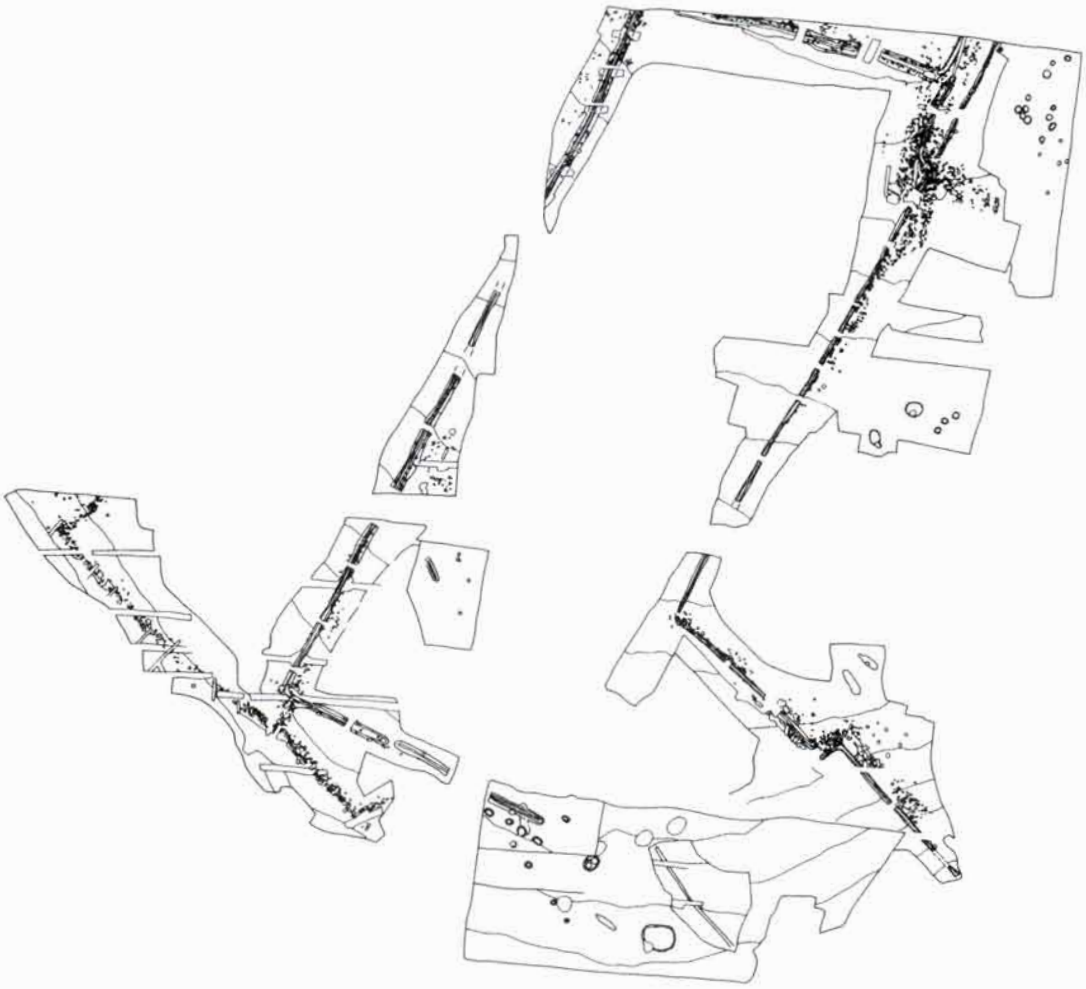
坂上遺跡

富士見工業団地造成に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書



1994

群馬県勢多郡富士見村教育委員会

坂上遺跡全景

方形区画遺構

方形区画遺構北東部

A・B区全景

A区3号土坑

B区1号集石

F南区深堀り土層断面

序　　文

長く純農村地帯であった富士見村では、これまで主に県営の土地改良事業に伴って村の南部の地区で多くの埋蔵文化財を発掘調査してきました。

近年では前橋市の北に隣接するという地理的な条件によって宅地開発などの民間開発が増加しつつあります。

この度、村と群馬県企業局によって工業団地が計画され、事前に発掘調査を実施したところ多くの成果を上げることができました。

発掘調査では古墳時代の牧と思われる遺構のほか、縄文時代の多数の陥し穴や土坑が発見され、富士見村の歴史に新たな資料を加えることができました。

発掘調査・整理作業ともに必ずしも十分な時間と予算の元に実施できたわけではありませんが、本報告書が多くの皆様に活用され、歴史解明の一助となれば幸いに存じます。

発掘調査にあたりご指導・ご協力いただきました関係機関の皆様と、厳寒の中発掘調査に従事していただいた作業員の皆様に心より感謝申し上げ序といたします。

平成6年3月

富士見村教育委員会

教育長　鈴　木　清　茂

例　　言

1．本書は富士見工業団地造成に伴い事前調査を行った坂上遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡の所在地は群馬県勢多郡富士見村大字石井2252－1番地外である。

3．調査期間は以下のとおりである。

発掘調査　　平成3年12月2日～平成4年4月30日

整理作業　　平成4年5月1日～平成6年3月25日

4．調査は群馬県企業局の委託を受け、富士見村教育委員会が主体となって行った。

5．調査組織は以下のとおりである。

富士見村教育委員会　　教育長　鈴木清茂

社会教育課長　狩野　透　（～平成4年3月）

青木鶴男　（平成4年4月～）

係　長　本多幸一　（～平成5年3月）

樺沢幹夫　（平成5年4月～）

主　任　羽鳥政彦　（調査担当）

6．本書の作成は編集、執筆、遺構写真、遺物写真の撮影等は羽鳥が行った。原稿執筆補佐、遺構図トレース、遺物実測・トレース、写真図版版組等は舩津かほるが行った。縄文土器拓本・断面実測・トレース、石器実測・トレースは関口すみ子、関口照子、塩沢雪江が行った。

遺構図トレース、遺物実測・トレースの一部は技研測量設計㈱に委託した。

自然化学分析については㈲古環境研究所に委託した。

7．発掘調査から整理作業にかけて以下の方々からご指導、助言を賜った。　（順不同、敬称略）

群馬県教育委員会文化財保護課　群馬県企業局　西毛開発事務所　富士見村役場総務課

山下歳信　細野高伯　長谷川福次　小島純一　星克典　関根慎二　谷藤保彦　渋谷昌彦　早田勉

松田光太郎　津金沢吉茂　石井克己　飛田野正佳

8．発掘調査・整理作業員は以下のとおりである。

安斉あさ　石関ミツ江　井上やま　今井善六　今井はる　今井ヤスノ　木暮たの　小山タキ江

狩野光江　黒岩香織　斉藤ふみ子　塩沢雪江　下田光芳　下田マキ子　関口すみ子　関口トク

須田シゲ　羽鳥すみ　平野辰夫　広川珠江　舩津かほる　八ツ田もと　久保学　関口照子

凡　　例

1．本書の挿図の方位は座標北を表す。

2．挿図の縮尺は以下のとおりである。

遺構図	全体図	1／800	遺物図	縄文土器実測		1／3、1／4
	遺構配置図・割付図	1／800、1／400		縄文土器拓影		1／3
		1／1000		石器	石鏃	1／1
	竪穴住居跡	1／80			石斧等	1／3
	竪穴状遺構	1／60			磨石等	1／4
	土坑・陥穴	1／60		弥生土器		1／3
	集石	1／40		土師器		1／3
	溝跡・柵列・柱穴	1／100、1／200		陶磁器等		1／3
	炭窯跡	1／80		煙管		1／3

3．遺物写真の縮尺は統一していない。

4．遺構番号は基本的に調査時点に付したものをそのまま用いている。

方形区画遺構に関連すると思われる一連の遺構については、特に番号を付さず、個別に名称を付し呼称している。

土坑番号は整理の結果人為的と思われないものは報告から除いたため、欠番が生じているものがある。

5．グリッド名は、南東杭で呼称している。

6．縄文時代の土坑断面図中のスクリーントーンはローム主体土層である。

7．遺構の方位は基本的に北からの偏角であるが、炭窯跡は煙道方向の角度である。

8．第1図は建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「前橋」を一部加筆して使用した。

第3図は富士見村役場発行2千5百分の1原形図を1／2に縮小して使用した。

目　　次

巻頭図版
序　　文
例　　言
凡　　例
目　　次
図版目次・表目次
写真図版目次
抄　　録

I　発掘調査と遺跡の概要
1．発掘調査に至る経緯 …… 1
2．発掘調査の経過 …… 1
3．遺跡の位置と地形 …… 3
4．周辺の遺跡 …… 3
5．本調査の範囲・遺構検出状況 …… 5
6．土層堆積状況 …… 7

II　検出された遺構と遺物
1．縄文時代の遺構と遺物
(1)　概　　要 …… 9
(2)　竪穴住居跡 …… 9
(3)　竪穴状遺構 …… 9
(4)　陥し穴・土坑 …… 13
①　A・B区 …… 13
②　F　区 …… 21
(5)　集石遺構 …… 28
(6)　遺物包含層 …… 31
(7)　倒木痕 …… 31
(8)　縄文時代の遺物 …… 32
①　土　　器 …… 32
②　石　　器 …… 54
2．縄文時代以外の遺構と遺物
(1)　A区の遺構 …… 64
①　概　要 …… 64
②　東西道路跡 …… 64
③　南北道路跡 …… 71
④　区画溝 …… 71
⑤　A区32号土坑 …… 73
⑥　1号墓坑 …… 73
(2)　B区の遺構
①　概　要 …… 74
②　東西溝跡 …… 74
③　南北溝跡 …… 76
④　柵列・柱穴群 …… 76
(3)　C・D・E・F区の遺構
①　概　　要 …… 78
②　方形区画遺構 …… 78
③　E区小溝 …… 104
④　土　坑 …… 104
(4)　炭 窯 跡 …… 108
(5)　縄文時代以外の出土遺物 …… 114

III　発掘調査の成果と課題
1．縄文時代のまとめ …… 116
2．方形区画遺構について …… 117

附編　坂上遺跡の自然科学分析
I．坂上遺跡のテフラ分析 …… 126
II．坂上遺跡の植物珪酸体分析 …… 132

図版目次

第1・2図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第 3 図　遺跡周辺の地形及び調査区配置図 …… 4
第 4 図　A区縄文時代遺構配置図 …… 5
第 5 図　B区縄文時代遺構配置図 …… 6
第 6 図　E区縄文時代遺構配置図 …… 7
第 7 図　F区縄文時代遺構配置図 …… 8
第 8 図　1・2号住居跡 …… 10
第 9 図　竪穴状遺構 …… 11
第 10 図　A区縄文土坑(1) …… 14
第 11 図　A区縄文土坑(2) …… 15
第 12 図　A区縄文土坑(3) …… 16
第 13 図　A区縄文土坑(4) …… 17
第 14 図　A区縄文土坑(5) …… 18
第 15 図　A区縄文土坑(6) …… 19
第 16 図　A区縄文土坑(7) …… 20
第 17 図　A区縄文土坑(8) …… 21
第 18 図　B区縄文土坑(1) …… 22
第 19 図　B区縄文土坑(2) …… 23
第 20 図　B区縄文土坑(3) …… 24
第 21 図　B区縄文土坑(4) …… 25
第 22 図　B区縄文土坑(5) …… 26
第 23 図　F区縄文土坑 …… 27
第 24 図　集石遺構 …… 29
第 25 図　A区倒木痕 …… 30
第 26 図　B区倒木痕 …… 31
第 27 図　A区出土縄文土器 …… 32
第 28 図　B区遺構出土縄文土器 …… 33
第 29 図　B区遺物包含層出土縄文土器(1) …… 34
第 30 図　B区遺物包含層出土縄文土器(2) …… 35
第 31 図　B区遺物包含層出土縄文土器(3) …… 36
第 32 図　B区遺物包含層出土縄文土器(4) …… 37
第 33 図　B区遺物包含層出土縄文土器(5) …… 38
第 34 図　E区出土縄文土器 …… 39
第 35 図　F区遺構出土縄文土器 …… 40
第 36 図　F区8号土坑出土縄文土器 …… 41
第 37 図　F区土坑出土縄文土器 …… 42
第 38 図　F区遺構外出土縄文土器(1) …… 43
第 39 図　F区遺構外出土縄文土器(2) …… 44
第 40 図　F区遺構外出土縄文土器(3) …… 45
第 41 図　A区出土石器 …… 56
第 42 図　B区出土石器(1) …… 57
第 43 図　B区出土石器(2) …… 58
第 44 図　E区出土石器(1) …… 59
第 45 図　E区出土石器(2) …… 60
第 46 図　F区出土石器(1) …… 61
第 47 図　C区、F区出土石器(2) …… 62
第 48 図　F区出土石器(3) …… 63
第 49 図　A区遺構配置図（縄文時代以外） …… 65
第 50 図　A区部分図面割付図 …… 66
第 51 図　A区東西道路西端部 …… 67
第 52 図　A区東西道路西半部及び周辺柱穴 …… 68
第 53 図　A区東西道路中央部及び周辺柱穴 …… 69
第 54 図　A区東西道路東端部 …… 70
第 55 図　A区南北道路 …… 71
第 56 図　A区区画溝 …… 72
第 57 図　A32号土坑・1号墓坑 …… 72
第 58 図　B区遺構配置図（縄文時代以外） …… 73
第 59 図　B区部分図面割付図 …… 74
第 60 図　B区東西溝 …… 75
第 61 図　B区南北溝 …… 75
第 62 図　B区柵列・柱穴群 …… 77
第 63 図　C・D・E・F区遺構配置図(縄文時代以外) … 79
（方形区画遺構部分名称）
第 64 図　C・D・E・F区部分図面割付図 …… 81
（方形区画遺構）
第 65 図　方形区画遺構北東部 …… 83
第 66 図　方形区画遺構北東端部 …… 85
第 67 図　方形区画遺構東溝・北東部東西柵列 …… 87
第 68 図　方形区画遺構東溝中央部 …… 89
第 69 図　方形区画遺構東溝南端～南東溝北西半部 …… 90
第 70 図　方形区画遺構南東溝屈折部 …… 91
第 71 図　方形区画遺構南東溝南東半部
及びE北区土坑位置図 …… 92
第 72 図　方形区画遺構北溝 …… 94
第 73 図　方形区画遺構西溝北半部（F区） …… 95
第 74 図　方形区画遺構西溝中央部
及びD区土坑位置図 …… 96
第 75 図　方形区画遺構西溝南半部（C区） …… 97
第 76 図　方形区画遺構南溝及びC区柵列東半部 …… 98
第 77 図　方形区画遺構南溝中央（土橋）部 …… 99
第 78 図　方形区画遺構C区柵列東半部東側 …… 100
第 79 図　方形区画遺構C区柵列東半部西側 …… 101
第 80 図　方形区画遺構C区柵列西半部 …… 102
第 81 図　方形区画遺構C区柵列西端部 …… 103
第 82 図　方形区画遺構南溝東端部 …… 105
第 83 図　E南区小溝 …… 105
第 84 図　E南区土坑位置図 …… 106
第 85 図　F区土坑位置図 …… 107
第 86 図　D区土坑 …… 109
第 87 図　E南区土坑 …… 110
第 88 図　E北区土坑 …… 111
第 89 図　F区土坑（縄文時代以外） …… 111
第 90 図　炭窯跡(1) …… 112
第 91 図　炭窯跡(2) …… 113
第 92 図　縄文時代以外の出土遺物 …… 115
第 93 図　関連する遺跡位置図 …… 119

表目次

第 1 表　A区縄文土坑一覧表 …… 12
第 2 表　B区縄文土坑一覧表 …… 13
第 3 表　F区縄文土坑一覧表 …… 13
第 4 表　A区出土土器観察表 …… 46
第 5 表　B区遺構出土土器観察表 …… 46
第 6 表　B区遺構外出土土器観察表 …… 47
第 7 表　E区出土土器観察表 …… 50
第 8 表　F区遺構出土土器観察表 …… 50
第 9 表　F区遺構外出土土器観察表 …… 51
第10表　出土石器計測表 …… 54
第11表　D区土坑一覧表 …… 108
第12表　E南区土坑一覧表 …… 108
第13表　E北区土坑一覧表 …… 108
第14表　F区土坑一覧表 …… 108

写真図版目次

巻頭写真　坂上遺跡全景
方形区画遺構　方形区画遺構北東部
A・B区全景　A区3号土坑　B区1号集石　E南区深掘り土層断面

PL 1　坂上遺跡
PL 2　A区全景、B区全景
PL 3　E南区全景、F区縄文調査区北半部
〈縄文時代の遺構〉
PL 4　縄文時代住居跡、竪穴状遺構
PL 5～9　縄文時代土坑－A区
PL10～13　縄文時代土坑－B区
PL14～15　縄文時代土坑－F区
PL16　集　石
〈縄文時代以外の遺構〉
PL17～19　A区の遺構
PL20～21　B区の遺構
PL22～24　方形区画遺構全景、方形区画遺構－F区北東部・東溝
PL25　方形区画遺構－E北区
PL26～27　方形区画遺構－F区北溝・西溝・東溝
PL28～32　方形区画遺構－C区南溝・C区柵列
PL33　方形区画遺構と土坑群－D区・E南区
PL34～36　土坑－D区・E南区・E北区・F区
PL37　炭窯跡
〈遺　物〉
PL38～41　縄文時代の土器
PL42～43　縄文時代の石器
PL43　縄文時代以外の出土遺物
〈調査風景〉
PL44　調査風景
〈自然科学分析〉
PL45～47　植物珪酸体

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要

1．発掘調査に至る経過

平成２年度に富士見村役場総務課企画係から富士見村教育委員会に対し、村内大字石井において開発を予定しているため、開発予定地の埋蔵文化財の有無を知りたい旨の照会があった。これを受けて教育委員会で遺物の散布調査等の現地踏査を実施したところ、縄文時代を中心とする遺物が採集された。また、開発予定地の西方には周知の遺跡である岡城跡が近接し、東方にも城跡関連地名が残ることから、これらに関連する遺跡の存在も予想された。この結果を受けて村役場総務課企画係に対して、とりあえず試掘調査を行い、遺跡の有無を確定し、範囲や性格等を把握した上で保護措置を講ずる必要がある旨回答した。

平成３年度頭初に群馬県企業局、総務課企画係、教育委員会の３者で協議を行い、開発者側の準備が整い次第試掘調査を行うこととなった。８月に至り、遅れていた用地交渉等に目途がついたため協議を行い、９～10月の予定で試掘調査を行うこととなった。調査準備を行い９月中には試掘調査を開始したが、10月には別件の発掘調査と並行しての作業となった。試掘調査は、当初表土直下の淡色黒ボク土・黒ボク土面を検出面として行ったが、この面では縄文時代の遺構の検出が困難なため、改めてローム層上面を検出面として掘削を行ったため２面調査となった。試掘調査の結果、開発予定地のほぼ全面から時期不明の溝跡、土坑、柱穴が検出され、また範囲は限定されるものの縄文時代の陥し穴・土坑等が検出された。

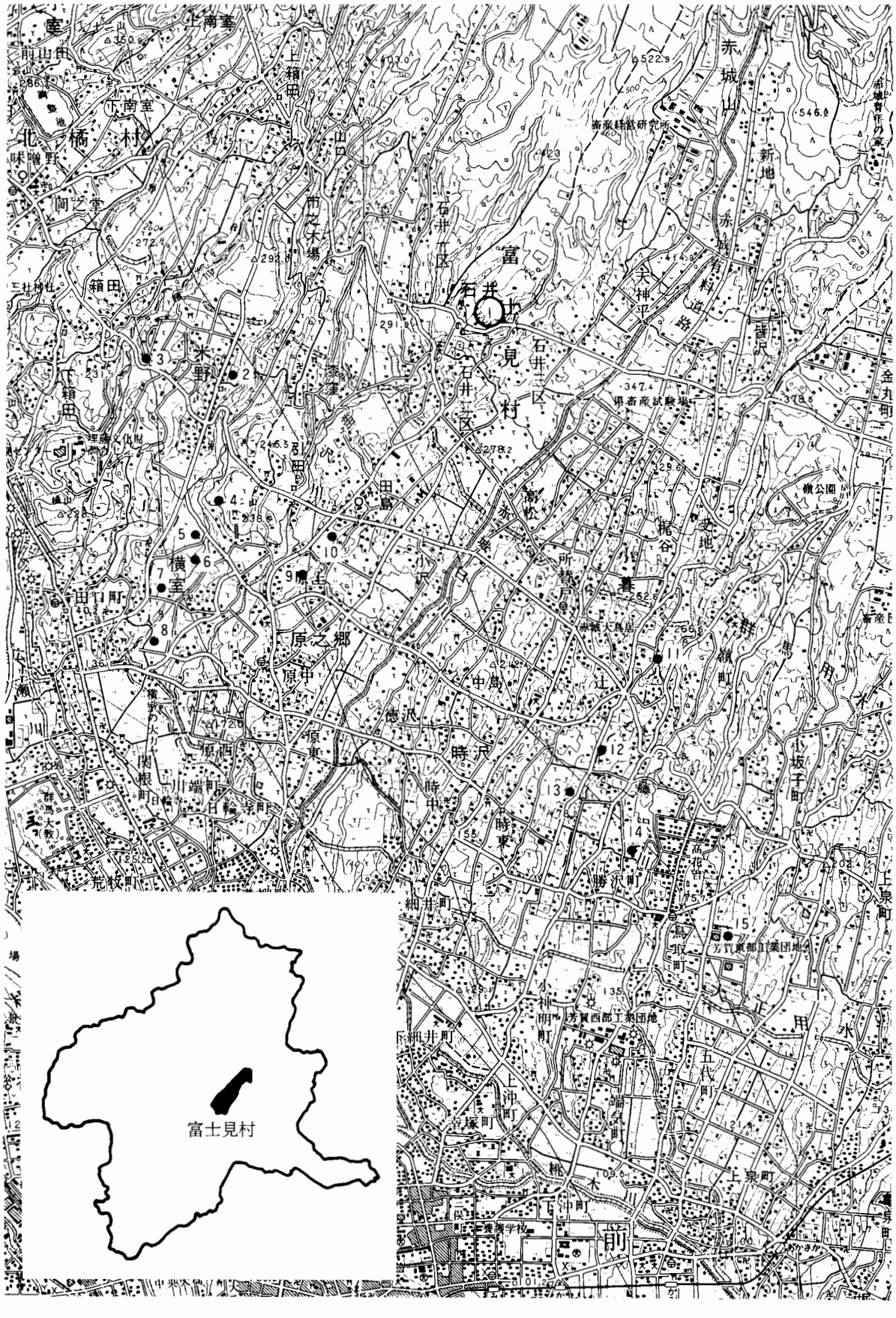
試掘調査の結果を基に開発者側と埋蔵文化財の保護措置について協議を行ったが、開発の意志が堅く、また盛土保存等による工事計画の変更も不可能なため、試掘調査で遺構・遺物の検出された区域全面の発掘調査を行い、記録保存とすることで合意した。また、年度末までに終了する予定で教育委員会の準備が整い次第発掘調査を開始することとなったが、11月に緊急の調査が入ったため準備が行えず、表土剝ぎを開始できたのは11月下旬、作業員を投入できたのは12月２日からであった。

2．発掘調査の経過

11月下旬に重機により抜根・表土剝ぎを開始した。調査期間の関係や、調査範囲が広大であるため、時には４～５台の重機を用いて作業を行った。また、作業員の不足を補うためほぼ全調査期間を通して重機により排土搬出を行った。表土剝ぎはまずＣ・Ｄ・Ｅ・Ｆ区に検出された溝を追いかける形で行ったが、試掘調査で予想していなかった南側でも溝が検出され、方形に巡ることが明らかになった。

作業員は12月２日から投入した。まず遺構検出作業を行ったが、試掘調査で予想した以上の柱穴が次々と現れてきた。精査は溝を優先し、柱穴調査が追いかける形となったが、柱穴規模が大きく、また、黒ボク土中に掘り込まれているため壁面を捉えることが困難で、なかなか調査が進まなかった。調査の進捗に伴いＣ区では溝から離れた部分にも柱穴が存在することが判明したため、拡幅して調査を行った。１面調査が一段落した段階でＦ・Ｅ区の２面の調査も開始した。この段階で年度末に調査を終了することが困難と思われたため、事業者側と調査期間の延長を協議し、１ケ月延長することとなった。また、調整池の工事を先行したいとの要望があったため、Ｅ・Ｆ区２面の調査を一旦中止し、Ｂ・Ａ区の調査を先行する事になった。Ｂ・Ａ区の調査は１面部分の遺構量が少なかったため、引き続き２面までの表土剝ぎを行い、土坑群等の精査を行った。４月には時には各区の２面調査を並行し、Ｅ区の３面（旧石器）試掘調査も行い終了となった。

調査期間中に横室古墳公園（陣場・庄司原古墳群）の整備を並行して行っていたため、時に本跡の調査を



第1・2図　遺跡の位置と周辺の遺跡

休まざるを得ない場合もあった。また、調査期間が厳冬期と重なり、赤城颪の吹き荒ぶなか地面の凍結と乾燥にも苦しめられ、さらに、降雪も度重なり最悪の条件下の調査であった。

3．遺跡の位置と地形

富士見村は赤城山の南西麓から山頂までを含む狭長な村である。前橋市の北方に位置し、東に大胡町、宮城村、西に北橘村等が接している。標高は南端の約150mから山頂の1,828mまであり、標高450m前後の傾斜変換点を境として、北東部の山岳地と南西の裾野部分とに2分され、さらに裾野部分は西側の丘陵地形と東側の赤城白川によって形成された扇状地形に2分される。

坂上遺跡の周辺は北東から南西に向かう幾筋もの小河谷によって開析され、馬の背状の台地が形成されている。坂上遺跡はこの内の一つの台地の南端部の東半部分に占地しており、南側には赤城白川扇状地が広がっている。調査地の標高は304～337mである。

坂上遺跡は県道大間々・宮城～子持線に接して北側に位置する。富士見村役場の北東方約2kmの距離にあり、珊瑚寺に隣接する。東方約1.5kmには通称赤城県道が南北に走り、群馬県畜産試験場がある。

4．周辺の遺跡

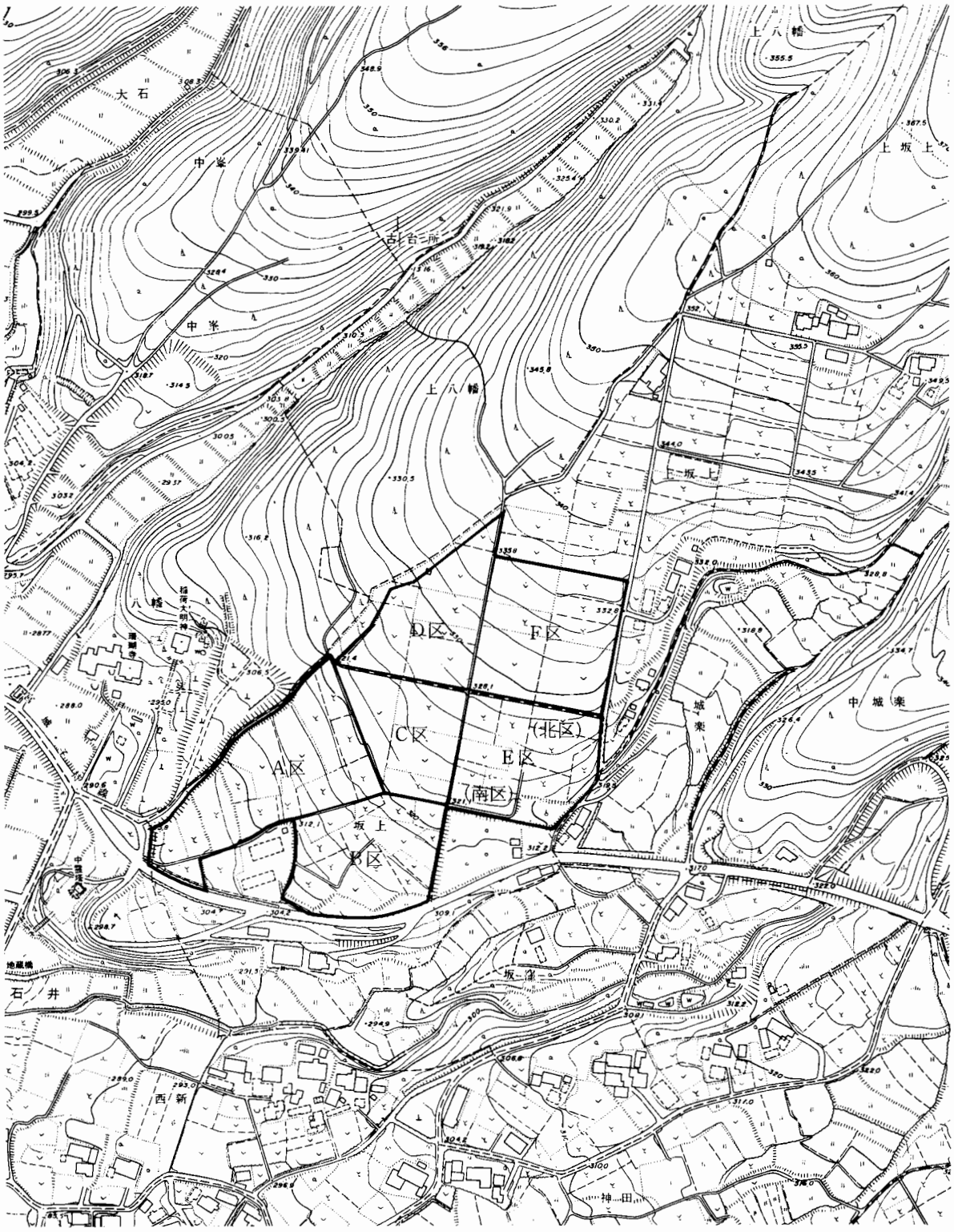
坂上遺跡（第1図1）周辺ではこれまで発掘調査が行われていない為、歴史的な環境は不明瞭であるが、包蔵地はいくつか知られている。富士見村誌によれば坂上遺跡の所在する大字石井内には13ケ所の遺物散布地が挙げられている。その大半は縄文時代の遺跡で、時期的には前期・中期が多く、後晩期は認められないようである。これ以外に、赤城山南麓から榛名山東南麓に特徴的な平安時代頃の遺物とされている石製骨蔵器の出土が数ケ所で知られている。西方約0.5kmには戦国時代の岡城跡があり、本跡に東接する尾根には城楽の地名が残っている。さらに、本跡の西側には平安時代初期の創建と伝えられる珊瑚寺が隣接する。

富士見村ではこれまで主に県営の土地改良事業に伴って南西部と南東部で発掘調査を行っている。これらの内から、本跡の時代・時期、特に縄文時代前期後半の遺構・遺物を出土した遺跡を中心に見てみたい。

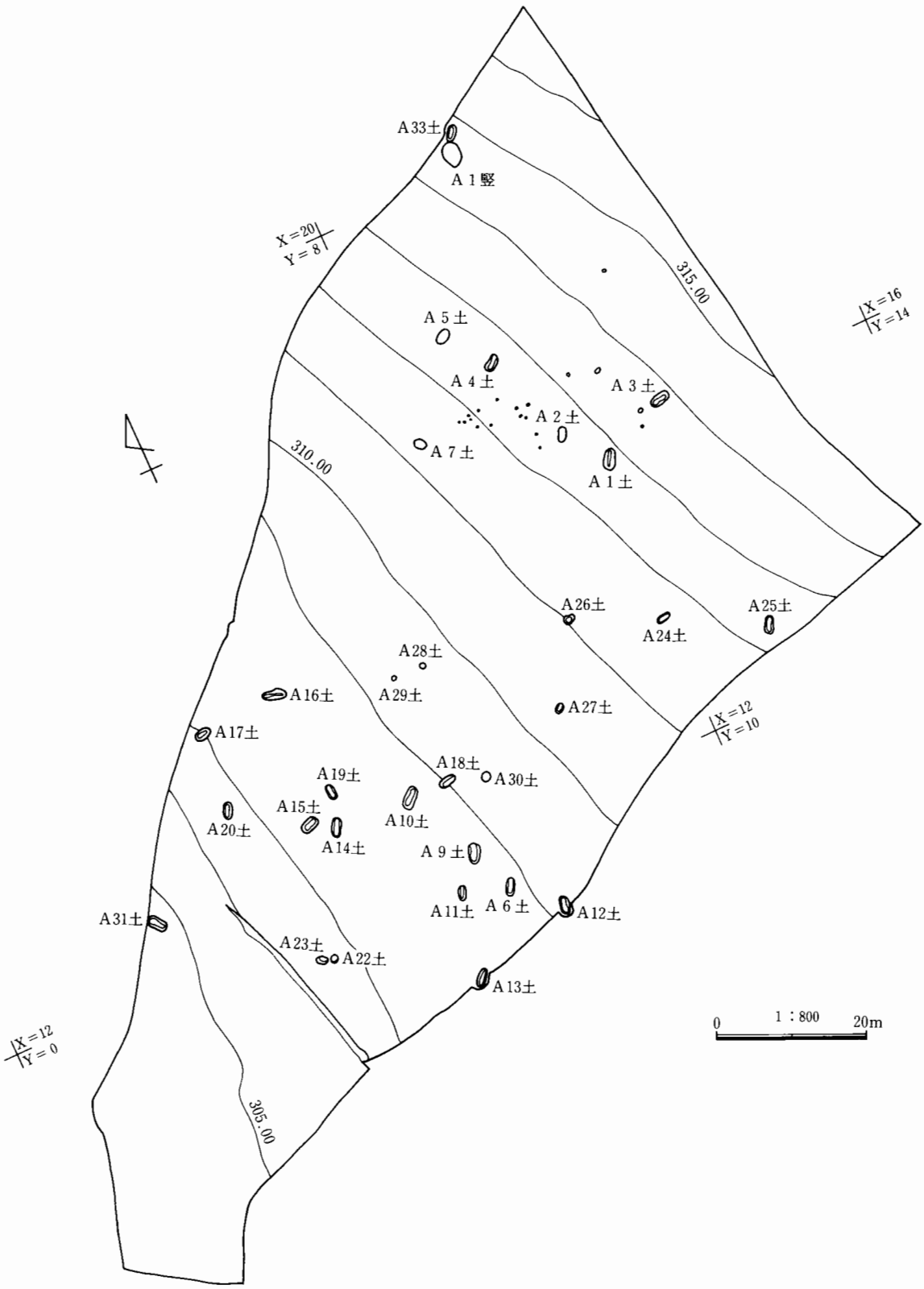
第1図2の米野田遺跡では当地域では調査例の少ない縄文時代前期末～中期初頭を中心とする集落、平安時代の集落、中世の城館跡等を調査した。江戸時代の沼田街道「米野宿」の隣接地である。3の向吹張遺跡では縄文時代前期後半・中期中葉、奈良・平安時代の集落、中世頃の城館跡を調査した。4の愛宕山遺跡は縄文時代前期後半を主体とする集落であり、良好な遺物が出土している。5の上庄司原東遺跡では縄文時代前期の集落、古墳時代後期の古墳、平安時代の集落を調査した。縄文時代前期の住居跡2軒から小型石棒が各1点出土している。6の下庄司原東遺跡では縄文時代前・中期の住居跡、古墳時代前期の方形周溝墓（前方後方型を含む）、古墳時代・平安時代の集落跡を調査した。7の陣場遺跡では縄文時代前期（前半・中葉・後半）・中期の集落、古墳時代終末期の古墳、平安時代の集落を調査した。縄文時代前期後半の住居跡から小型石棒1点が出土し、複数の住居跡から大半は破片であるが結節浮線文土器が出土している。8の田中田遺跡は古墳時代（前期～後期）主体の集落で、縄文時代前期・中期の住居跡・土坑も調査した。9の久保田遺跡では当地域では調査例の少ない縄文時代前期初頭の集落、古墳時代・平安時代の集落、中世の城館跡を調査した。少量ではあるが縄文時代中期初頭の土器片も出土している。10の白川遺跡は古墳時代～平安時代を中心とする集落で、古墳時代の住居跡からＦＡ降灰前後の良好な一括遺物や小型の竹製編籠が出土している。また、縄文時代前期・後期の住居跡等も調査した。11の広面遺跡は縄文時代前期後半を主体とする集落で、良好な遺物が出土している。12の孫田遺跡からは縄文時代前期後半の土坑が検出されている。13の上百駄山

遺跡では縄文時代前期後半と平安時代の集落、中世城館跡を調査した。富士見村で唯一縄文時代草創期の土器片が出土した遺跡で、前期後半の結節浮線文土器も復元されている。

14・15は前橋市の遺跡で、14の芳賀北曲輪遺跡、15の芳賀東部団地遺跡ともに縄文時代前期後半の集落を調査し、良好な遺物が出土している。



第3図　遺跡周辺の地形及び調査区配置図

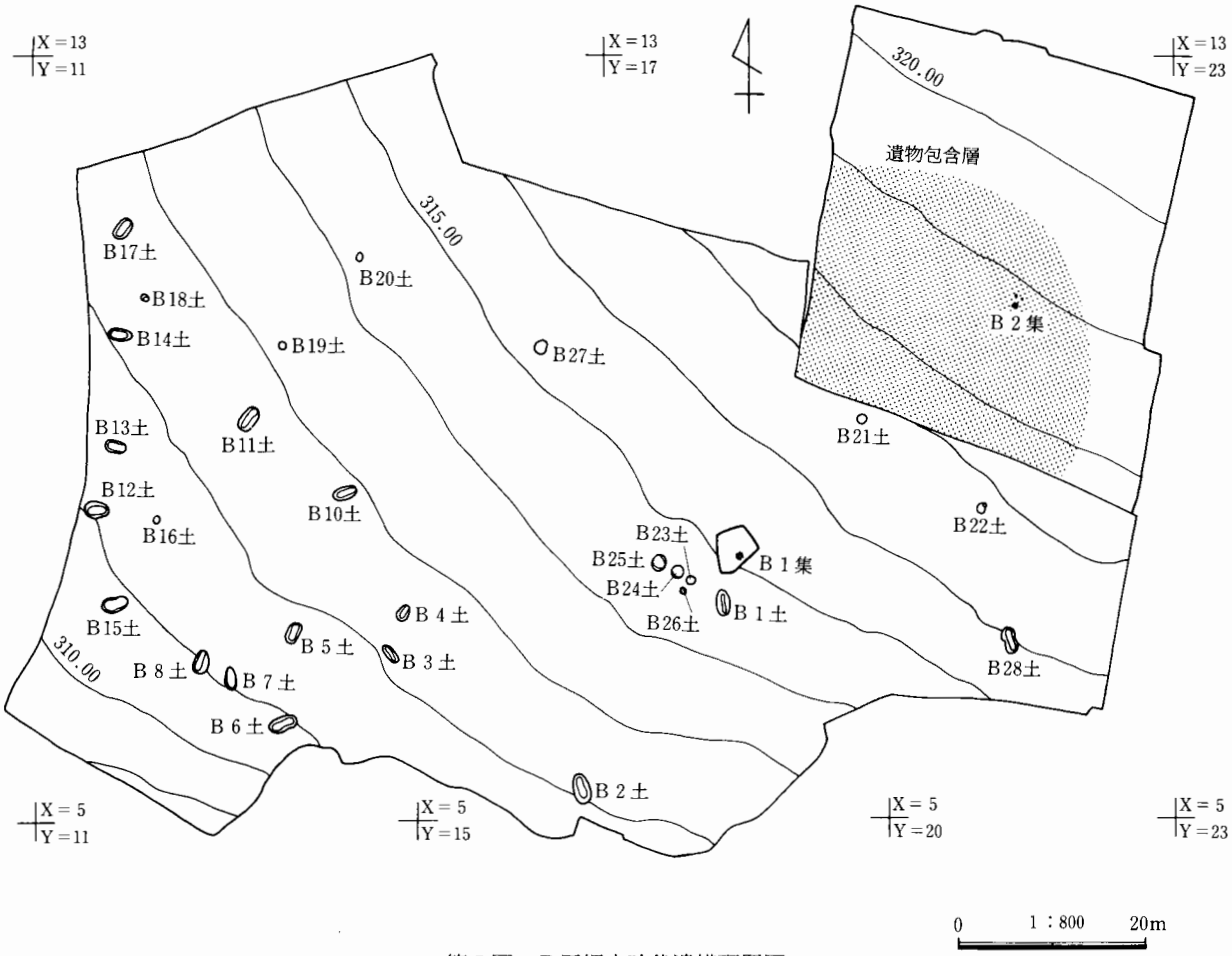


第４図　Ａ区縄文時代遺構配置図

５．本調査の範囲・遺構検出状況

基本的に試掘調査で遺構・遺物が検出された部分の全面発掘を行った。

１面調査では前記したように淡色黒ボク土、若しくは黒ボク土上面を検出面として表土剝ぎを行った。試



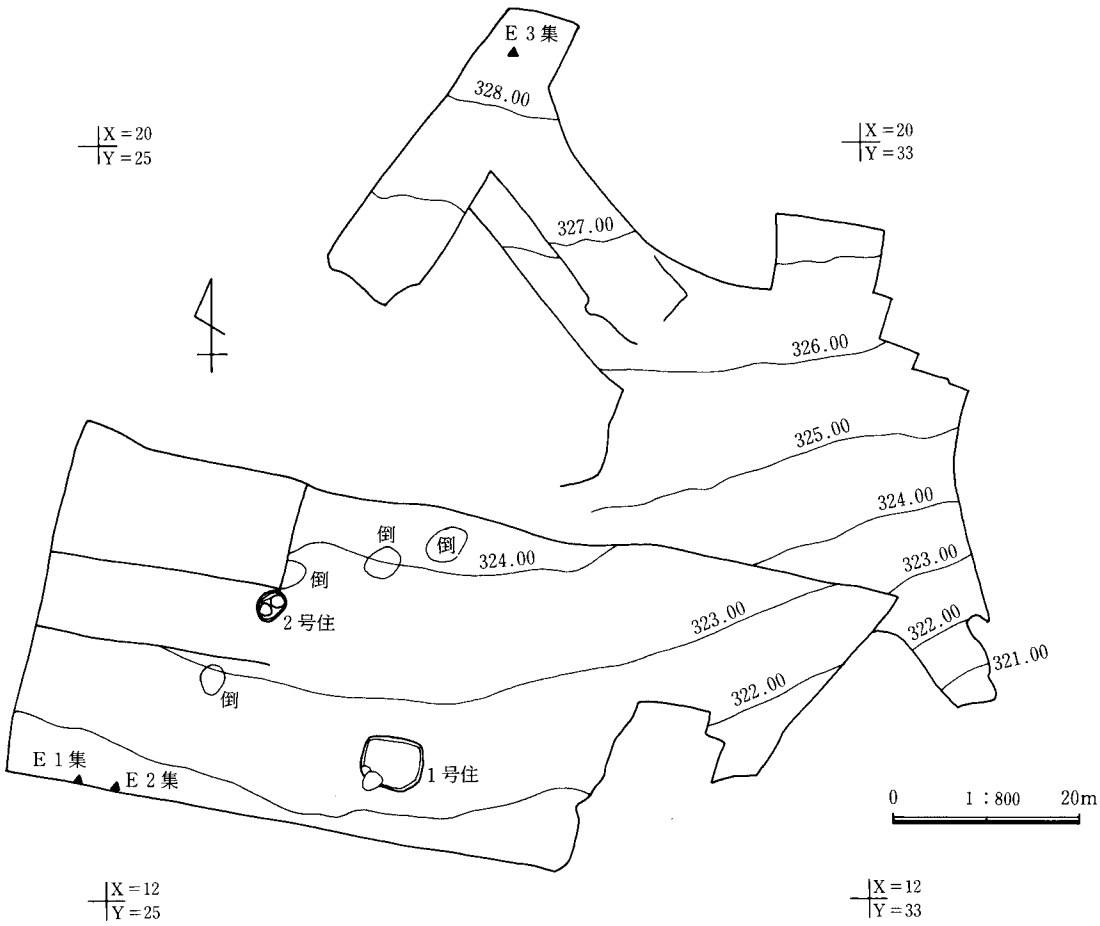
第５図　Ｂ区縄文時代遺構配置図

掘調査では溝跡・道路跡と柱穴或いはこれに近接した若干の土坑が検出されただけであったため、溝跡・道路跡或いは柱穴（柵列）を追いかける形で調査区を拡幅していった。Ｂ区の縄文時代の遺物包含層とＢ１号集石は１面で検出された。また、東西溝跡は試掘トレンチにかからず、２面調査で検出したものである。Ｅ・Ｆ区でも試掘調査では予想できなかった部分から土坑が検出された。

精査を行っていない等の理由により拡幅の範囲を記録していないため、全体図中に記載できなかった地点は、Ｄ区の南端部でＣ区柵列の延長上、Ｄ区北端の倒木痕周辺、Ｆ区１号土坑及びその周辺である。

２面調査はローム層上面～黒ボク土下面を検出面として表土剝ぎを行った。試掘調査の結果に基づきＡ・Ｂ区のほぼ全面とＥ・Ｆ区の部分調査の予定で拡幅していった。Ａ区については試掘調査の結果及び本調査での陥し穴・土坑群の検出状況から判断して東端部を調査区域から除外した。Ｂ区もＡ区と同様の判断で北東部を除外したが、遺物包含層下に遺構が存在した可能性は否定できない。Ｆ区の土坑は北東隅にまとまっていたため、１面の方形区画遺構東溝（北東溝）までを本調査の範囲としたが、Ｆ１号土坑周辺からもある程度の数量の遺物が出土しており、面的に広げれば何らかの遺構を検出できた可能性はある。

Ｂ区は試掘調査の結果から北東部と南北溝の周辺を除いて１面調査を行わず、最初から２面まで検出面を下げたが、１号集石は排土の際に黒ボク土上層から検出されたため、この周辺については掘り下げを中止して精査を行った。また、早期を中心とする土器破片が排土の際や、ローム層上面から出土していることからすれば、黒ボク土中を人力で掘り下げればある程度の遺物や遺構を検出できた可能性がある。



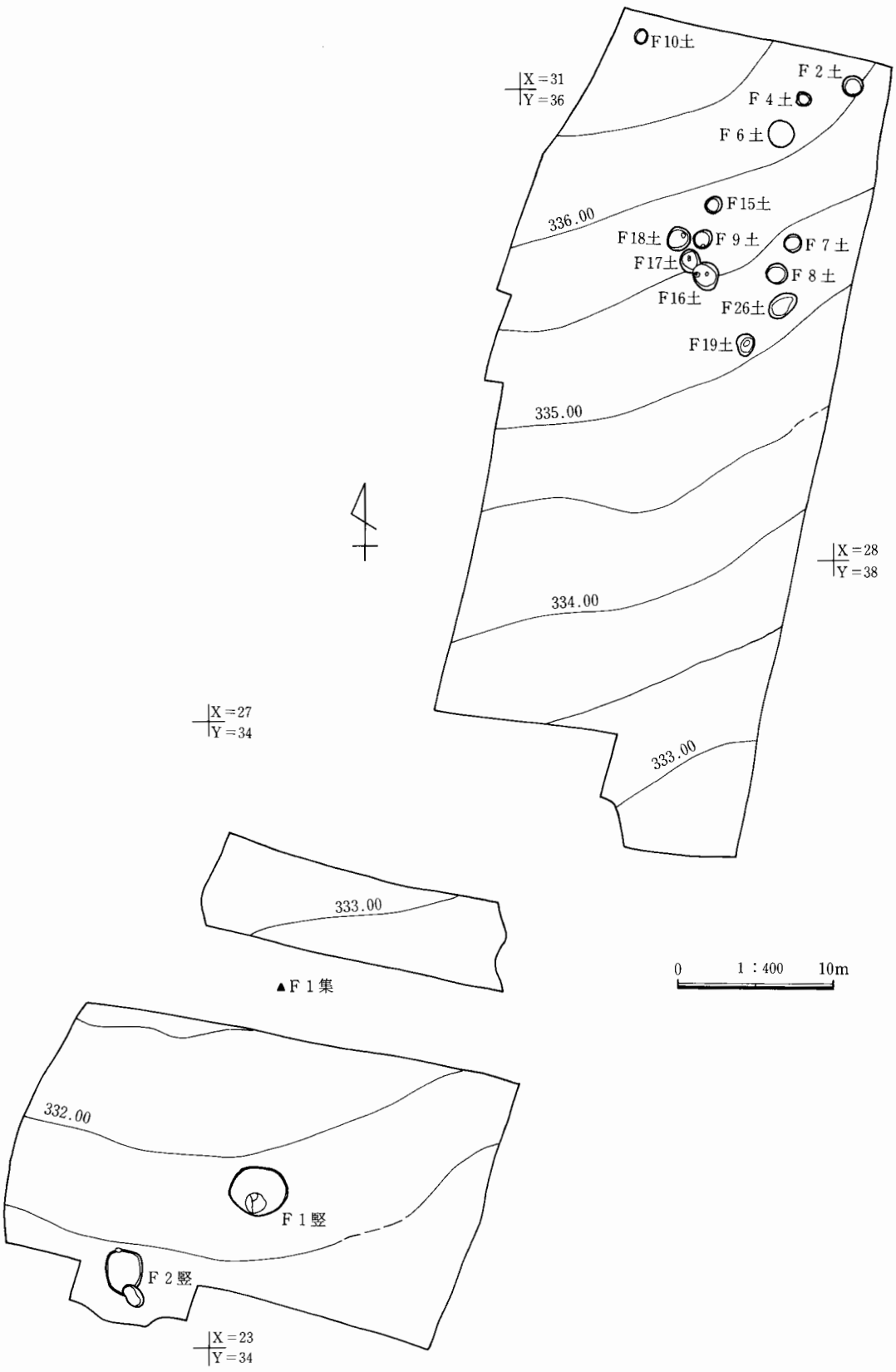
第6図　E区縄文時代遺構配置図

6．土層堆積状況

調査地の現況は桑畑、野菜畑を主体として、若干の陸稲栽培も行われていた。耕作により全体的に削平されていたが、特にA区は大区画ではあるものの段状に切土・整地され、深いところではローム層まで耕作が及んでいた。

堆積土層の詳細は後章の自然科学分析に譲り、ここでは富士見村の他の遺跡の土層堆積状況も含めて、ローム層よりも上位の土層堆積について復元的に説明したい。

残りの良い部分では表土（耕作土―砂質暗褐色土）の直下に淡色黒ボク土が残存するが、多くは黒ボク土まで削平されている。黒ボク土の下には若干の漸移層を挟みローム層となる。淡色黒ボク土より上位には下から浅間C軽石を含む黒色土(下層には少なく上層に多い)、榛名―二ツ岳火山灰、ＦＰ軽石を含む黒褐色土、黒色土（浅間B軽石層を含む）などが堆積すると思うが、榛名―二ツ岳火山灰（ＦＰ軽石を含む）や浅間B軽石などの純層堆積は住居跡や溝などの遺構覆土内に含まれる場合がほとんどであり、台地上においては通常耕作土中に鋤き込まれている。榛名―二ツ岳軽石が純層堆積した遺構については現在のところ調査例が無い。浅間A軽石も明瞭には確認されていない。自然科学分析で検出された粕川テフラについては、これまでまったく認識していなかったため堆積していても見逃した可能性が高いと思われる。



第７図　Ｆ区縄文時代遺構配置図

II　検出された遺構と遺物

1．縄文時代の遺構と遺物

(1) 概　　要

竪穴住居跡はＥ南区に１軒検出された。竪穴状遺構はＡ区に１基、Ｅ南区に１基・Ｆ区に２基検出されている。陥し穴はＡ区・Ｂ区に検出されている。土坑はＡ区・Ｂ区・(Ｅ南区)・Ｆ区に検出されている。集石遺構はＢ区・Ｅ区・Ｆ区に検出されているが、このうちＢ区２号集石とＥ区３号集石は構造的には炉跡の可能性がある。遺物包含層はＢ区北東部に検出されている。これ以外に倒木痕が各区から検出されているが、面的に占地状況の判るＡ・Ｂ区だけ平面図を掲載する。

(2) 竪穴住居跡

１号住居跡（遺構第８図、遺物第34・44図、ＰＬ４）

Ｅ南区南寄り、13―28・29グリッドに位置する。北西約16mに２号住居跡が近接する。南西隅に倒木痕が重複し、倒木痕が新しいと思われる。

東西両辺が外方に張り出すが、ほぼ隅丸長方形状を呈し、東西6.8m、南北5.6m、深さ50cmを測る。長軸方位はＮ―82°―Ｗである。床面は中央部がわずかに凹むがほぼ平坦で、中央部は比較的良く踏み固められている。床面の中央には小振りの山石が２個置かれ、周辺には少量の焼土が検出されたことから炉跡と思われる。柱穴は小ピットが散在して検出されただけで、主柱穴は不明である。壁面は多少角度をもって立ち上がる。覆土は暗褐色土主体で、上層に黒色土が堆積する。

遺物は少量の土器破片・石器が出土しただけである。構築時期は不明確であるが、前期後半と思われる。

２号住居跡（遺構第８図、遺物第34図、ＰＬ４）

Ｅ南区中央部西寄り、15―27グリッドに位置する。床面に段差が認められ、建て替えの可能性がある。また、内部に土坑が２基重複する。南東16mに１号住居跡が、南方24mにＥ２・３号集石が近接する。住居跡としたが、実質的には竪穴状遺構である。

全体的には楕円形を呈し、東西3.4m、南北2.7m、深さ50cmを測る。内壁の南北で2.3mである。長軸方位はＮ―62°―Ｅである。南側の床面はかなり凹むが比較的堅緻である。上段は軟弱である。壁面は若干角度をもって立ち上がる。炉跡や柱穴は検出されていない。

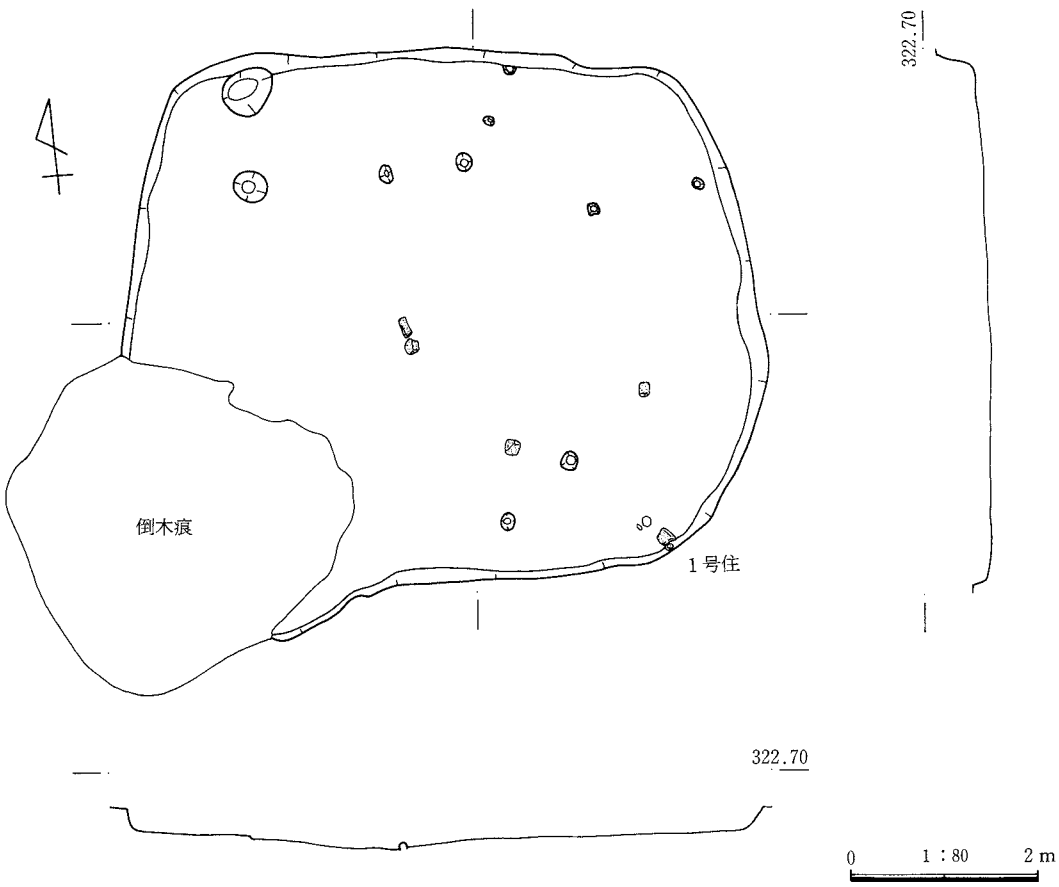
遺物は少量の土器破片が出土しただけである。構築の時期は不明確であるが、前期後半と思われる。

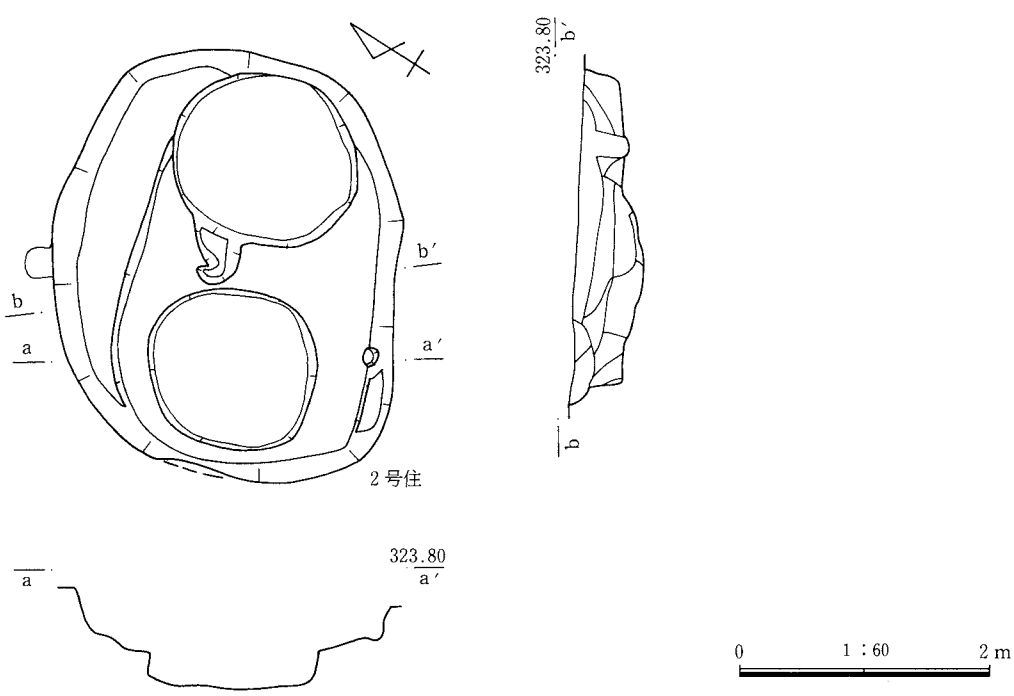
土坑は南側の掘り方ほぼ一杯に２基が東西に並んで掘削されている。いずれも円形を呈し、１号土坑は長径1.5m×短径1.35m、床面からの深さ30cmを測る。２号土坑は長径1.4m×短径1.3m、床面からの深さ30cmを測る。遺物は出土していない。

(3) 竪穴状遺構

Ａ区１号竪穴状遺構（遺構第９図、遺物第41図、ＰＬ４）

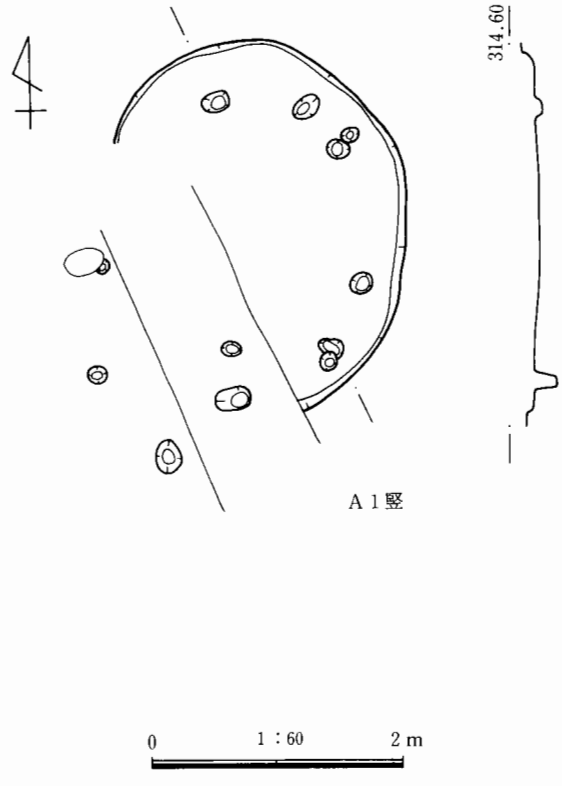
Ａ区北端、20―10グリッドに位置する。北東にＡ区33号土坑が近接する。掘り込みが浅く、また、試掘トレンチにより西半部を削平する。





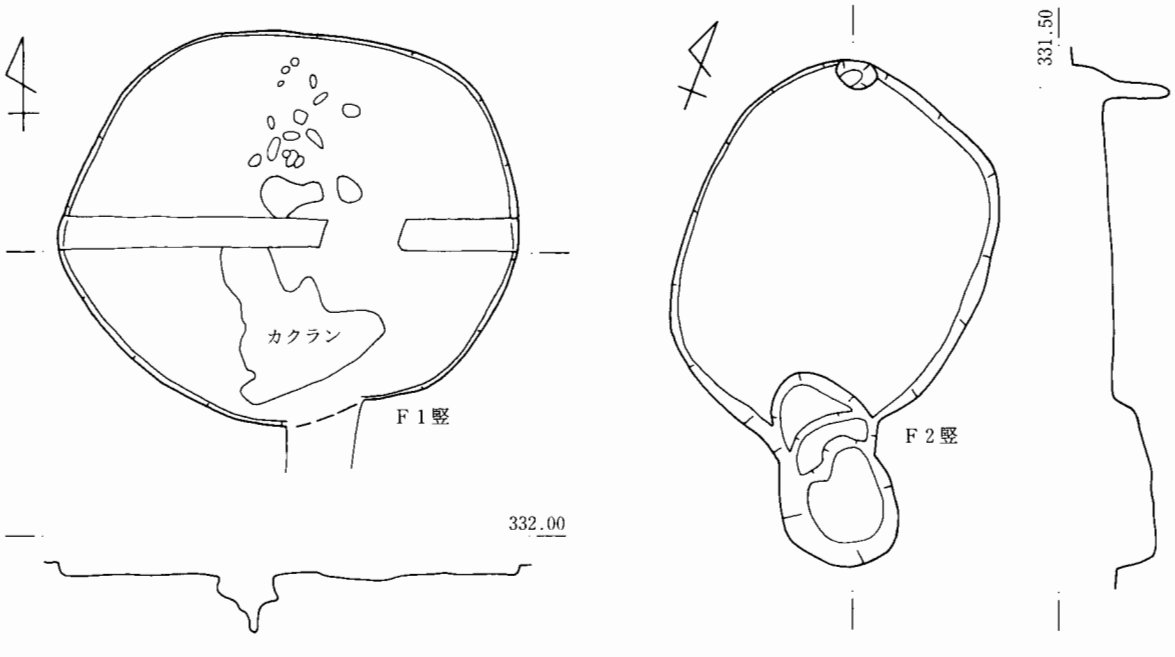
第8図　1・2号住居跡

現状ではほぼ楕円形を呈し、長軸をほぼ南北にとる。東西2.3m以上、南北約３ｍを測る。深さは東壁で約15cmである。床面は中央部がわずかに凹むがほぼ平坦で、中央部を除くと余り踏み固められてはいない。小ピットが東～北の壁に沿って検出されている。南西の削平部分にも検出されるが、推定される壁よりも外に位置するものもあり、全て本跡に帰属するとすれば平面形はかなり歪んだ形状になるが、いずれにしても詳細は不明である。炉跡その他の施設は検出されていない。遺物は打製石斧が１点出土しただけで、土器が出土していないため構築時期は不明である。



Ｆ区１号竪穴状遺構（遺構第９図、遺物第35･46図、ＰＬ４）

Ｆ区２面南側の調査区、24―35グリッドに位置する。南西約７ｍにＦ区２号竪穴状遺構が近接する。ほぼ中央部に木根によると思われる攪乱が重複する。若干東西に長い円形を呈し、ほぼ東西方向に長軸をとる。東西3.6m、南北3.1m、深さ15cmを測る。床面は平坦で、中央部は比較的堅緻であるが、周縁は軟弱である。炉跡や柱穴などの施設は検出されていない。覆土は暗褐色土主体である。遺物は土器破片と石器が少量出土しただけである。構築時期は前期後半と思われる。



第９図　竪穴状遺構

Ｆ区２号竪穴状遺構（遺構第９図、遺物第35図、ＰＬ４）

Ｆ区２面南側の調査区、23—34グリッドに位置する。南壁に土坑が重複する。

概ね楕円形状を呈し、南北方向に長軸をとる。東西2.4m、南北2.8m、深さ30cmを測る。床面は中央部がわずかに凹むがほぼ平坦である。床面は比較的よく踏み固められている。炉跡は検出されていない。北西隅に細く深い杭状の柱穴があるが、１基だけであり本跡に帰属するかどうか不明である。覆土は暗褐色土主体である。遺物は土器破片が少量出土している。構築時期は前期後半と思われる。

重複する土坑は３基程度の重複と思われる。径0.8m強、深さ50cmの土坑の北壁に浅い２段の円形の掘り込みが認められる。

⑷ 陥し穴・土坑（遺構第10～23図、ＰＬ５～15）

Ｅ区２号住居跡及びＦ区２号竪穴状遺構に重複する土坑を除いたＡ区・Ｂ区・Ｆ区に検出された陥し穴・土坑について報告するが、個別の規模等については一覧表に記載し、ここでは陥し穴を中心に全体的な特徴

第１表　Ａ区縄文土坑一覧表　　8・21・30は欠番　32は縄文時代以外　（単位cm）

番号	位置	確認面規模			底面規模				長軸方位	等高線角	逆茂木		備考（遺物など）
		長軸 短軸 深さ	長短比		底面規模	長短比	最小	比			ケ所	配列	
1	15—11G	262×126×130	2.08		226× 80	2.83	52	4.35	N—32°—E	斜	2	6—6	
2	16—10G	200× 90× 84	2.22		164× 51	2.73	38	4.32	N—32°—E	斜	3	3—2—1	
3	16—12G	230×130×114	1.77		202× 76	2.66	54	3.74	N—80°—E	直	2	4—4	
4	17—10G	236×136×108	1.74		195× 74	2.64	60	3.25	N—51°—E	直	2	3—1	土器・石器
5	18—9G	205×111×120	1.85		154× 53	2.91	34	4.53	N—61°—E	直	2	2—2	
6	11—7G	218×100×106	2.18		200× 64	3.16	57	3.51	N—30°—E	斜	2	3—3	
7	17—8G	138×106× 64	1.30		96× 54	1.78			N—2°—W		1	2？	
9	11—7G	264×144×110	1.83		220× 92	2.39	55	4.00	N—21°—E	斜	3	1—4—4	
10	12—6G	290×130× 92	2.23		222× 78	2.85	56	3.96	N—44°—E	斜	2	3—3	
11	11—7G	190× 92× 88	2.07		158× 46	3.43	30	5.27	N—32°—E	斜	2	1—1	
12	10—8G	232×130×125	1.78		200× 70	2.86	50	4.00	N—10°—E	斜	2	5—3	
13	10—6G	227×106×106	2.14		203× 43	4.72	36	5.64	N—39°—E	斜	無		
14	12-5•6G	242×130× 84	1.86		204× 60	3.4	48	4.25	N—25°—E	斜	3	3—5—1	土器・石器
15	13—5G	232×148×124	1.57		154× 74	2.08	54	2.85	N—72°—E	直	2	2—3	土器
16	14-5•6G	302×106×166	2.85		356× 12	21.3			N—72°—W	斜	無		
17	14—4G	224×130×126	1.72		160× 70	2.42	46	3.48	N—80°—E	直	2	5—5	
18	12—7G	218×100× 94	2.18		188× 64	2.94	52	3.62	N—77°—E	直	2	3—3	
19	13—6G	208× 98×110	2.12		168× 66	2.47	54	3.11	N—10°—W	平	2	3—4	
20	13—4G	210×102×120	2.06		191× 67	2.85	48	3.98	N—28°—E	斜	2	2—4	
22	11—5G	102× 98× 84			102× 88				N—85°—W		無		
23	11—5G	160× 86× 84	1.86		138× 82	1.68			N—60°—E	斜	1	1	
24	13—10G	174× 84× 60	2.07		160× 68	2.35	54	2.96	N—81°—E	斜	3	3—4—5	
25	12—12G	214×106×100	2.02		192× 78	2.46	48	4.00	N—29°—W	斜	3	6—5—1	
26	14—9G	96× 60× 88	1.6		84× 42	2.00			N—9°—E		無		
27	13—9G	126× 94× 94	1.34		124× 70	1.77			N—54°—E	直	1	2	
28	14—7G	74× 60× 66	1.12		70× 54	1.30			N—32°—W		無		
29	14—7G	80× 62× 58	1.29										
31	12—3G	290×162×130	1.79		214× 77	2.78	60	3.57	N—28°—W	斜	2	5—3	石器
33	20—11G	214× 94× 94	2.28		163× 40	4.08			N—35°—E	斜	2	3—3	

について記述することにする。

①A・B区－A区とB区に別れているが、陥し穴・土坑群としては一連である。また、陥し穴・土坑としたが厳密に定義・分類して使い分けているものではない。

陥し穴の分布状況は、A区は等高線に沿って概ね標高307～309mと311～313mに帯状に分布する。B区でもA区上段の延長上にあたる標高311～313mに大半が位置する。

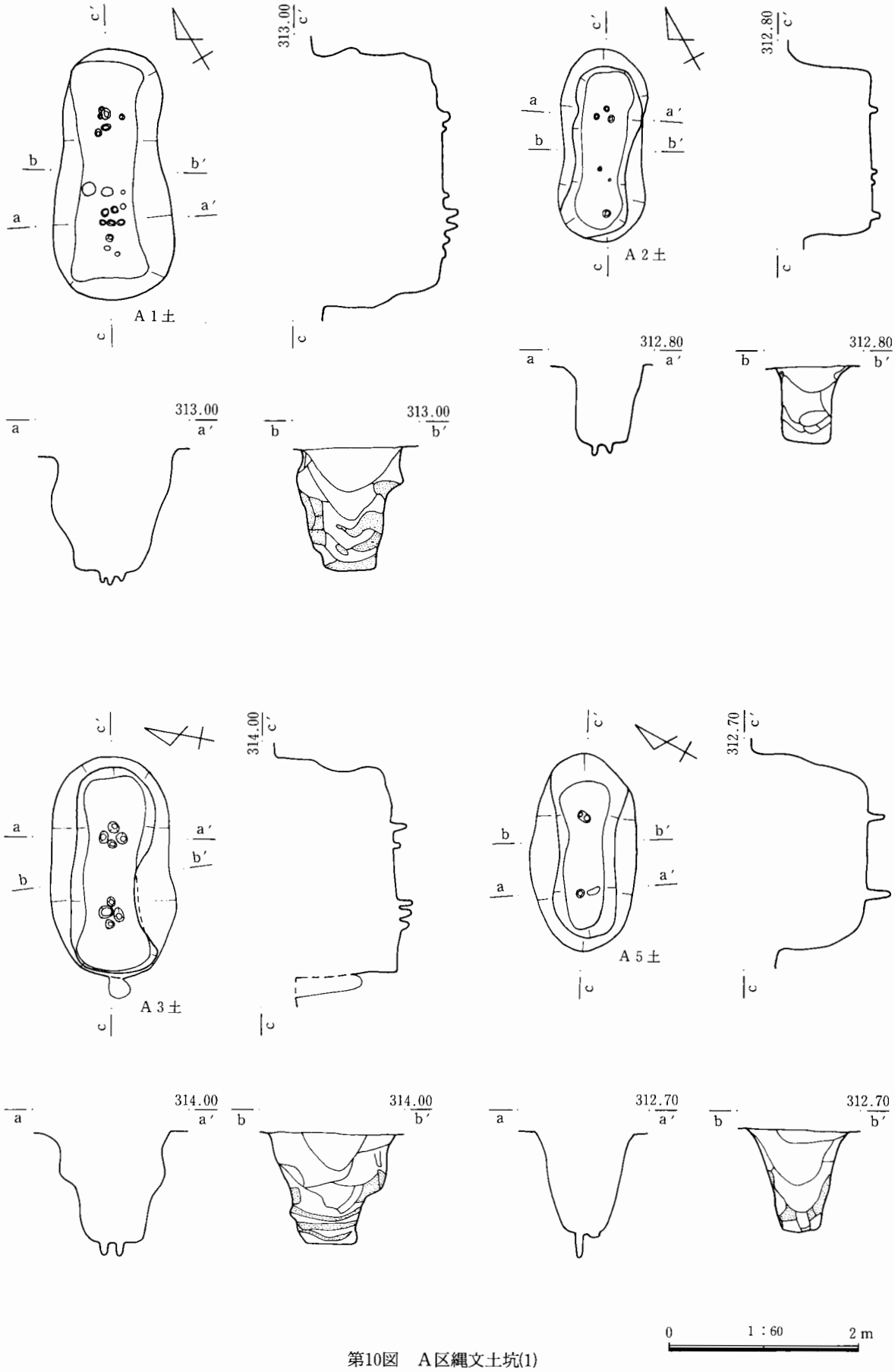
第2表　B区縄文土坑一覧表　　9は倒木痕　26は欠番　　(単位cm)

番号	位置	確認面規模		底面規模				長軸方位	等高線角	逆茂木		備考（遺物など）
		長軸 短軸 深さ	長短比	底面規模	長短比	最小	比			ケ所	配列	
1	7－19G	266×150×108	1.77	188× 44	4.27	24	7.83	N－1°－W	斜	1	1	土器
2	5－17G	308×197×140	1.56	228× 73	3.12	50	4.56	N－10°－W	斜	2	4－5	
3	6－15G	228× 90×102	2.53	187× 43	4.35	28	6.68	N－33°－W	平	2	2－2	
4	7－15G	180×120×150	1.50	255× 54	4.72	26	9.81	N－30°－E	直	無		
5	6－14G	228×134×130	1.70	188× 78	2.41	48	3.92	N－23°－E	直	2	4－4	
6	5－14G	294×156×120	1.88	222× 83	2.67	53	4.19	N－64°－E	斜	無		土器・石器
7	6－14G	250×110×104	2.27	218× 58	3.76	36	6.06	N－6°－W	斜	2	1－2	
8	6－13G	261×164×137	1.59	188× 70	2.69	46	4.09	N－16°－E	直	4	1-3-5-1	
10	8－15G	263×140×126	1.88	204× 58	3.52	42	4.86	N－76°－E	斜	2	2－2	
11	9－14G	294×176×123	1.67	232× 63	3.68	50	2.64	N－40°－E	直	2	1－2	
12	8－12G	240×166×116	1.45	170× 80	2.13	58	2.93	N－86°－W	斜	2	5－4	
13	8－12G	210×130×116	1.62	184× 73	2.52			N－83°－W	斜	2	3－6	
14	10－12G	224×130×116	1.74	198× 76	2.61	56	3.54	N－88°－W	斜	2	5－7	
15	7－12G	280×156×116	1.79	218× 86	2.53	52	4.19	N－67°－W	斜	無		
16	8－13G	76× 70× 45		76× 60				N－8°－E				
17	11－12G	228×128×122	1.78	188× 82	2.29	58	3.24	N－37°－E	直	2	6－5	
18	10－13G	96× 68× 70	1.41	56× 38	1.47			N－40°－W				
19	9－14G	78× 68× 97	1.15	44× 38	1.16			N－7°－W				
20	10－15G	85× 70× 56	1.21	70× 50	1.40			N－6°－E				
21	9－20G	96× 96× 62		105× 81								
22	8－21G	96× 86× 30		78× 69								
23	7－18G	90× 80× 50		86× 65								
24	7－18G	128×125× 86		100× 96								
25	7－18G	146×140× 74		128×118								石器
27	9－17G	145×110×165	1.32	112× 66	1.70			N－36°－E	直			
28	6－22G	286×160×126	1.79	212× 60	3.53	42	5.05	N－16°－E	斜	2	3－2	土器

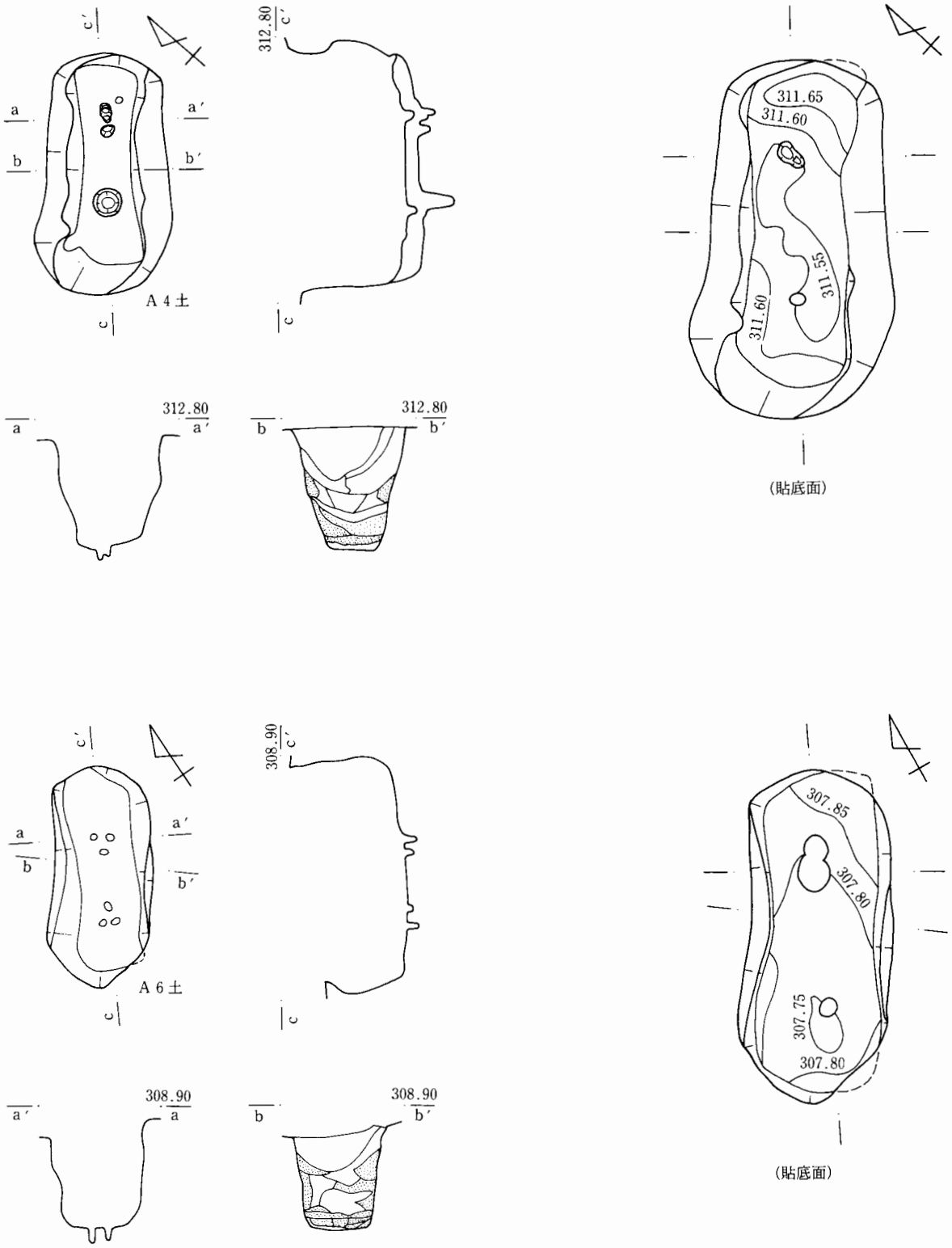
第3表　F区縄文土坑一覧表　　(単位cm)

番号	位置	長軸×短軸×深さ	形状	備考（遺物など）
2	30－39G	径約130 × 70	円形	土器
4	30－38G	96 × 76 × 40	長円形	土器
6	30－38G	径約170 × 90	円形	土器・石器
7	29－38G	径約105 × 60	円形	石器
8	29－38G	径約130 × 64	円形	土器
9	29－38G	120 × 110 × 55	円形	土器
10	31－37G	径約90 × 48	円形	

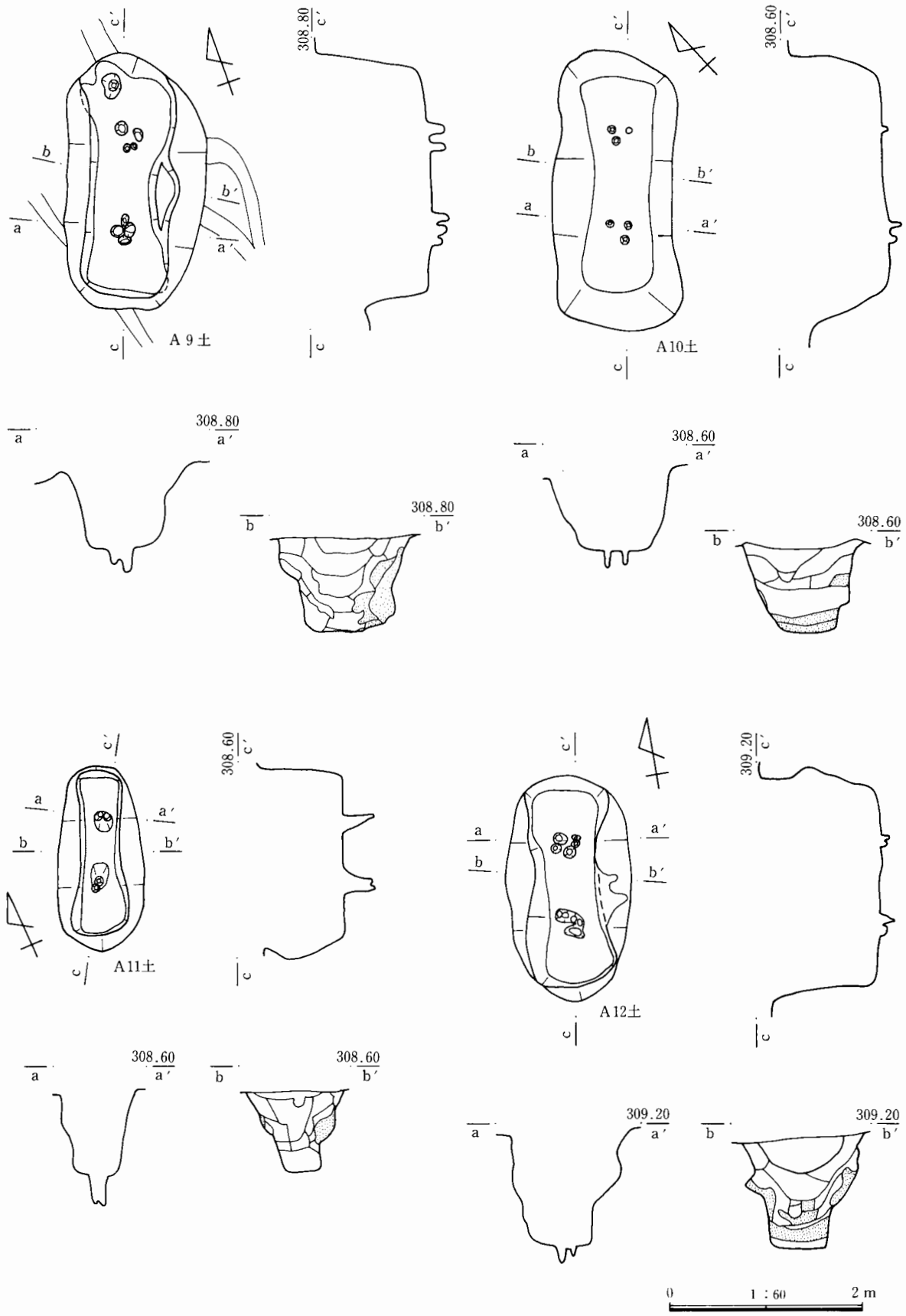
番号	位置	長軸×短軸×深さ	形状	備考（遺物など）
15	30－38G	径約105 × 34	円形	
16	29－38G	180 × 162 × 60	円形	土器・石器、ピット
17	29－38G	146 × 122 × 54	長円形	土器
18	30－37G	160 × 144 × 70	円形	土器・石器、ピット
19	29－38G	146 × 112 × 40	不正円形	2基重複？
26	29－38G	192 × 136 × 78	長円形	



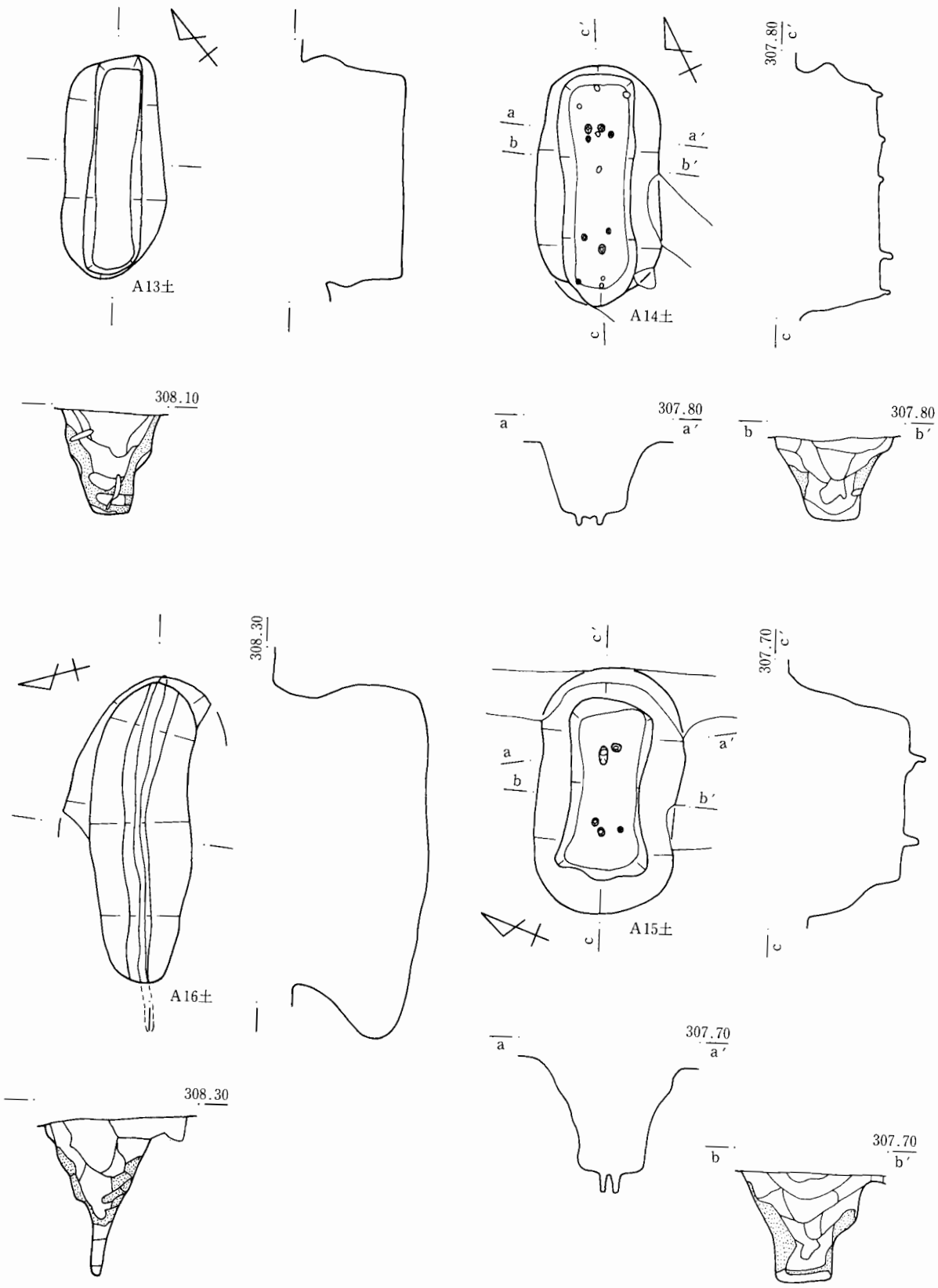
第10図　A区縄文土坑(1)



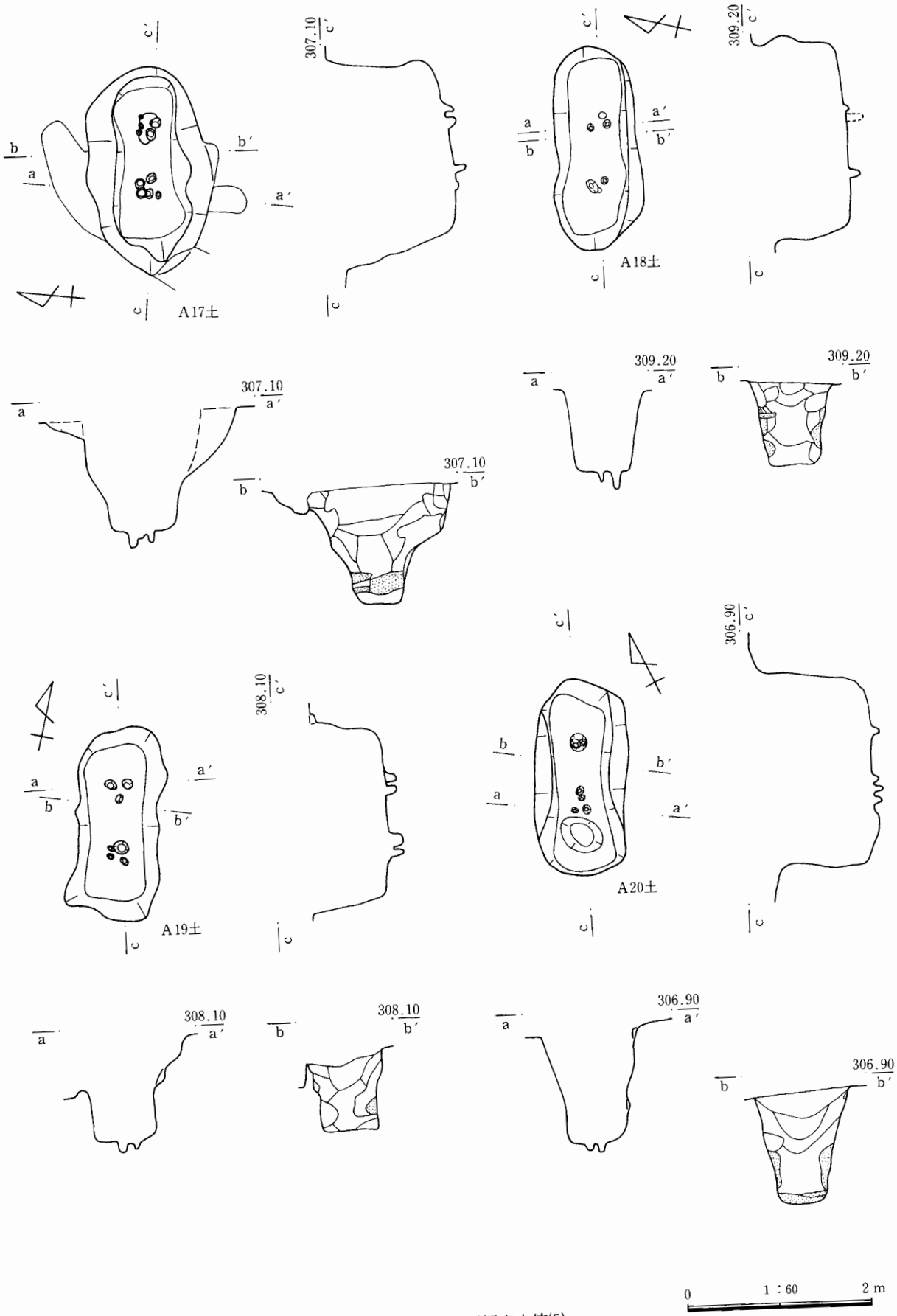
第11図　A区縄文土坑(2)



第12図　A区縄文土坑(3)



第13図　A区縄文土坑(4)



第14図　A区縄文土坑(5)

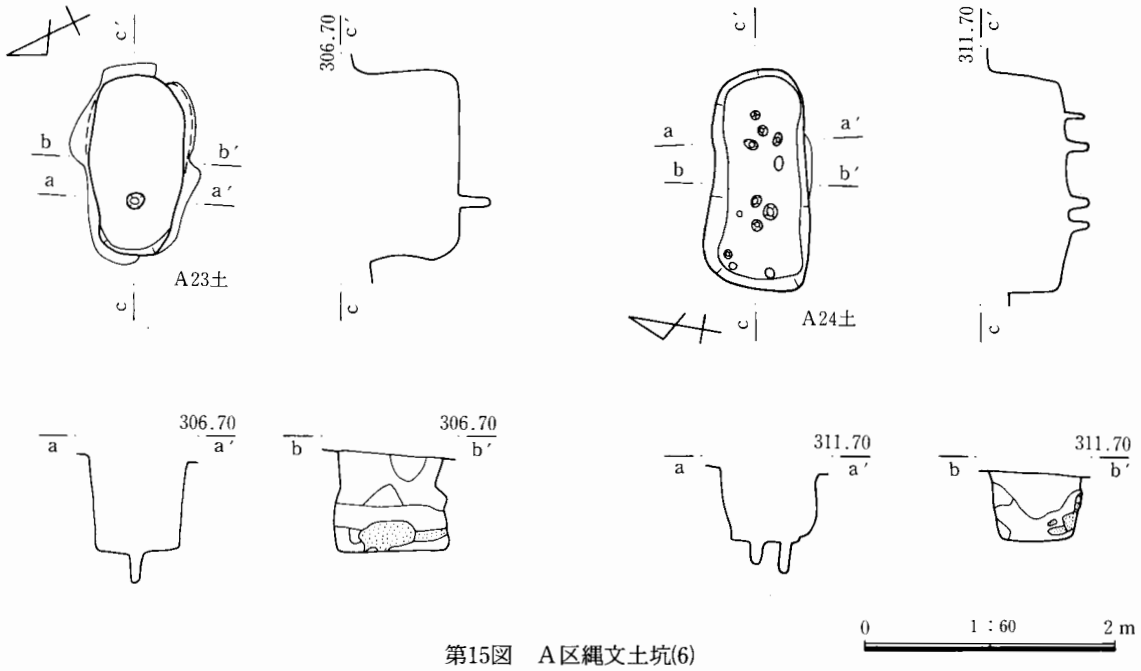
陥し穴の平面形状は一般的な小判型の範疇に収まるものが大半を占めるが、いくつかのバリエーションに分類することは可能である。しかし、形状の変化は微妙であり、また、本来は同型であるものが掘り込み上部の削平により検出面の形状が異なる場合もあり、今回は類型化を行っていない。少数例を挙げるといわゆるTピットはA区に1基だけ検出された。検出面の平面形が小さな楕円形で、底面が長方形を呈するA27号土坑、やはり検出面の平面形が楕円形で底面が細長く、長軸断面が袋状を呈するB区4号土坑、同様に検出面が楕円形で、底面規模に余り差が無く、深い掘り込みを持つB27号土坑や、規模が小さく隅丸長方形を呈するA区7号・A区26号も陥し穴の範疇で捉えられるものであろう。これ以外に平面規模がごく小さい割に深い掘り込みをもち、隅丸長方形あるいは長円形を呈するA28・29号土坑、B18～20号土坑がある。規模的には柱穴とも言い得るが、それぞれが独立して占地することや形状等から総合的に判断すれば、その対象や実効は不明であるが、陥し穴に類する機能を有すると考えている。土坑は全て円形である。断面は袋状を呈し、貯蔵穴と推測されるものが大半である。

陥し穴の規模は長軸で比較すると、TピットのA16号土坑とB2号土坑が3m超で最大規模である。これ以下は漸移的に規模を減じていくが、200～250cmに22基が属し、過半数を占める。

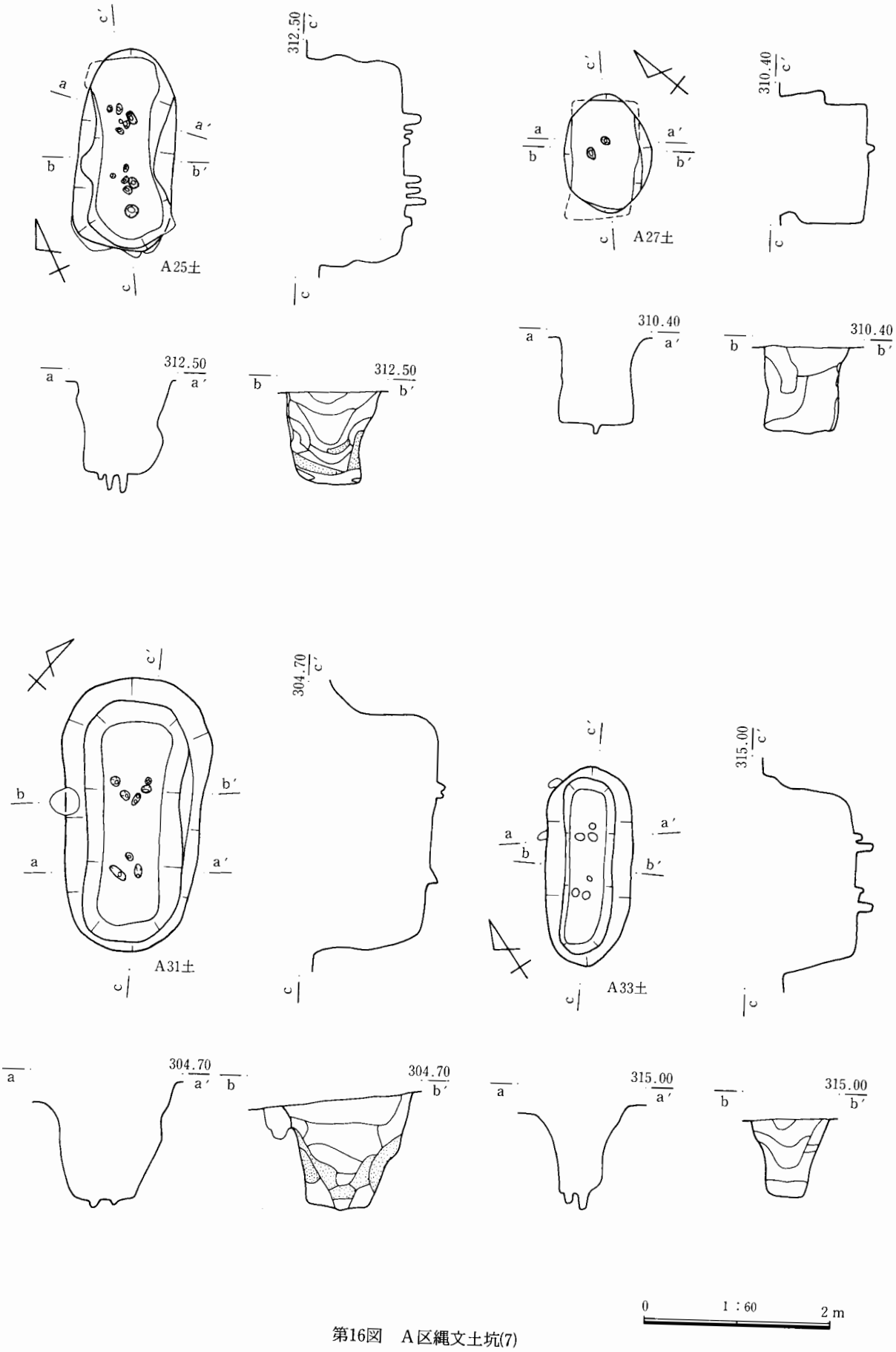
定型的な陥し穴の大半から逆茂木が検出されている。隅部に認められ3ケ所としたものもあるが、攪乱と思われるものを除くと、基本的にはほとんどが2ケ所タイプである。逆茂木は比較的太い掘り込みを持つ杭状のものは少なく、大半はごく細い掘り込みのため移植ゴテが入らず、完掘していない。逆茂木の本数は1ケ所1～6本まであるが、3・4本のものが多いようである。配置状況は長軸・短軸上ともに対称形を成すものが多く、同時に複数を設置していたと思われるが、重複や非対称のものは補修や敷設換えを行った結果と思われる。定型的で逆茂木の検出されないものについては、断ち割りを行っていないため見逃した可能性も否定できない。

地形に対する陥し穴の構築方向は長軸が等高線に対して斜めのものが多く、直交の約2倍である。等高線に平行に設置されたものは2基だけである。

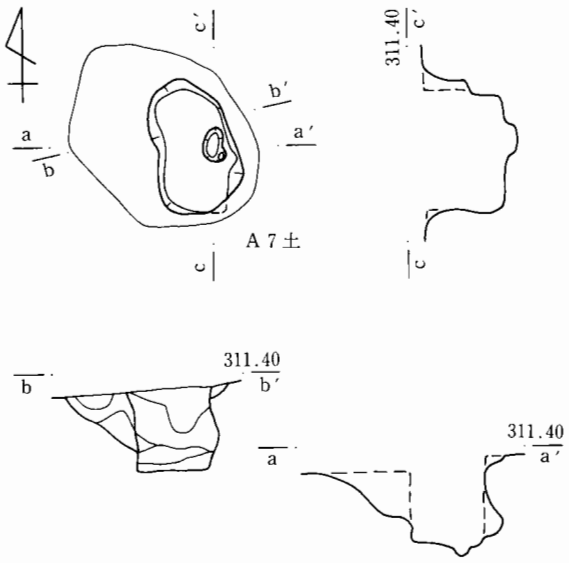
遺物を出土した陥し穴、土坑は少ない。A区の陥し穴から出土した土器の時期は中期初頭が多く、B区は



第15図　A区縄文土坑(6)

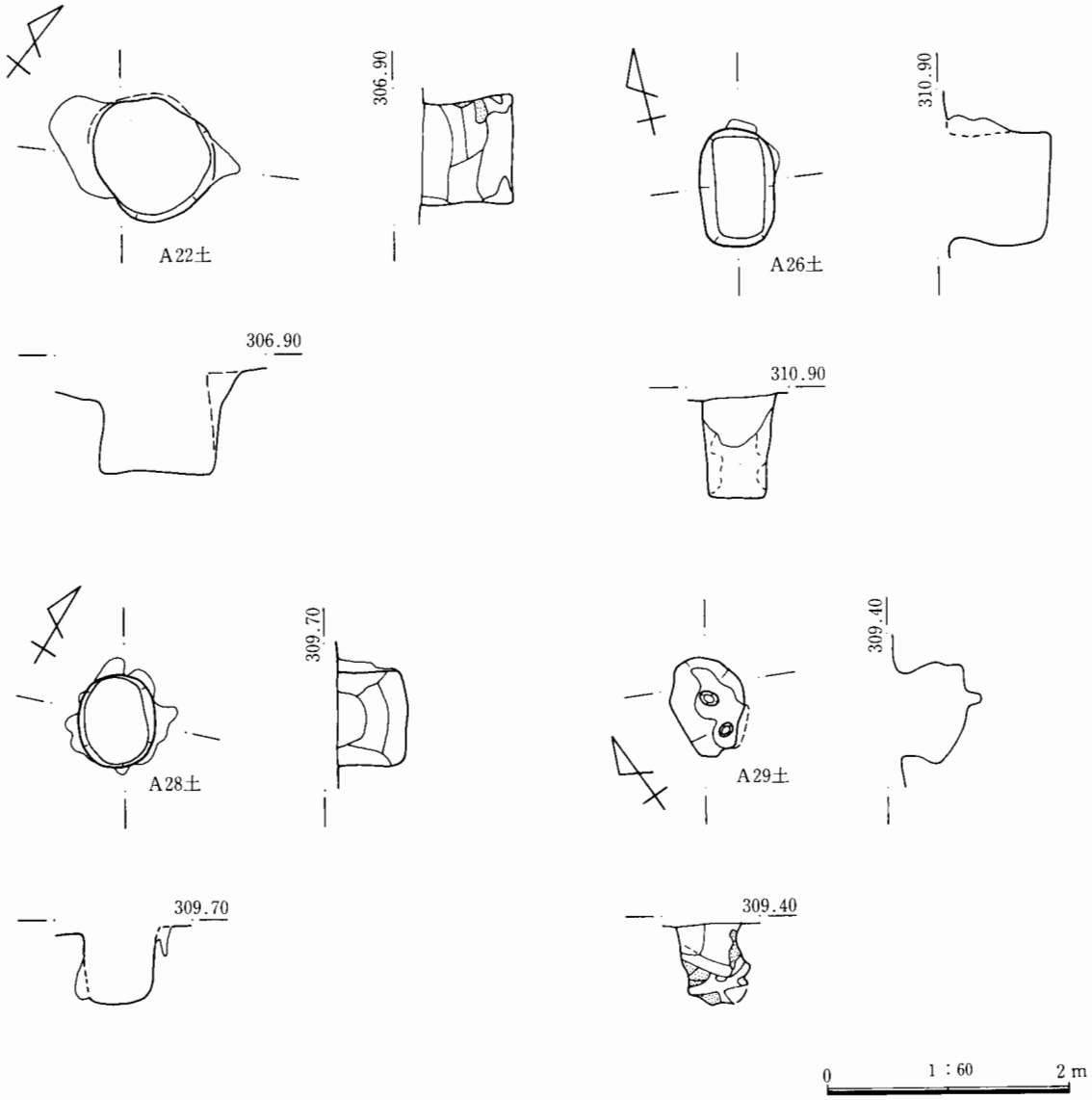


第16図　A区縄文土坑(7)

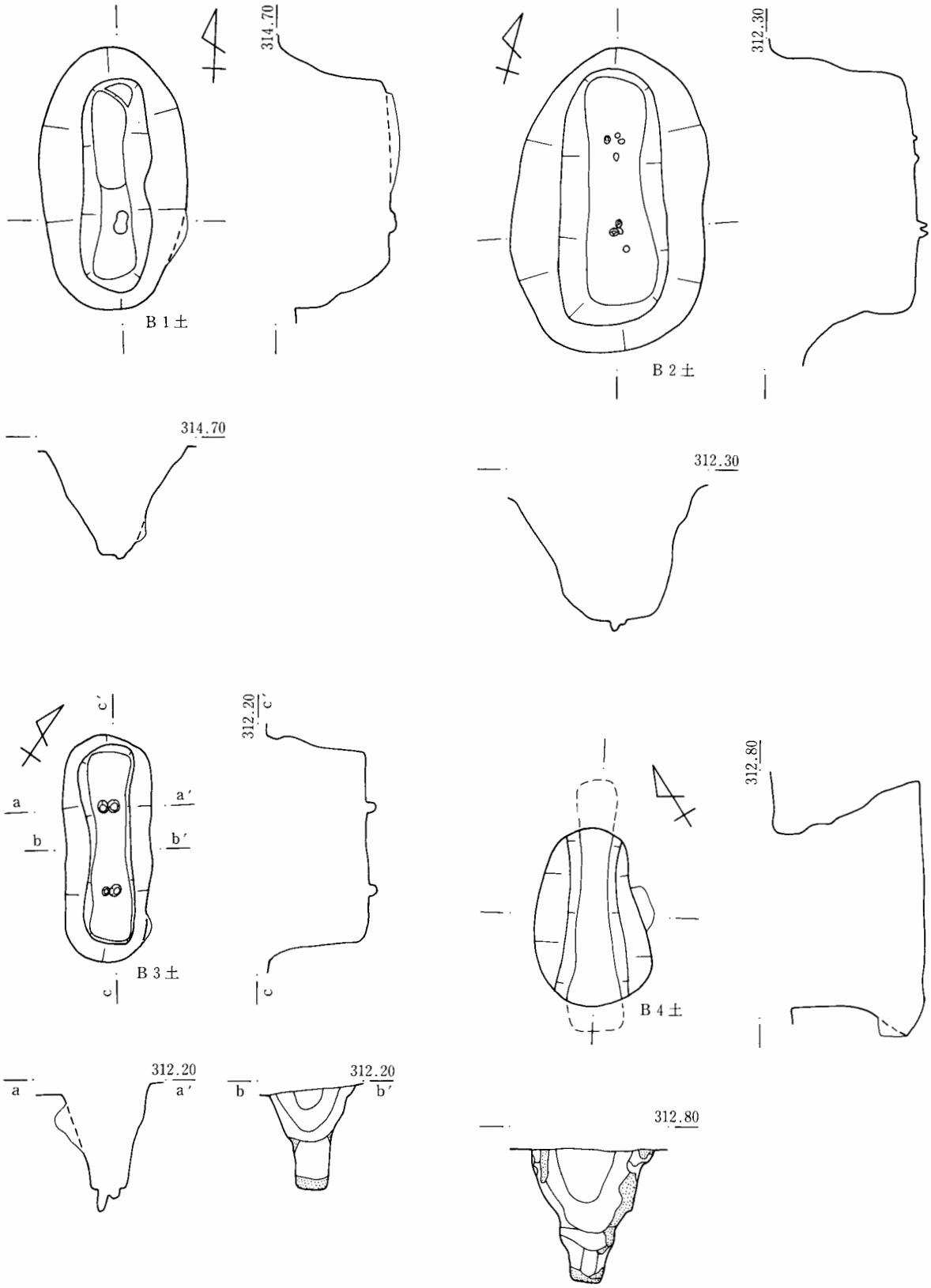


早期、前期、中期が混在する。しかし、大半は覆土の中～上層から出土しており、構築時期を示すものは少ないと思われる。

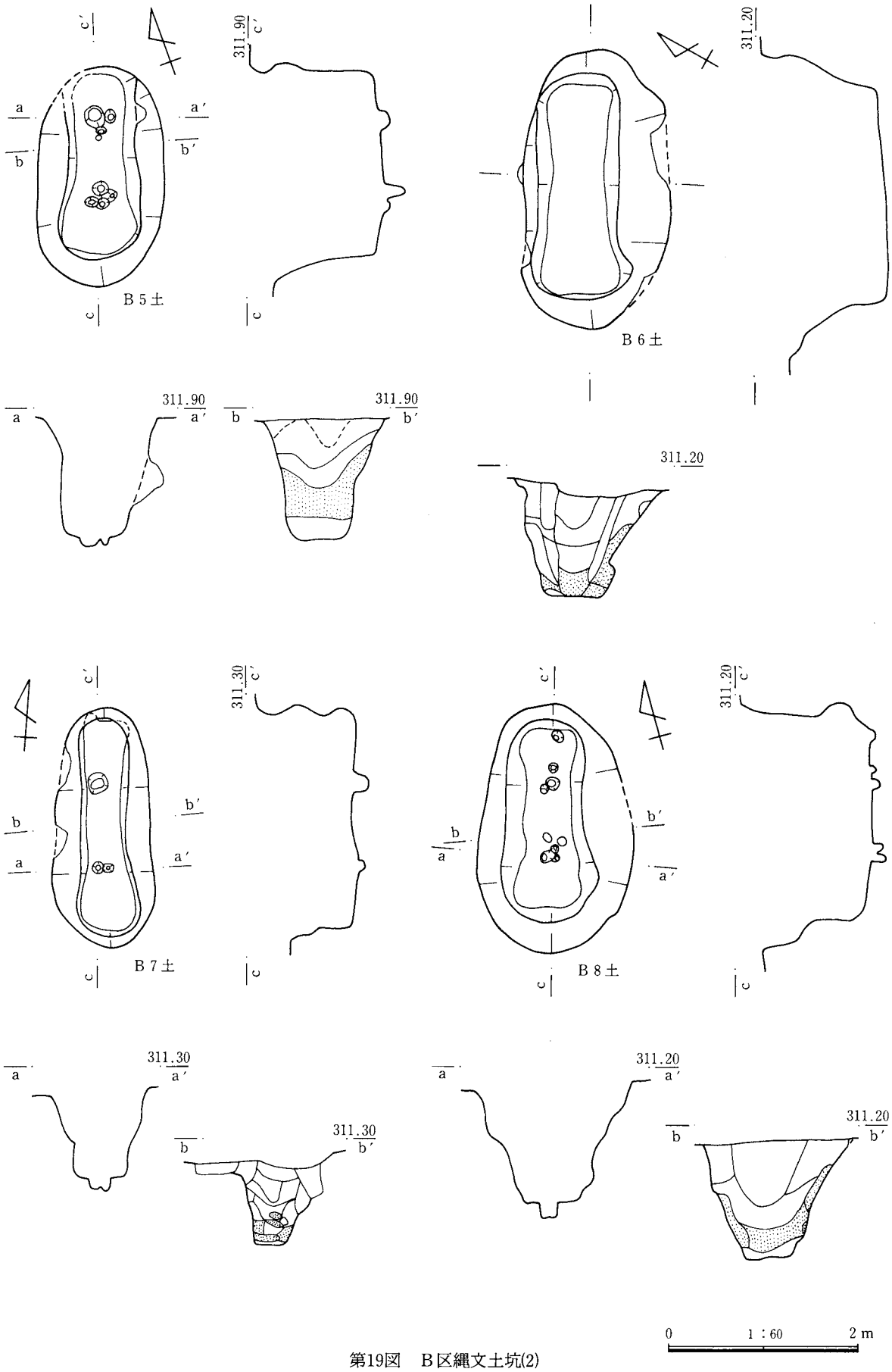
②F区―円形を呈し、底面が平坦で、壁面が直立若しくはオーバーハングする貯蔵穴状の一般的な土坑が多い。円形タイプの規模は径0.9m前後から1.8mまで様々であるが、90・110・130・170cmを各前後する規模で分類することも可能と思われる。遺物は大半の土坑から出土している。出土土器の時期は大半が前期後半である。形状復元できる個体は少ないが、結節浮線文土器が1個体出土している。



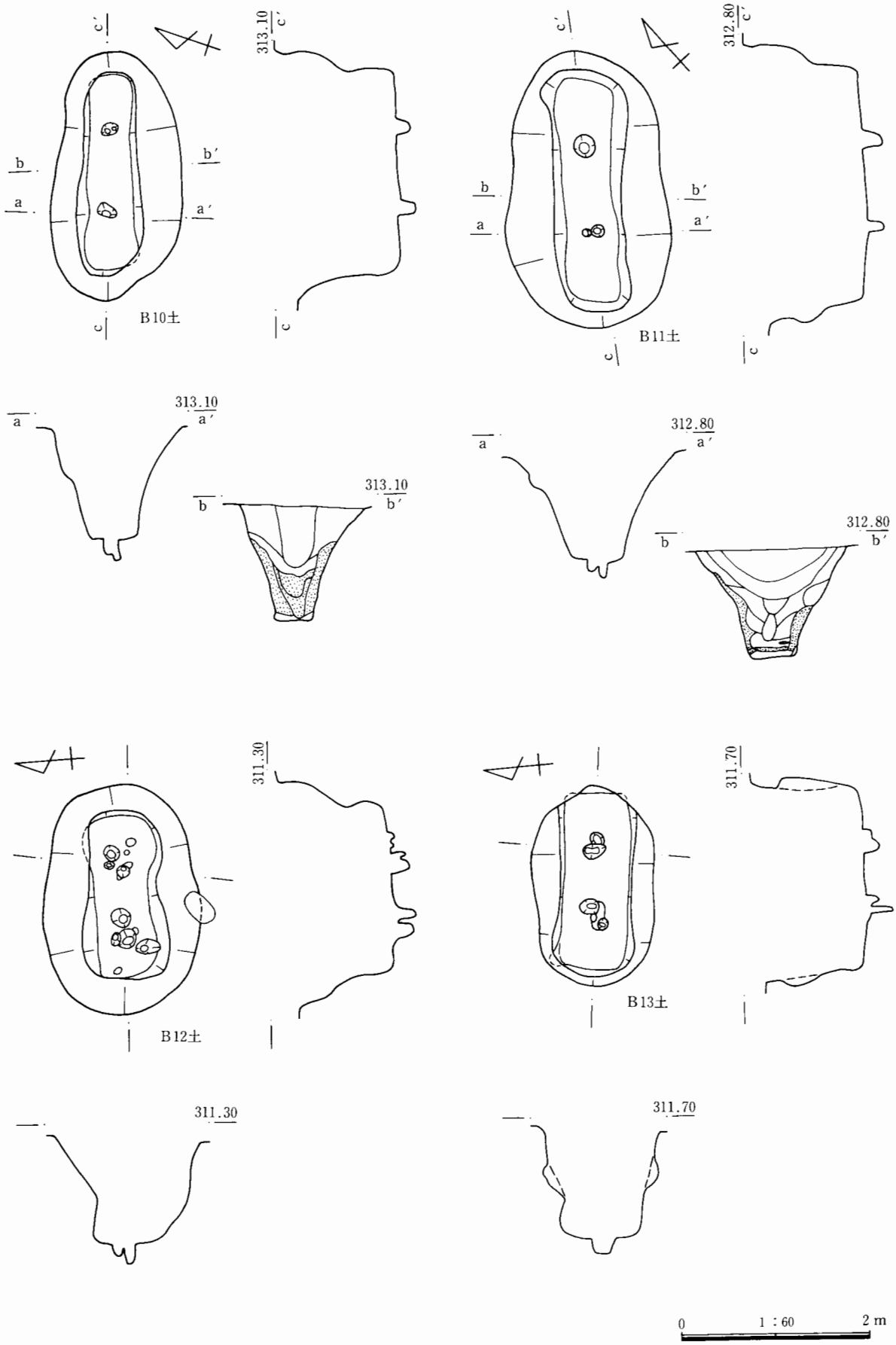
第17図　A区縄文土坑(8)



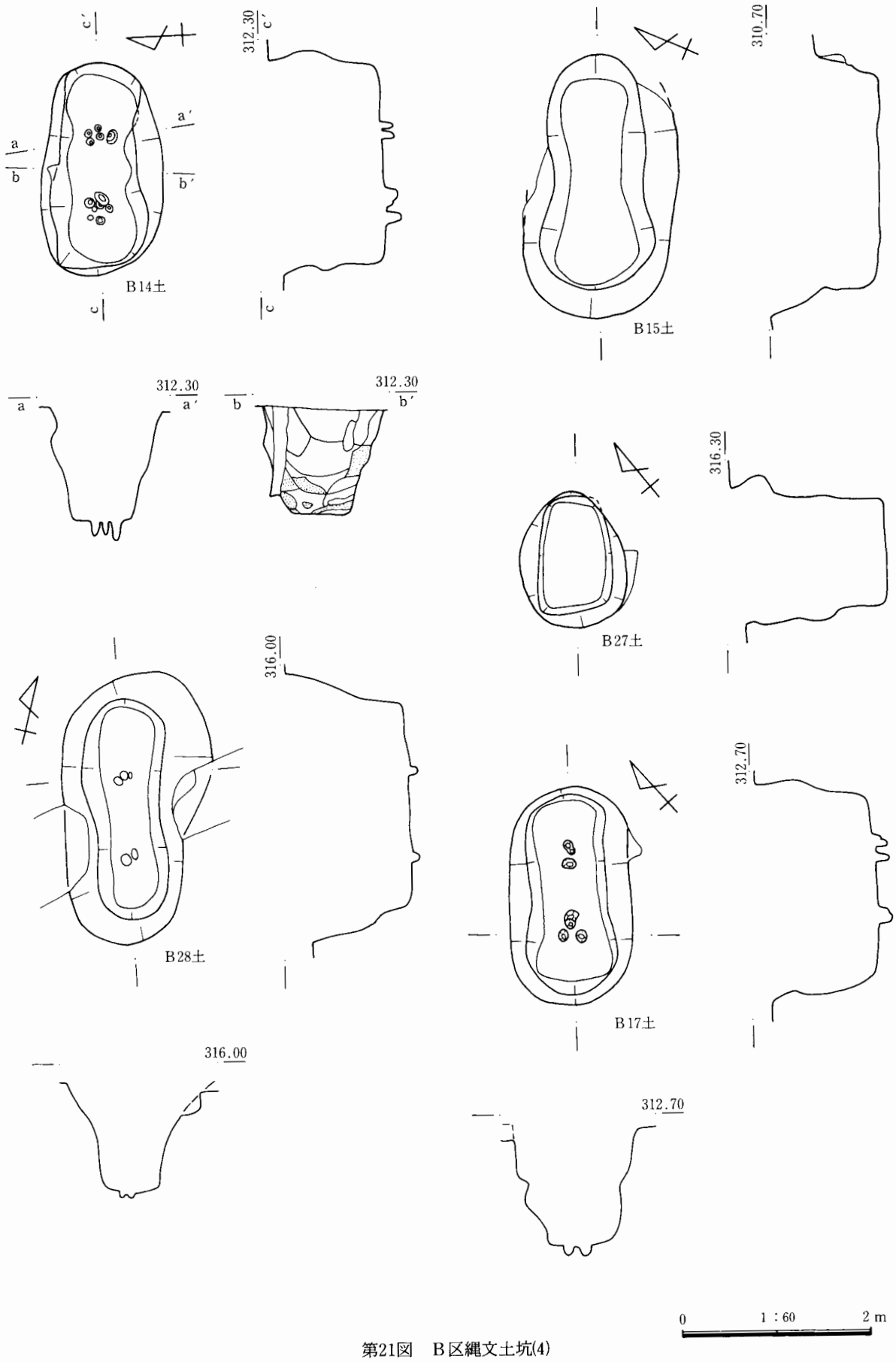
第18図　B区縄文土坑(1)



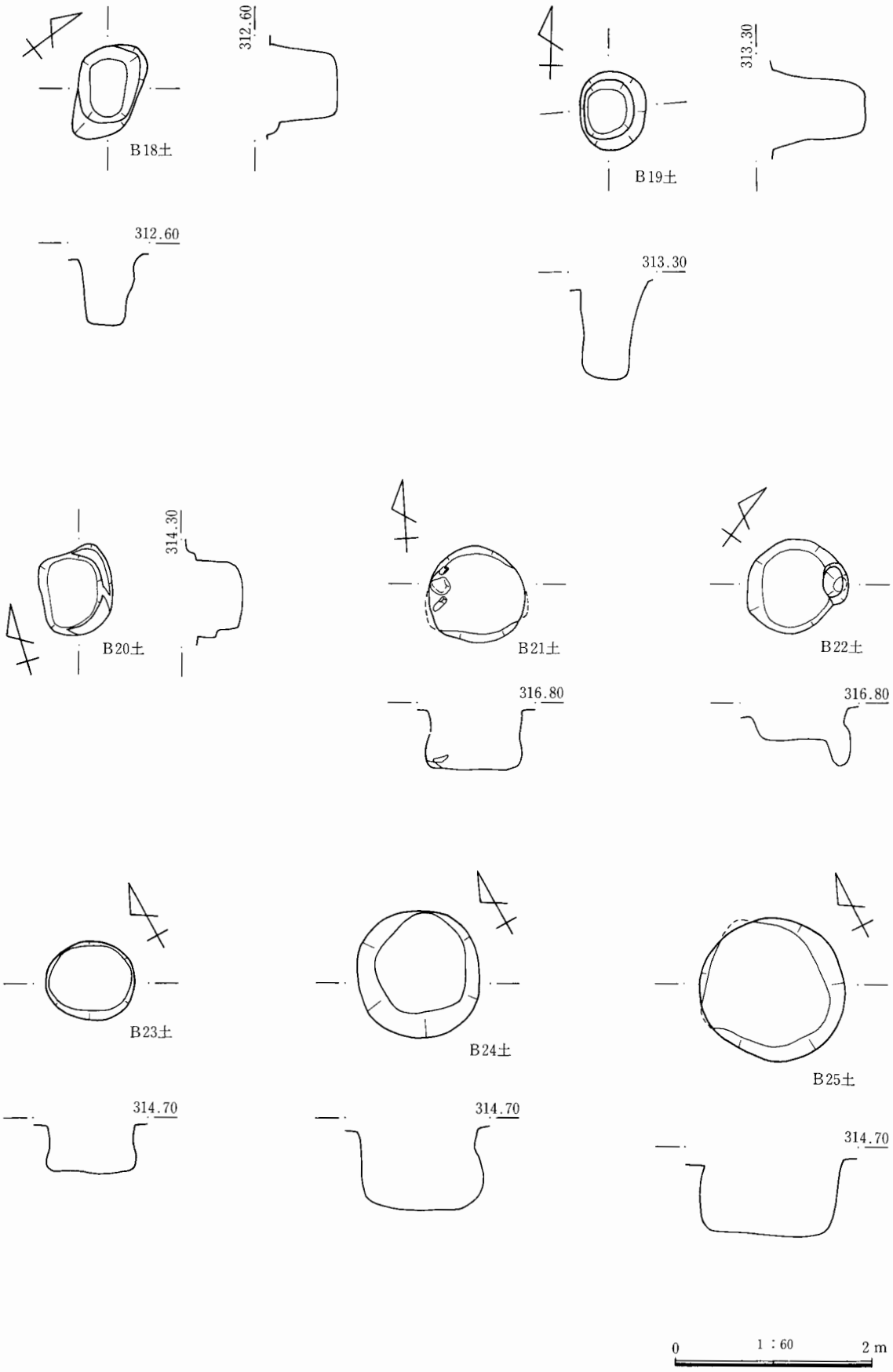
第19図　B区縄文土坑(2)



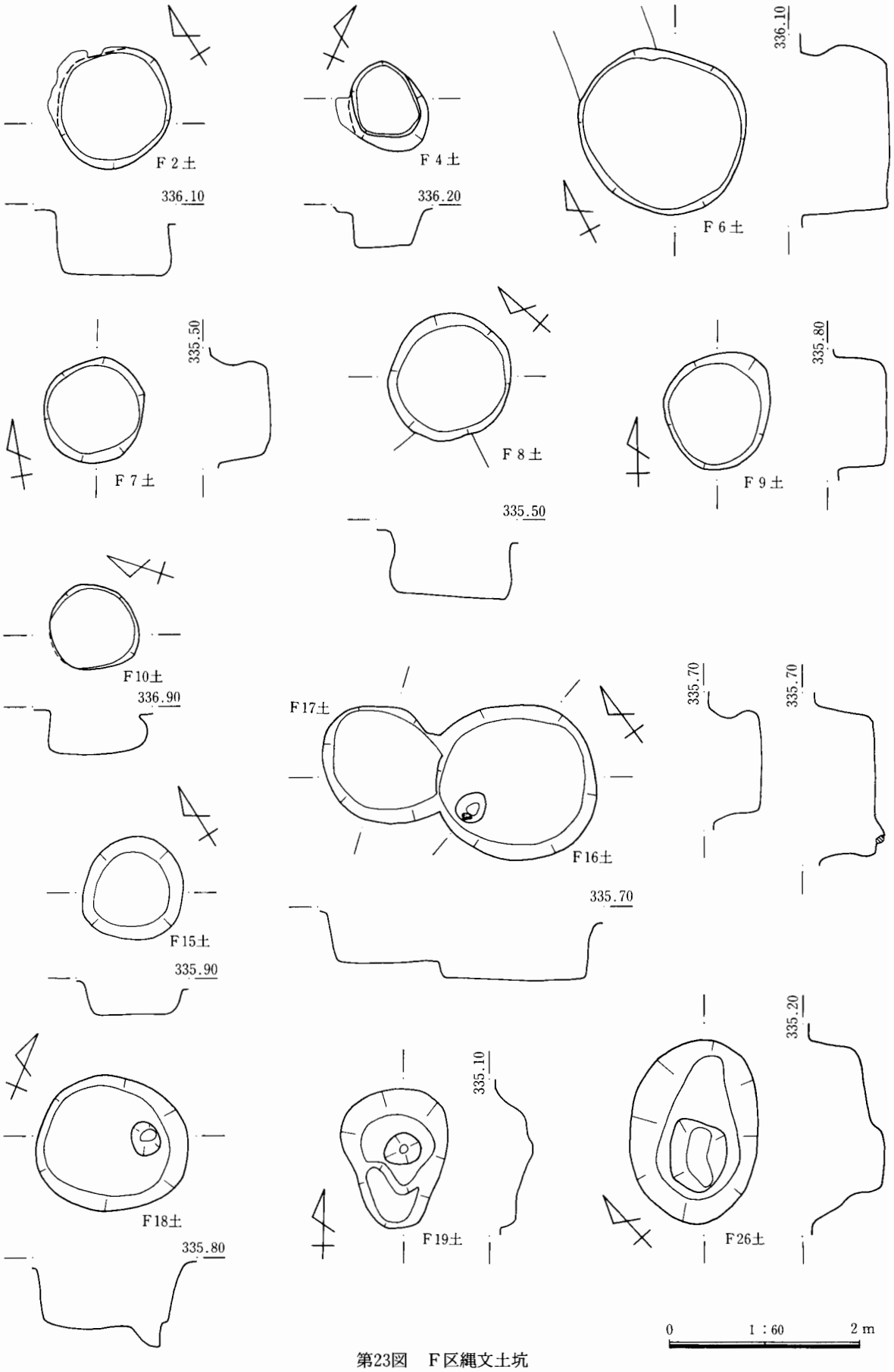
第20図　B区縄文土坑(3)



第21図　B区縄文土坑(4)



第22図　B区縄文土坑(5)


F 2 土
336.10
F 4 土
336.20
F 6 土
336.10
F 7 土
335.50
F 8 土
335.50
F 9 土
335.80
F10土
336.90
F17土
F16土
335.70
335.70
335.70
F15土
335.90
F18土
335.80
F19土
335.10
F26土
335.20
0
1 : 60
2 m

第23図　F区縄文土坑

(5) 集石遺構（遺構第24図、ＰＬ16）

Ｂ区１号集石（遺物第28図、ＰＬ38）

Ｂ区中央部東寄り、７―19グリッドに位置する。検出面は黒ボク土上層である。

中央部に角礫を据え、その周りに大きさを揃えて鶏卵～拳大の亜円礫（山石）を円形に寄せ集め、さらにこの上に一回り大きく小礫で楕円形に覆ったような状態で出土している。礫は全て火熱を受けて赤変している。集石の間から押型文土器が出土しており、周辺遺構外からも早期土器が比較的多く出土している。

Ｂ区２号集石

Ｂ区北東部の１面調査部分、10―22グリッドに位置する。周辺には縄文時代の遺物包含層が広がる。検出面は黒ボク土中層である。不明瞭であるが本跡を中心とした周辺には円形の凹みが認められ、また、本跡の構造からも竪穴住居跡である可能性が強い。

平板な角礫（山石）４石を用いて四方から斜めに組んでおり、この中心部にも角礫が乗っている。一部の礫に赤変が認められるが、人為的に火熱を受けた結果であるかどうか判然としない。いずれにしても住居跡に伴う炉跡と思われる。北方と北東方約１ｍにさらに２個の角礫が近接して出土している。

本跡周辺からは前期中葉と中期初頭の土器が比較的まとまって出土しているが、炉跡の構造等からすれば中期初頭に帰属する可能性が高いと思われる。

Ｅ区１号集石

Ｅ南区の南西端部、13―25グリッドに位置する。調査区域の端であり調査区外に続く可能性もある。２号集石が東に近接し、一連の遺構の可能性もある。検出面は黒ボク土中層である。

長さ30cm前後の平板な角礫２石と通有の角礫１石で構成する。それぞれ20～30cmの間隔を開けて、ほぼ同一レベル上に三角に並んでいる。

Ｅ区２号集石

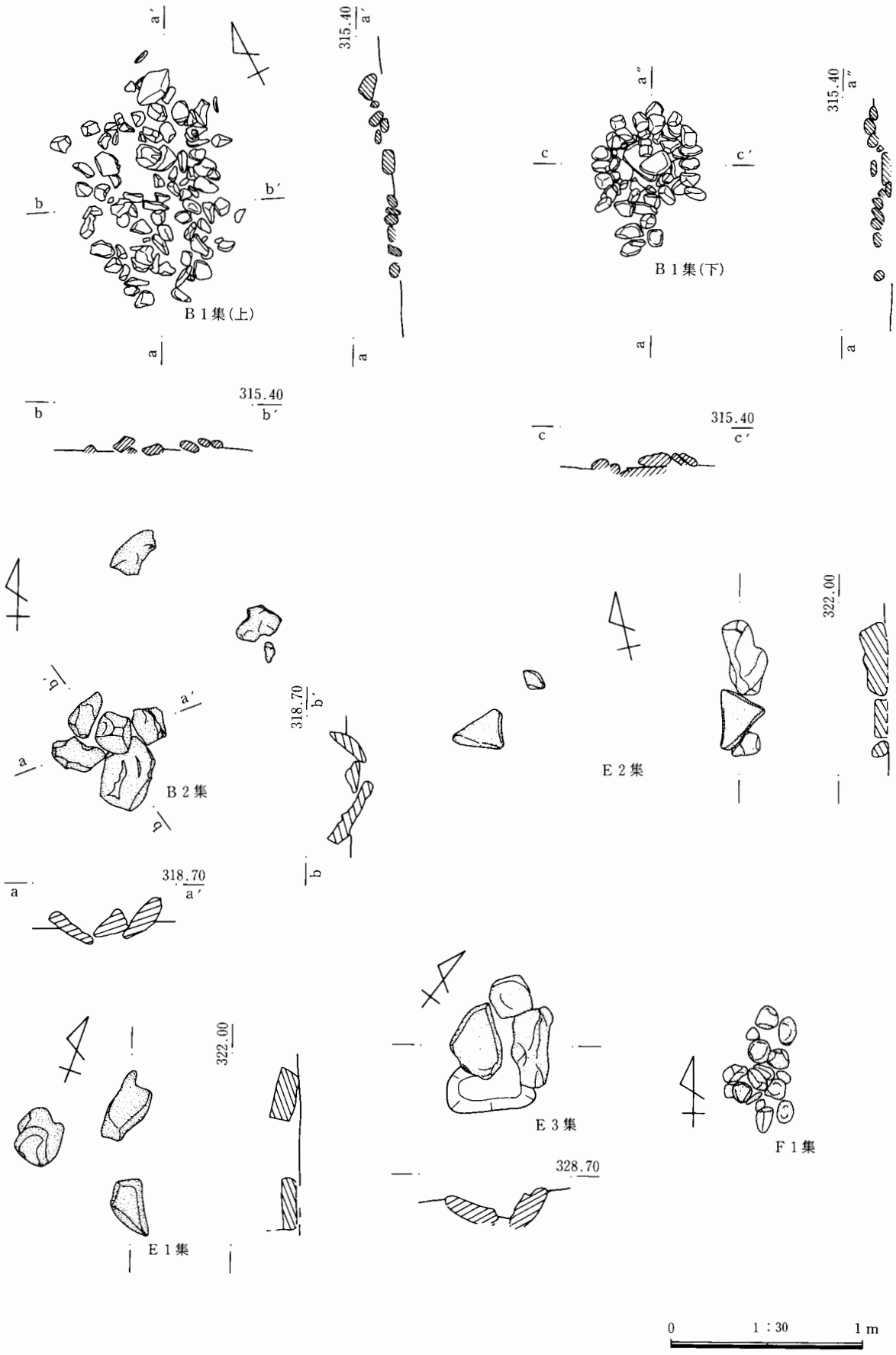
Ｅ南区の南西端部、13―26グリッドに位置する。調査区域の端であり調査区外に続く可能性もある。１号集石に近接しており、検出面も同層位であるため、一連の遺構の可能性もある。

平板な角礫１石と長形の角礫１石、拳大の円礫が南北に接して並んでいる。この西方約１ｍ（１号集石とのほぼ中間）にも平板な角礫と円礫が出土している。

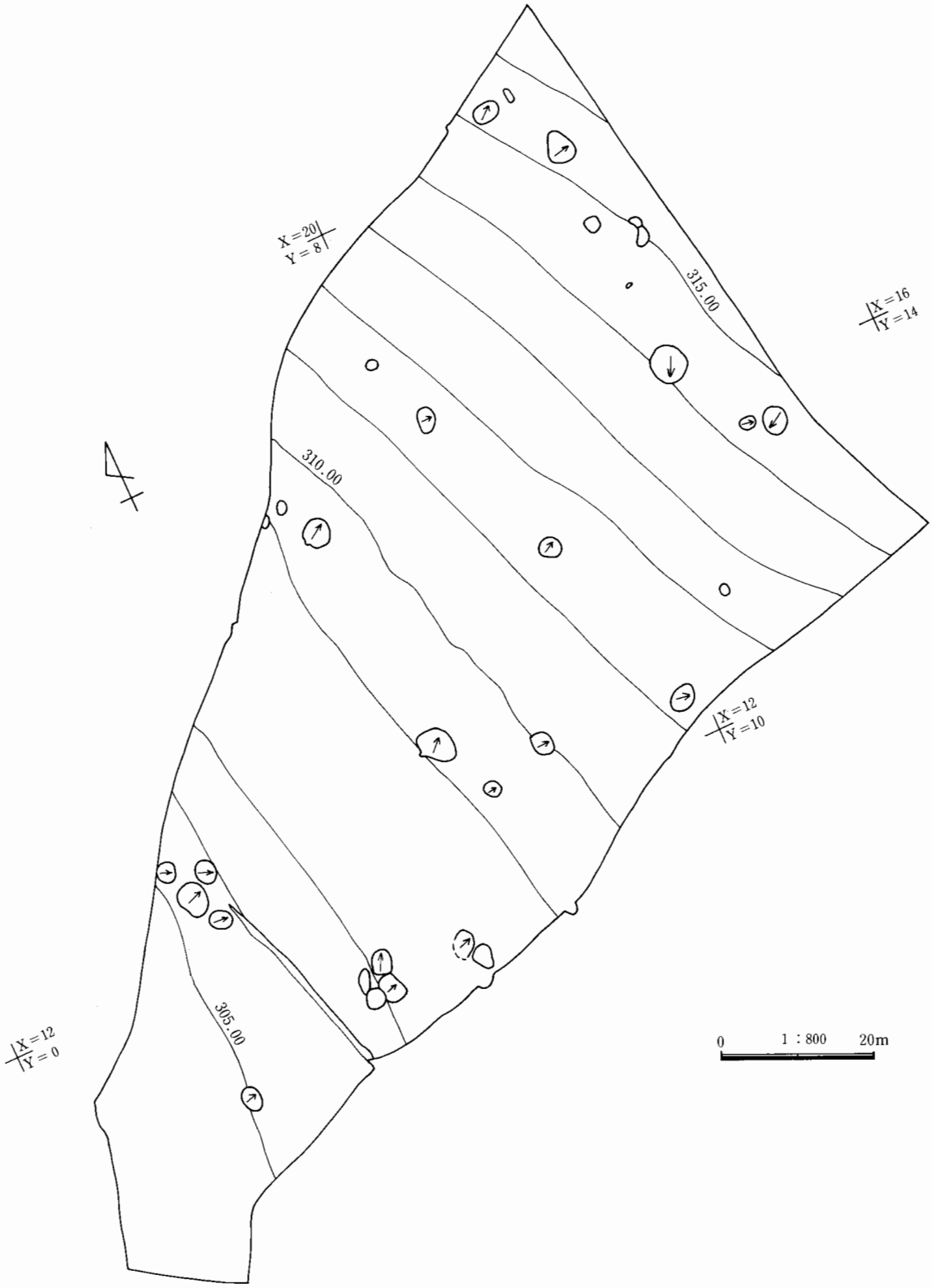
Ｅ区３号集石

Ｅ北区の北西端部、20―30グリッドに位置する。近接する遺構は無い。検出面は黒ボク土中層である。

長さ40cm前後の平板な角礫と20cmの角礫を用いて三方から斜めに組んでいる。南側には石の抜き痕と思われる浅い掘り込みが認められており、元々は四方に石を配した構造であったと思われる。焼土や角礫の赤変は顕著には認められないが、構造的には炉跡と思われる。但し、周辺に明瞭な掘り込みは認められず、また、遺物も出土していないため、竪穴住居跡に伴う炉跡であるかどうかは不明である。



第24図　集石遺構



第25図　A区倒木痕

Ｆ区１号集石

Ｆ区２面の南側調査区の区域外北側、25―35グリッドに位置する。検出面は黒ボク土上層である。

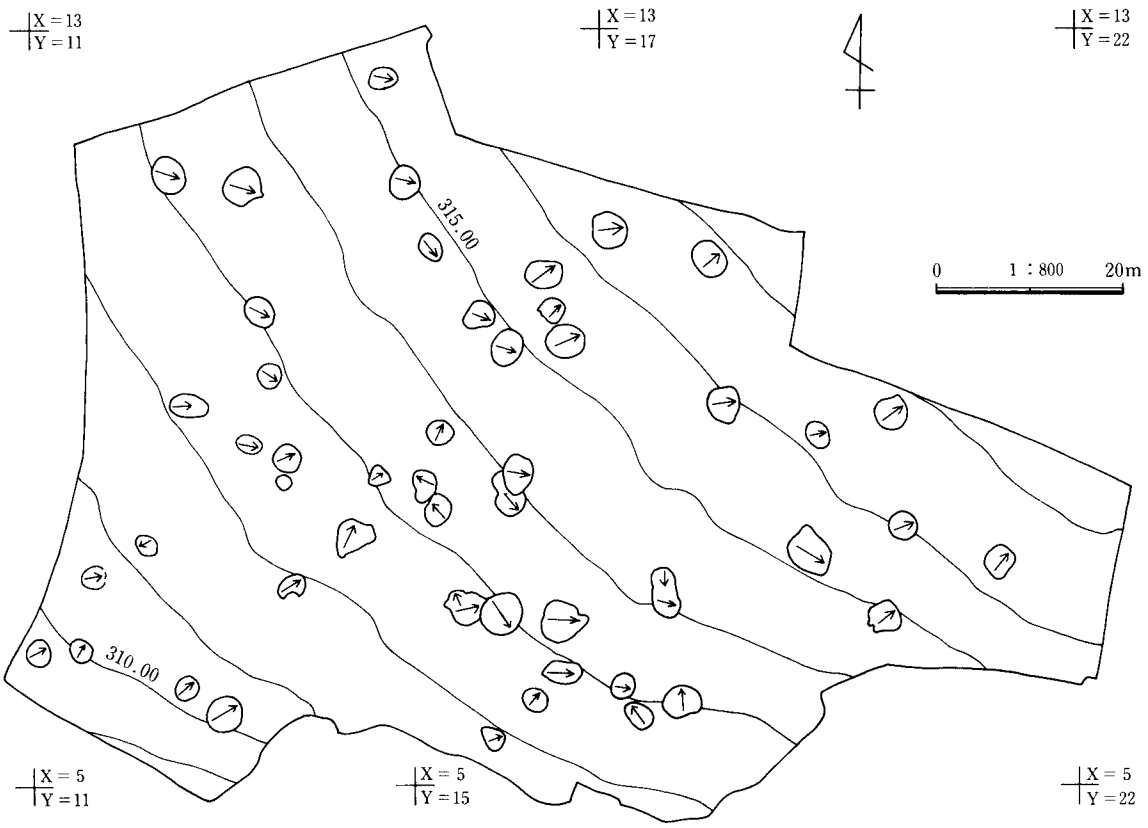
拳大の円礫（山石）十数個が70×30cm程の範囲に雑然と集められたような状態で出土している。円礫は全て火熱を受けて赤変している。掘り込みは検出できなかった。

(6) 遺物包含層（遺物第29～33図、ＰＬ38・39）

Ｂ区北東部、１面調査区の南寄りに位置する。Ｘ＝９～11、Ｙ＝20～22ラインを中心に形成される。検出層位は淡色黒ボク土～黒ボク土上層である。この中には竪穴住居跡と推定されるＢ２号集石が含まれることから、別の遺構の存在も十分に予想されるが、層位の関係もあり検出できなかった。出土遺物は前期中葉と中期初頭が主体で、早期～前期初頭は多時期にわたって少量ずつ出土している。土器の残存状態は全て小破片であり、形状復元できるものはほとんど無い。

(7) 倒 木 痕（第25・26図）

調査範囲内のほぼ全面から検出されているが、特にＢ区内に多い。ここではＡ・Ｂ区の倒木痕の検出状況を掲載したが、倒壊方向は東～北方向が大半である。精査を行っていないこともあり縄文時代という以外の時期の絞り込みはできない。陥し穴と重複するものも複数基あるが、土坑群との係わりや分布状況に特段の規則性は看取できない。



第26図　Ｂ区倒木痕

(8) 縄文時代の遺物

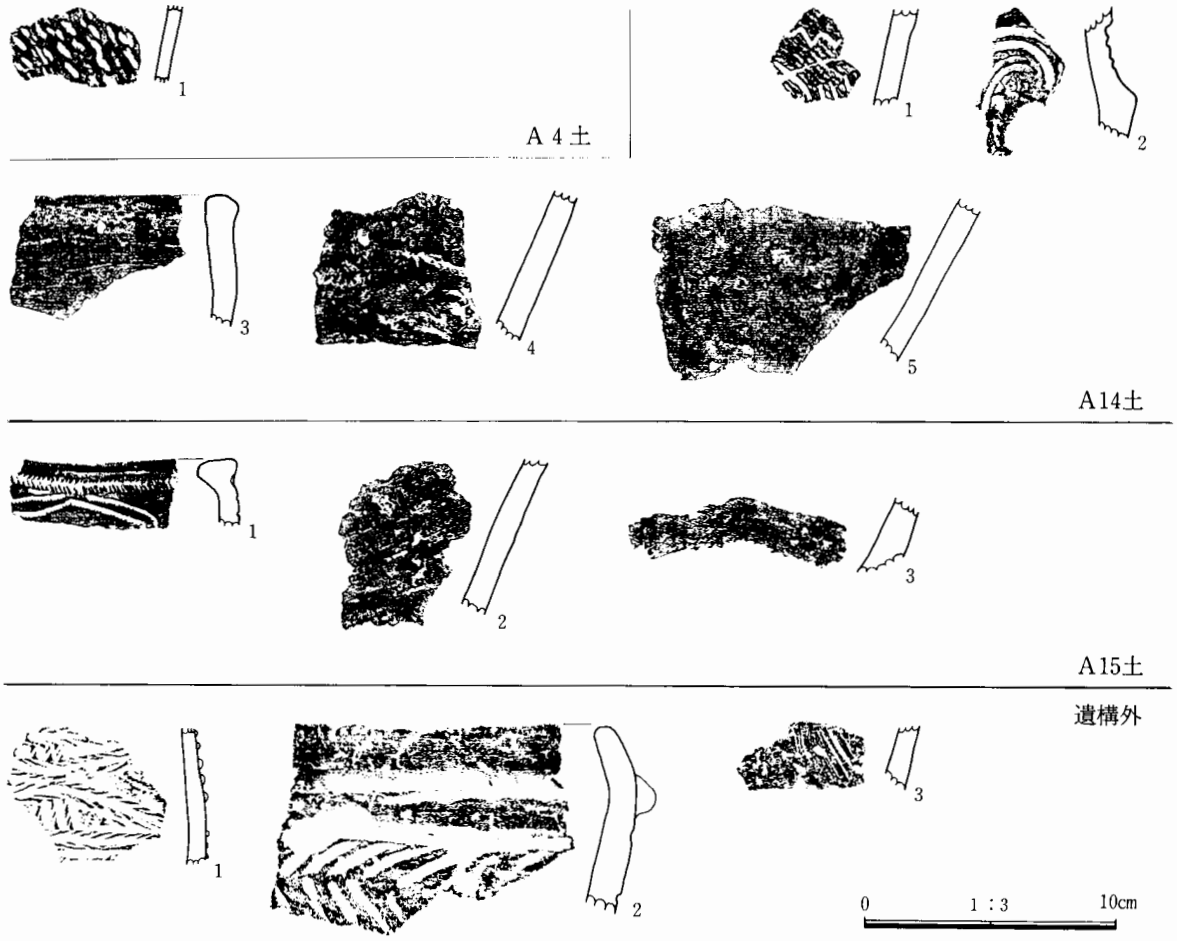
① 土 器

A区出土土器

A 4 土 1 は節が大きいが撚糸と思われる。時期は不明確であるが、色調・胎土からは中期初頭期の土器に近似する。A14土 1 は縄文地文上に沈線で鋸歯文等を施文する。2 は瘤状突起の周囲に渦巻き状に太沈線で施文する。3～5 は無文で、3 の口縁部は外方に肥厚する。A15土 1 は口縁部が極端に肥厚する。角押文を口縁端部直下に巡らし沈線で施文する。2・3 はA14土 3～5 と同一個体と思われる。時期は中期初頭～前葉と思われる。遺構外 1 は浮線文土器で浮線上にキザミを付す。諸磯 b 式土器である。2 は隆帯で区画し、区画内に太沈線で矢羽根状文を施文する。加曽利E式土器である。3 は疎らに縦位の平行沈線を施文する。帰属時期は不明である。

B区出土土器

B 1 土 1・2 は横方向のケズリが顕著な無文土器である。時期は早期平坂式か？。B 6 土 1・2 は縄文地文だけの土器。3～5・8・9 は同一個体で、隆帯で横方向に区画し、キャタピラ文、角押による鋸歯文な



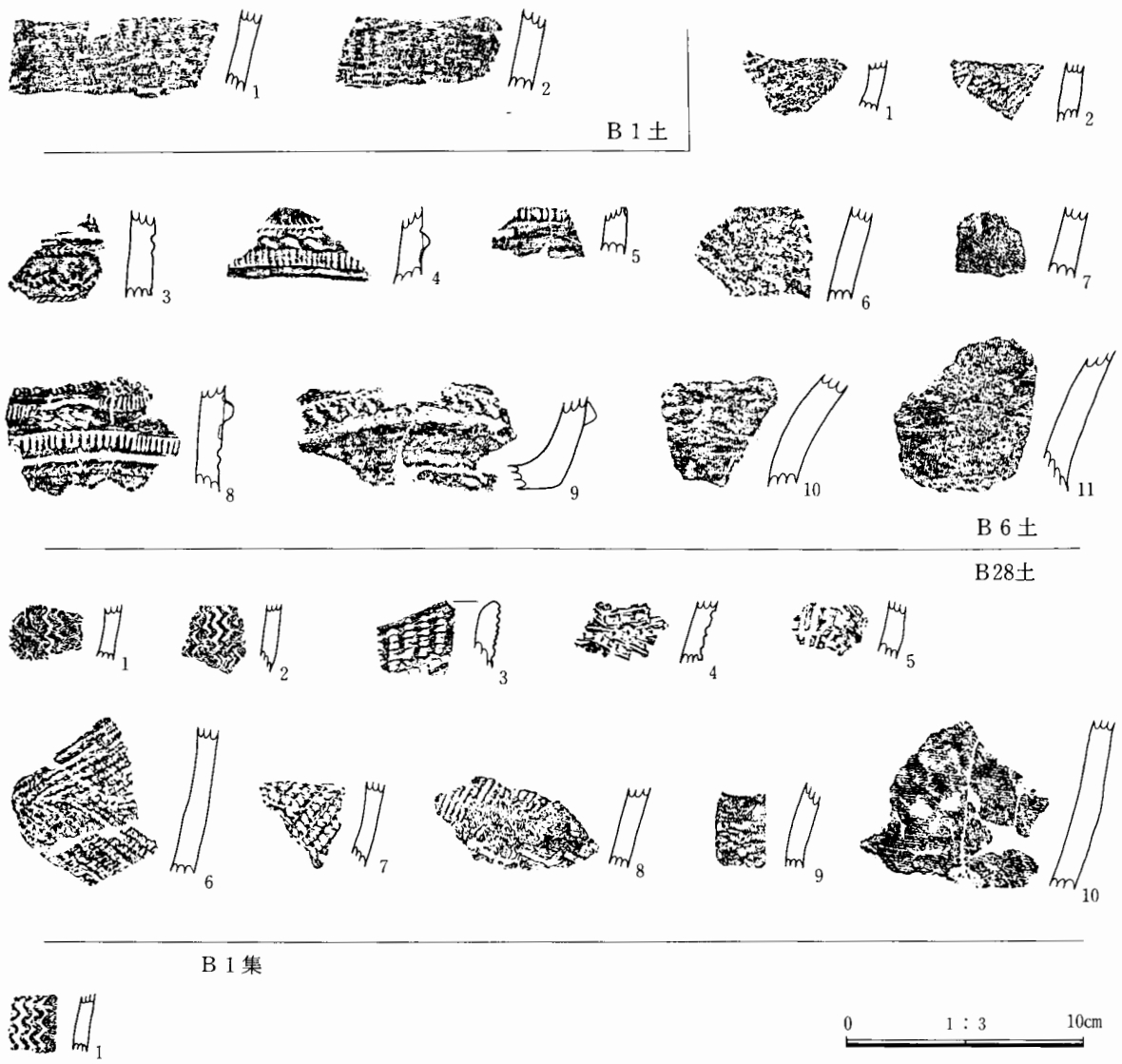
第27図　A区出土縄文土器

どを施文する。勝坂式である。6・7・10・11は無文土器である。B28土1・2は早期の押型文土器、3は櫛歯状工具による刺突文、4は平行沈線に刺突文、5は平行沈線、6は羽状縄文、7は附加条で前期初頭〜中葉である。8は結節縄文で前期末〜中期初頭と思われる。9は原体不明、10は無文土器で時期不明である。B区1号集石は早期押型文である。

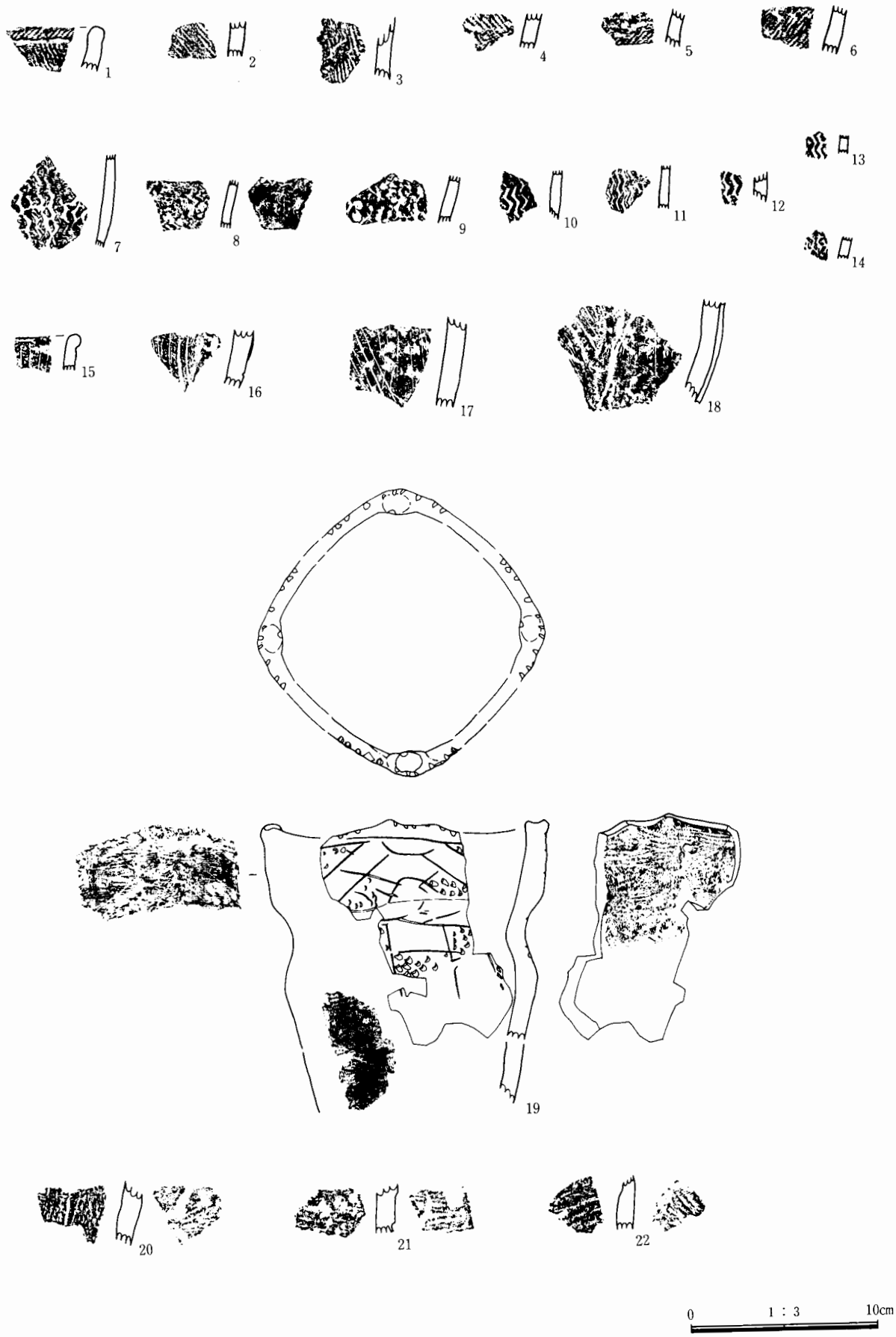
包含層からは前期中葉、中期初頭を中心に比較的まとまった量が出土しているが、全て破片であり、形状復元できるものはない。遺構外からは数量は少ないが早期の撚糸文、押型文、沈線文、条痕文、中期後半の破片が出土した。ある程度形状復元できたのは条痕文土器が1点である。

1〜6は撚糸文系の縄文土器である。7〜14は縦位の山形押型文で、8だけは内面にも横方向に施文する。15〜18は沈線文を縦位に施文するが、16・18には縦位の隆帯も付される。19〜22は条痕文土器である。23〜30は無文土器で、27は中期の可能性がある。25・29・30はB1土1・2と同一個体と思われる。31〜42は底部である。31・32は尖底、33・34は丸底である。35〜37は鉢若しくは浅鉢と思われる。43〜48は縄文施文土器であるが、45〜48は疎らに施文する。以上の土器の大半は早期までに属すると思われるが、中期初頭等が含

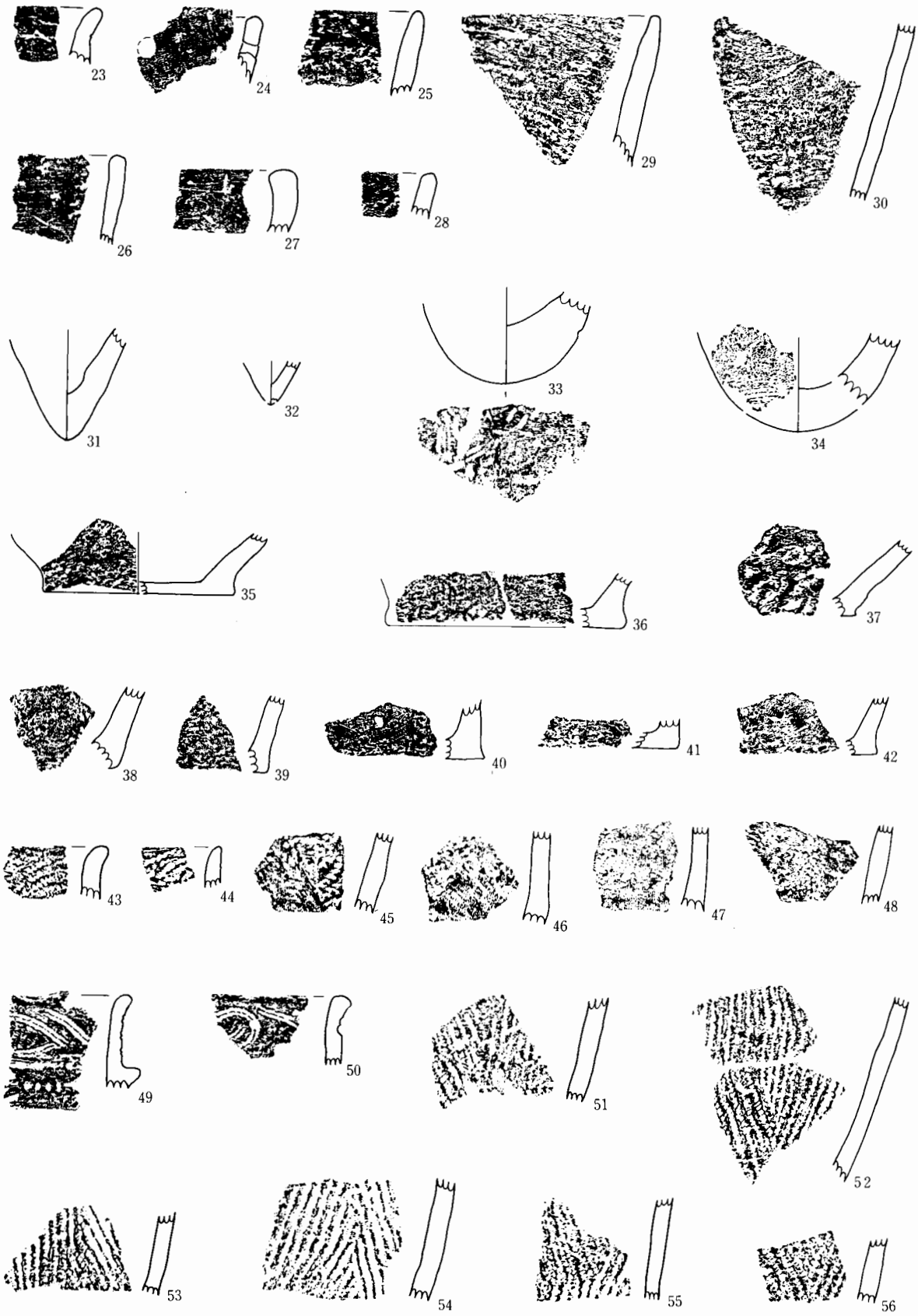
（P39へ）



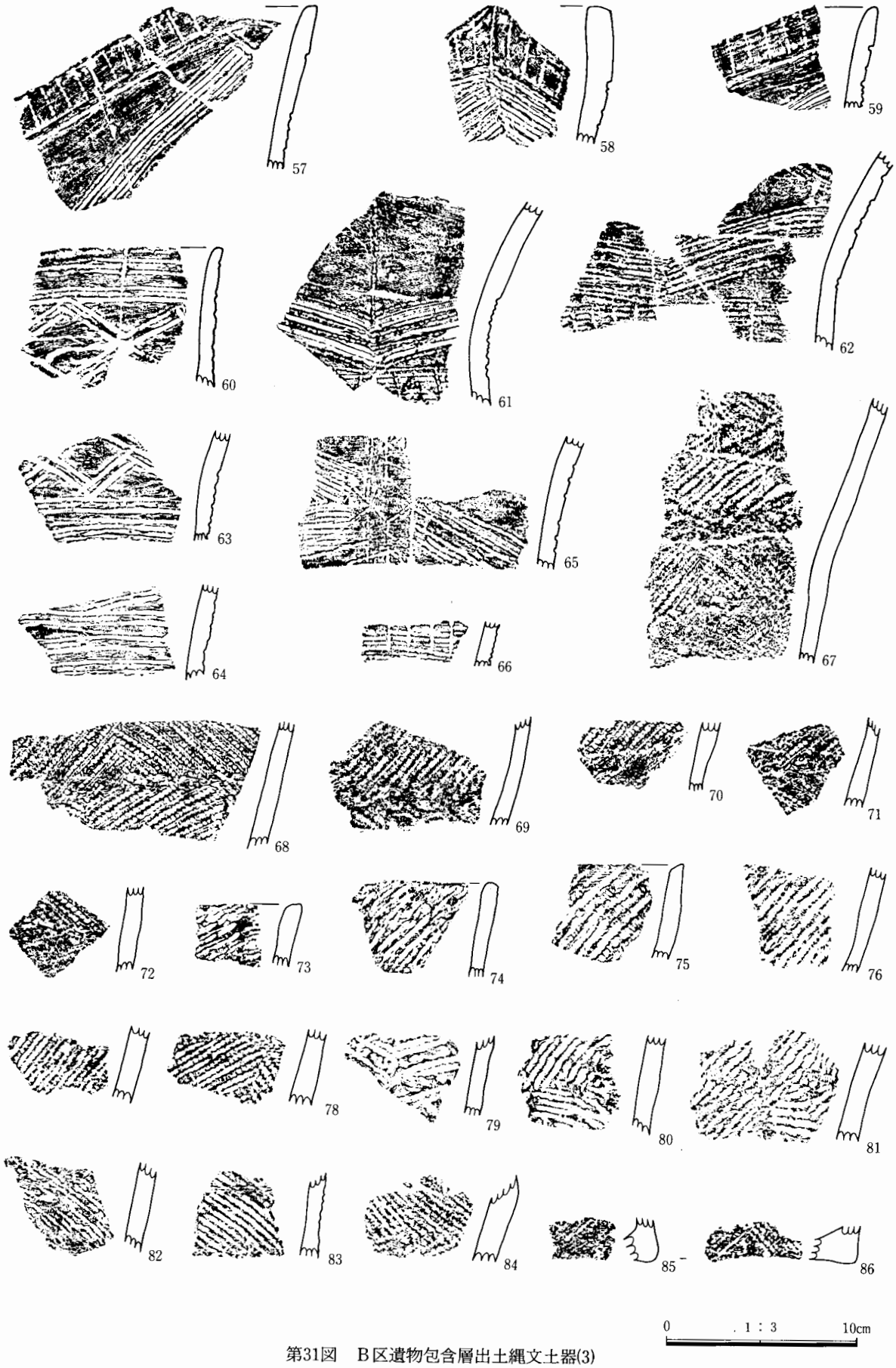
第28図　B区遺構出土縄文土器



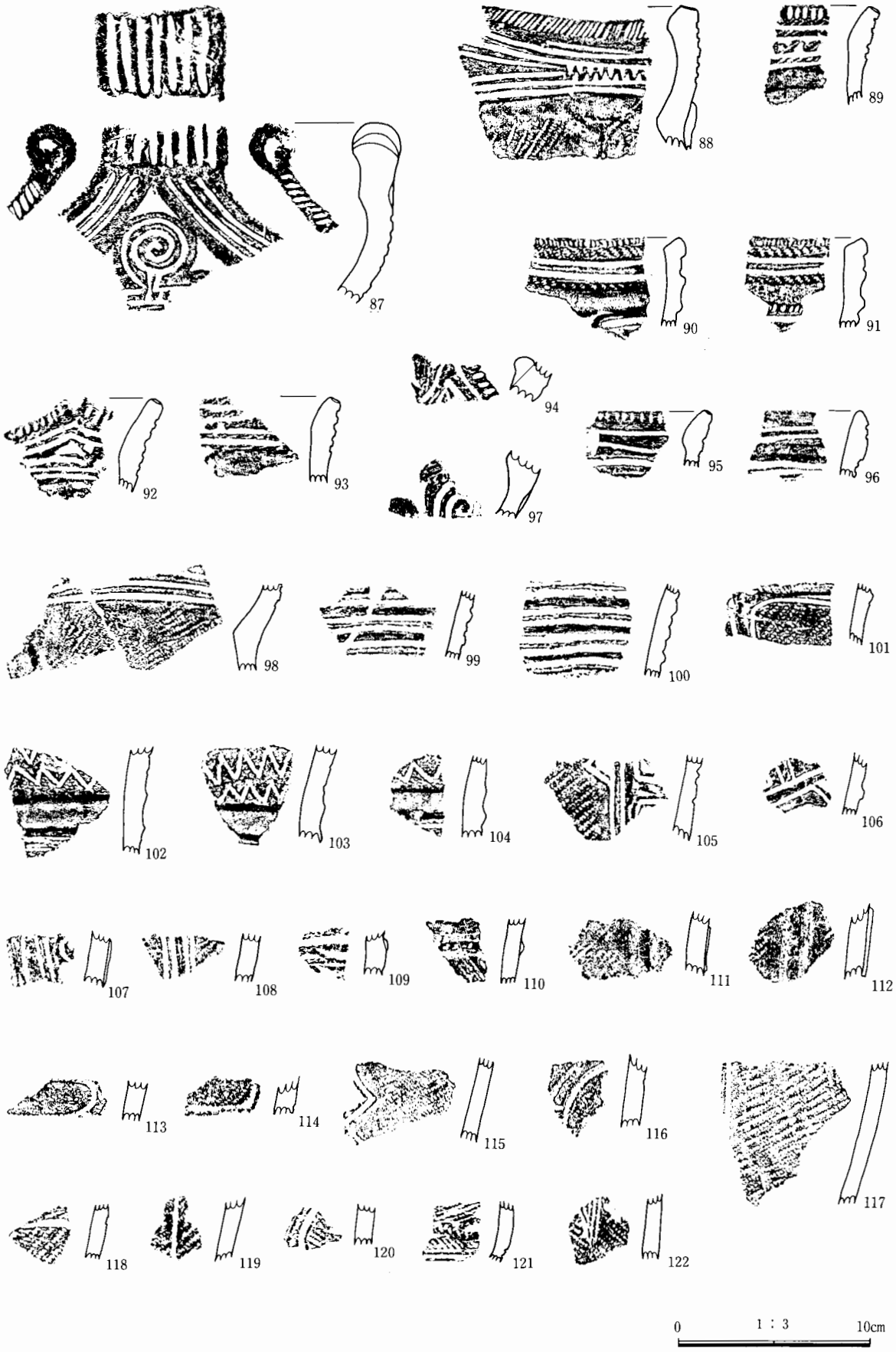
第29図　B区遺物包含層出土縄文土器(1)



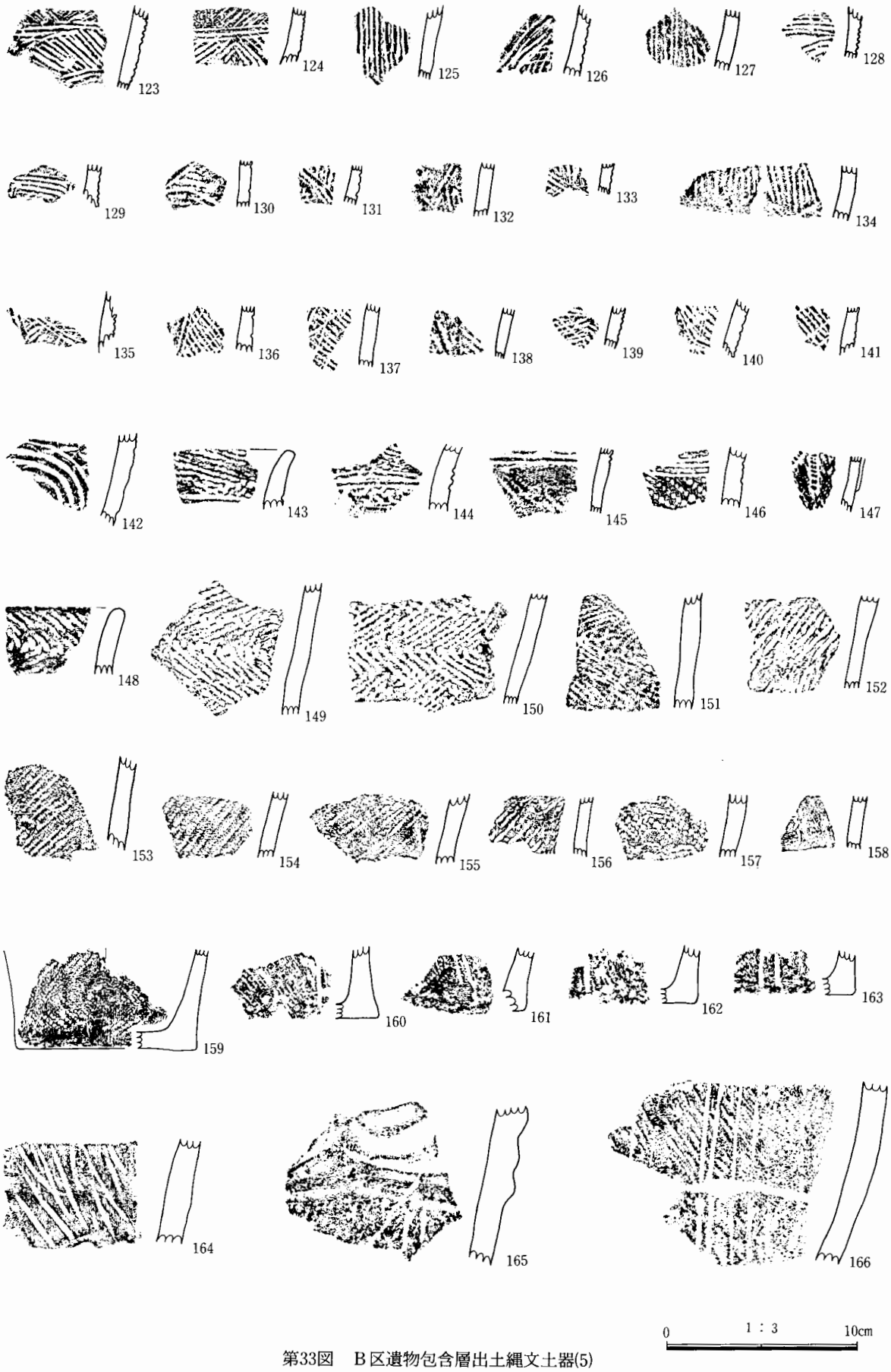
第30図　B区遺物包含層出土縄文土器(2)



第31図　B区遺物包含層出土縄文土器(3)



第32図　B区遺物包含層出土縄文土器(4)



第33図　B区遺物包含層出土縄文土器(5)

まれる可能性がある。

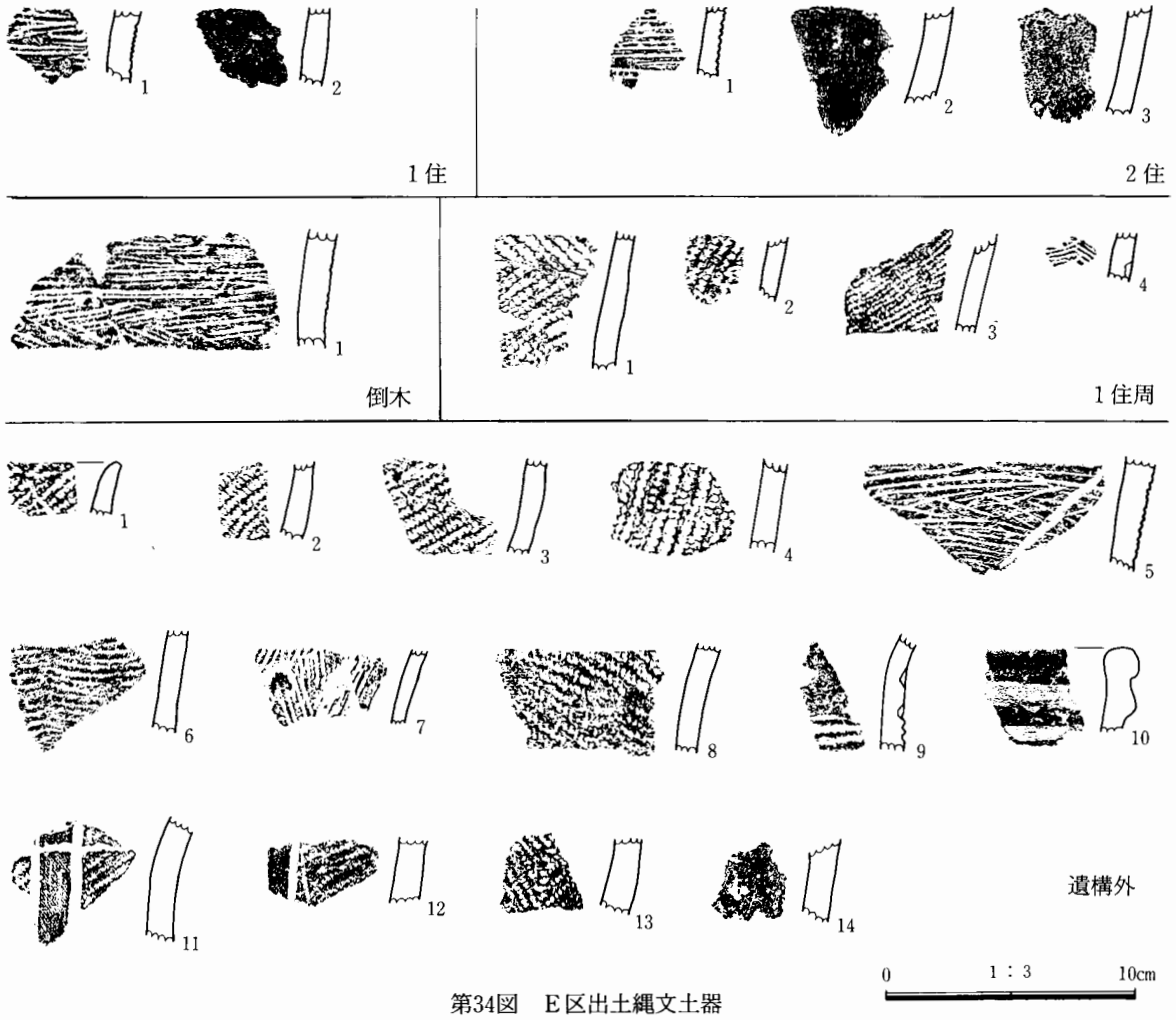
49～56は前期初頭花積下層式である。57～86は前期中葉で、有尾式を主体とする土器である。87～163は中期初頭五領ケ台式土器を中心とするが、前期末十三菩提式を含む可能性もある。164～166は中期後半加曽利Ｅ式土器である。

Ｅ区出土土器

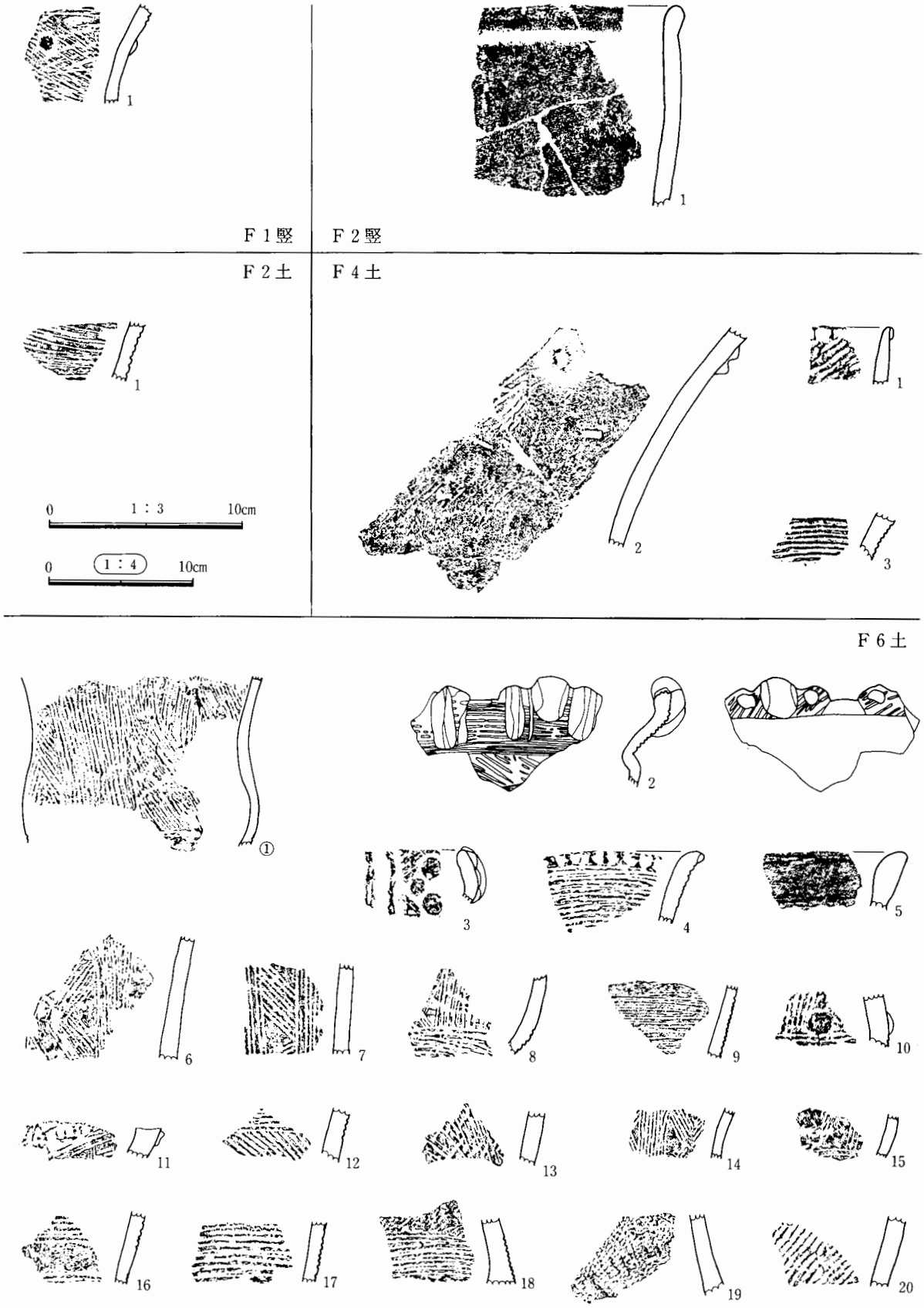
１住１は平行沈線文土器で前期後半諸磯ｂ式か？。２は無文である。２住１は平行沈線文で諸磯ｂ～ｃ式土器である。２・３は無文である。倒木１は諸磯ｂ式である。１住周１・２は前期初頭～中葉、３は前期後半、４は平行沈線と陰刻文で前期末葉十三菩提式と思われる。遺構外１～４は含繊維土器で前期初頭～中葉、５は諸磯ｂ式、６は前期後半～末葉、７は諸磯ｃ式で、８も前期後半頃と思われる。９は太い平行沈線と陰刻文で前期末葉～中期初頭と思われる。10は隆帯の口縁部、11・12は磨消懸垂帯、13は縄文で中期後半加曽利Ｅ式である。14は無文である。

Ｆ区出土土器

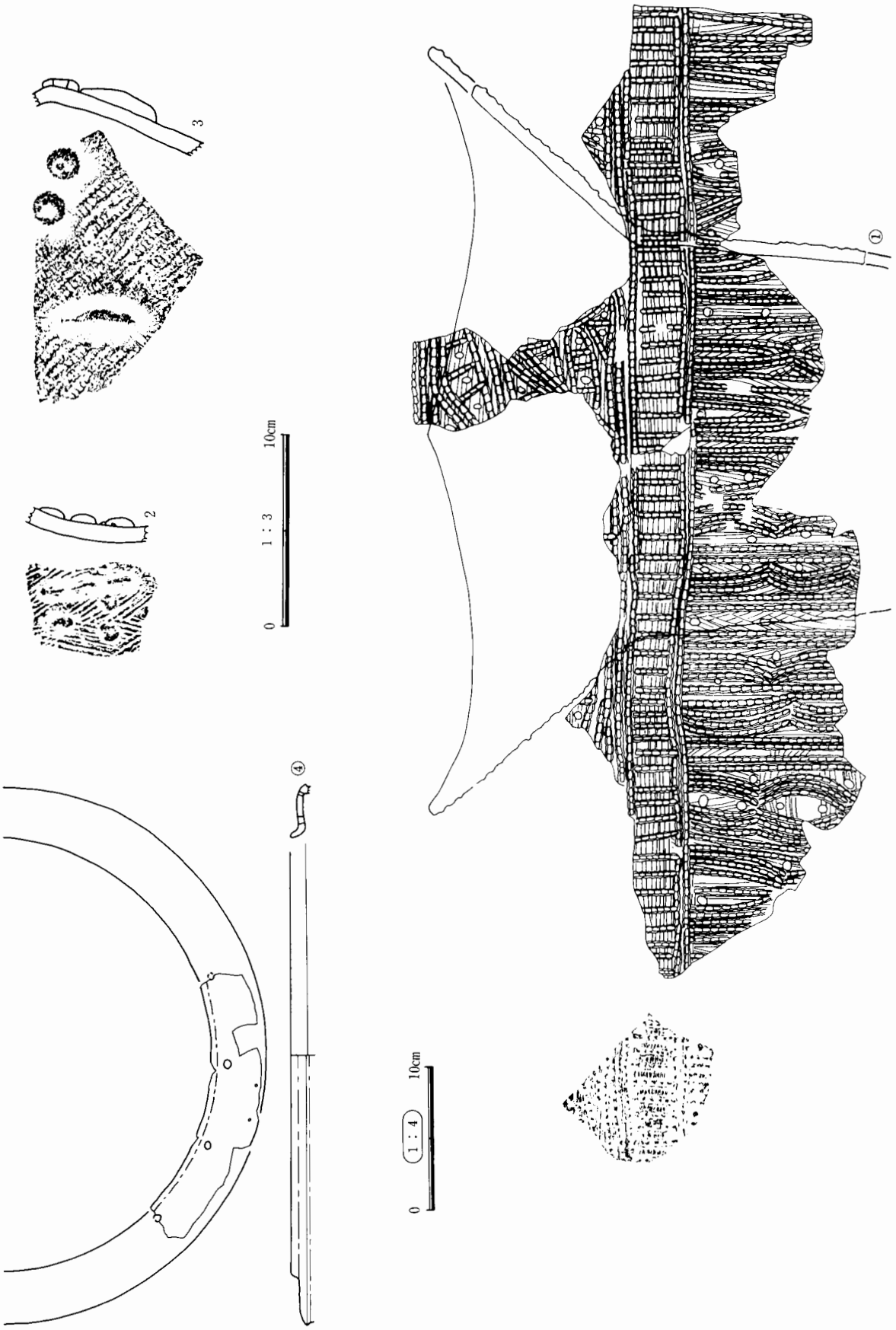
遺構内、遺構外を含めて出土土器の大半が前期後半である。諸磯ｃ式が主体で諸磯ｂ式が少量出土している。Ｆ６土５は中期の可能性がある。Ｆ８土１は結節浮線文土器で地文に平行沈線文が施され、小ボタン状



第34図　Ｅ区出土縄文土器

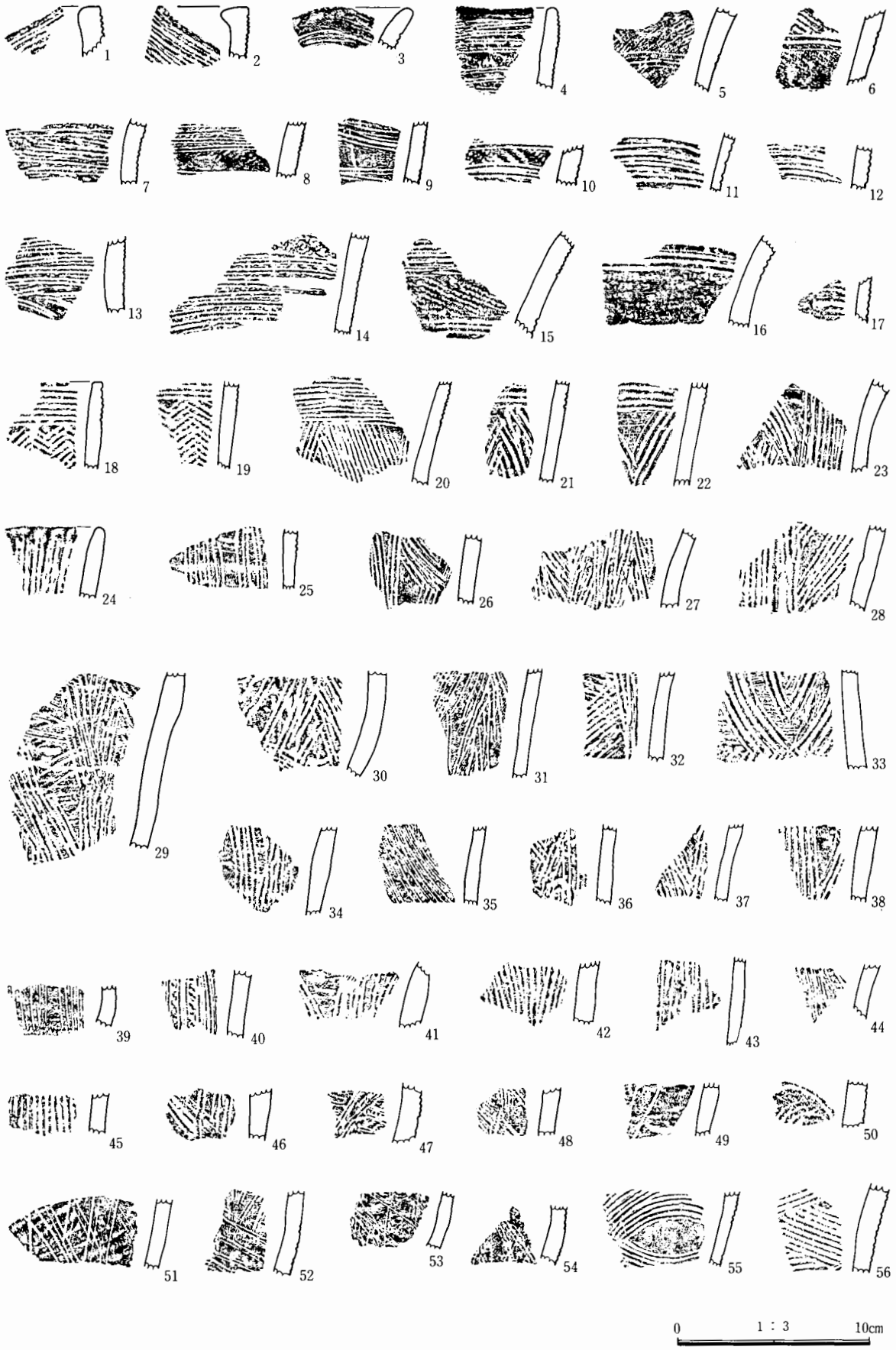


第35図　F区遺構出土縄文土器



第36図　F区8号土坑出土縄文土器

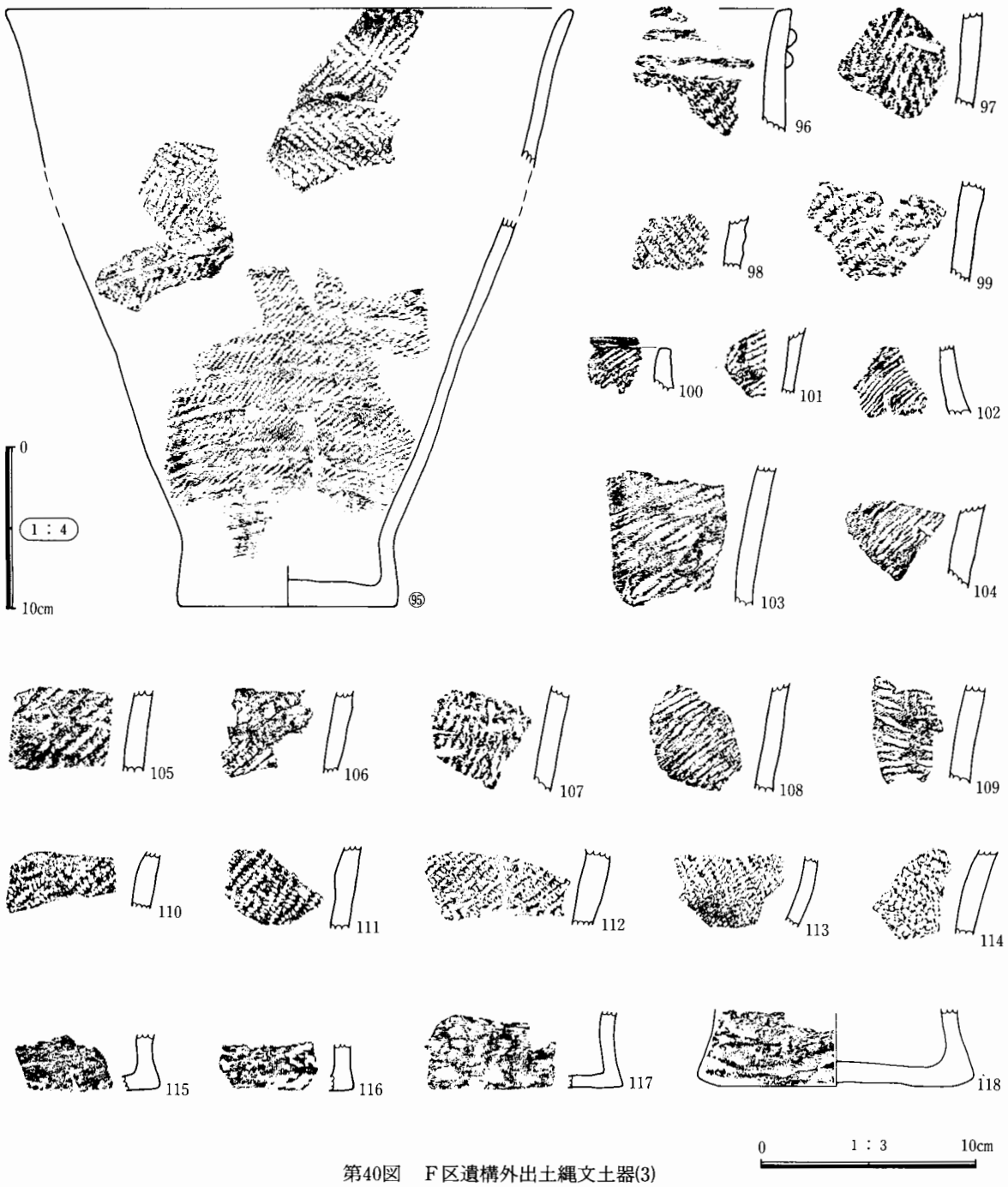
第37図　F区土坑出土縄文土器



第38図　F区遺構外出土縄文土器(1)

第39図　F区遺構外出土縄文土器(2)

貼付文が付される。残存する口縁部は波底部で、実測図は口縁部も上方展開している。Ｆ６土・Ｆ16土・Ｆ18土などはｂ・ｃ式ともに出土している。遺構外１～56は平行沈線文だけの土器である。遺構外55・56は時期的に新しい様相がある。57～83は貼付文を付す平行沈線文土器である。61・62は小型土器で異質な感じがする。84～86は同一個体で、無文地に多段の貼付文を付す。87～90は口縁部で口縁端に凹凸文を付す。91・92は同一個体で、刺突文を多段に付す。93はＦ８土１と同一個体である。94は肥厚する口縁部に三角陰刻文を連続する。十三菩提式と思われる。95～114は縄文施文土器である。95は上下で原体を変えて施文する。底部の立ち上りに特徴があり、諸磯ｃ式頃に帰属すると思われる。96～99は含繊維土器である。前期初頭と思われる。100以降の土器の時期は明確ではないが、前期後半に属するものが多いと思われる。115～118は無文



第40図　Ｆ区遺構外出土縄文土器(3)

の底部で、立ち上りの特徴からやはり前期後半に属するものが多いと思われる。

観察表の注：集合沈線は先の平行沈線の片側に次の平行沈線の片側を重ね合わせて施文していく方法で、連続沈線は先の平行沈線とほぼ沈線の幅に等しい間隔を開けて次の平行沈線を施文する技法である。集合沈線と連続沈線が併用される場合において、集合・連続沈線という表現は残存資料内において前者の優越を意味するが、平行沈線との併用の場合は先後関係が一方の優越を意味しない。

第４表　Ａ区出土土器観察表

出土位置	番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　　土	色　　調
Ａ４土	1	胴部　　附加条？		白色粒、砂粒、石英	暗褐色
A14土	1	胴部、鋸歯状沈線文、短沈線文	ＲＬ	砂粒	橙色～にぶい黄橙色
	2	口辺部、瘤状突起、太沈線		砂粒、白色粒	橙色
	3	口縁部、無文、内外ミガキ		金雲母、砂粒	にぶい橙色～黒色
	4	胴部、無文、ナデ・ミガキ		金雲母、砂粒	にぶい橙色～黒色
	5	胴部、無文　ナデ・ミガキ		金雲母、砂粒	にぶい橙色～黒色
A15土	1	口縁部、角押文		砂粒	赤褐色～黒褐色
	2	胴部、無文、ナデ・ミガキ		金雲母、粗砂	にぶい橙色
	3	胴部、無文、ナデ・ミガキ		金雲母、粗砂	橙色
遺構外	1	胴部、浮線文、12－７Ｇ	ＲＬ	砂粒	浅黄色
	2	口縁部、隆帯区画、区画内太沈線で矢羽状、12－７Ｇ		赤色粒、砂粒	淡黄色～浅黄橙色
	3	胴部、平行沈線？、A19土周		砂粒	にぶい橙色

第５表　Ｂ区遺構出土土器観察表

出土位置	番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　　土	色　　調
Ｂ１土	1	胴部、砂粒引きずり痕顕著		長石、砂粒	灰褐色
	2	胴部、砂粒引きずり痕顕著		長石、砂粒	にぶい橙色
Ｂ６土	1	胴部、爪形文？	不明	長石、砂粒	にぶい橙色
	2	胴部	Ｌ	砂粒	にぶい褐色
	3	胴部、角押文		砂粒	赤褐色
	4	胴部、隆帯上キザミ、角押文、キャタピラ文		砂粒	赤褐色
	5	胴部、キャタピラ文		砂粒	赤褐色
	6	胴部、無文、横ケズリ		粗砂多量	にぶい橙色～灰褐色
	7	胴部、無文、ナデ		砂粒、白色粒	暗褐色
	8	胴部、隆帯下に縄の押圧文、キャタピラ文		砂粒	赤褐色
	9	底部、隆帯上キザミ		砂粒	赤褐色
	10	胴部、無文		白色粒、砂粒	赤褐色
	11	胴部、無文、ミガキ		白色粒、砂粒	赤褐色
B28土	1	胴部、山形押型文		砂粒	明赤褐色
	2	胴部、山形押型文		砂粒	明赤褐色
	3	口縁部、櫛歯状工具による刺突文		繊維	にぶい黄橙色
	4	口辺部、平行沈線、沈線間刺突文		繊維、砂粒	にぶい褐色
	5	胴部、沈線	Ｒ？	繊維、砂粒、赤色粒	褐色
	6	胴部　　多条ＲＬ－多条ＬＲ羽状		粗砂、繊維	にぶい褐色
	7	胴部	ＬＲ	石英、砂粒、繊維	暗褐色
	8	胴部、結節縄文	Ｌ	粗砂、赤色粒	にぶい褐色
	9	胴部	ＬＲ	砂粒	にぶい赤褐色
	10	胴部、無文、ナデ・ミガキ、凹凸顕著		白色粒、砂粒	にぶい赤褐色
Ｂ１集	1	胴部、山形押型文		砂粒	にぶい橙色

第6表　B区遺構外出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　　土	色　　調	出土位置
1	口縁部肥厚帯、撚糸文系	LとR	白色粒、砂粒	橙色	10—20G
2	胴部、撚糸文系	RL	粗砂	橙色	10—21G
3	胴部、撚糸文系	L	粗砂多量	橙色	10—20G
4	胴部、撚糸文系	RL	粗砂	橙色	9—22G
5	胴部、撚糸文系	LR	粗砂	橙色	9—22G
6	胴部、撚糸文系	LR	粗砂	橙色	9—22G
7	胴部、山形押型文		細砂	にぶい黄橙色	11—22G
8	胴部、山形押型文（表裏）		砂粒	にぶい黄橙色	9—18杭
9	胴部、山形押型文		砂粒	にぶい黄橙色	9—18杭
10	胴部、山形押型文		粗砂	にぶい赤褐色	表採
11	胴部、山形押型文		粗砂	にぶい黄橙色	表採
12	胴部、山形押型文		砂粒	にぶい赤褐色	9—21G
13	胴部、山形押型文		砂粒	橙色	表採
14	胴部、山形押型文		砂粒	にぶい橙色	表採
15	口縁部、（平行）沈線文		砂粒	にぶい赤褐色	11—21G
16	胴部、隆帯、（平行）沈線文		砂粒	にぶい赤褐色	11—20G
17	胴部、（平行）沈線文		砂粒	にぶい赤褐色	10—21G
18	胴部、隆帯区画文垂下、（平行）沈線文		砂粒	にぶい橙色～橙色	11—20G
19	口縁部～胴部、口径15.4cm、沈線区画文、刺突文	条痕文	小礫、砂粒、繊維	暗褐色	6—17
20	胴部、条痕文（表裏）		砂粒、繊維	にぶい橙色	9—22G
21	胴部、条痕文（表裏）		粗砂	にぶい橙色	表採
22	胴部、条痕文（表裏）		砂粒	橙色	表採
23	口縁部、無文、外面に粘土帯の接合痕（折り返し？）		砂粒	褐灰色	10—21G
24	口縁部、無文、円孔		白・赤色粒、砂粒	暗赤褐色	10—20G
25	口縁部、無文、砂粒引きずり痕顕著		砂粒	にぶい橙色～灰褐色	6—17G
26	口縁部、無文、凹凸激しいがナデは丁寧		白色粗粒、砂粒	橙色	柵列周
27	口縁部、無文、ケズリ・ナデ		粗砂	明赤褐色	6—17G
28	口縁部、無文、ナデ		細砂	橙色	10—20G
29	口縁部、無文、砂粒引きずり痕顕著		粗砂	にぶい橙色	6—21G
30	胴部、無文、砂粒引きずり痕顕著		粗砂	にぶい橙色～褐灰色	6—21G
31	底部、無文、ナデ		砂粒、粗砂少量	にぶい橙色～明赤褐色	9—21G
32	底部、無文、ナデ		砂粒	橙色～にぶい橙色	表採
33	底部、無文、丸底、貝殻文？		白色粗粒多量、砂粒	にぶい黄橙色～褐灰色	8—16杭
34	底部、無文、丸底、条痕文		砂粒、白色粒少量	明赤褐色	10—21G
35	底部、無文、浅鉢？、ナデ痕顕著		砂粒、小礫少量	にぶい橙色～橙色	10—21G
36	底部、無文、浅鉢？		砂粒	にぶい橙色～橙色	10—21G
37	底部、無文、浅鉢？、指頭ナデ痕顕著		砂粒	にぶい橙色	9—21G
38	底部、無文、ナデ		砂粒、赤色粒	橙色～にぶい橙色	10—20G
39	底部、無文、凹凸顕著		砂粒、片岩	橙色	11—20G
40	底部、無文、丁寧なナデ・ミガキ		砂粒	橙色	10—20G
41	底部、無文、雑な器面調整		粗砂多量	にぶい橙色	10—20G
42	底部、無文、雑なケズリ・ナデ		砂粒	にぶい橙色	10—20G
43	口縁部	RL	粗砂、小礫	橙色	10—20G
44	口縁部	LR	繊維、細砂	浅黄橙色	11—20G
45	胴部	RL	粗砂、小礫	にぶい橙色	表採
46	胴部	RL	粗砂、小礫	にぶい橙色	10—20G
47	胴部	RL	粗砂、小礫	にぶい橙色	表採
48	胴部	RL	粗砂、小礫	にぶい橙色	10—20G
49	口縁部、隆帯上キザミ、L縄とR縄の押圧文		砂粒、繊維少量	浅黄橙色	10—20G
50	口縁部、L縄とR縄の押圧文		砂粒、繊維少量	浅黄橙色	10—22G
51	胴部　多条RL—多条LR	←	砂粒、繊維少量	橙色	10—22G
52	胴部　多条RL—多条LR	←	砂粒、繊維少量	橙色～にぶい赤褐色	10—22G
53	胴部　多条RL—多条LR	←	砂粒、繊維少量	橙色	10—22G
54	胴部　多条RL—多条LR	←	砂粒、繊維少量	にぶい黄橙色	10—22G
55	胴部　多条RL—多条LR	←	砂粒、繊維少量	にぶい黄橙色～灰黄褐色	B2集周

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　　土	色　　調	出土位置
56	胴部　多条ＲＬ－多条ＬＲ	←	砂粒、繊維少量	にぶい橙色	柵列周
57	口縁部、櫛歯状工具で平行沈線文と連続刺突文		繊維、砂粒	橙色～にぶい黄橙色	9－21G
58	口縁部、櫛歯状工具で平行沈線文と連続刺突文		砂粒、繊維	にぶい黄橙色	－　G
59	口縁部、櫛歯状工具で平行沈線文と連続刺突文		砂粒、繊維	にぶい黄橙色	9－20G
60	口縁部、平行沈線文		繊維、砂粒	にぶい褐色	9－22G
61	口辺部、櫛歯状工具で平行沈線文と連続刺突文		繊維、砂粒	黄褐色～黒褐色	10－20G
62	口辺部、櫛歯状工具で平行沈線文と連続刺突文		繊維、砂粒	橙色	9－20G
63	口辺部、平行沈線文		繊維、砂粒	にぶい黄橙色	9－22G
64	口辺部、平行沈線文		繊維、砂粒	にぶい褐色	9－22G
65	口辺部、櫛歯状工具で平行沈線文と区画刺突文		繊維砂粒	橙色	9－20G
66	口辺部、櫛歯状工具で平行沈線文と連続刺突文		繊維砂粒	橙色	表採
67	胴部	附加条	繊維、砂粒、赤色粒	橙色～褐色	9－20G
68	胴部	附加条	繊維、砂粒、赤色粒	橙色～にぶい褐色	9－20G
69	胴部	附加条	粗砂、繊維	橙色～褐灰色	9－20G
70	胴部　ＬＲ＋２ＲＬ	附加条	繊維、砂粒	にぶい橙色	10－20G
71	胴部　ＬＲ＋２ＲＬ－ＲＬ＋２ＬＲ羽状	附加条	砂粒、繊維	橙色～にぶい黄橙色	9－20G
72	胴部　ＬＲ＋２ＲＬ－ＲＬ＋２ＬＲ羽状	附加条	砂粒、繊維	橙色	9－20G
73	口縁部	異束？	白色粒、砂粒、繊維	褐灰色	9－22G
74	口縁部	附加条	白・赤色粒、繊維	灰褐色	9－22G
75	口縁部、内削ぎ	多ＬＲ	繊維、砂粒、赤色粒	にぶい黄橙色～灰褐色	表採
76	胴部	多ＬＲ	繊維、粗砂、赤色粒	橙色～黒褐色	表採
77	胴部	ＬＲ	繊維、砂粒、赤色粒	にぶい黄橙色	表採
78	胴部	ＬＲ	繊維、砂粒、赤色粒	にぶい橙色～黒色	10－20G
79	胴部	附加条	繊維、砂粒	にぶい黄橙色～褐灰色	10－21G
80	胴部　多条ＬＲ－Ｒ	←	繊維、粗砂、白色粒	にぶい橙色～褐灰色	10－20G
81	胴部	Ｌ－Ｒ	白色粒、繊維、砂粒	橙色～暗褐色	10－20G
82	胴部	Ｒ	繊維、砂粒	褐灰色～にぶい黄橙色	表採
83	胴部	Ｒ	繊維、砂粒	橙色～にぶい褐色	9－21G
84	胴部　ＲＬ－ＬＲ羽状	←	繊維、砂粒	橙色	柵列周
85	底部、上げ底	ＬＲ	繊維、砂粒	橙色	9－20G
86	底部、上げ底　Ｌ－ＲＬ	←	繊維、砂粒	にぶい橙色	9－21G
87	波頂部、口唇部キザミ、渦巻文、三角印刻文、太沈線		白粒、粗砂、金雲母	明赤褐色～にぶい褐色	Ｂ２集周
88	口縁部、口唇部キザミ、太沈線、交互刺突文、隆帯	ＬＲ	白粒、粗砂、金雲母	にぶい橙色～にぶい赤褐色	10－21G
89	口縁部、口唇部キザミ、太沈線、交互刺突文	Ｌ	粗砂	赤色	10－20G
90	口縁部、口縁端キザミ、隆帯上ＲＬ施文、角押文		粗砂、白色粒	にぶい赤褐色～黒褐色	10－20G
91	口縁部、口縁端キザミ、隆帯上ＲＬ施文、角押文		粗砂、白色粒	にぶい赤褐色	10－20G
92	口縁部、波頂部、口唇部キザミ、平行沈線、三角陰刻		片岩、長石、砂粒	にぶい橙色～赤褐色	10－22G
93	口縁部、口唇部キザミ、幅広平行沈線文、交互刺突文	Ｌ？	粗砂、片岩、長石	橙色	10－20G
94	口縁部、波頂部直下、口唇部キザミ、太沈線で施文		砂粒	赤褐色	10－22G
95	口縁部肥厚、渦巻文、三角陰刻文		白色粒、粗砂、雲母	にぶい赤褐色	Ｂ２集周
96	口縁部肥厚、口唇部キザミ、単沈線で施文		粗砂	にぶい赤褐色	10－20G
97	口縁部肥厚、平行沈線		粗砂	黒褐色	表採
98	胴部、太沈線を多段に施文	ＲＬ	粗砂、白粒、金雲母	赤褐色～にぶい赤褐色	10－22G
99	胴部、竹管押引文を多段に施文		粗砂	にぶい赤褐色	10－20G
100	胴部、竹管押引文を多段に施文		粗砂	にぶい赤褐色	10－21G
101	胴部、隆帯で懸垂文・横帯文、太沈線で楕円区画	ＬＲ	粗砂	にぶい赤褐色	10－21G
102	胴部、隆帯で２段の横帯文、角押文で鋸歯文など	ＬＲ	粗砂多量、赤色粒	にぶい赤褐色	11－21G
103	胴部、隆帯で２段の横帯文、角押文で鋸歯文など	ＬＲ	粗砂多量、赤色粒	にぶい赤褐色	10－20G
104	胴部、隆帯で２段の横帯文、角押文で鋸歯文など	ＬＲ	粗砂多量、赤色粒	にぶい黄橙色～褐灰色	11－21G
105	胴部、隆帯と沈線で懸垂文・横区画文、角押文	ＲＬ	粗砂	灰褐色～褐灰色	9－21G
106	胴部、隆帯と沈線で区画文		粗砂	にぶい褐色	10－20G
107	胴部、隆帯で懸垂文、角押文		砂粒	にぶい赤褐色	11－21G
108	胴部、隆帯に沈線と角押文が沿う	ＲＬ	粗砂、雲母	暗褐色	9－20G
109	胴部、隆帯脇押引文		砂粒、雲母	橙色～にぶい褐色	11－21G
110	胴部、隆帯上ＬＲ押圧文	ＲＬ	砂粒	にぶい赤褐色	10－20G
111	胴部、隆帯で懸垂帯	ＬＲ	粗砂	橙色	10－21G

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　　土	色　　調	出土位置
112	胴部、隆帯で懸垂帯	RL	粗砂	にぶい橙色	表採
113	胴部、角押文で楕円区画文	LR	粗砂	暗赤褐色	表採
114	胴部、角押文で楕円区画文	LR	粗砂	にぶい赤褐色	表採
115	胴部、角押文で縦位に鋸歯文、三角陰刻	RL	粗砂、雲母	極暗褐色	10—20G
116	胴部、角押文で孤文	RL	粗砂、褐色鉱物	にぶい赤褐色	9 —20G
117	胴部、角押文で懸垂文	RL	粗砂、褐鉱、金雲母	暗い褐色	10—20G
118	胴部、太沈線	LR	粗砂	暗い褐色	11—22G
119	胴部、沈線	RL	粗砂、褐色鉱物	にぶい赤褐色	表採
120	胴部、太沈線	多RL	粗砂	にぶ橙色	10—22G
121	胴部、　RL—LR羽状	←	粗砂	橙色～にぶい赤褐色	10—22杭
122	胴部、平行沈線文	LR	砂粒、白色粒	にぶい褐色	10—21G
123	胴部、平行沈線で区画し、集合沈線を充填		砂粒、石英	橙色	10—22G
124	胴部、集合沈線文		砂粒、石英	橙色	9 —22G
125	胴部、集合沈線文		砂粒、石英	橙色	10—22G
126	胴部、集合沈線文		砂粒、石英	橙色	10—22G
127	胴部、集合沈線文		砂粒、石英	橙色	10—22杭
128	胴部、集合沈線文、余白に陰刻文		砂粒、石英	橙色	10—22杭
129	胴部、集合沈線文		砂粒、石英	橙色	10—22杭
130	胴部、平行沈線・単沈線で区画	RL	砂粒、石英	橙色	表採
131	胴部、集合沈線文		砂粒、石英	橙色	9 —22G
132	胴部、集合沈線文		砂粒、石英	橙色	9 —22G
133	胴部、集合沈線文		砂粒、石英	橙色	9 —22G
134	胴部、集合沈線文		片岩、砂粒	にぶい黄橙色～灰褐色	9 —22G
135	胴部、集合沈線文		砂粒	橙色	9 —22G
136	胴部、集合沈線と単沈線で斜格子文		砂粒	橙色	9 —22G
137	胴部、集合沈線と単沈線で斜格子文		砂粒	橙色	10—22G
138	胴部、集合沈線と単沈線で斜格子文		砂粒	橙色	9 —22G
139	胴部、集合沈線と単沈線で斜格子文		砂粒	橙色	10—22杭
140	胴部、集合沈線と単沈線で斜格子文		砂粒	橙色	9 —22G
141	胴部、集合沈線と単沈線で斜格子文		砂粒	橙色	9 —22G
142	胴部、半隆起線文		砂粒	にぶい黄橙色	表採
143	口縁部、平行沈線　RL—LR羽状	←	砂粒	にぶい橙色～暗い赤褐色	10—22杭
144	胴部、平行沈線文、交互刺突文	RL	砂粒	にぶい橙色	10—21G
145	胴部、平行沈線文	RL	粗砂	にぶい橙色	10—22杭
146	胴部、平行沈線文	RL	砂粒	浅黄橙色～橙色	7 —18杭
147	胴部、結節浮線文	LR	砂粒	にぶい赤褐色	表採
148	口縁部　R—L羽状	←	粗砂、石英、金雲母	灰褐色	10—22杭
149	胴部　R—L羽状	←	粗砂、石英、金雲母	灰褐色	10—22杭
150	胴部　R—L羽状	←	粗砂、石英、金雲母	灰褐色	9 —22G
151	胴部　RL—LR羽状	←	砂粒、白色粒	にぶい黄橙色～暗褐色	10—22杭
152	胴部	L	粗砂	灰褐色～にぶい橙色	表採
153	胴部	RL	粗砂、白色粒	にぶい褐色	10—22杭
154	胴部	RL	粗砂、白色粒、雲母	にぶい褐色～褐灰色	11—21G
155	胴部	LR	白色粒、砂粒	赤褐色～にぶい橙色	10—21G
156	胴部、結節縄文	L	砂粒	にぶい褐色	表採
157	胴部、結節縄文	RL	砂粒	橙色	5 —18G
158	胴部、結節縄文		砂粒、雲母	にぶい赤褐色	10—21G
159	底部　RL—LR羽状	←	白色粒、砂粒	にぶい赤褐色	10—22G
160	底部、沈線で懸垂帯	R	粗砂、白色粒	橙色	10—21G
161	底部、沈線で懸垂帯	LR	白色粒、粗砂	にぶい赤褐色	10—20G
162	底部、沈線で懸垂帯	R？	白色粒、砂粒	橙色	10—21G
163	底部、沈線で狭い懸垂帯	LR	白色粒、粗砂	にぶい赤褐色	10—21G
164	胴部、斜め単沈線（条線状）		砂粒	淡黄色	表採
165	口辺部、隆帯で口縁部区画、懸垂帯区画は沈線	不明	粗砂	にぶ橙色	表採
166	胴部、沈線で懸垂帯	LR	砂粒、赤・白色粒	にぶい橙色～にぶい赤褐色	表採

第７表　Ｅ区出土土器観察表

出土位置	番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　　土	色　　調
１住居	1	胴部、平行沈線2.5㎜		砂粒	橙色
	2	胴部、無文、ミガキ		粗砂、赤・白色粒	にぶい赤褐色
２住居	1	胴部、連続沈線３㎜		粗砂多量	橙色
	2	胴部、無文		粗砂、白色粒	にぶい赤褐色～にぶい橙色
	3	胴部、無文		粗砂多量、白色粒	にぶい橙色～暗褐色
倒木痕	1	胴部、連続沈線２㎜		粗砂、赤色粒	橙色～にぶい黄橙色
１住周	1	胴部　ＲＬ－ＬＲ羽状	←	繊維、砂粒	明赤褐色
	2	胴部	ＬＲ	繊維、砂粒	明赤褐色
	3	胴部	ＬＲ	砂粒、金雲母	灰白色
	4	胴部、集合沈線1.5㎜、陰刻文		砂粒	浅黄橙色～橙色
遺構外	1	口縁部	ＬＲ	繊維	にぶい褐色～黒褐色
	2	胴部	ＬＲ	繊維、赤色粒	にぶい橙色～黒褐色
	3	胴部	ＬＲ	繊維、赤色粒	にぶい橙色～にぶい褐色
	4	胴部	ＬＲ	繊維、砂粒、赤色粒	にぶい橙色～灰褐色
	5	胴部、平行沈線３㎜、単沈線		砂粒	にぶい橙色
	6	胴部、集合沈線３㎜、孤状に施文		砂粒	橙色
	7	胴部、連続・集合沈線2.5㎜		粗砂	赤褐色
	8	胴部	ＲＬ	砂粒、赤色粒	にぶい黄橙色
	9	胴部、平行沈線４㎜、陰刻文		砂粒	にぶい赤褐色
	10	口縁部、隆帯		白色粒、砂粒	赤褐色～暗赤褐色
	11	胴部、磨消懸垂帯	ＲＬ	粗砂	明赤褐色～暗赤褐色
	12	胴部、磨消懸垂帯	ＲＬ	砂粒、赤色粒	明赤褐色
	13	胴部　ＲＬ縦横		砂粒、赤色粒	明赤褐色～暗赤褐色
	14	胴部、無文、ミガキ		砂粒、白・赤色粒	赤褐色

第８表　Ｆ区遺構出土土器観察表

出土位置	番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　　土	色　　調
Ｆ１竪	1	胴部、横帯文、斜格子文、平行沈線2.5㎜、貼付文		赤色粒、砂粒	褐色
Ｆ２竪	1	口縁部、無文		砂粒	暗赤褐色
Ｆ２土	1	胴部、浅い平行沈線		白色粒、細砂	にぶい褐色
Ｆ４土	1	口縁部、凹凸文	Ｌ	粗砂	暗赤褐色
	2	口辺部、貼付文　上位にＲ縦、他はＬＲ		白・赤色粒、細砂	黄橙色
	3	胴部、集合沈線文2.5㎜		細砂	黄橙色
Ｆ６土	1	胴部、集合・連続沈線３㎜		粗砂	褐色
	2	口縁部、集合沈線2.5㎜、貼付文		白色粒、砂粒	暗褐色
	3	口縁部、連続沈線３㎜、貼付文		白色粒、砂粒	赤褐色～黒褐色
	4	口縁部、集合・連続沈線2.5㎜、凹凸文		砂粒、黒色鉱物	にぶい黄橙色
	5	口縁部肥厚、下端に沈線		白色粒、粗砂	褐色
	6	胴部、連続沈線２㎜		白色粗粒多量	褐色～暗褐色
	7	胴部、連続沈線2.5㎜		白色粒	橙色
	8	胴部下端、連続沈線2.5㎜		粗砂、白色粒	褐色
	9	胴部、連続沈線2.5㎜		白色粒、黒色鉱物	橙色
	10	胴部下端、連続・集合沈線２㎜、貼付文		細砂	浅黄橙色
	11	胴部、平行・連続沈線3.5㎜、棒状貼付文上刺突文		砂粒	暗赤褐色～黒褐色
	12	胴部、集合沈線2.5㎜		砂粒	暗褐色
	13	胴部、連続沈線３㎜	Ｌ	砂粒	赤褐色
	14	胴部、集合沈線1.5㎜		白色粒、粗砂多量	暗褐色
	15	胴部下端、連続沈線２㎜		砂粒、白色粒	赤褐色
	16	胴部、連続・平行沈線３㎜		砂粒多量	黄橙色
	17	胴部、集合沈線3.5㎜		粗砂多量	橙色

出土位置	番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　　土	色　　調
	18	胴部、連続・集合沈線２㎜	？	細砂	にぶい浅黄橙色
	19	胴部、結節縄文	ＲＬ	白色粗粒	赤褐色
	20	胴部、	Ｌ	細砂	浅黄橙色
Ｆ８土	1	口縁部～胴部、結節浮線文、貼付文、地文連続2.5㎜		細砂	にぶい橙色
	2	胴部、集合沈線2.5㎜、貼付文		砂粒	にぶい黄橙色～赤褐色
	3	口辺部、貼付文	附加条	砂粒	浅黄色～黒褐色
	4	浅鉢、口縁部、円孔		砂粒	にぶい褐色
Ｆ９土	1	胴部、集合・連続沈線2.5㎜	？	砂粒、粗砂	にぶい橙色
	2	胴部、集合沈線３㎜	Ｒ	砂粒多量	にぶい黄橙色
	3	胴部、集合・連続沈線1.5㎜		砂粒	浅黄色～黄灰色
Ｆ16土	1	口縁部、貼付文	不明瞭	白色粒	にぶい黄橙色～黒褐色
	2	口縁部、波頂部２山状、連続・集合沈線2.5㎜	ＬＲ	粗砂	にぶい黄橙色～黒褐色
	3	口縁部、集合沈線2.5㎜		白色粒	にぶい黄橙色
	4	口縁部、無文		白色粒、砂粒	にぶい赤褐色
	5	胴部、貼付文	Ｌ	白色粒	にぶい橙色
	6	胴部、連続沈線2.5㎜		砂粒	
	7	胴部、単沈線	附加条	白色粒	黄橙色
	8	胴部、集合沈線2.5㎜	ＲＬ	粗砂	明赤褐色
	9	胴部、連続沈線２㎜		砂粒	明赤褐色
	10	胴部、連続・平行沈線４㎜		粗砂	明赤褐色
	11	胴部	ＲＬ	白色粒、砂粒	浅黄橙色
	12	胴部、沈線		砂粒	にぶい赤褐色
Ｆ17土	1	胴部、連続沈線２㎜、貼付文		細砂	橙色
Ｆ18土	1	胴部～底部、集合・連続沈線2.5㎜、貼付文		白色粒、砂粒	明赤褐色～橙色
	2	胴部下端、集合・連続沈線2.5㎜、貼付文	ＲＬ	白色粒	明赤褐色
	3	胴部、集合・連続沈線2.5㎜、貼付文		砂粒、白色粒	赤褐色
	4	胴部、集合沈線2.5㎜、貼付文		砂粒	にぶい赤褐～にぶい黄橙色
	5	胴部、集合・連続沈線3.5㎜、貼付文		白色粒、砂粒	にぶい赤褐色
	6	胴部、集合沈線3.5㎜		白色粒、砂粒	にぶい褐色
	7	胴部、集合沈線3.5㎜		白色粒	にぶい赤褐色
	8	胴部、連続・集合沈線２㎜		白色粒	赤褐色
	9	胴部、単位不明瞭		砂粒	にぶい橙色
	10	胴部、半截竹管若しくは貝殻文		砂粒、赤色粒	にぶい黄橙色
	11	胴部、半截竹管２本一組８㎜	ＲＬ	砂粒、金雲母	橙色
	12	底部	ＲＬ多	白色粒	浅黄橙色～橙色
Ｆ21土	1	胴部、集合・連続沈線2.5㎜		砂粒	にぶい黄橙色
	2	胴部、集合沈線1.5㎜	不明瞭	粗砂、白色粒	にぶい赤色粒褐色
Ｆ24土	1	胴部、集合・連続2.5㎜	ＲＬ	白色粒、黒色鉱物	にぶい褐色

第９表　Ｆ区遺構外出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　　土	色　　調	出土位置
1	口縁部、集合沈線2.5㎜		白・赤色粒、砂粒	にぶい赤褐色	Ｆ１土周
2	口縁部、集合・連続沈線２㎜		白色粒、砂粒	にぶい褐色	北東部
3	口縁部、連続沈線2.5㎜		白色粒、砂粒	にぶい橙色	27―34杭
4	口縁部、連続沈線２㎜	ＲＬ	白色粒、砂粒	明赤褐色～暗褐色	Ｆ８土周
5	胴部、平行・連続沈線2.5㎜	Ｌ	白色粒、砂粒	にぶい橙色	集石周
6	胴部、集合沈線３㎜	ＲＬ	砂粒	浅黄橙色	北溝
7	胴部、連続・集合沈線２㎜	ＲＬ？	白色粒、砂粒	にぶい橙色	26―34杭
8	胴部、連続沈線1.5㎜	Ｌ	砂粒	暗赤褐色	Ｆ８土周
9	胴部、連続沈線2.5㎜、施文具２種		白色粒、砂粒	橙色	包
10	胴部、連続沈線2.5㎜	ＲＬ	砂粒	暗褐色	包
11	胴部、連続沈線３㎜		砂粒	淡黄色	南東部

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　　土	色　　調	出土位置
12	胴部、集合沈線2.5㎜		赤色粒、細砂	橙色～浅黄橙色	Ｆ１土周
13	胴部、連続沈線２㎜		砂粒	浅黄橙色～暗褐色	北東部
14	胴部、連続沈線２㎜	ＲＬ	白色粒、砂粒	暗赤褐色	28―35Ｇ
15	胴部、連続沈線2.5㎜	ＲＬ	白色粒、砂粒	にぶい橙色	包
16	胴部、集合沈線３㎜	？	砂粒	淡黄色	31―36Ｇ
17	胴部、平行沈線2.5㎜、縦ナデにより断続		白色粒、細砂	にぶい橙色	Ｆ１土周
18	口縁部、集合沈線2.5㎜		白色粒、砂粒	橙色～にぶい橙色	30―36杭
19	胴部、集合沈線2.5㎜		白色粒、砂粒	橙色	30―36杭
20	胴部、集合沈線２㎜		砂粒	にぶい黄橙色	31―36杭
21	胴部、集合沈線３㎜		白色粒、砂粒	暗褐色	25―32杭
22	胴部、集合沈線３㎜		白色粒、砂粒	にぶい橙色	表採
23	胴部、連続・集合沈線３㎜		白色粒、砂粒	黒褐色	表採
24	口縁部、集合沈線2.5㎜		砂粒、白色粒	淡黄色	32―34杭
25	胴部、連続沈線２㎜		白色粒、砂粒	淡黄色	26―33杭
26	胴部、集合・連続沈線２㎜		砂粒	にぶい橙色	包
27	胴部、連続・集合沈線２㎜		白・赤色粒、砂粒	暗赤褐色	北溝
28	胴部、集合沈線2.5㎜		砂粒、白色粒	淡黄色	27―34杭
29	胴部、連続・集合沈線2.5㎜		白色粒、砂粒	にぶい黄橙色	Ｆ１土周
30	胴部、連続・集合沈線2.5㎜		白色粒、砂粒	にぶい黄橙色	Ｆ１土周
31	胴部、集合沈線1.5㎜		白色粒、砂粒	にぶい橙色	Ｆ１土周
32	胴部、集合・連続沈線2.5㎜		粗砂	浅黄橙色	表採
33	胴部、集合沈線３㎜　　地文連続沈線		白色粒、砂粒	橙色～浅黄橙色	25―32杭
34	胴部、集合・連続沈線2.5㎜		白色粒、砂粒	にぶい黄橙色	Ｆ１土周
35	胴部、連続沈線２㎜		白色粒、砂粒	にぶい黄橙色	27―34杭
36	胴部、連続沈線2.5㎜		白色粒、砂粒	赤褐色	Ｆ１土周
37	胴部、集合沈線２㎜		白色粒、砂粒	にぶい褐色	26―34杭
38	胴部、集合沈線2.5㎜		砂粒	にぶい黄橙色	包
39	胴部、連続沈線３㎜		砂粒、赤色粒	橙色	26―35杭
40	胴部、連続沈線２㎜	ＲＬ	白色粒、砂粒	暗褐色	北溝
41	胴部、連続沈線３㎜		赤色粒、砂粒	にぶい黄橙色	Ｆ１土周
42	胴部、集合沈線３㎜		砂粒、赤色粒	淡黄色～暗褐色	表採
43	胴部、集合沈線３㎜		砂粒	浅黄橙色	北溝
44	胴部、連続沈線2.5㎜		砂粒	橙色	Ｆ１土周
45	胴部、集合沈線2.5㎜		赤色粒、砂粒	にぶい褐色	集石周
46	胴部、連続沈線2.5㎜		赤色粒、砂粒	赤褐色	27―34杭
47	胴部、連続沈線２㎜		白色粒、砂粒	にぶい褐色	27―34杭
48	胴部、連続沈線２㎜		砂粒	にぶい橙色	集石周
49	胴部、単沈線		細砂	にぶい橙色	表採
50	胴部、平行・集合沈線2.5㎜		砂粒	にぶい黄橙色	集石周
51	胴部、平行沈線2.5㎜	Ｌ	赤色粒、細砂	にぶい橙色	表採
52	胴部、平行沈線２㎜		白色粒、砂粒	暗褐色	Ｆ１土周
53	胴部、平行沈線２㎜		白色粒、砂粒	暗褐色	北溝
54	胴部、平行沈線1.5㎜		細砂	淡黄色	北東部
55	胴部、集合沈線2.5㎜		赤色粒、砂粒	赤褐色	表採
56	胴部、集合沈線３㎜		細砂	橙色	北東部
57	口縁部、集合沈線2.5㎜、貼付文		雲母、砂粒	にぶい赤褐色	29―36杭
58	口縁部、集合沈線３㎜、貼付文		赤・白色粒、砂粒	赤褐色	31―33杭
59	口縁部、集合・連続沈線2.5㎜、貼付文		砂粒	褐灰色	26―34杭
60	口縁部、連続沈線2.5㎜、貼付文		砂粒	褐灰色	表採
61	口縁部、平行沈線２㎜、貼付文		白色粒、砂粒	赤褐色	表採
62	口縁部、平行沈線2.5㎜、貼付文		白色粒	赤褐色	表採
63	口縁部、集合沈線2.5㎜、貼付文		砂粒、赤色粒	褐灰色～にぶい黄橙色	集石周
64	口縁部、連続沈線2.5㎜、貼付文		砂粒	にぶい赤褐色	24―32杭
65	口縁部、凹凸文、貼付文	ＲＬ	白色粒、砂粒	にぶい黄橙色	28―36Ｇ
66	口縁部、連続沈線1.5㎜、凹凸文、貼付文		砂粒	にぶい赤褐色	Ｆ１土周
67	口縁部、集合・連続沈線2.5㎜、貼付文剝落		白色粒、砂粒	褐灰色～黒褐色	31―36杭

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　　土	色　　調	出土位置
68	口縁部、連続沈線2.5mm、貼付文		砂粒	にぶい黄橙色	南東部
69	口辺部、棒状貼付文上刺突文・キザミ		砂粒	にぶい橙色	集石周
70	胴部、連続沈線2.5mm、棒状貼付文上刺突文、		白色粒、砂粒	黒褐色	表採
71	胴部、集合・連続沈線２mm、棒状貼付文上刺突文		白色粒、砂粒	橙色	集石周
72	胴部、集合沈線2.5mm、貼付文		白色粒、砂粒	にぶい褐色～黒褐色	30—35杭
73	胴部、平行沈線条線状、貼付文		白色粒、砂粒	にぶい黄橙色	24—32杭
74	胴部、集合・連続沈線2.5mm、貼付文		砂粒、赤色粒	にぶい黄橙色	Ｆ１土周
75	胴部、集合・連続沈線2.5mm、貼付文		砂粒、雲母	にぶい赤褐色	21—34G
76	胴部、集合・連続沈線３mm、貼付文		白色粒、砂粒	にぶい橙色	31—36G
77	口辺部、集合沈線３mm、貼付文		白色粒	にぶい褐色～暗褐色	北溝
78	胴部、集合沈線2.5mm、貼付文		粗砂	にぶい黄橙色	Ｆ１土周
79	胴部、連続沈線2.5mm、貼付文		砂粒、雲母	にぶい赤褐色	28—35杭
80	胴部、集合沈線2.5mm、貼付文		砂粒	浅黄橙色～褐灰色	32—34杭
81	胴部下端、集合沈線３mm、貼付文		砂粒	浅黄橙色	26—34杭
82	胴部、連続沈線2.5mm、貼付文		砂粒、白色粒	褐灰色	26—34杭
83	底部、集合・連続沈線2.5mm、貼付文		白色粒、砂粒	黄橙色	Ｆ１土周
84	口縁部、貼付文		赤色粒、雲母、砂粒	にぶい褐色	Ｆ１土周
85	胴部、貼付文		砂粒	にぶい橙色	Ｆ１土周
86	胴部、貼付文		砂粒	にぶい橙色	Ｆ１土周
87	口縁部、集合沈線2.5mm、凹凸文		砂粒	淡黄色	包
88	口縁部、集合沈線2.5mm、凹凸文		白・赤色粒、砂粒	にぶい褐色～褐灰色	24—34杭
89	口縁部、凹凸文	L	砂粒	にぶい赤褐色	Ｆ１土周
90	口縁部、口唇部キザミ		砂粒、赤色粒	淡黄色	Ｆ１土周
91	胴部、半截竹管で連続刺突文３mm		細砂	にぶい黄橙色	29—36杭
92	胴部、半截竹管で連続刺突文３mm		細砂	にぶい橙色	包
93	口縁部、結節浮線文、貼付文		砂粒	褐色	29—38G
94	口縁部、三角陰刻文		砂粒	暗褐色～黒褐色	25—32杭
95	口縁部～底部　　口縁部ＲＬ－ＬＲ羽状、胴部ＬＲ		白色粒、粗砂、黒鉱	にぶい橙色～赤褐色	24—32G
96	口縁部、隆帯	ＬＲ多	白色粒、砂粒、繊維	にぶい黄橙色～橙色	28—35G
97	胴部	Ｌ－Ｒ	砂粒、繊維	にぶい橙色	28—35杭
98	胴部	ＲＬ多	繊維、砂粒	にぶい褐色	26—33杭
99	胴部	ＬＲ	繊維、砂粒	にぶい黄橙色	集石下
100	口縁部	Ｌ	砂粒、白色粒	暗褐色	Ｆ１土周
101	胴部	Ｌ	砂粒	にぶい黄橙色	Ｆ１土周
102	胴部	Ｌ	白色粒、砂粒	暗赤褐色	Ｆ１土周
103	胴部	Ｌ	白色粒、砂粒	暗赤褐色	31—36杭
104	胴部	Ｌ	砂粒	極暗赤褐色	24—32杭
105	胴部	Ｌ	砂粒	橙色	21—34G
106	胴部	Ｌ	砂粒	灰褐色	26—34杭
107	胴部	Ｌ	砂粒、赤色粒	暗褐色	28—35G
108	胴部	Ｌ	砂粒	にぶい赤褐色	24—32杭
109	胴部　　Ｌ縄	不明	砂粒、白色粒	淡黄色～灰褐色	27—34杭
110	胴部	ＬＲ	砂粒	橙色	24—32杭
111	胴部	ＬＲ	砂粒	にぶい橙色	24—32杭
112	胴部	ＬＲ多	砂粒	赤褐色	23—31杭
113	胴部	ＲＬ多	粗砂	暗赤褐色	Ｆ１土周
114	胴部	ＲＬ	白色粒、砂粒	橙色	Ｆ１土周
115	底部、無文		細砂	にぶい橙色	24—32杭
116	底部、無文		細砂	淡黄色	集石周
117	底部、無文		砂粒	浅黄橙色	Ｆ１土周
118	底部、無文		粗砂	浅黄橙色	南東部

② 石 器

A区は陥し穴内から打製石斧、遺構外から石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、スクレイパーが出土している。点数的に少ないが、これは最初からローム面まで表土剝ぎを行った範囲が多いためとも思われる。

B区からは石鏃、石匙、打製石斧、敲打石、スクレイパー、凹石が出土している。大半は遺構外からの出土で、中でも石鏃が多い点が特徴である。

E区からは石鏃、打製石斧、三角錐状石器、スクレイパー、磨石・凹石、多孔石などが出土している。B区と同様に大半が遺構外である。資料提示していないが、スタンプ状石器が4点出土している。

C区は石鏃と磨石が各1点遺構外から出土しただけである。

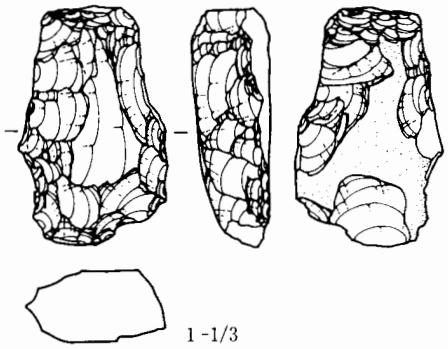
F区は遺構内外から石鏃、打製石斧、スクレイパー、磨石・凹石などが出土している。遺構の性格を反映して磨石・凹石が多いことが特徴である。

尚、石器の石材については専門家による鑑定を経ていないため、誤認しているものもあると思われる。

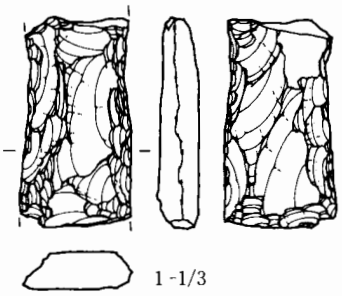
第10表　出土石器計測表

出土位置	番号	器　　種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石　　材	備　　考
A区1号竪穴	1	打製石斧	94.0	59.0	31.0	210	黒色安山岩	完形
A区4号土坑	1	打製石斧	117.5	44.0	18.0	126.7	黒色安山岩	完形
A区14号土坑	1	打製石斧	(83.0)	(45.0)	16.5	(77.6)	黒色頁岩	両端欠損
A区31号土坑	1	打製石斧	117.5	61.5	28.0	200	黒色頁岩	完形
A区遺構外	1	石鏃	13.0	10.5	2.0	0.3	黒曜石	完形
〃	2	石匙	36.0	55.0	8.0	10.4	黒色安山岩	完形
〃	3	打製石斧	(75.0)	(43.0)	22.0	(90.3)	黒色頁岩	完形
〃	4	打製石斧	59.0	35.0	11.0	26.3	ホルンフェルス	刃部欠損
〃	5	磨製石斧	(20.0)	(26.0)	(14.0)	(10.1)	輝緑岩	小破片
〃	6	スクレイパー	64.0	85.0	17.0	93.2	黒色頁岩	一部欠損？
B区6号土坑	1	石鏃	22.0	(14.5)	2.5	(0.5)	黒色頁岩	基部欠損
B区25号土坑	1	石鏃	18.0	14.5	3.5	0.7	チャート	完形
B区遺構外	1	石鏃	20.0	15.0	3.5	0.8	チャート	完形
〃	2	石鏃	21.0	(15.0)	4.5	1.0	チャート	完形
〃	3	石鏃	20.0	15.5	2.5	0.5	チャート	完形
〃	4	石鏃	(23.0)	(14.0)	4.5	(1.2)	黒色頁岩	基部欠損
〃	5	石鏃	(22.0)	(21.0)	7.0	(2.9)	チャート	基部・先端部欠損
〃	6	石鏃	17.0	(10.5)	2.5	(0.3)	チャート	基部欠損
〃	7	石鏃	13.0	(12.0)	3.5	(0.4)	黒曜石	基部欠損
〃	8	石鏃	(13.5)	(15.0)	3.0	(0.6)	チャート	基部欠損
〃	9	石鏃	15.0	13.0	3.0	0.4	黒色頁岩	完形
〃	10	石鏃	18.5	(12.0)	2.0	(0.3)	黒曜石	基部欠損
〃	11	石鏃	15.0	14.5	2.5	0.3	黒曜石	完形
〃	12	石鏃	15.5	12.5	2.0	0.3	チャート	完形
〃	13	石鏃	20.0	(14.0)	2.0	(0.3)	黒曜石	基部欠損
〃	14	石鏃	24.0	(18.0)	5.5	(1.5)	チャート	基部欠損
〃	15	石鏃	21.0	16.0	4.0	1.0	チャート	完形
〃	16	石鏃	(12.0)	15.0	3.0	(0.6)	チャート	先端部欠損
〃	17	石匙？	47.5	69.5	10.0	25.0	黒色安山岩	完形
〃	18	スクレイパー	96.0	42.0	15.0	54.3	黒色頁岩	一部欠損？
〃	19	打製石斧	123.0	49.0	21.0	84.4	黒色頁岩	完形
〃	20	打製石斧	108.0	45.5	21.0	117.4	黒色頁岩	完形
〃	21	スクレイパー	59.0	82.0	25.0	110.6	黒色安山岩	完形
〃	22	スクレイパー	40.0	79.5	16.0	27.7	黒色頁岩	完形
〃	23	スクレイパー	113.5	79.0	20.0	170.7	黒色頁岩	完形
B区遺構外	24	叩打石	110.0	34.5	36.5	220	灰色安山岩	一部欠損
〃	25	凹石	111.0	69.0	57.0	594	粗粒輝石安山岩	完形
〃	26	凹石	118.0	81.0	48.0	449	粗粒輝石安山岩	完形
C区遺構外	1	石鏃	17.0	15.0	3.0	0.4	チャート	完形
〃	2	磨石	93.5	77.5	50.0	493	粗粒輝石安山岩	完形

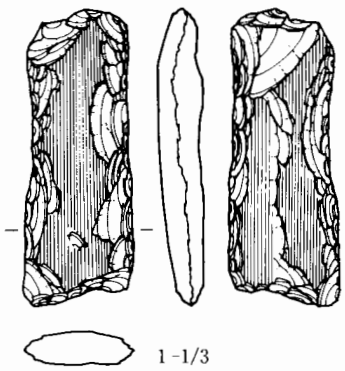
出土位置	番号	器　　種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石　　材	備　　考
1号住居跡	1	スクレイパー	58.0	58.0	19.0	63.4	黒色頁岩	完形
〃	2	スクレイパー	51.0	57.5	9.0	34.3	黒色頁岩	完形
〃	3	スクレイパー	69.0	47.0	12.0	44.2	黒色頁岩	完形
E区遺構外	1	石鏃	(30.0)	18.0	5.5	(2.4)	チャート	基部・先端部欠損
〃	2	石鏃	18.0	(14.0)	2.5	(0.5)	チャート	基部欠損
〃	3	石鏃	15.0	(13.5)	2.0	(0.2)	チャート	基部欠損
〃	4	石鏃	20.0	(11.5)	3.0	(0.5)	チャート	基部欠損
〃	5	石鏃	19.0	17.0	3.0	0.8	チャート	完形
〃	6	石鏃	29.0	(21.0)	5.0	(1.7)	チャート	基部欠損
〃	7	石鏃	22.0	(12.0)	3.0	(0.4)	チャート	基部欠損
〃	8	石鏃	21.0	(14.0)	3.0	(0.6)	黒色頁岩	基部欠損
〃	9	石鏃	21.0	15.5	3.0	0.8	黒曜石	一部欠損？
〃	10	石鏃	(17.0)	(12.5)	3.5	(0.5)	黒曜石	基部・先端部欠損
〃	11	打製石斧	(53.0)	(39.0)	15.0	(45.3)	黒色頁岩	刃部欠損
〃	12	打製石斧	(68.0)	65.0	20.0	(91.8)	黒色頁岩	基部欠損
〃	13	三角錐状石器	(82.5)	(41.0)	(38.0)	(134.7)	黒色頁岩	欠損
〃	14	礫器	64.5	59.0	26.0	96.6	黒色頁岩	完形
〃	15	礫器	54.0	70.0	21.0	73.5	黒色頁岩	完形
〃	16	スクレイパー	78.5	56.5	27.0	104.5	黒色頁岩	完形
〃	17	スクレイパー	106.0	49.0	14.0	84.6	輝石安山岩	完形
〃	18	礫器	131.5	92.0	30.0	370	黒色頁岩	完形
〃	19	凹石	101.0	99.0	44.0	634	石英閃緑岩	完形
〃	20	磨石	100.0	80.0	40.0	465	粗粒輝石安山岩	完形
〃	21	多孔石	159.0	118.0	116.0	2760	粗粒輝石安山岩	完形
F区1号竪穴	1	石鏃	18.0	16.0	4.0	0.9	チャート	完形
〃	2	スクレイパー	44.0	32.0	9.5	13.2	黒色安山岩	欠損
〃	3	磨石	82.0	37.0	36.0	393	粗粒輝石安山岩	欠損
F区6号土坑	1	磨石	89.5	63.0	34.0	274	石英斑岩	完形
F区7号土坑	1	打製石斧	112.0	51.5	20.5	99.7	黒色頁岩	完形
F区16号土坑	1	石鏃	(21.5)	19.5	6.0	(2.4)	チャート	先端部欠損
〃	2	多孔石	190.0	166.5	105.0	3790	粗粒輝石安山岩	一部欠損
F区18号土坑	1	打製石斧	(81.0)	(62.0)	18.0	(80.6)	黒色頁岩	刃部欠損
	2	磨石	(43.5)	71.0	54.5	(230)	粗粒輝石安山岩	欠損
F区遺構外	1	石鏃	(12.5)	15.0	3.0	(1.1)	チャート	先端部欠損
〃	2	石鏃	(18.5)	14.0	4.5	(1.0)	黒色頁岩	基部・先端部欠損
〃	3	石鏃	(21.0)	(14.5)	6.0	(0.6)	チャート	先端部欠損
〃	4	石鏃	(20.0)	15.0	5.0	(1.0)	黒曜石	基部欠損
〃	5	石鏃	16.0	(14.0)	3.5	(0.5)	チャート	基部欠損
〃	6	打製石斧	(97.0)	(51.0)	16.0	(84.2)	黒色頁岩	刃部欠損？
〃	7	打製石斧	(75.5)	(57.0)	18.0	(78.5)	黒色頁岩	刃部欠損
〃	8	打製石斧	(76.0)	54.0	20.0	(104.5)	黒色頁岩	刃部欠損
〃	9	スクレイパー	57.0	51.0	14.0	34.8	黒色安山岩	完形
〃	10	凹石	97.0	75.0	56.0	528	粗粒輝石安山岩	完形
〃	11	凹石	(81.5)	61.0	35.5	(220)	安山斑岩	欠損
〃	12	凹石	84.0	71.0	29.0	224	角閃石安山岩	完形
〃	13	凹石	89.0	66.5	44.0	330	粗粒輝石安山岩	完形
〃	14	凹石	111.5	81.0	47.0	550	粗粒輝石安山岩	完形
〃	15	凹石	144.0	71.0	51.0	830	粗粒輝石安山岩	完形
〃	16	磨石	114.5	65.0	41.0	473	石英斑岩	完形
〃	17	磨石	132.0	64.5	37.5	512	粗粒輝石安山岩	完形
〃	18	磨石	79.0	70.0	47.0	360	粗粒輝石安山岩	完形
〃	19	磨石	144.0	52.0	37.0	478	粗粒輝石安山岩	完形
〃	20	磨石	105.0	97.0	47.0	692	石榴石花崗岩	完形
〃	21	磨石	88.0	80.0	62.0	598	粗粒輝石安山岩	完形



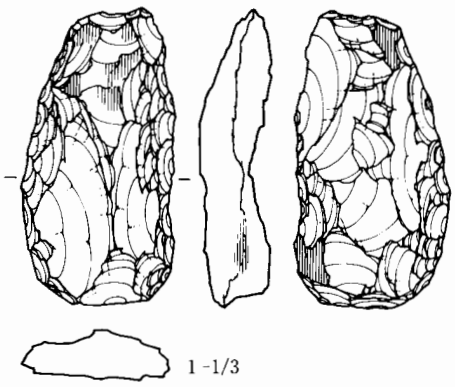
A 1 竪



A14土

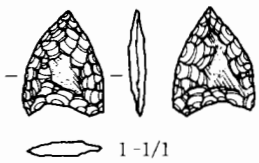


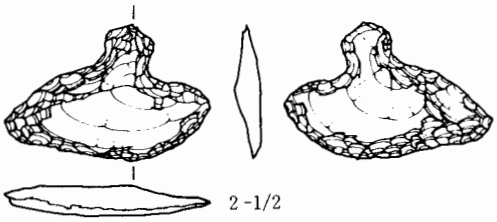
A 4 土

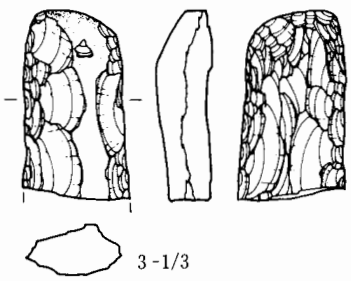


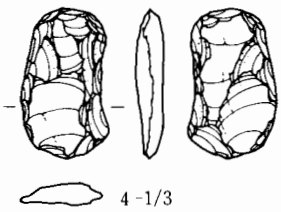
A31土

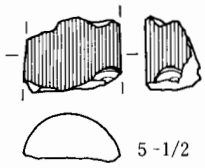
遺構外

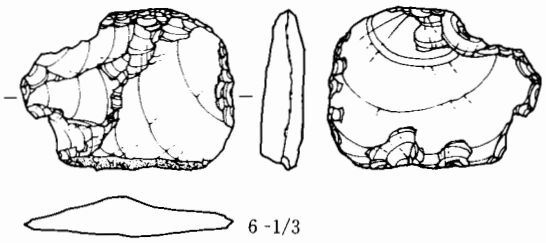




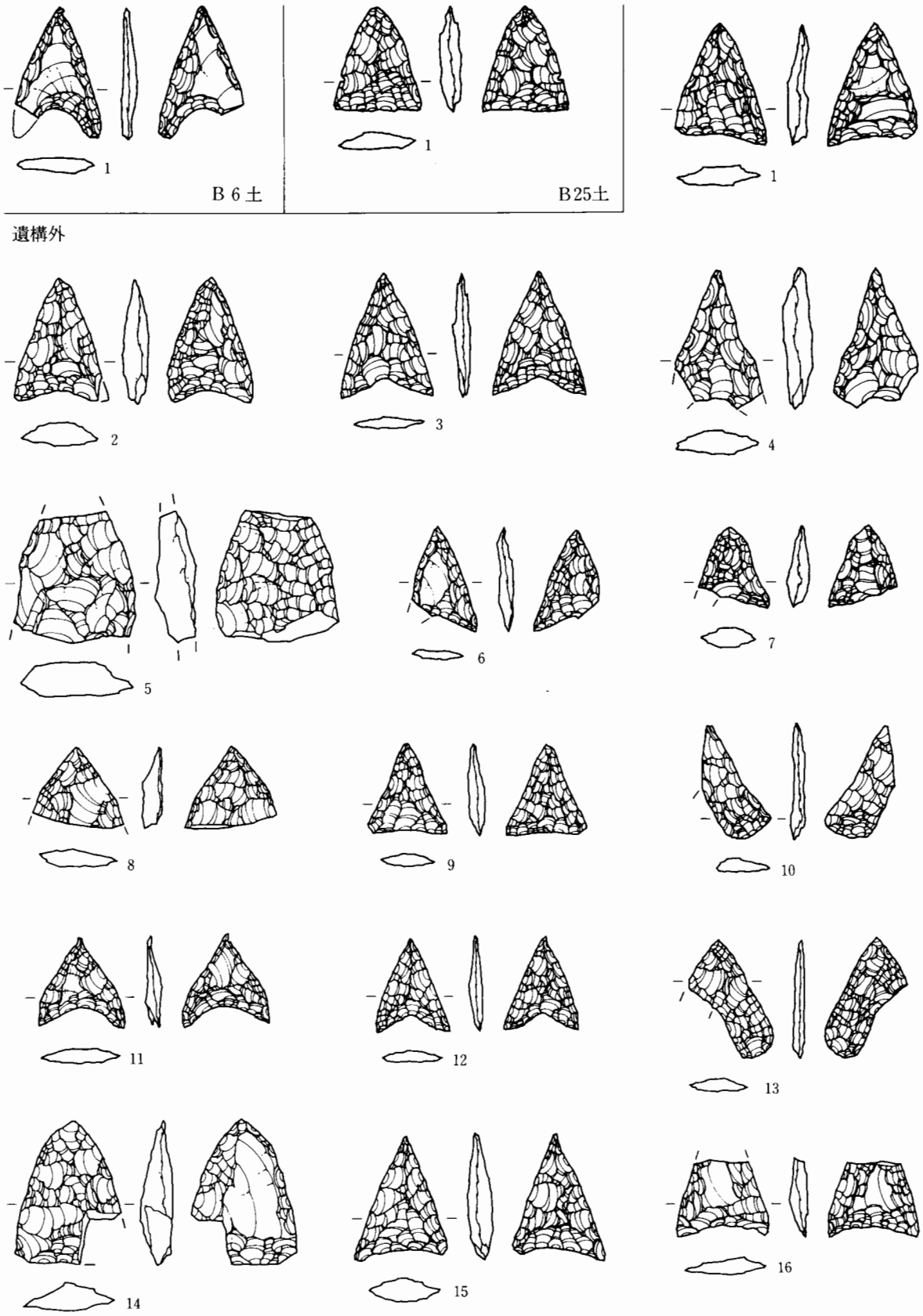




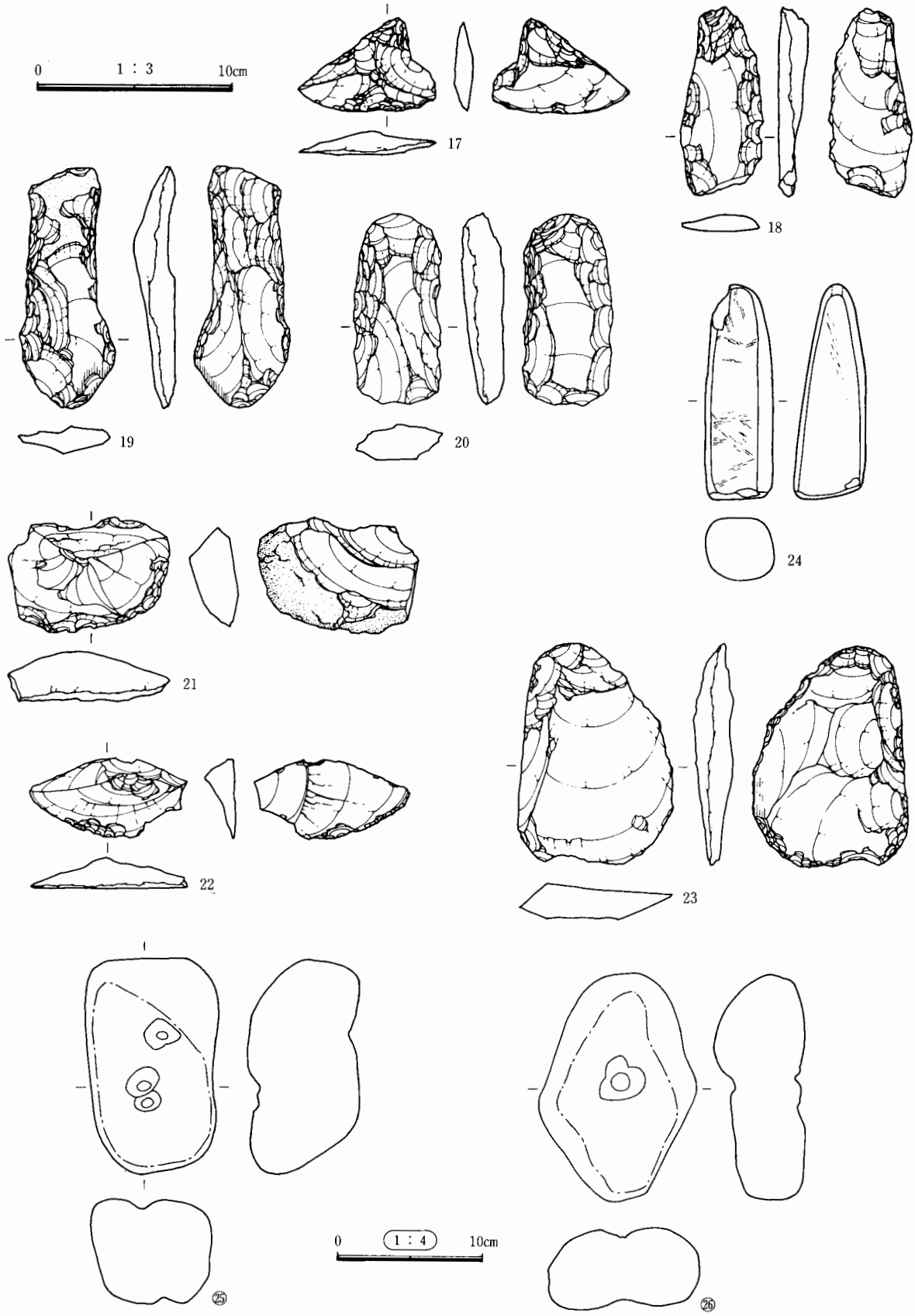




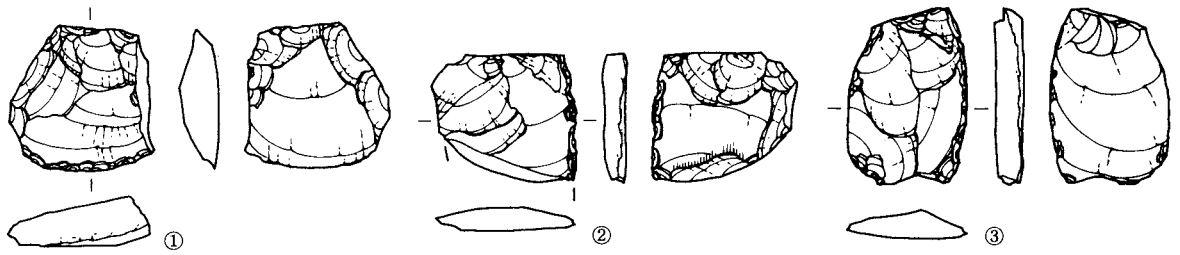
第41図　A区出土石器



第42図　B区出土石器(1)

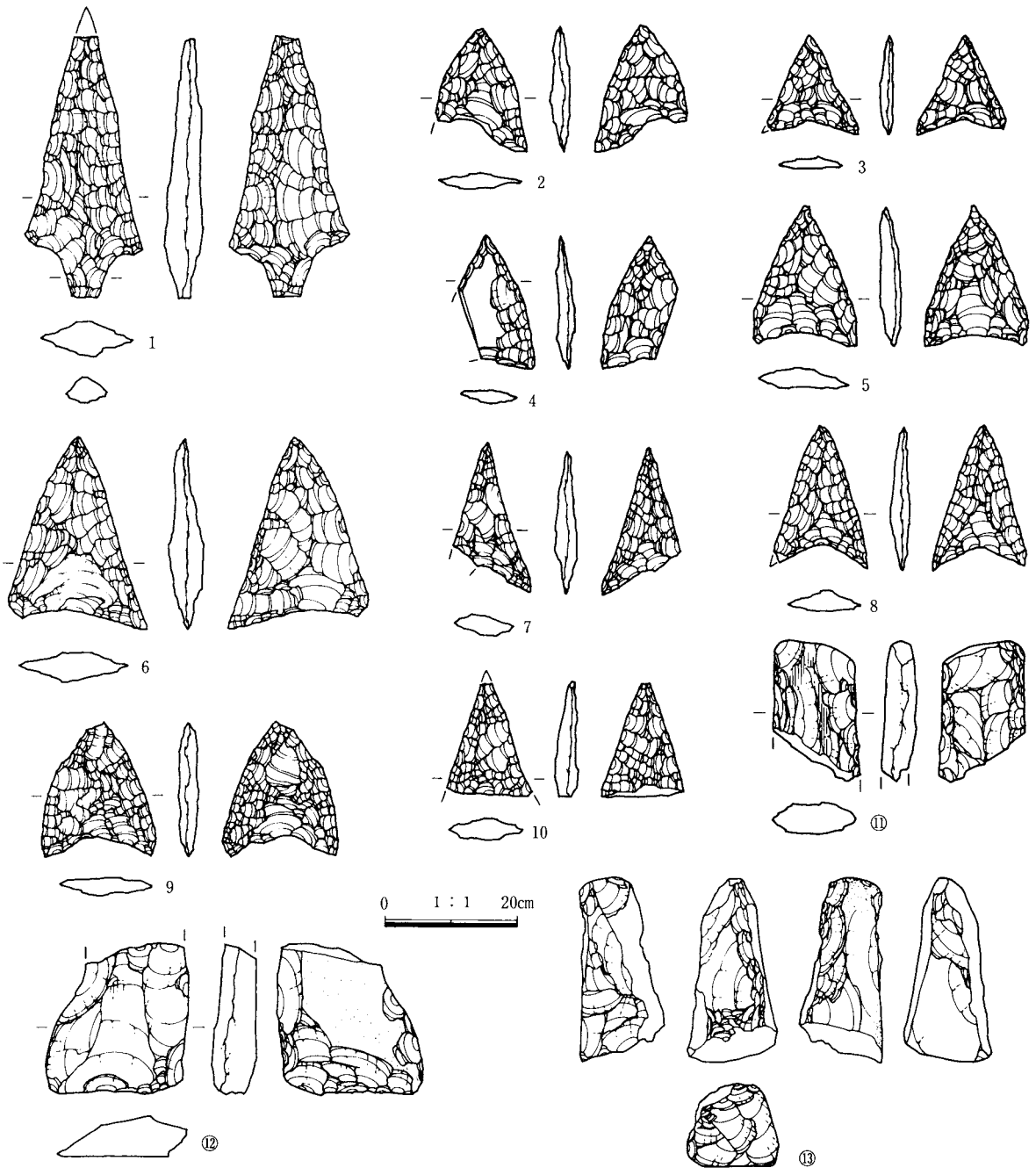


第43図　B区出土石器(2)

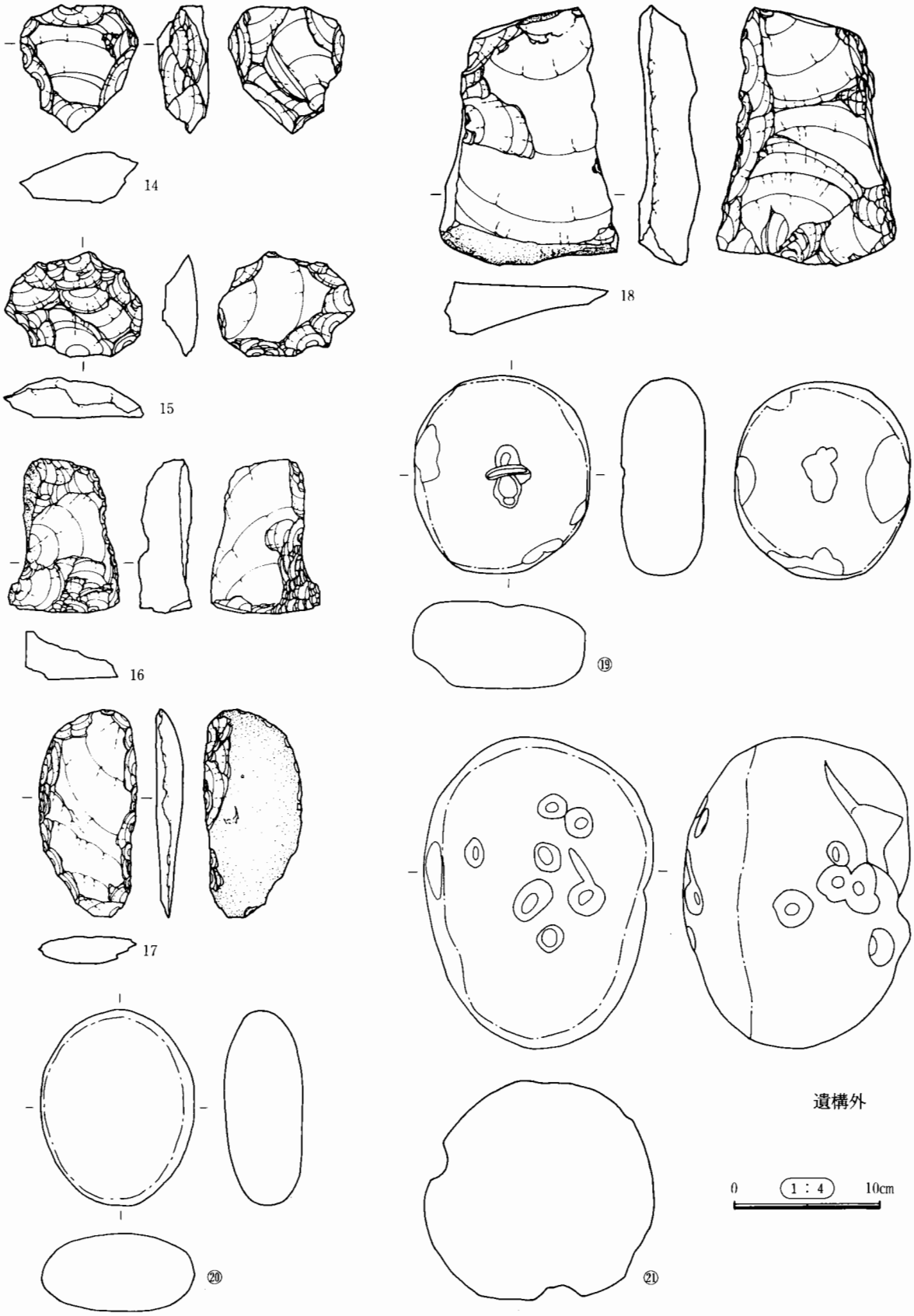


1号住

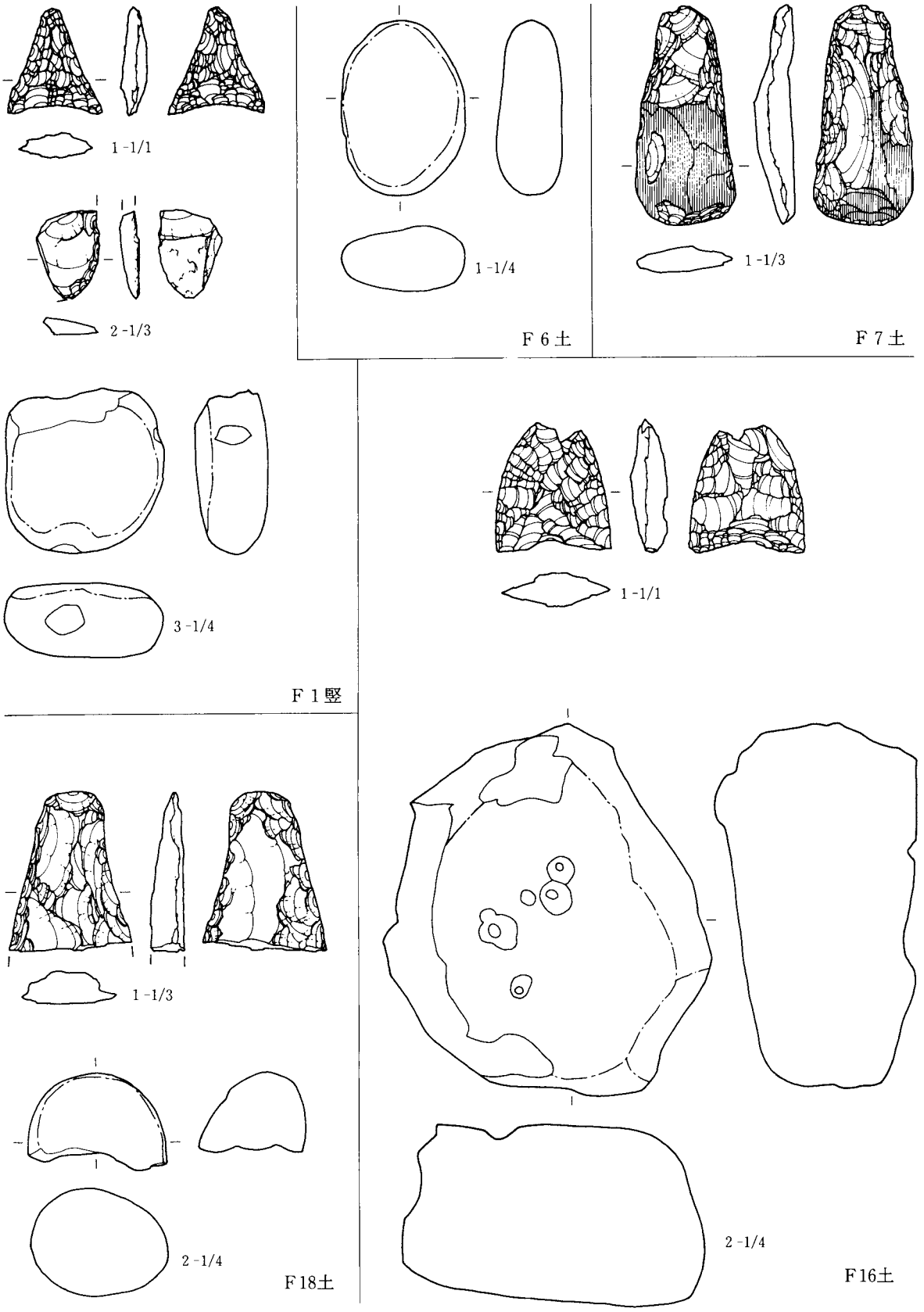
遺構外



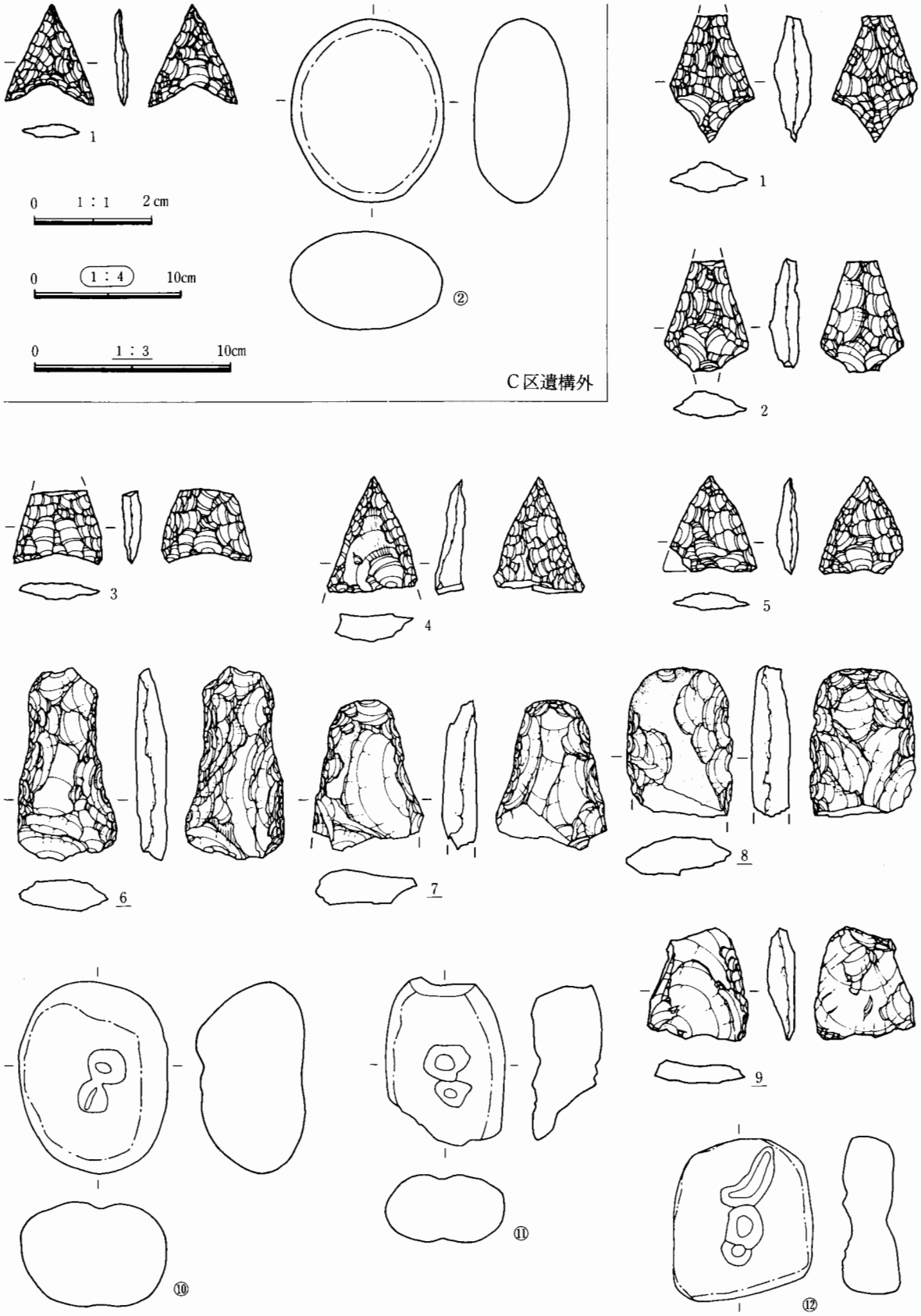
第44図　E区出土石器(1)



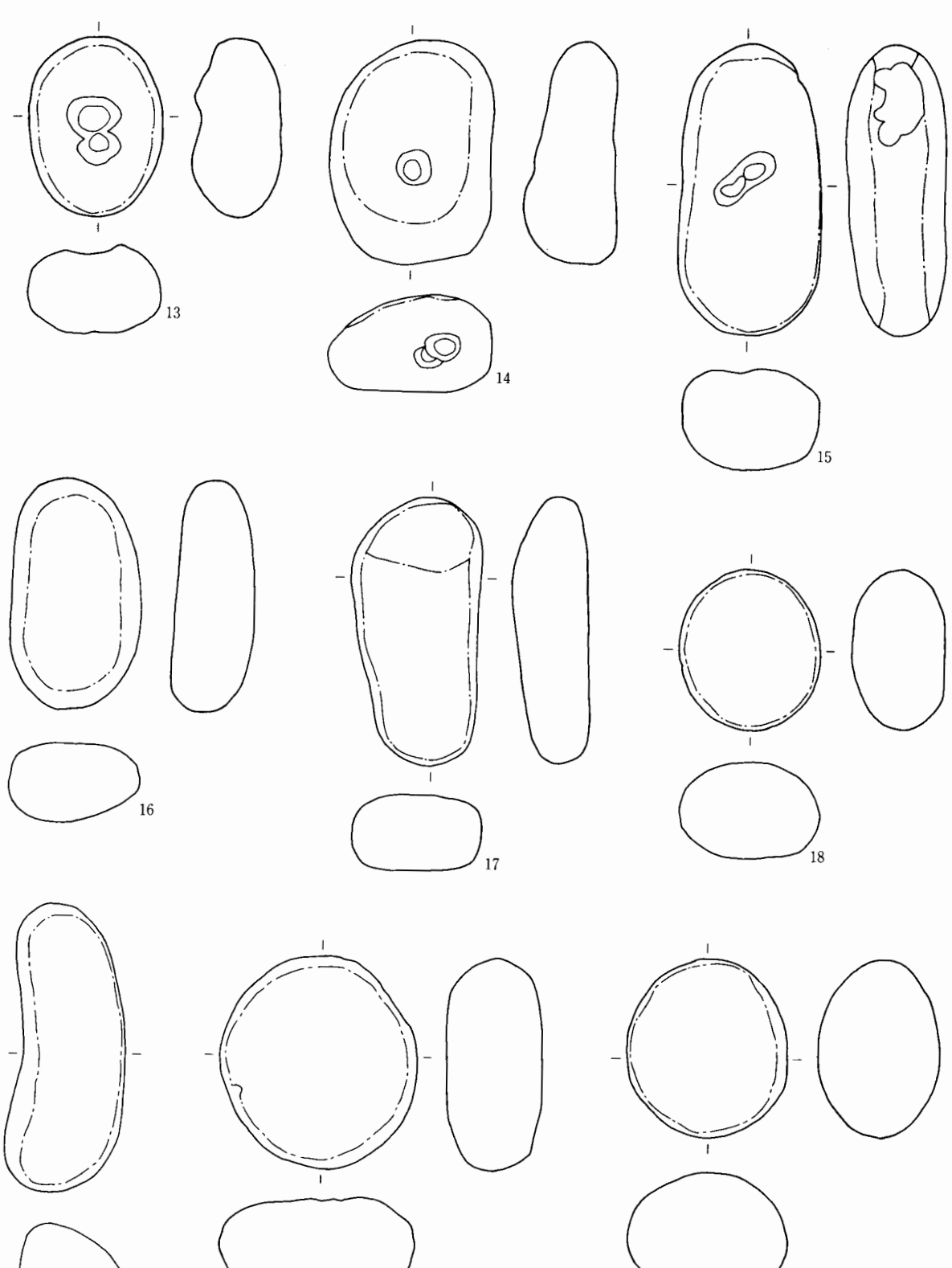
第45図　E区出土石器(2)



第46図　F区出土石器(1)



第47図　C区、F区出土石器(2)



第48図　F区出土石器(3)

2．縄文時代以外の遺構と遺物

(1) A区の遺構

① 概　要

検出された遺構は道路跡２条と東西道路跡に関係すると思われる柵列・柱穴群、区画溝１カ所、墓坑１基・土坑１基である。

遺物は墓坑から寛永通宝が出土した以外は、遺構外から陶磁器等が少量出土しただけである。

② 東西道路跡（遺構第51～54図、ＰＬ17～19）

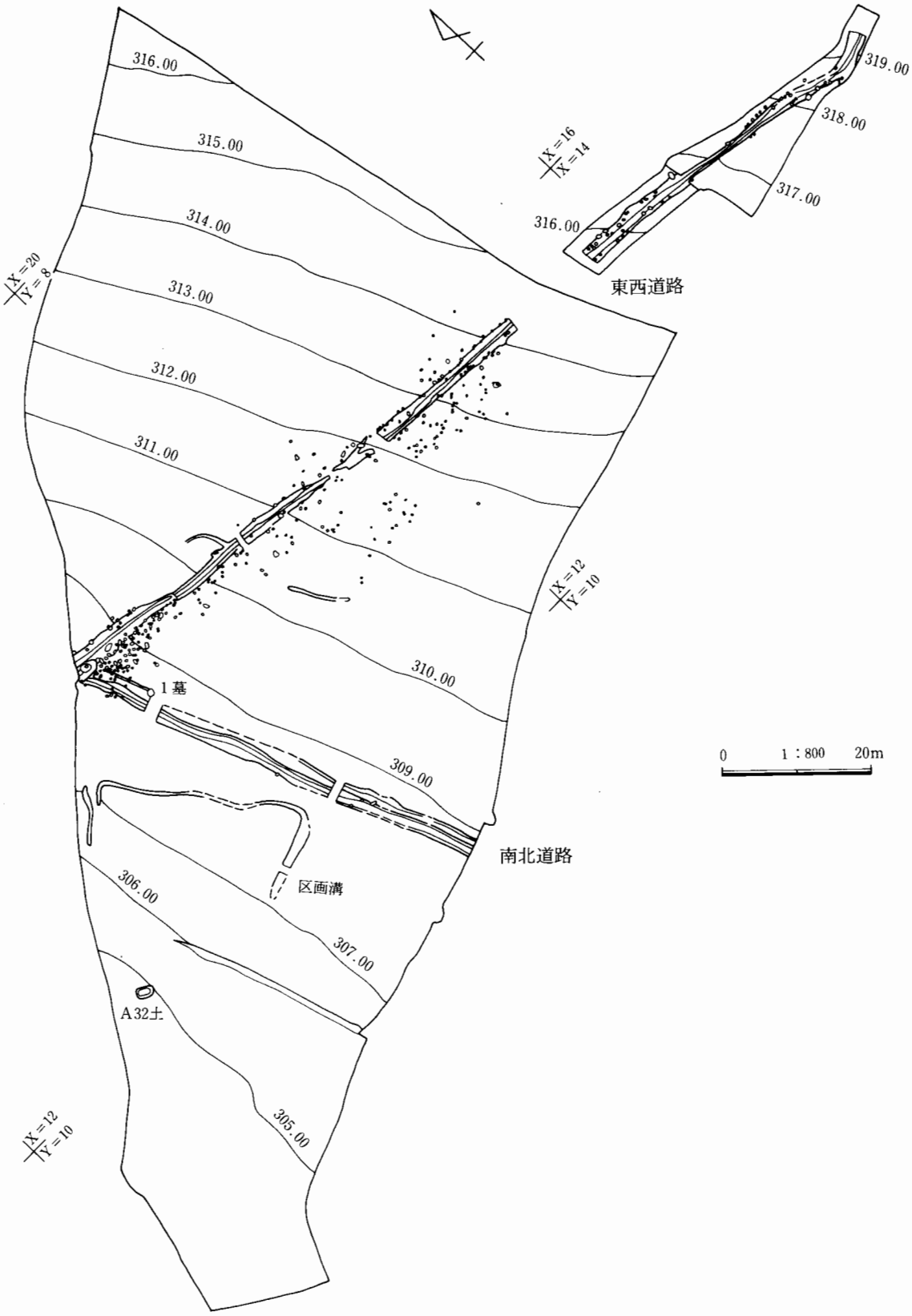
Ａ区の中央部をほぼ直線的に東西に伸びる道路跡で、東端部で走向を北寄りに変えＣ区へと続いている。概ねＮ－82°－Ｗの走向で14－18グリッドの変換点に至り、約130°の角度で東北東に折れ、さらにＮ－59°－Ｅの走向でＣ区に至り柵列に沿って東へ屈曲する。西端から変換点までの長さは約130m、変換点からＣ区柵列までの長さは約50mを測る。底面は比較的平坦で、中央部には踏み固めによる凹みがあり、ＦＰ軽石が路面に踏み込まれている箇所もある。路面は同一位置、或いは若干位置を違えて複数が認められ、比較的長期にわたる使用が推測される。１面調査時点での掘り込みの上幅は、西端を除いた残りの良い部分で2.4m前後である。全体的に浅く、底面幅は1.4m前後で推移する。14－18グリッドの変換点から南西へ向かう掘り込みも認められるが、現道下へと続くため調査を行っていない。実測図上では表記していないが、１面での調査の際に15－12グリッド付近に南西方向への分岐（或いは区画内への上り口）も確認されている。西端は台地から谷部への降り口となっており、上幅や深さが漸増する。西端部の上幅約４ｍ、深さ1.2mを測る。底面南側から南壁にかけて大きな流水痕が形成されており、これにより北側へ路面を移動したような痕跡も認められる。覆土は暗褐色土・黒褐色土主体に堆積するが、西端部では上層に南側からの褐色土の流れ込みが認められる。ＦＰ軽石・Ｃ軽石ともに含んでいる。

西端部の南側壁面から壁外にかけては重複する多数の柱穴が検出されている。この柱穴群は西へ行くほど多くなり、長三角形状の分布範囲を呈するが、柱穴の配列に明瞭な規則性は看取できない。また、柱穴群の西端は南北道路跡の重複により数量・規模が減ずることから、柱穴群と南北道路跡は無関係と思われ、両道路跡（或いは柱穴群と南北道路跡との間）に時間差が存在することが判る。北側壁面～縁辺にも柱穴が穿たれているが、この場合は概ね２条程度の柵列状である。道路跡と柱穴群の新旧関係は明瞭ではない。

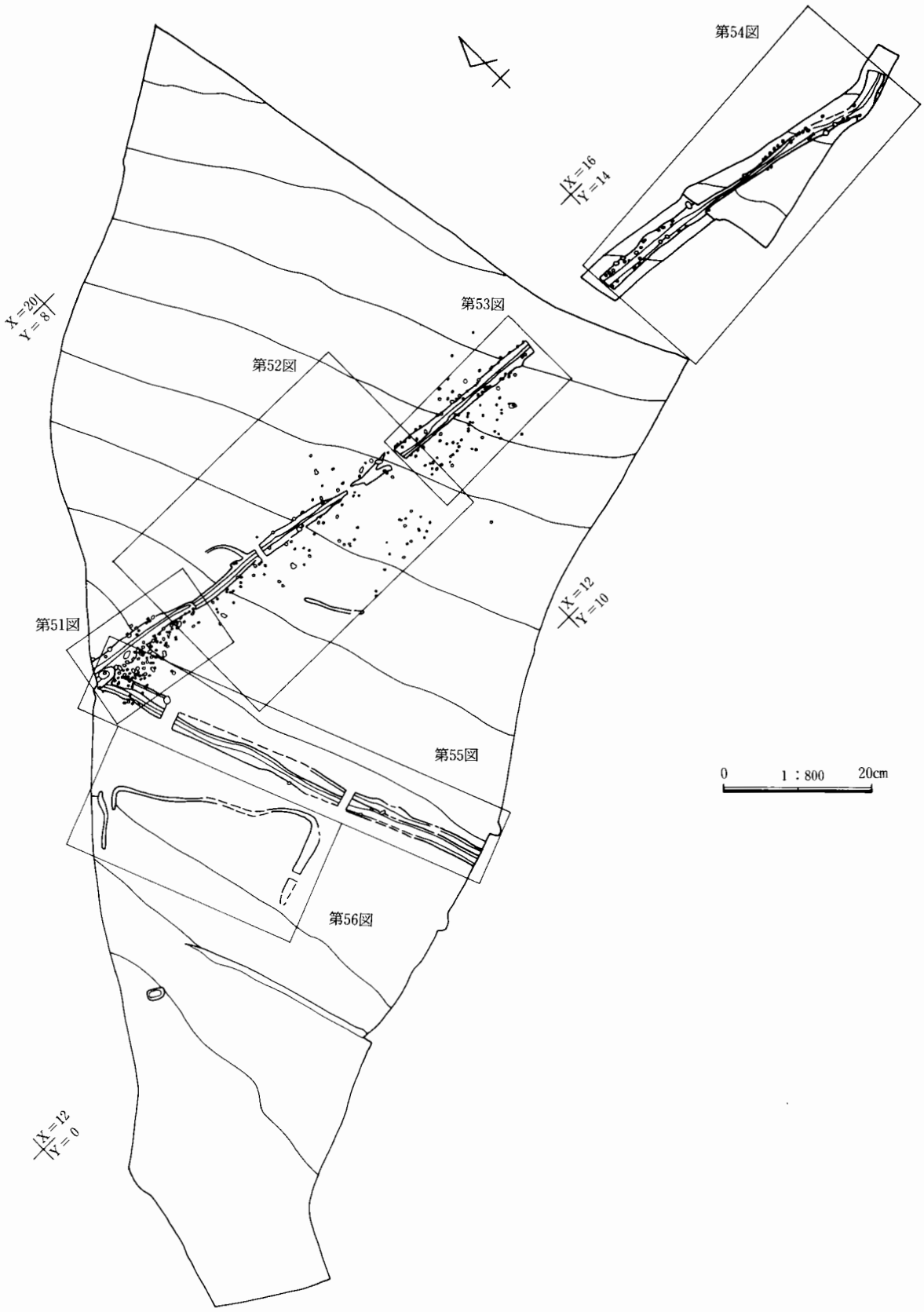
東西道路では西端以外の縁辺部にも疎らではあるが柱穴列が続いている。但し、位置によって北縁、南縁或いは両縁に沿う場合があり、また、両側とも途切れる部分もあり一定していない。

東西道路跡の縁辺以外にも柱穴が検出されている。北側はごくまばらであるが、16－９グリッド付近にはＬ字状に区画するように小規模な柱穴の配列が認められる。南側の西半部には道路跡縁辺からほぼ５ｍの間に多数検出されているが、特段の規則性は伺えない。16－８グリッド周辺にもある程度まとまって検出されているが、やはり規則性は認められない。但し、先述した15－12グリッドの分岐の延長上に位置しており、道路跡と関連する可能性がある。

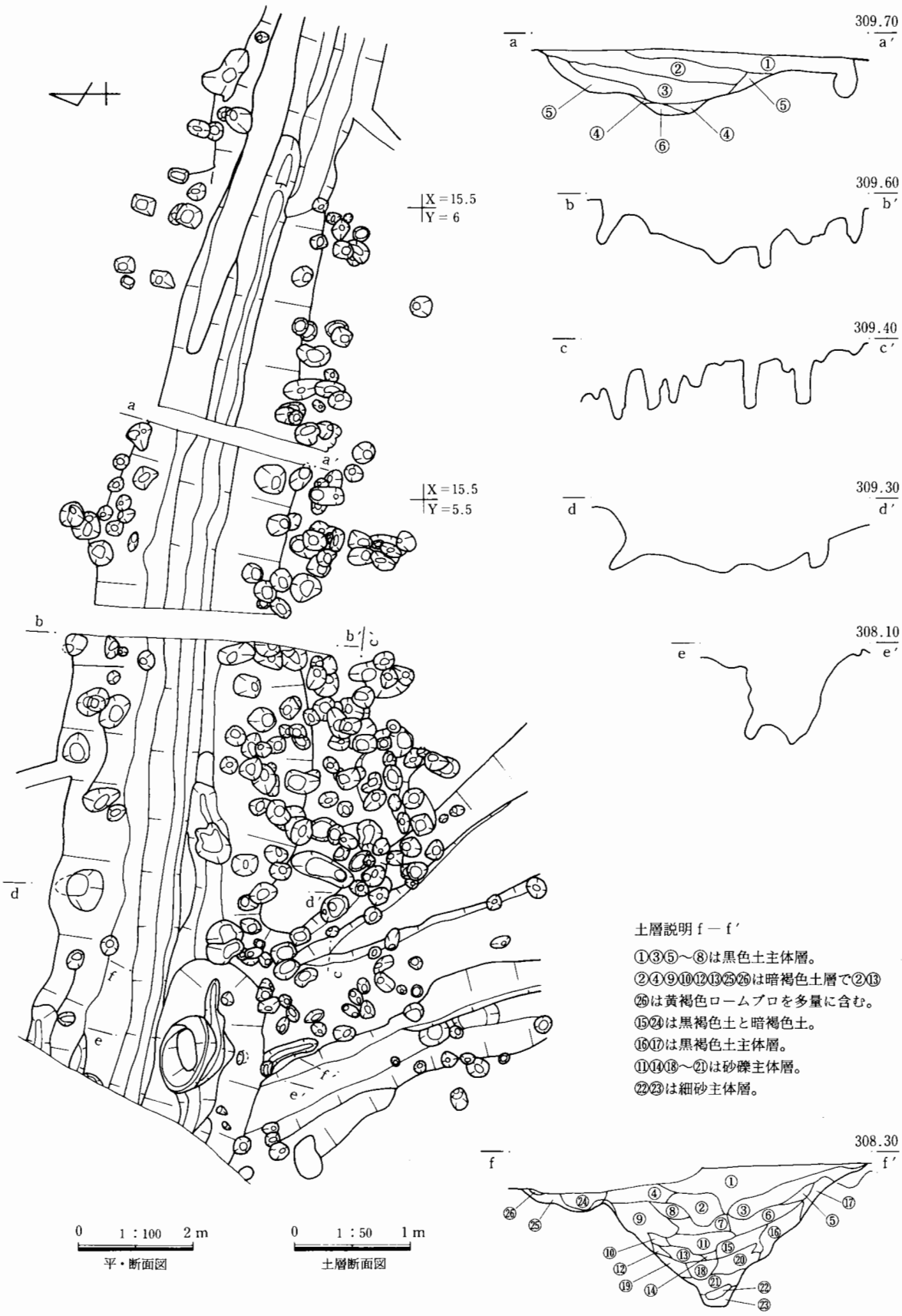
Ａ区では基本的に道路跡に沿って１面調査を行い、他の部分は２面調査だけを行っている。１面の残存状況は、耕作の影響によって必ずしも良好とは言えないものの、残存状況良好な部分と２面の間には30cm前後の差があり、浅い柱穴が削平された可能性は否定できない。確かに、１面の試掘調査の際には図上表記していない、道路跡から離れた箇所に検出された柱穴もあった。しかし、その大半は１面での検出時点から小規模であり、有為の配列や広がりを持たないことは、試掘トレンチを適宜拡幅することで確認している。



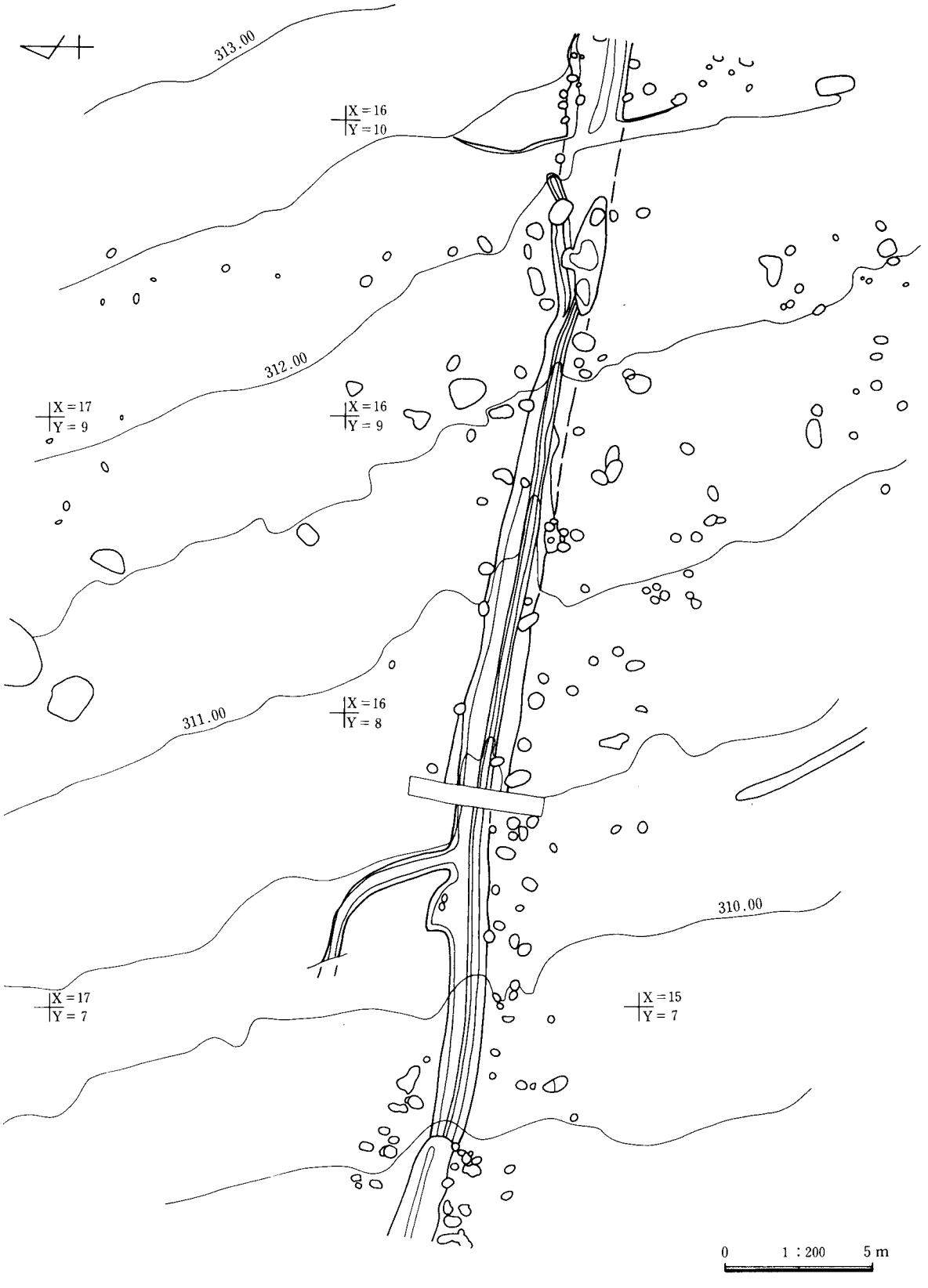
第49図　A区遺構配置図（縄文時代以外）



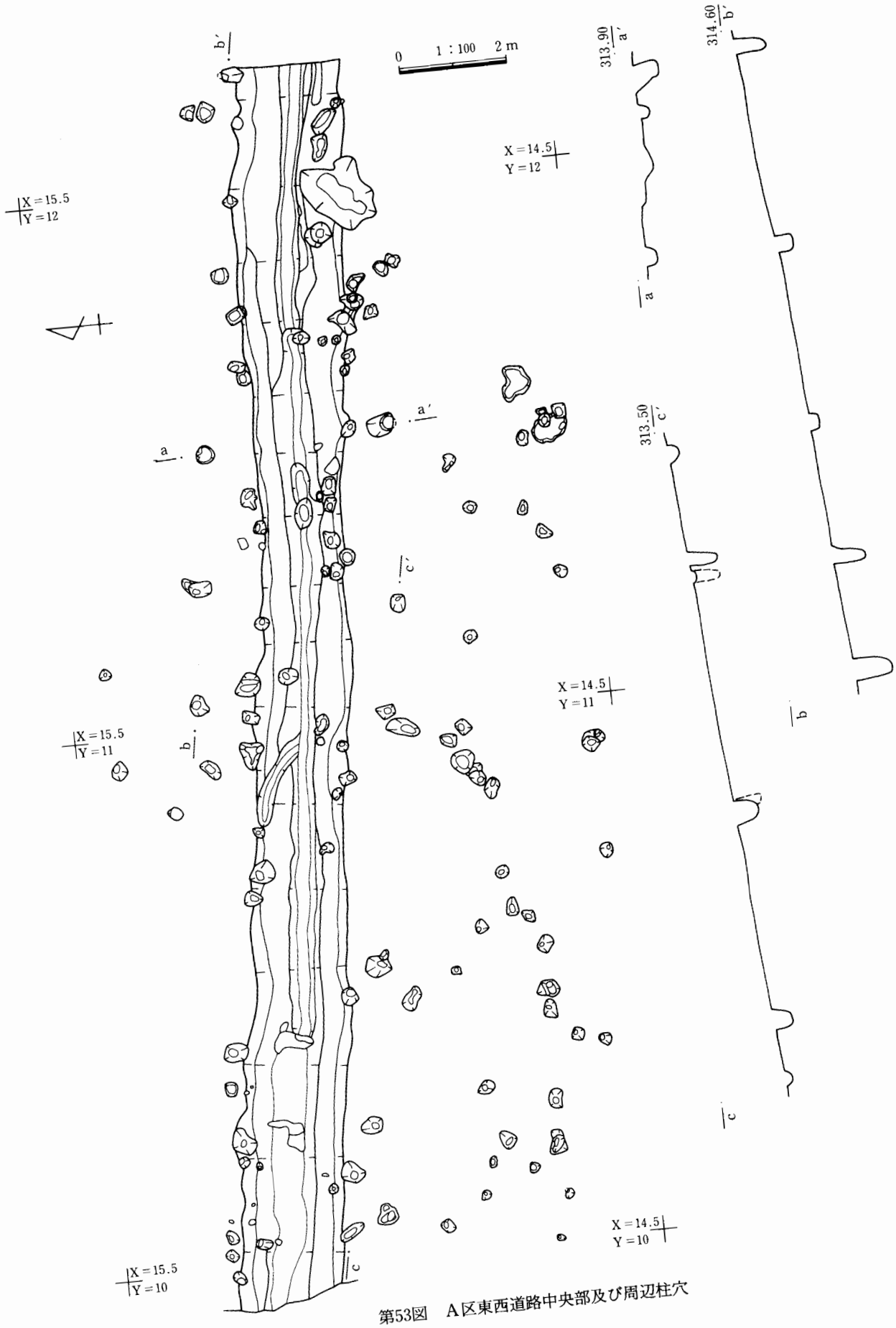
第50図　A区部分図面割付図



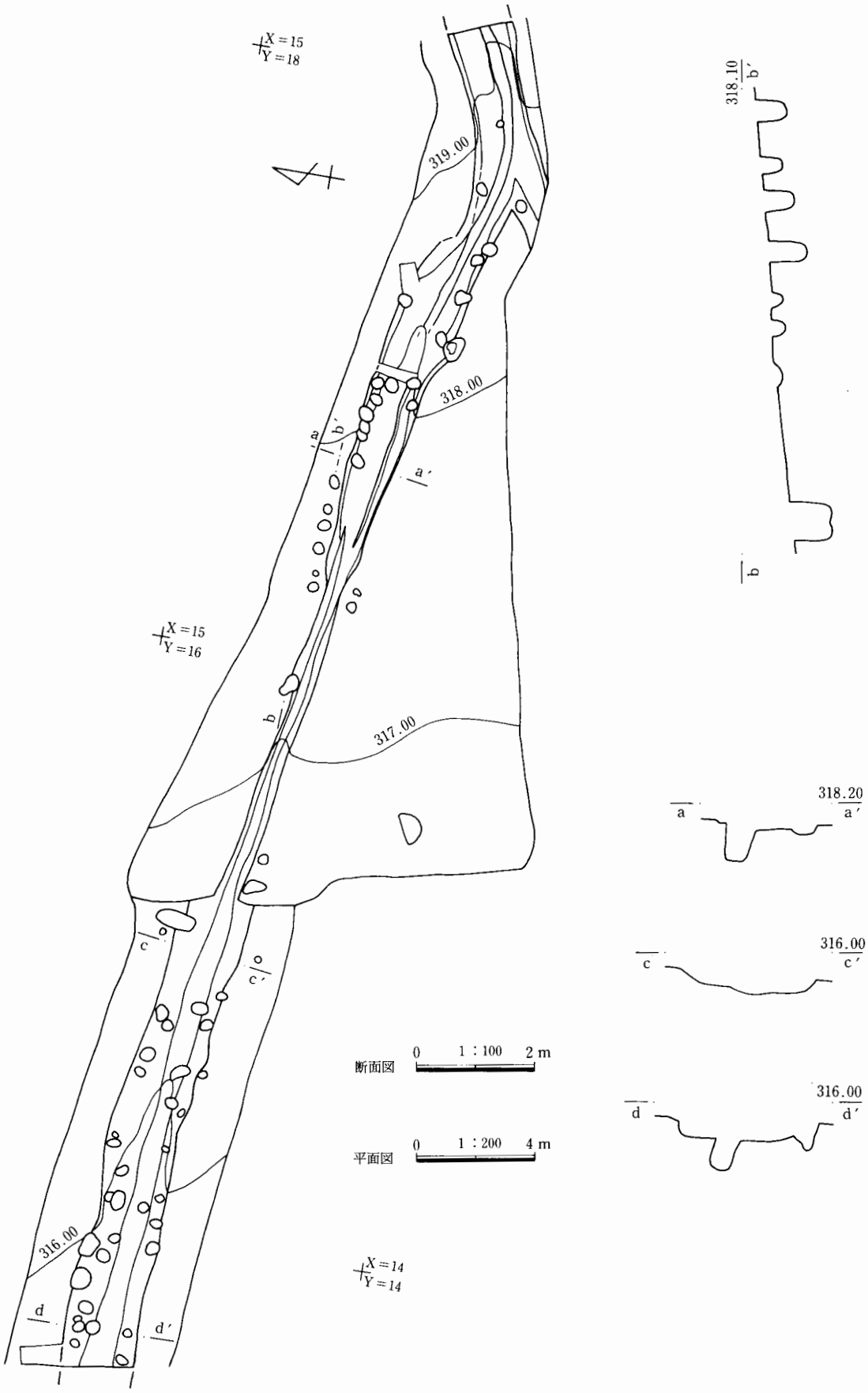
第51図　A区東西道路西端部



第52図　A区東西道路西半部及び周辺柱穴



第53図　A区東西道路中央部及び周辺柱穴



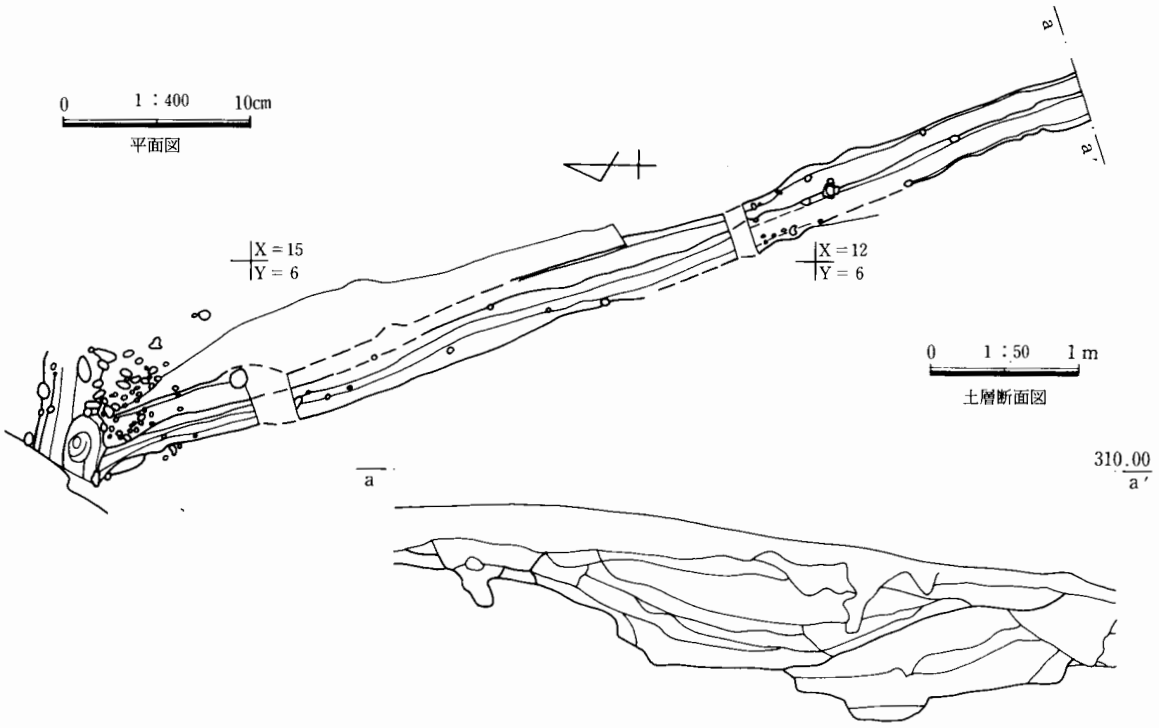
第54図　A区東西道路東端部

③ 南北道路跡（遺構第55図、ＰＬ18・19）

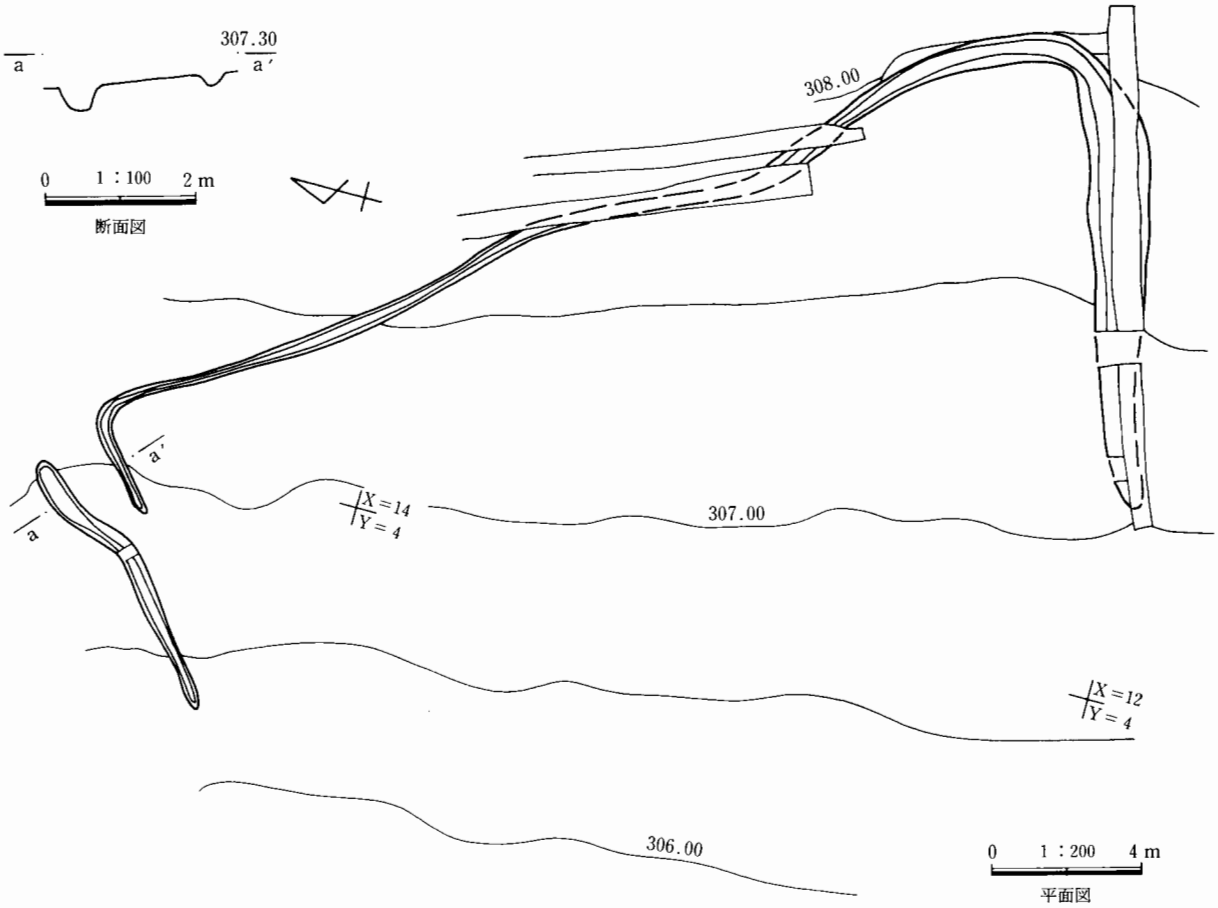
東西道路の西端部から等高線に沿って南北方向に直線的に伸びる道路跡である。現状の長さは約57ｍを測り、さらに南側の調査区域外に延びている。走向はＮ―20°―Ｗである。若干位置をずらして２時期の重複が認められており、東側が浅く新しい。東側道路底面に１号墓坑が重複するが、新旧関係は確認できていない。また東西道路跡との新旧関係も不明である。南端の断面を観察すると、古い（西側の）道路がほとんど埋まり切った段階で新しい（東側の）道路を構築しており、かなりの時間差が存在すると思われる。東側道路の掘り込みの上幅約３ｍ、路面幅約１ｍ、東壁の高さ50cm程度である。西側道路の路面幅は約1.7ｍを測るが、西側に行くに従い狭くなる。東側道路の覆土は下層は黒ボク土・淡色黒ボク土であるが、上層には多量の浅間Ｂ軽石を含む。西側道路の覆土は黒ボク土・淡色黒ボク土主体で、浅間Ｃ軽石、榛名山二ツ岳ＦＰ軽石を含む。東西道路と異なり柱穴は少量検出されただけである。

④ 区 画 溝（遺構第56図、ＰＬ19）

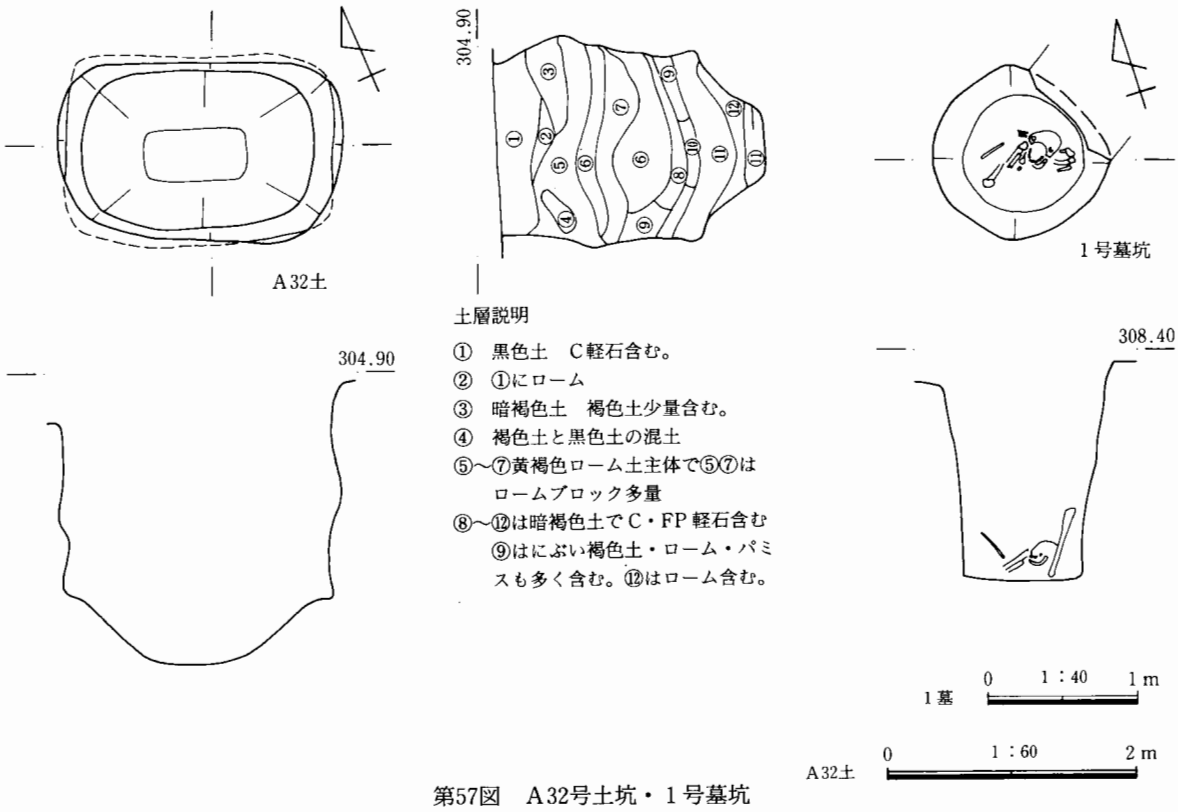
南北道路の西側に位置する。西方に向かってコの字に掘削されているが、北端は喰い違いになっており、入口と推定される。区画の範囲は北側が東西約８ｍ、南北が溝の外縁で約31ｍ、南側が東西約13ｍを測る。溝の幅は北溝から溝の南北部分で20～70cm、南側の東西部分で最大1.6ｍ、深さは20～30cmとごく小規模である。遺物は出土しておらず、時期不明である。



第55図　Ａ区南北道路



第56図　A区区画溝



第57図　A32号土坑・1号墓坑

⑤　A区32号土坑（遺構第57図、ＰＬ19）

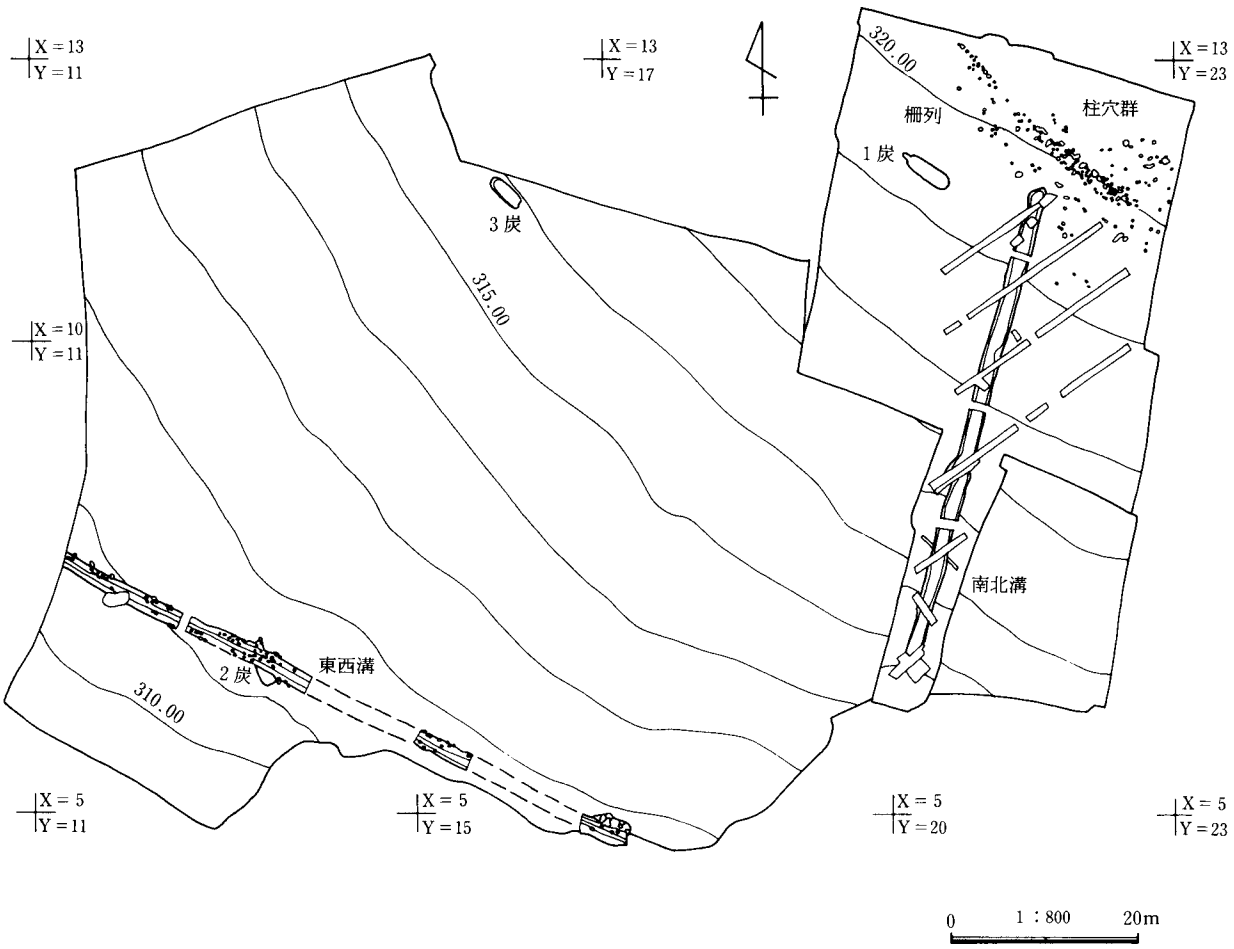
12－３グリッドに位置する。区画溝が東方約15mに近接する。検出面での形状は隅丸長方形を呈し、長軸2.3m×短軸1.45m×深さ2.3mを測る。長軸方位はN－64°－Wである。底面は長方形を呈し、長辺85cm×短辺42cmを測る。壁面はこの小さな底面から一旦斜めに60cm程立ち上り、そこから垂直或は多少オーバーハング気味に開口部に至る。壁面には主にパミス層部分に顕著な崩落が認められ、比較的長期間の使用が推測される。覆土中～上層には多量のローム土が堆積しており、埋没途中で人為的に埋められたと推測される。

遺物は出土しておらず、類例もないため、構築時期や性格は不明であるが、規模や構造からみてムロのような貯蔵の用途に用いられたと推測している。

⑥　１号墓坑（遺構第57図、ＰＬ19）

14－６グリッドに位置する。南北溝と重複するが新旧関係は判然としない。

径約0.9m、深さ約1.2mを測り、円形を呈する。いわゆる座棺で、寛永通宝が出土している（資料未掲載）。江戸時代の墓坑である。



第58図　Ｂ区遺構配置図（縄文時代以外）

(2) B区の遺構

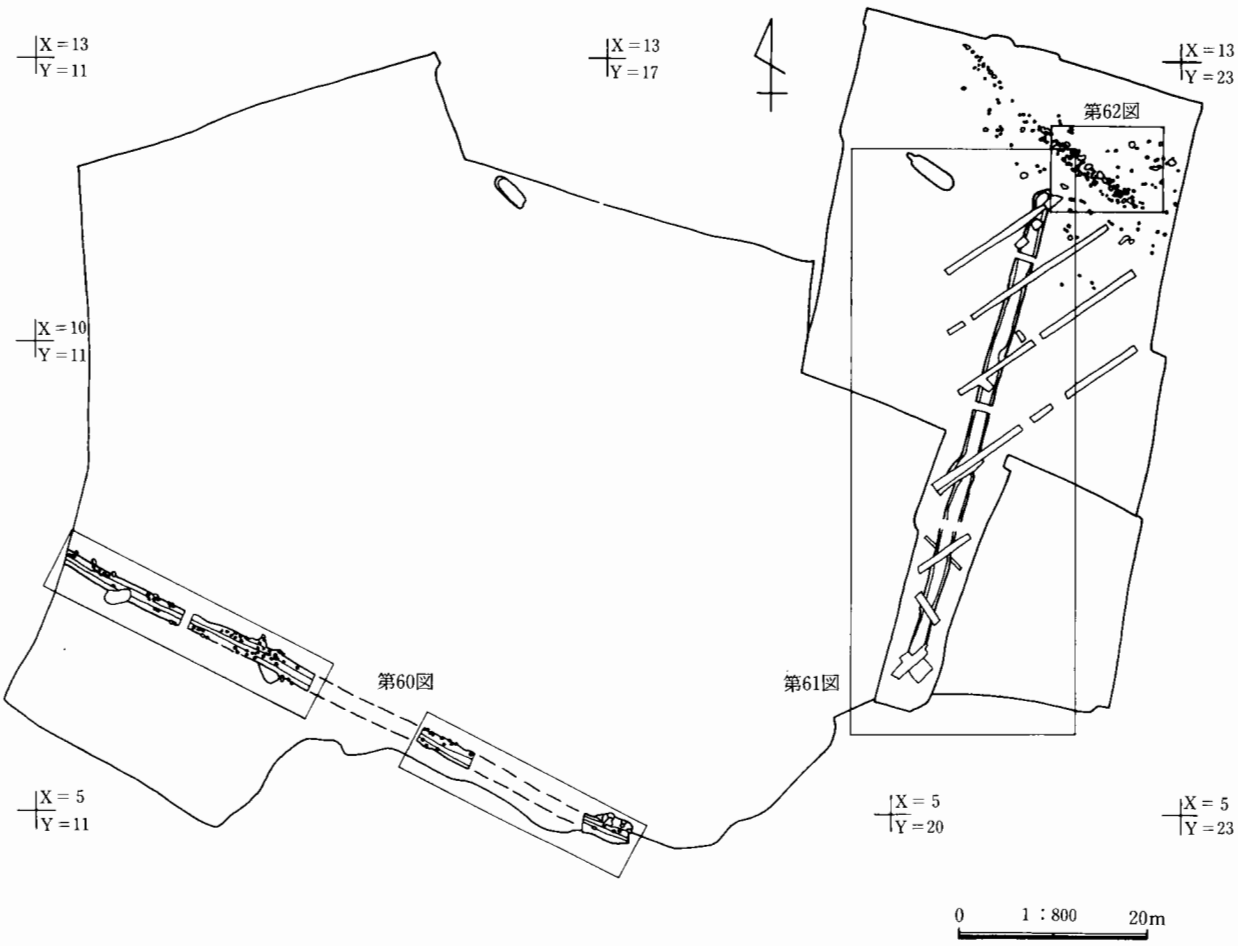
① 概　要

検出された遺構は溝跡２条と柵列・柱穴群、炭窯跡３基（別記）である。遺物は調査区北端部の遺構外から弥生時代中期と古墳時代前期の土器破片が少量出土しただけである。

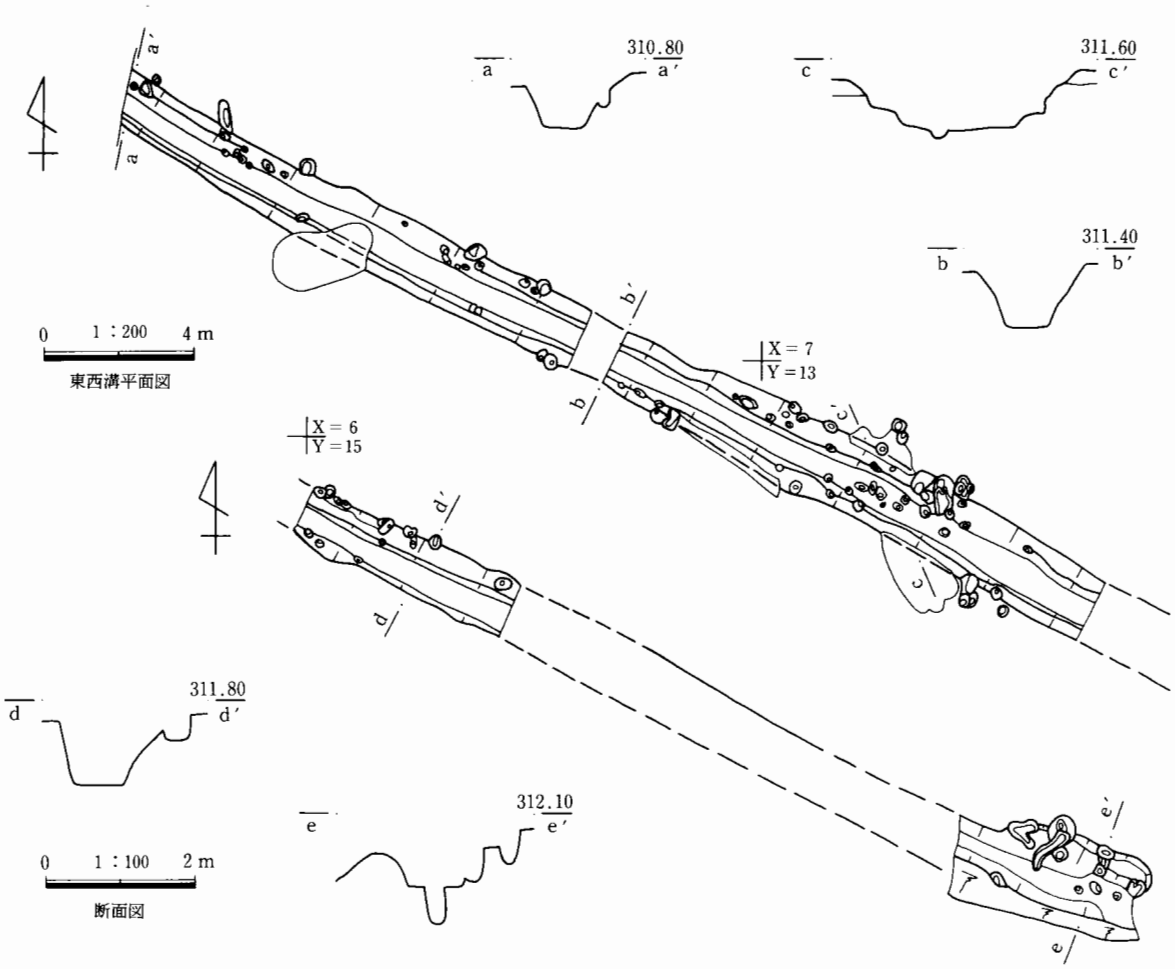
② 東西溝跡（遺構第60図、ＰＬ20・21）

Ｂ区南端、８―11グリッドから４―18グリッドにかけて東西方向に直線的に掘削されている。東西とも調査区域外に続いている。２号炭窯跡と重複し、炭窯跡が新しいことから、構築時期にある程度の時間的な隔たりが考えられが、両者とも明確な構築時期は不明である。断面形はおおまかには逆台形状を呈するが、壁面の立ち上りが中位から開き、中段の認められる部分も多い。上幅1.4～1.8m、下幅0.6m前後、深さ0.8m前後を測る。調査部分の長さは約66mを測り、走向はＮ―65°―Ｗである。

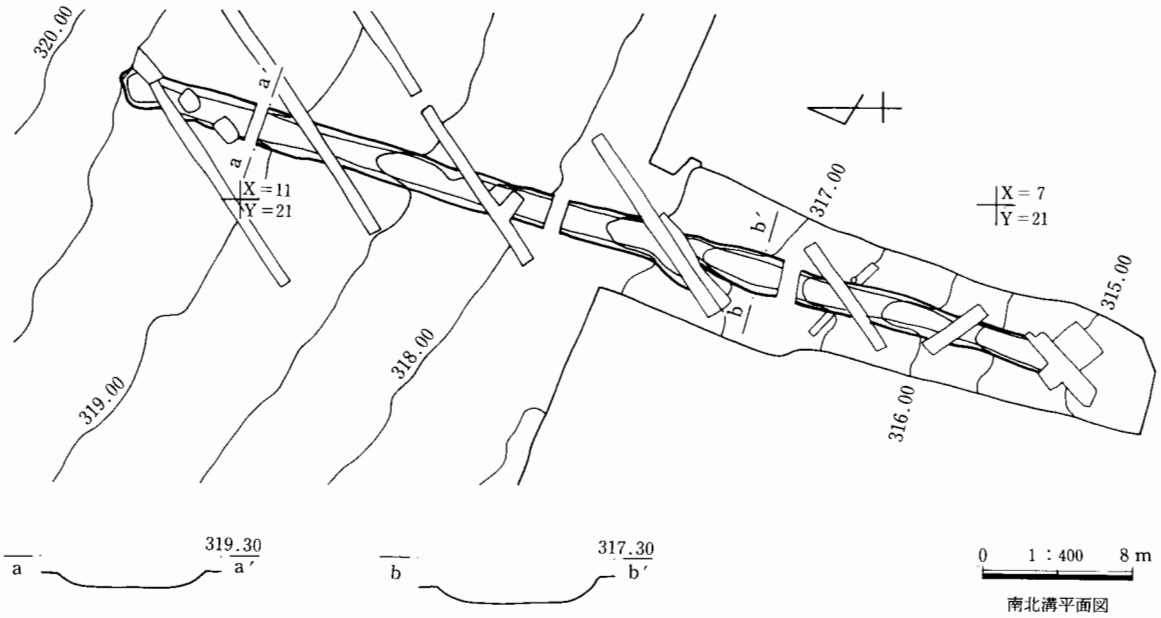
北側壁面を中心に柱穴が重複するが、明確な新旧関係は確認できていない。但し、位置関係からすれば同時か或いはごく近接した時期と思われる。



第59図　Ｂ区部分図面割付図



第60図　B区東西溝



第61図　B区南北溝

③ **南北溝跡**（遺構第61図、ＰＬ20）

Ｂ区東端、６―20グリッドから12―22グリッドに検出されている。柵列の南から等高線と直角に近い角度で、南北方向に直線的に掘削されている。南端は耕作溝部分で途切れるが、掘り込みが浅いため、ここで収束するかさらに続くかは不明である。現状での長さ55m、走向はＮ―15°―Ｅを測る。底面は中央部がわずかに凹むがほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。上幅約２ｍ、下幅約1.4m、深さ10cm前後を測る。覆土はＣ軽石・ＦＰ軽石を混入する暗褐色土である。

④ **柵列・柱穴群**（遺構第62図、ＰＬ21）

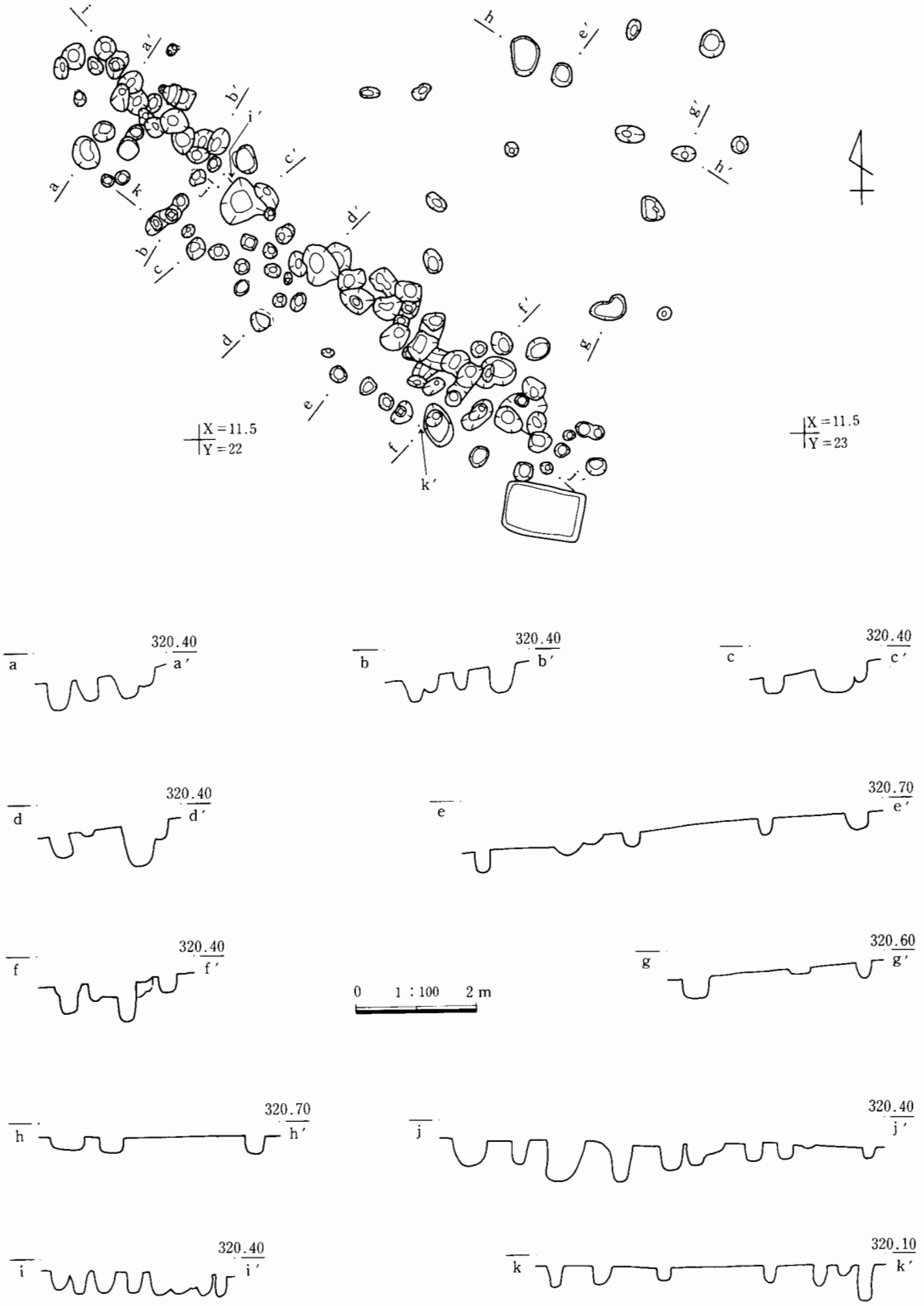
Ｂ区北東隅、12―22～11―23グリッド付近を中心に位置する。東西方向に列状に密集する柱穴群（以下柵列と称する）と、この柵列に平行して約２ｍ南側に位置する１～２列の柱穴列、柵列の東半部の北側に散在して検出された柱穴群がある。

柵列の柱穴の密集度も一様ではなく、新旧関係や構築の単位は明瞭には確認できていないが、平面的に全体の配列を見たとき多少の規則性を看取することができる。まず、西半部は比較的疎らで、東半部が密となり、東端でまた疎らになる。さらに、密集する柱穴の中でもほとんど間断なく密接・重複する部分と、その南側に１ｍ前後の空白域を挟み配列された比較的疎らな柱穴列がある。密集する柱穴の中央部には他の柱穴よりも大きな掘り形を持つ２基の柱穴が東西に並び、規模は他の柱穴と同様であるが、疎らな柱穴列にもこれと対応する位置に柱穴が認められる（断面ｃ・ｄの柱穴）。この４基に挟まれた部分にも柱穴が検出されているがすべて浅く、他の柱穴とは性格が異なると考えられることから、断面ｃ・ｄの柱穴は入口施設＝門柱と推定できる。また、柵列の方向に対してほぼ垂直方向に密に並ぶ柱穴の配列が1.5m前後の間隔で認められており（断面ａ、ｂ、ｆなどの配列）、これが柵列の柱間の単位の可能性もある。柵列西半の疎らな部分では概ね２列の柱穴列がＮ―45°―Ｗ前後の角度で配されており、それぞれが密集する部分の密接・重複する柵列と南側の疎らな柵列に接続する。さらに、入口より東側の柵列の方位はＮ―57°―Ｗ前後を指向することから、入口部分で柵列の方向を違えていることが判る。これらの柵列・柱穴列は先述したように新旧関係等が確認できていないが、入口の門柱には少なくとも１回の重複が認められており、一時期一列で構成していたかどうかは別として、複数時期・複数回数の改築・修復の結果柱穴が密集したものと考えられる。

柵列の東半部の北側に散在する柱穴群の柱穴の規模は柱穴列に比して小規模で一定していないが、方形に並ぶものもあり、入口施設に伴う建物があった可能性もある。断面ｈの柱穴列を北辺、断面ｇを東辺とする建物の復元が可能ならば、１間×１間で一辺約３ｍの華奢な建物が想定できる。

柵列・柱穴群の覆土は黒ボク土・淡色黒ボク土を主体としており、浅間Ｃ軽石を含むものも多いが、ＦＰ軽石はほとんど認められない。

柵列・柱穴群からは遺物が出土していないが、試掘調査・遺構検出作業の段階で古墳時代前期の土器破片が柱穴群周辺から出土しており、建物跡に伴う可能性もある。



第62図　B区柵列・柱穴群

(3) C・D・E・F区の遺構

① 概　要

検出された遺構はC・D・E・F各区に跨って検出された方形に囲う溝と柵列・柱穴、及びD・E・F区に検出された土坑（群）、C・E区に検出された炭窯跡である。遺物はE区遺構外から古式土師器？が1点出土しただけである。

② 方形区画遺構

方形区画遺構は南北方向に長方形に区画する溝跡と東溝の南端から南東方向に伸びる溝、及び、この溝跡に重複・近接する柵列、さらに、この区画溝の南西に検出された柵列を主体とする遺構も含めて総称したものである。

遺構の方向説明については基本的に北からの偏角45°未満を南北、46°～90°を東西とするが、45°前後の場合は南東・北西なども使用する。C区柵列については方形区画遺構溝跡との対応関係を重視して、枢要部の部位名称を南辺として説明したい。

柱穴の大半は複列の列状に検出されているが、明確な構築の単位は不明である。いずれにしても、単列・帯状を問わず列状（直線的とは限らない）に柱穴が並ぶものは基本的に柵列とする。但し、複列の場合にはは柱穴帯と表現することもあるが、厳密に定義して使い分けている訳ではない。また、列状に並ばない、或いは規則性を看取できない群在する柱穴を柱穴群とする。

東溝及び東西柵列（遺構第64～69図、ＰＬ22～24・27）

東溝はF区中央部を北から南へと直線的に下る溝で、E北区へ至り南端で南東溝へと接続する。北半部に掘り残しがあり、北溝の東まで喰違い構造になっている。全体で東溝であるが、説明の都合上、掘り残しの北側を北東溝、南側を東溝、喰違いは喰違い部分として説明したい。

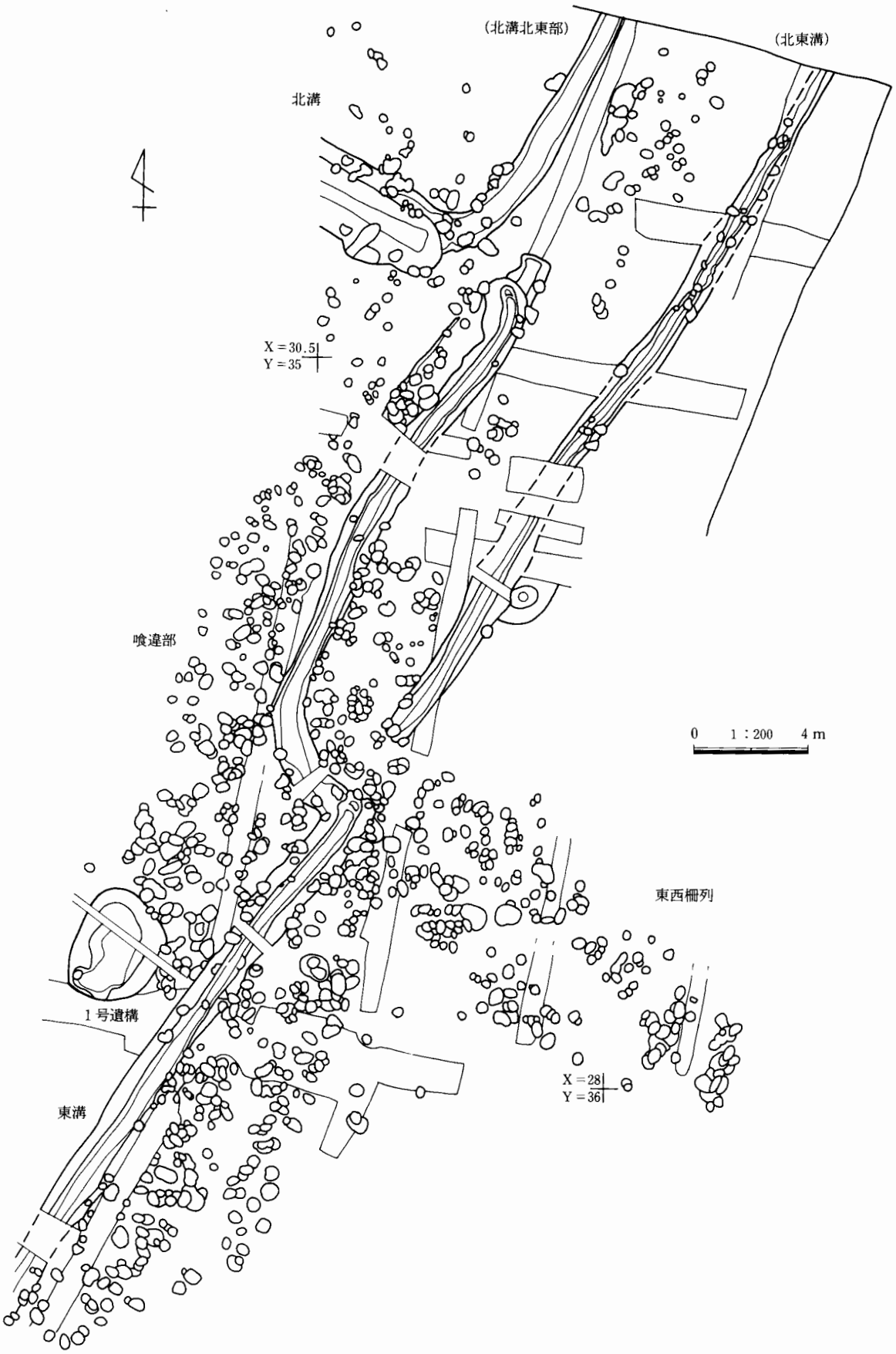
北東溝は31―37グリッドから29―36グリッドに位置し、北側の調査区域外に延びている。現状の長さは約27.2m、上幅は0.6～１m、深さは50～70cmを測る。

喰違い部分の先端は北溝の約２m東に位置しており、端部には掘り変えが認められる。新溝は北溝の延長上から弧を描いて始まり、多少湾曲するが北東溝とほぼ平行に南下する。北東溝南端部の西側で屈曲し、掘り残しの南で東溝に接続するが、東溝よりも浅いため段を生じている。旧溝は新溝の北側約1.2mの位置から直線的に始まり、新溝の西側を南下するが、検出面から浅いために途中で掘り込みが消滅している。浅く多少幅広い旧溝を幅狭く、深く掘り変え、その際に端部の形状を変更したものと思われる。喰違い部分の長さは新溝で約20m、深さは新溝の北端部で60cm、旧溝で20cmを測る。北東溝との間隔は3.5m前後である。

掘り残し部分の長さは約2.2mを測り、この南側の東溝北端にも段差が認められることから、掘り変えが行われたものと思われる。新旧の底面レベルで約30cmの差がある。

東溝もわずかに湾曲するがほぼ直線的に掘削されている。耕作による削平や表土剝ぎの関係で南になるほど規模を減じている。東溝の規模は上幅1.6～0.8m、下幅50～30cm、深さは北端で60cmを測る。断面形は幅の狭い底面から急角度で立ち上り、中段から大きく開く形状である。喰違い部分を除いた長さ約110m、北東溝を含めた長さ約139mを測る。東溝の走向は概ねN―35°―Eである。

柱穴は喰違い部分の周辺から東西柵列と呼称した部分、さらに東溝の北半部の東側に多量に検出されてい



第65図　方形区画遺構北東部

るが、南に下るに従い漸減し、南半部にはまったく検出されていない。また北東溝部分でも溝内に断続的に少数が検出されているだけである。

柱穴と溝の新旧関係を確認できた柱穴は少ないが、溝よりも古い柱穴、ほぼ同時と思われる柱穴、溝よりも新しい柱穴のいずれもが存在する。

柱穴個々の関係も個別に確認できていないが、柱穴の検出状況を平面的にみると、東西柵列と東溝の東側の柱穴群には概ね２列の柱穴帯的な分布状況を看取できる。柱穴帯を構成する柱穴には新旧関係を確認できたものもあるが、大半は断面観察ができなかったため、それぞれが柵列の作り替えの累積によるものか、或いは、単一時期の柱穴帯（同時期複数の柱穴列・柵列）として機能したものかの判断は付いていない。しかし、明瞭な柵列の単位を検出できないことからすれば、少なくとも１列の柵列が重畳した結果とは言えず、一時期一列であるかはどうかは別にして、長期にわたる修復の結果として柱穴帯が形成されたものと考える。また、ある程度の規模の構造改変を行った結果として、空白部を挟み２列（大きく２時期）の柱穴帯が顕現したものと思われる。

東溝の覆土は黒ボク土(暗褐色土)を主体に、淡色黒ボク土(褐色土～にぶい黄褐色)、黒色土、黄褐色ロームなどが堆積する。軽石は浅間Ｃ軽石、ＦＰ軽石ともに含むが、特に上層にはＦＰ軽石が目立つ。喰違い部分の上層には砂層も形成されている。

柱穴の形状はほとんど円形で、規模は様々である。径30～40cm、深さ40～50cmのものが多いが、径60cm前後、深さ80cm以上のものも多数認められる。柱穴の覆土も暗褐色土主体の物が多く、淡色黒ボク土を検出面とした部分では比較的検出しやすかったが、確認面が黒ボク土中の場合には検出するのが非常に困難であった。逆に、覆土が淡色黒ボク土やローム・ＦＡ層を含む場合は比較的判別しやすかった。東溝喰違い部周辺の柱穴には特に規模の大きなものが多く、浅間Ｃ軽石主体に堆積する柱穴も多数検出されている。全体的に見ればＦＰ軽石を含む柱穴は少なく、東西柵列を含めた柱穴群の主要部は浅間Ｃ軽石降下前後以降に構築され、ＦＡ火山灰降下以前の早い段階で廃絶したものと思われる。

北東溝と北溝北東部の間に検出された柱穴群は、喰違い部分周辺の柱穴群、或いは北溝部分の柱穴群の延長とも考えられるが、柱穴の規模が小さく、空白地帯を挟むことから別施設の可能性が高い。

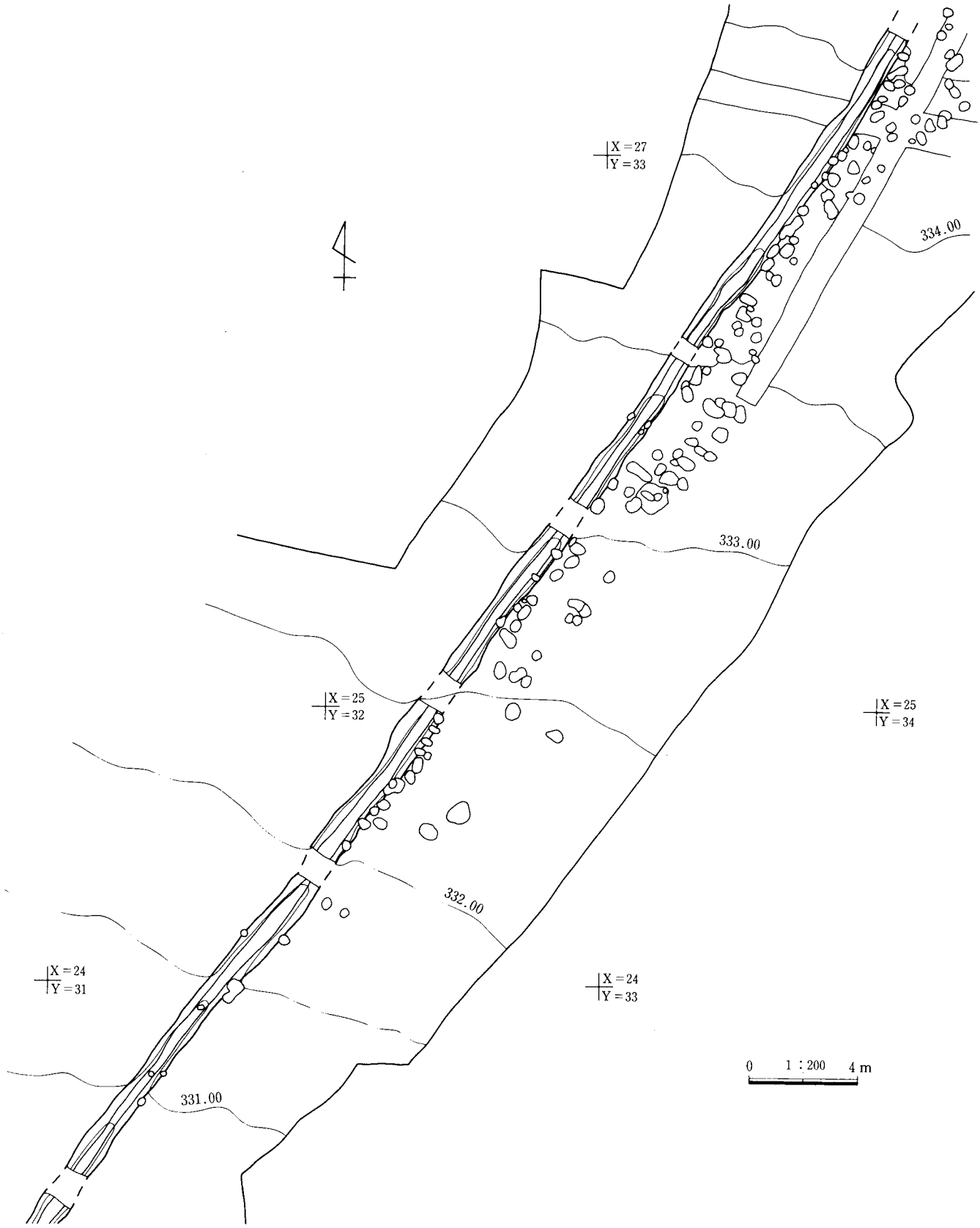
28―35グリッドに東溝に近接して検出された１号遺構は、土層の堆積状況から倒木痕と判断したが、下位にＦＡ火山灰層が純層堆積しており、方形区画遺構の機能した時期に立木が存在した可能性を示唆する。

南東溝（遺構第69～71図、ＰＬ25）

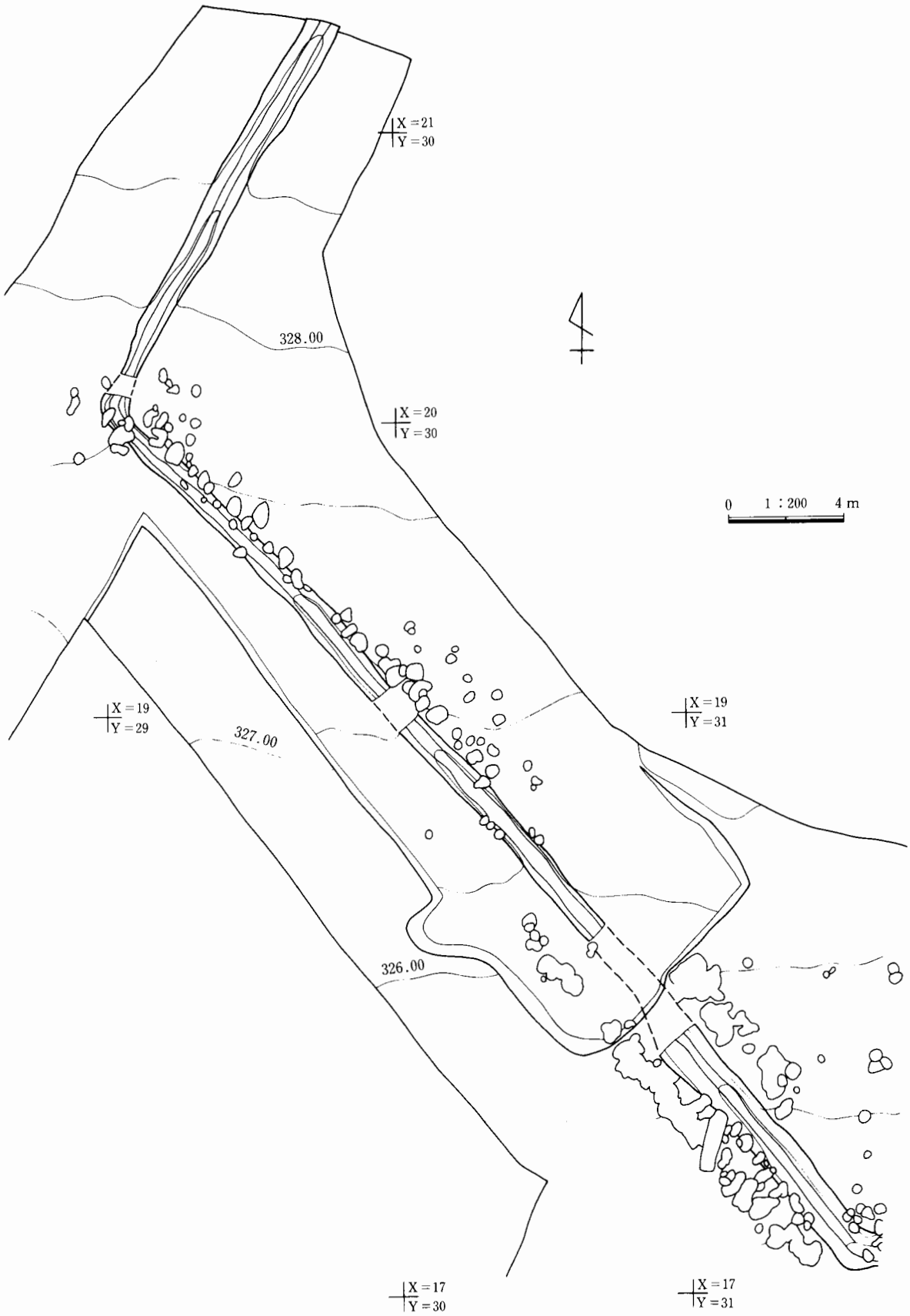
南東溝は19―30グリッドから14―35グリッドに位置する。東溝から約100°の角度で折れ、北西半部は17―32グリッドの土橋部分までほぼＮ―41°―Ｗの走向で、約40ｍ掘削されている。土橋部の幅は約1.6ｍを測り、土橋南東端から北東方向に約5.4ｍ掘削され、直角に折れてＮ―37°―Ｗの方向で掘削されて調査区域外にまで延びている。南東半部の長さは現況で38ｍを測る。上幅は1.2ｍ前後、深さ50cm前後である。

南東溝北西半部には土橋部の直前の東壁にテラス状の段が認められる。また端部東側には半円形の浅い掘り込みが認められており、浅く端部が屈曲する旧溝を深く直線的に掘り変えたと考えられる。さらに、南東半部は現況では北西端部から南西に直角に折れ曲がるが、端部から斜めに西方に向かう、柱穴とは異なる浅い掘り込みが認められ、やはり掘り変えが行われたと考えられることから、掘り変え前には溝の両端がほぼ東西から土橋部を挟み込む（溝に対して斜めに土橋部を設ける）ような位置関係にあったと考えられる。

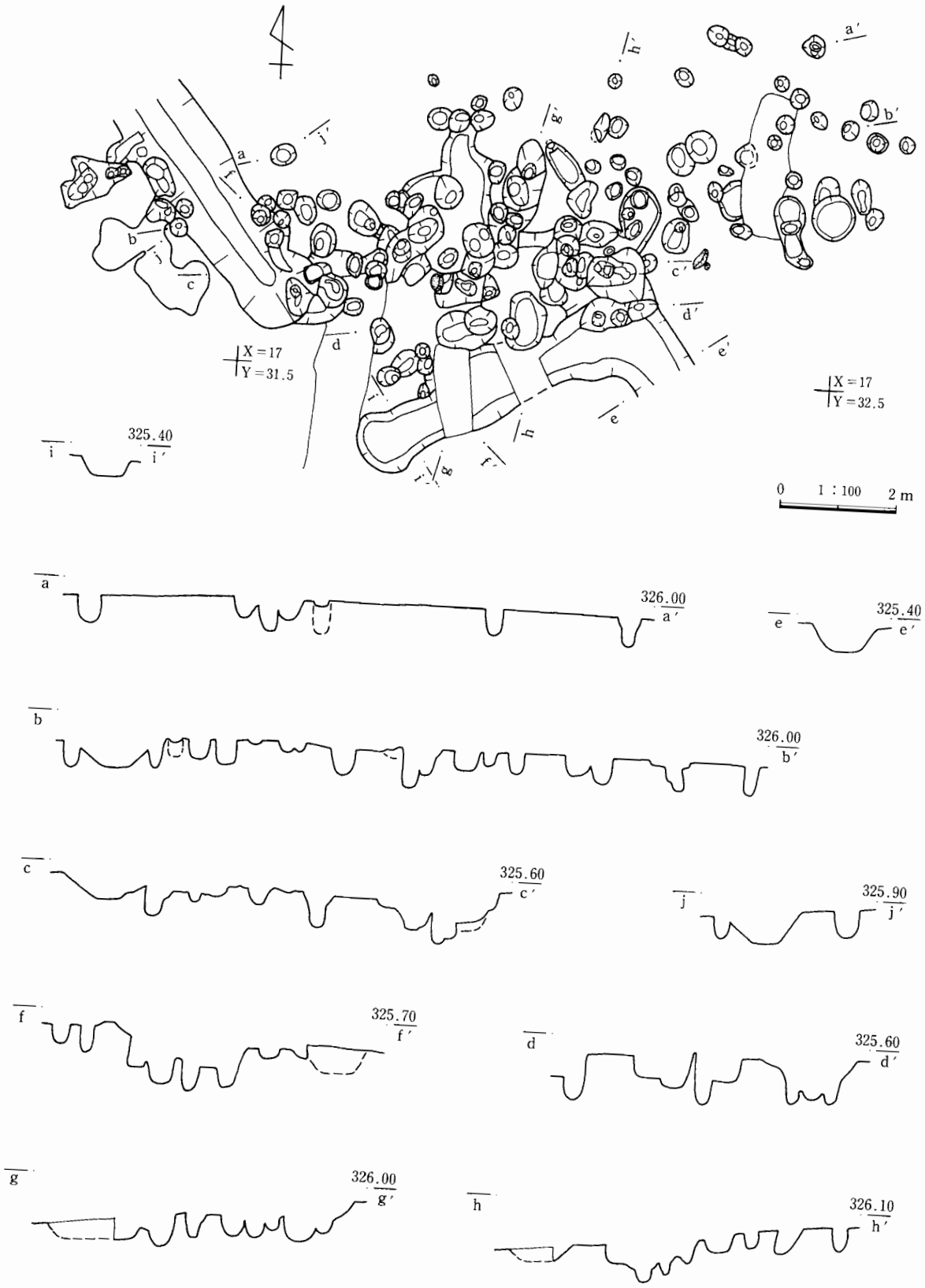
柱穴は東溝からの屈折部ではほぼ溝に重複するが、18―31グリッドにかけては東壁の縁辺に位置する。18



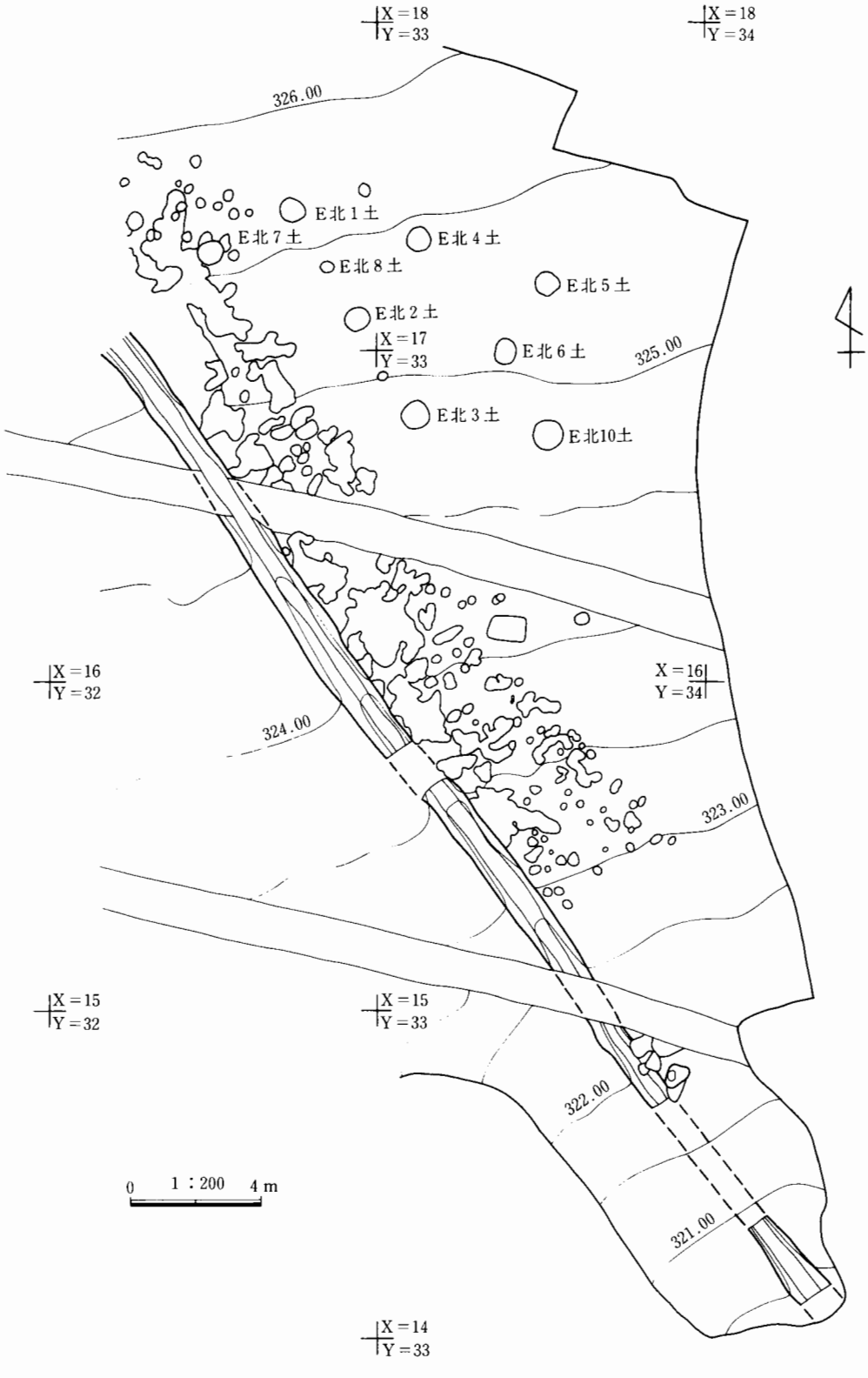
第68図　方形区画遺構東溝中央部



第69図　方形区画遺構東溝南端～南東溝北西半部



第70図　方形区画遺構南東溝屈折部



第71図　方形区画遺構南東溝南東半部及びＥ北区土坑位置図

—31グリッドから17—32グリッドでは溝の西側にほぼ平行して溝端まで沿い、部分的には東側にも認められる。但し、Y＝31ラインよりも西側はローム層上面が検出面となっており、西側にも浅い柱穴が存在した可能性は否定できない。土橋から屈折部分では土橋部も含めて東側に幅広く検出されているものの規則性は看取できない。南東溝南半部では溝に沿って東側に、概ね２列の柱穴帯状に検出されているが、両者とも15—34グリッドで終息する。尚、この部分はプラン確認を行っただけで精査はしていない。

北　溝（遺構第72図、ＰＬ26・27）

31—36グリッドから32—31グリッドに主体が位置する。西端は調査区域外であり、西溝との接続関係は不明である。東溝（北東溝）に平行する小溝（説明上北溝北東部と呼称する）が東端に接続する。北溝東端部の北壁と東壁の立ち上がりにはテラス状の段があり、プラン的にもズレが認められることから、幅広く・深く掘り変えを行ったものと思われる。北溝北東部の底面は北溝の旧溝部分に漸移的に接続することから、北溝北東部は旧溝部分に伴うもので、掘り変えは行われていないと考えられる。北溝の規模は上幅３ｍ前後、深さ80cm前後で、現況の長さは約57ｍを測る。断面形は他の溝と比較すると角度をもって立ち上がり、中段からさらに大きく開く形状である。走向は全体的に北側に膨らみをもつが、概ねＮ—72°—Ｗである。北溝北東部は上幅１ｍ前後、深さ20～30cmで、現況の長さ9.5ｍを測る。走向はＮ—35°—Ｅである。

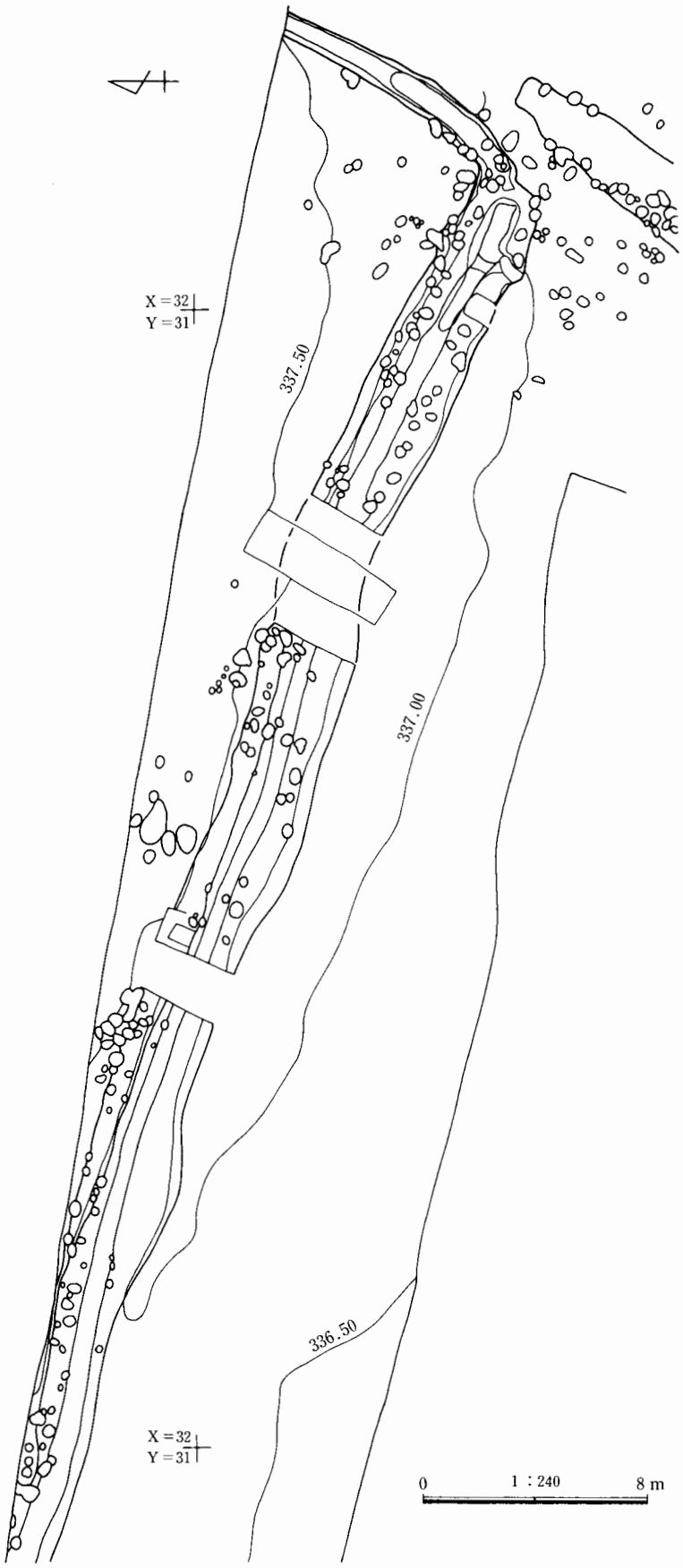
柱穴は溝内に多数検出されている。東半部では間断はあるものの北壁・南壁ともに認められるが、西半部では溝の底面から北壁面にかけた範囲に位置しており、溝と柱穴の位置関係に規則性は伺えない。溝外では北側に少数認められるが、南側にはほとんど認められない。溝のほぼ中央部の北縁辺には規模の大きな柱穴を中心にして、円形に柱穴が取り巻いたような状態で柱穴群が検出されている。柵列はこの部分を避けるように南方に孤状に迂回し、柱穴群との間に空白地帯ができている。また、この弧状の柵列部分のほぼ中央では柵列が途切れることから、入口施設の可能性も考えられる。

西　溝（遺構第73～75図、ＰＬ26・27）

32—30グリッドから19—21グリッド、Ｆ区・Ｄ区・Ｃ区に跨って位置する。多少の湾曲はあるがほぼ直線的に掘削されており、南端で南溝に接続する。Ｆ区部分が最も残りが良く上幅2.5ｍ前後、下幅0.6ｍ前後、深さ約1.6ｍを測る。断面形は狭い底面から一旦直に立ち上り、中段から大きく開く形状である。Ｄ区北半部やＣ区では規模を減ずるが、耕作等の影響と考えられ、元々は西溝全体が同規模・同形状で掘削されていたものと思われる。西溝全体の長さは現状で約162ｍを測り、走向は概ねＮ—33°—Ｅである。

柱穴はＦ区では疎密はあるが東西両壁面にかなり規模の大きな柱穴を穿っており、壁面に対して斜めに掘り込むものなどは溝に伴う可能性もある。溝の外部には西側に散在して検出されているが、東側にはほとんど検出されない。但し、北端から11ｍの地点に比較的規模の大きな５基の柱穴が集中して穿たれており、東溝の喰違いの基点（東溝北端）、或いは東西柵列にほぼ対応した位置にあるとも考えられることから、例えば標識柱的な機能を果たしていたとも推測される。Ｆ区南端からＤ区中頃までは溝の内外ともに柱穴が検出されていない。Ｄ区中頃では東壁にまばらに、南端では両壁に柵列が認められる。また、東側の溝外に土坑群と柱穴群が検出されたが、この柱穴群には建物跡や柵列などの規則性は認められない。Ｃ区では北半部は溝内を中心に、南半部では溝外の東側を中心にＣ区柵列から伸びる形で柵列が検出されている。

西溝は覆土の自然科学分析を行っている。詳細は後章に譲るが、下層から浅間Ｃ軽石・ＦＡ火山灰を含む層、間層を挟みＦＰ軽石を含む層、さらには粕川テフラが中位に堆積している。ＦＡ火山灰は純層堆積では



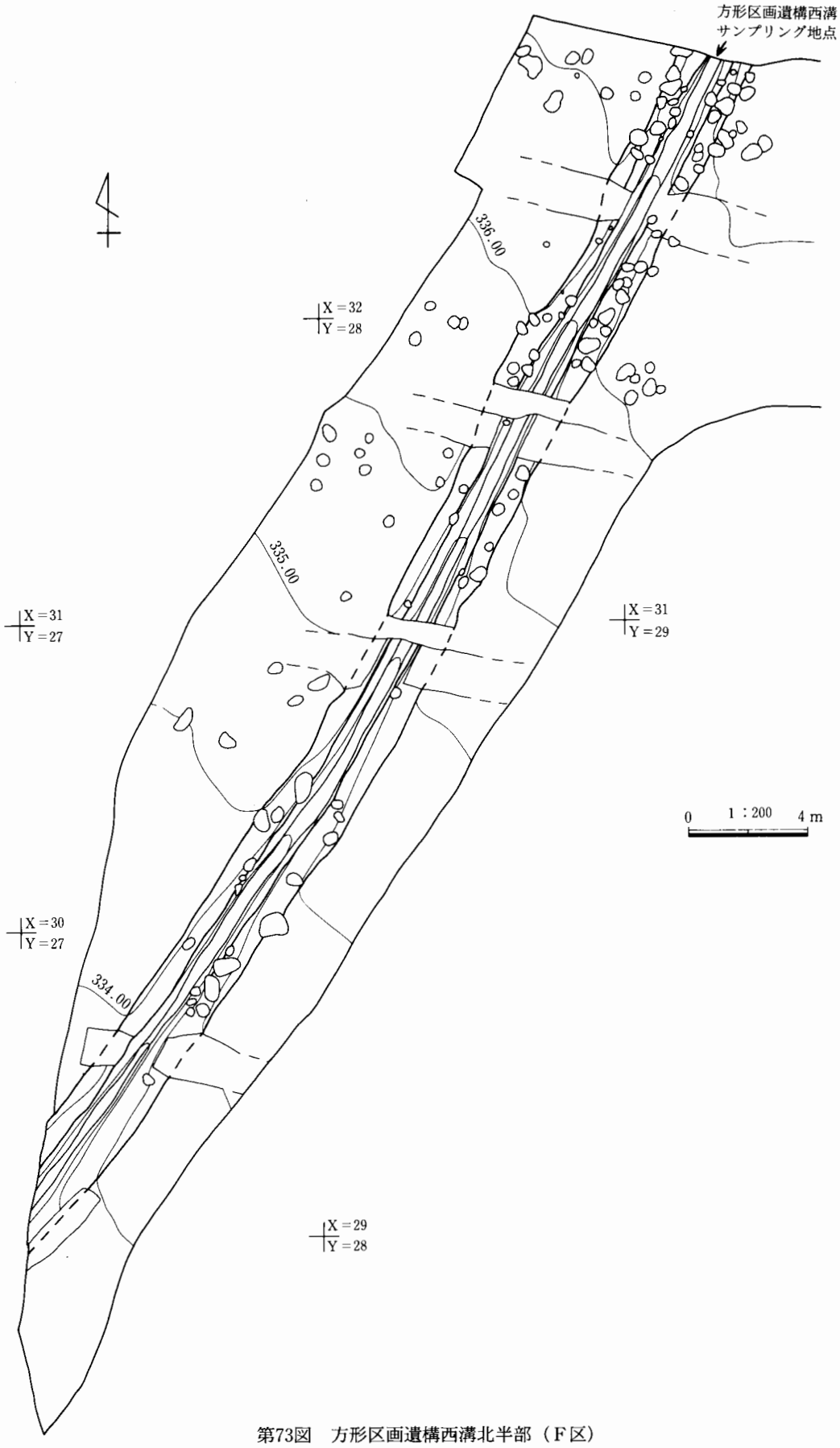
第72図　方形区画遺構北溝

ないが、これらのテフラの堆積状態から判断すれば、少なくとも西溝の北端ではＦＡ火山灰降下前後から埋没が開始されたと思われる。

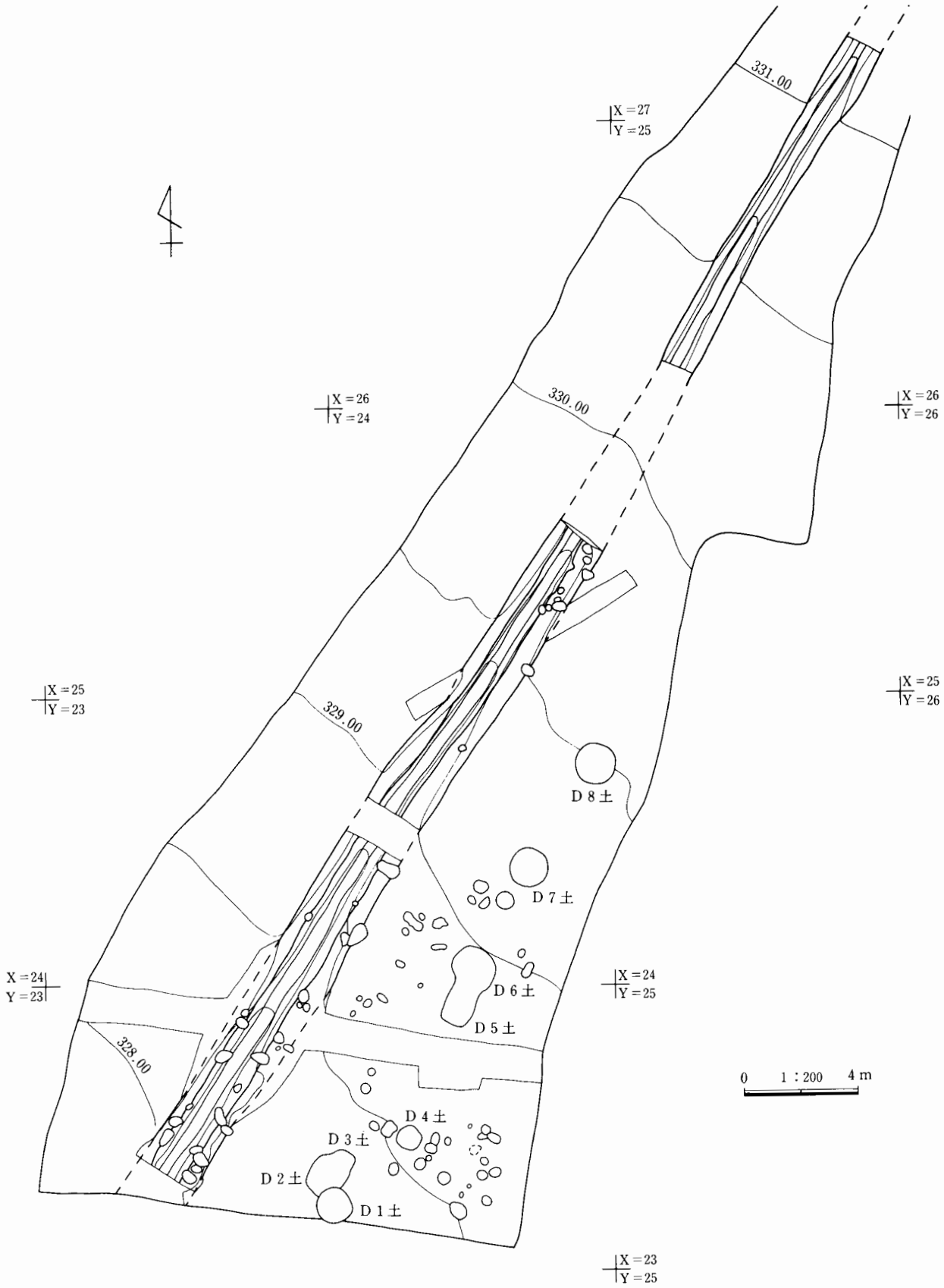
Ｄ区調査区外の30—25グリッド付近には径６ｍ前後の巨大な倒木痕が検出された。その覆土中には浅間Ｃ軽石が多量に堆積しており、１号遺構と同様に方形区画遺構の時期に立木が存在した可能性を示唆する。(プラン確認を行っただけで、精査は行っていない。)

南　溝（第76・77・82図、ＰＬ28・29・32）

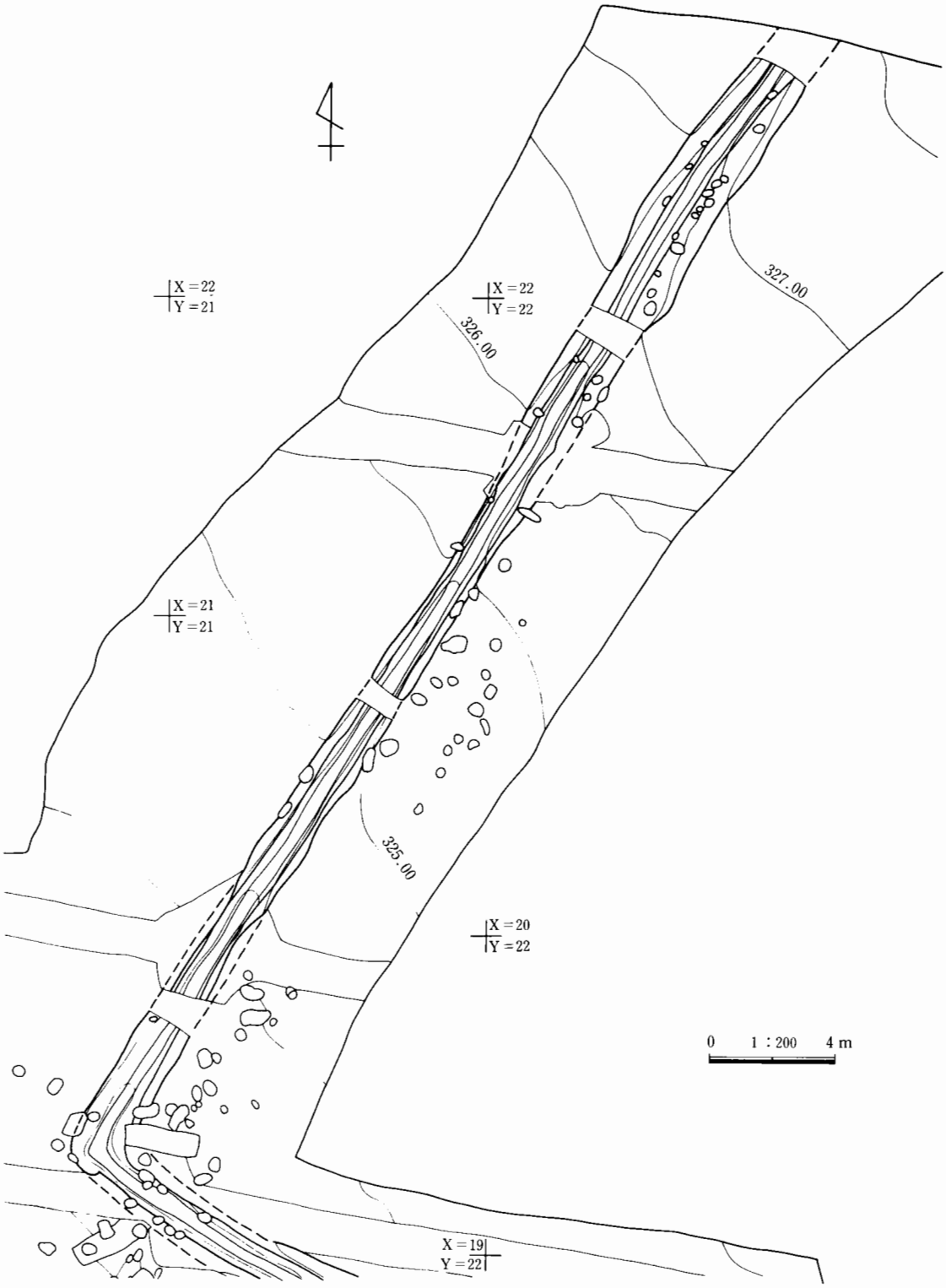
Ｃ区からＥ南区の北西にかけて位置する。中央部西寄りに土橋部の掘り残しがある。西溝南端から土橋部までは直線的であるが、土橋部から東方はわずかに屈曲する。走向は概ねＮ—58°—Ｗである。上幅は1.5～２ｍ、下幅は0.3ｍ前後、深さは約１ｍを測る。断面形は他の溝と同様に狭い底部から直に立ち上り、中段から大きく開く形状である。溝の長さは西端から土橋部までが25.2m、土橋部から東側で35.2mを測る。柱穴はＣ区柵列に関連すると思われるもの以外では溝延長上の西側壁外に数基、土橋部の周辺の溝内外に少数が検出されている。土橋部をはさむ形で溝外の南側にも検出されているが、ごく小規模であり、明瞭に入口施設を構成すると思われるものはなかった。



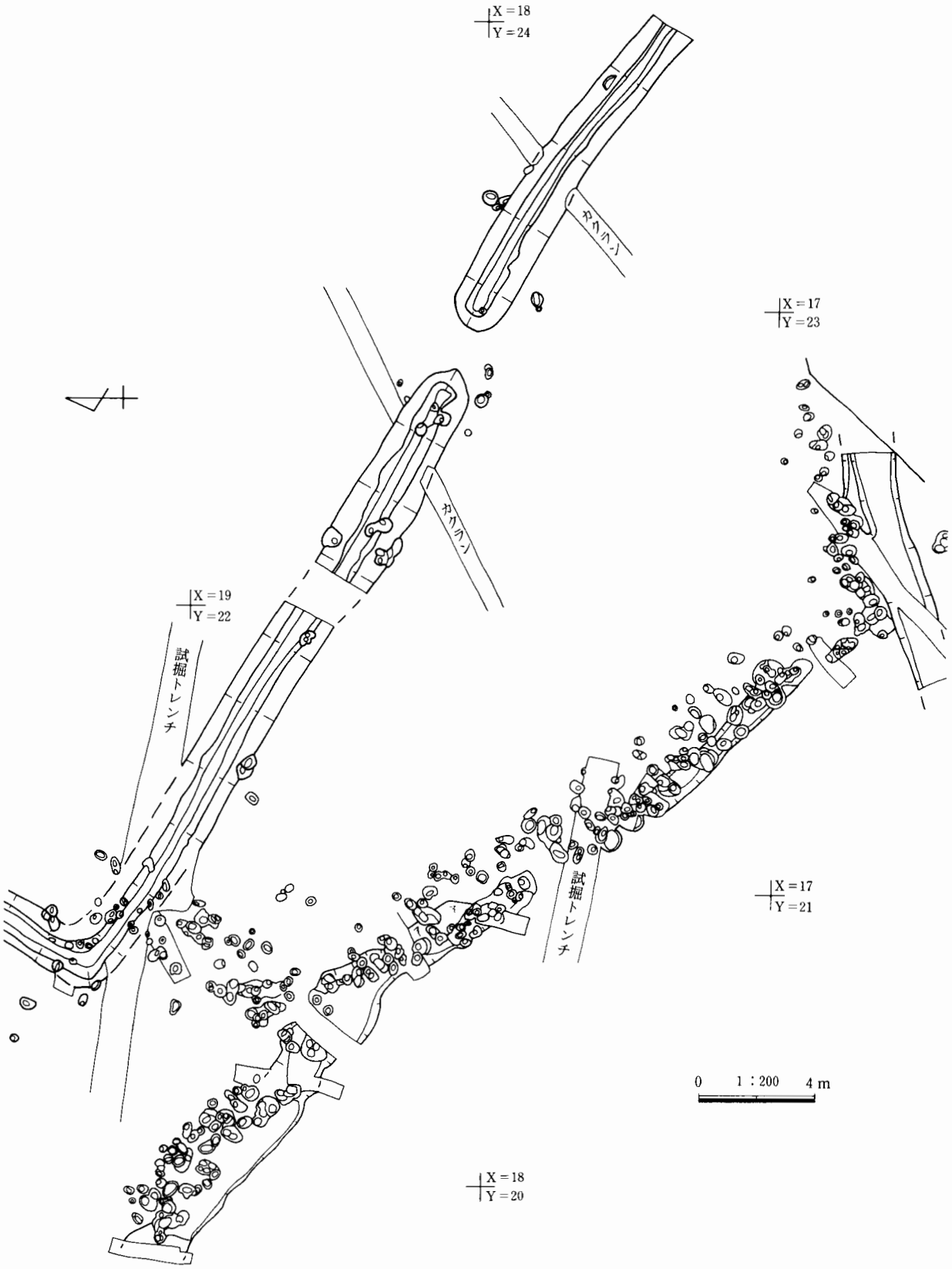
第73図　方形区画遺構西溝北半部（F区）



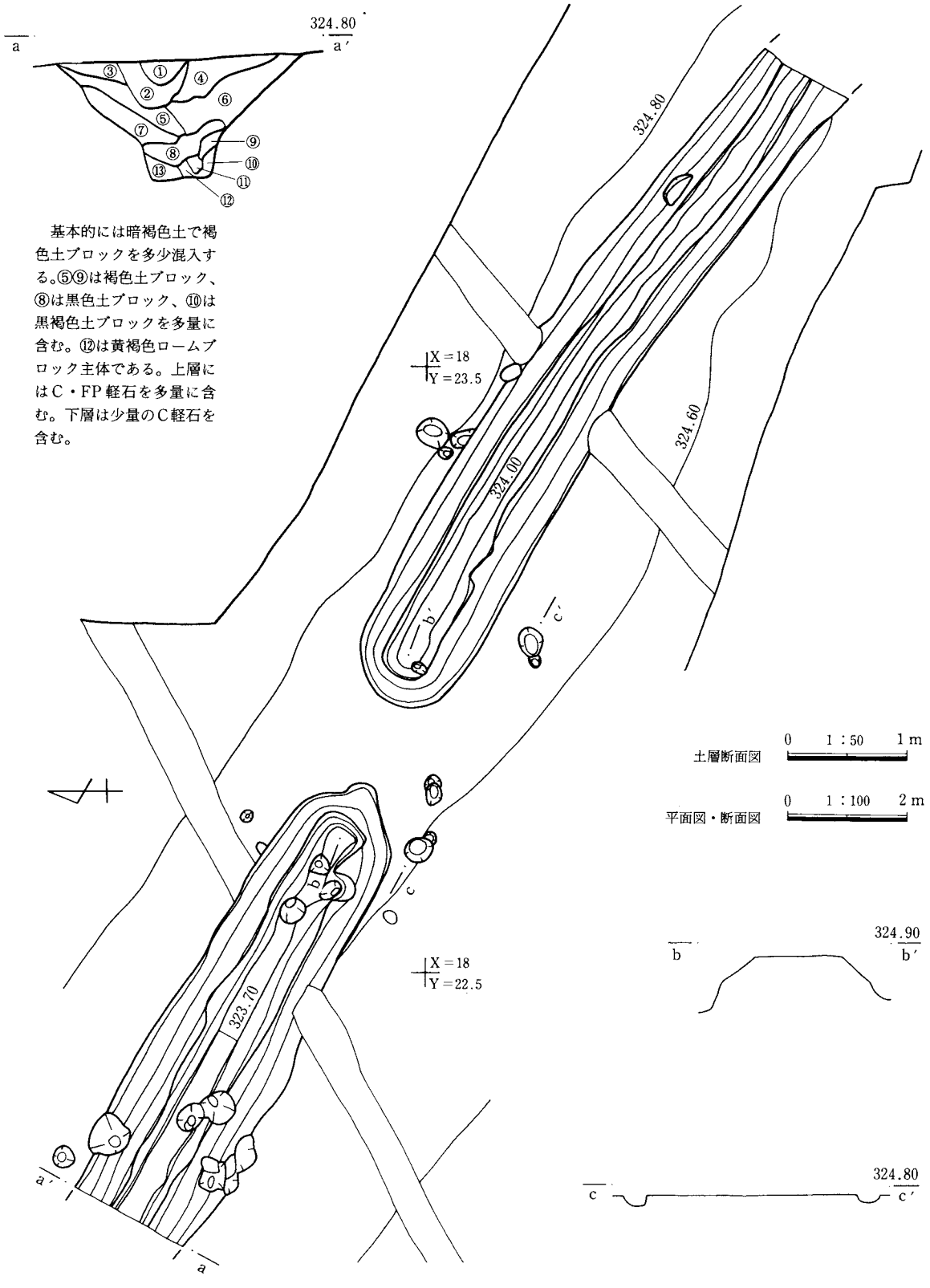
第74図　方形区画遺構西溝中央部及びD区土坑位置図



第75図　方形区画遺構西溝南半部（C区）



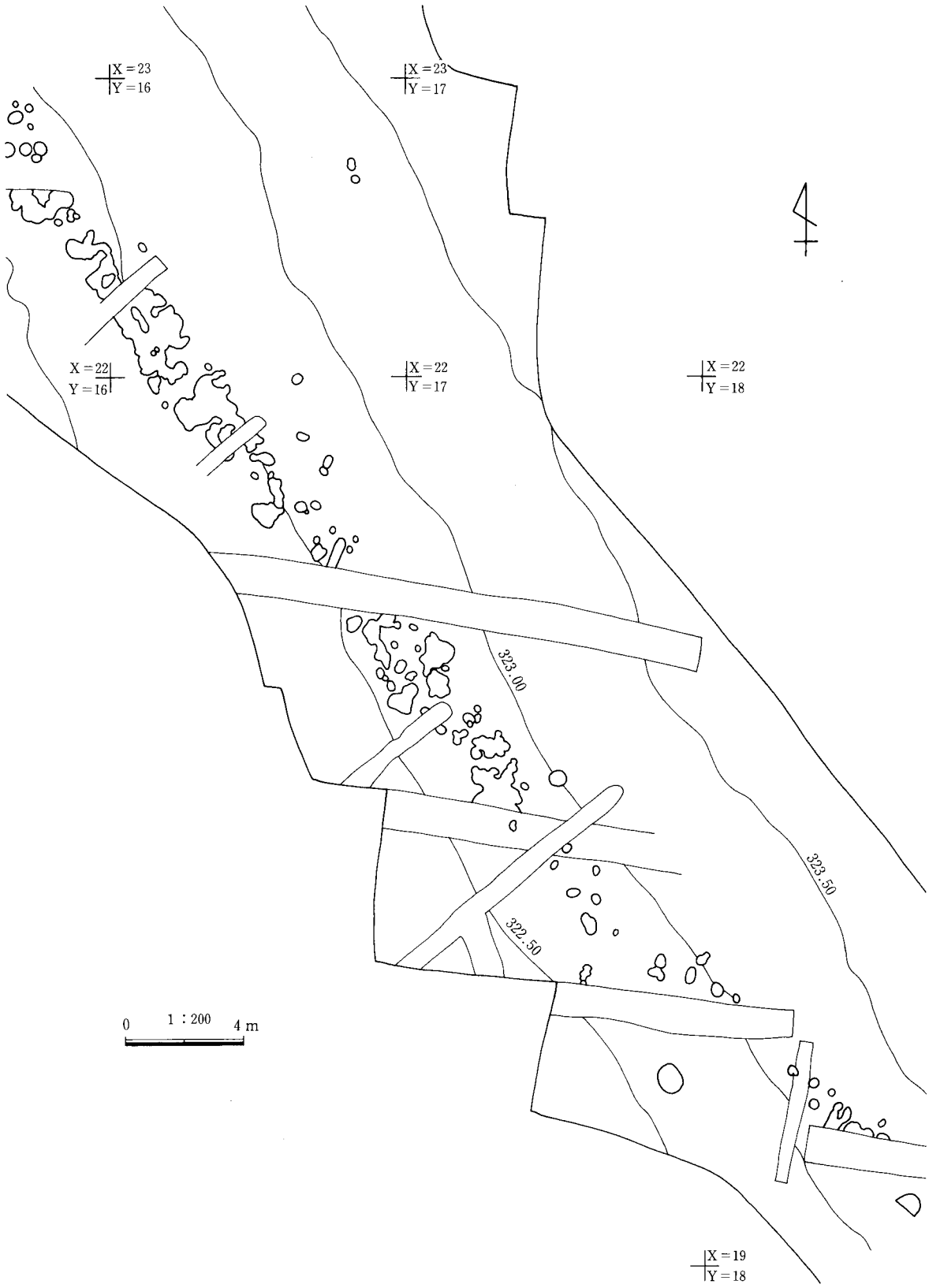
第76図　方形区画遺構南溝及びC区柵列東半部



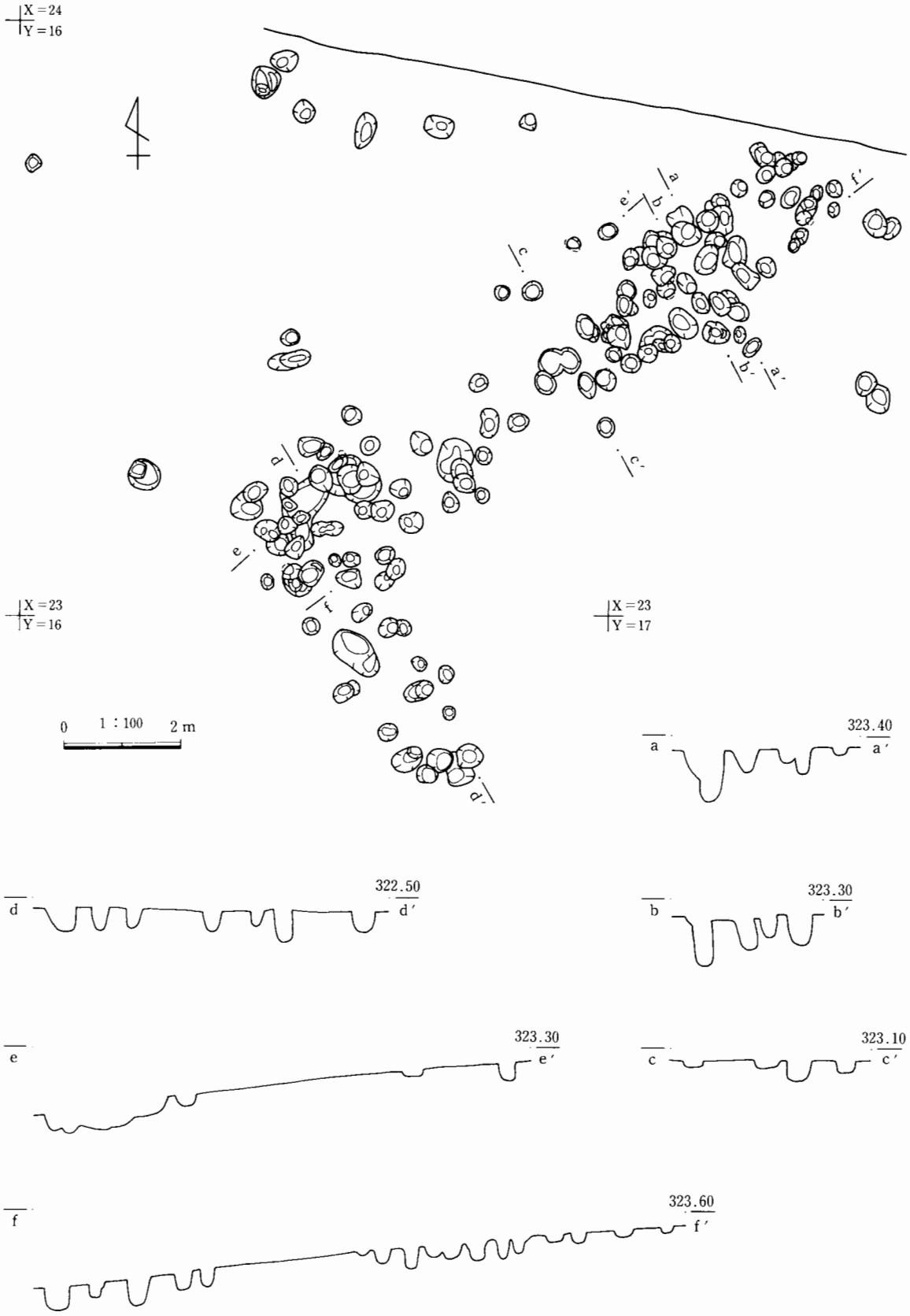
第77図　方形区画遺構南溝中央（土橋）部

第78図　方形区画遺構C区柵列東半部東側

第79図　方形区画遺構C区柵列東半部西側



第80図　方形区画遺構C区柵列西半部



第81図　方形区画遺構C区柵列西端部

C区柵列（第76・78～81図、ＰＬ28～32）

16―23グリッドから23―17グリッドの概ね北西―南東方向に南辺が位置する。柵列は16―23グリッドで東方に折れるが、この部分でＡ区の東西道路が沿ってきており、同時期あるいは近接した時期関係にあると推測される。23―17グリッドではほぼ直角に北東方向に折れ曲がる。実測図上に調査範囲・遺構検出状況は表示していないが、この柵列の延長上の現道北側（Ｄ区）も表土剝ぎを行っており、まばらに柱穴が検出されているがやがて消滅する。また18―21グリッドから北方へも区画するが、この区画の柵列は方形区画遺構西溝に沿って東側に位置する。

南辺の16―23グリッドから18―21グリッドの間(西区画と称す)、18―21グリッドから23―17グリッドの間（東区画と称す）はそれぞれ外方（南西方向）に弱い孤を描いている。西区画の長さは約60mを測り、方位は概ねＮ―43°―Ｗである。東区画の長さは約24mを測り、方位は概ねＮ―37°―Ｗである。この方位は西区画が南東溝の北半部、東区画が南東溝の南半部（若しくはこれに沿う柵列）の方位にそれぞれ近似するが、構造的にどのような意味があるのかは不明である。

東区画の柵列の南側の柵列には浅い溝が重複しており、柵列に伴う可能性が高い。溝は東区画の東端で消滅し、東区画のほぼ中央部には掘り残し（土橋部）がある。柵列部分は多少間隔が開くものの、特に入口施設を示唆するような配列はないが、入口の可能性を考えておきたい。尚、この土橋部周辺の柱穴中から馬歯が出土している。溝は東区画の西端で幅を広げ、さらに西区画の東端部に続き消滅する。

Ｃ区柵列についても柱穴列の単位や組み合わせは明瞭ではないが、少なくとも東区画については柵列だけの段階と、柵列に溝が伴う段階の２時期考えられる。また、西区画の柵列は両端を除いて精査を行っていないが、プランの検出状況からは２条の柵列帯が並走するような様相が認められる部分もある。

柱穴の覆土は黒ボク土、淡色黒ボク土を主体に堆積する。覆土中に浅間Ｃ軽石を含むものと軽石を含まないものがあるが、ＦＰ軽石を含むものはほとんど認められていない。

③Ｅ区小溝（第83図）

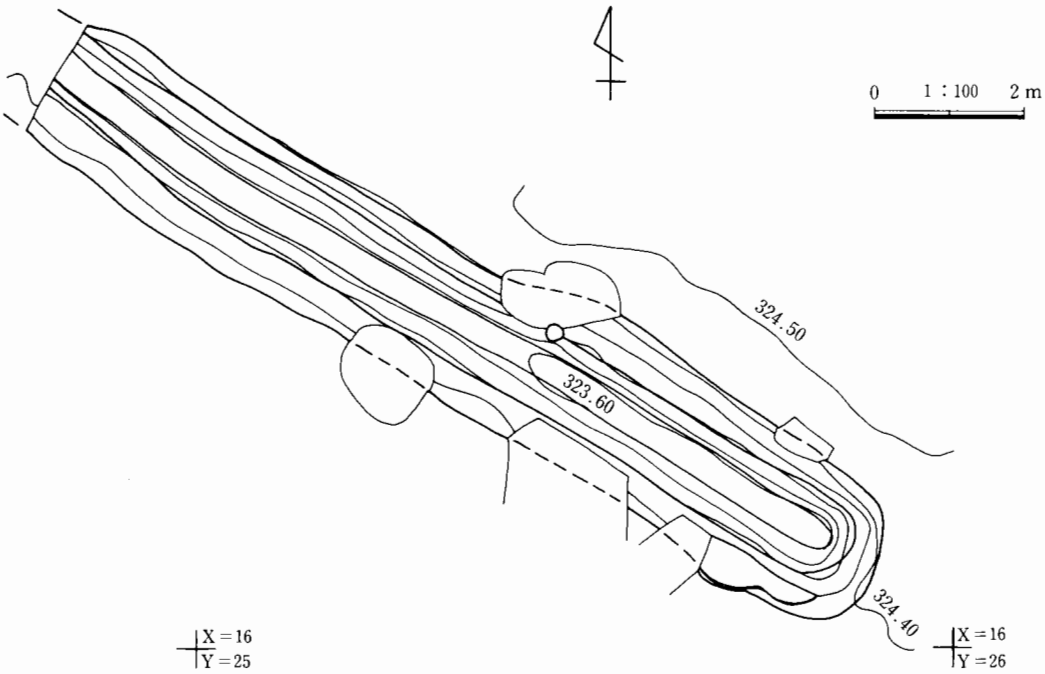
15―29グリッドから13―30グリッドに位置する。さらに南東方向へ続くと思われるが、掘り込みが浅いため13―30グリッドで消滅している。多少湾曲するがほぼ方形区画遺構南東溝と平行する。上幅0.4～0.6m、深さ0.1m前後のごく浅い溝で、残存長は約26.4mである。走向は概ねＮ―32°―Ｗを測り、断面形状は逆台形状を呈する。

④土　坑

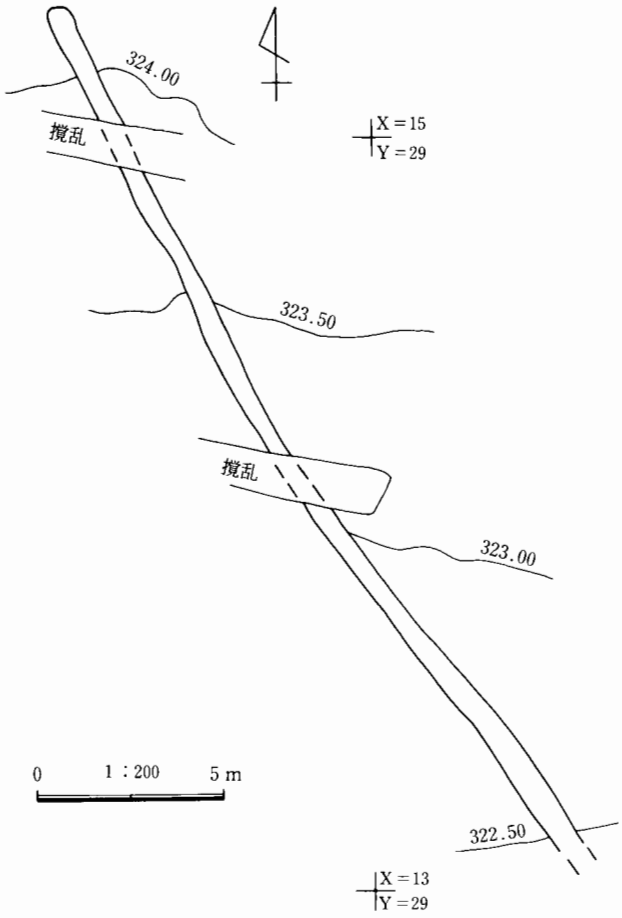
既述のとおり縄文時代以外の土坑は方形区画遺構周辺の５ケ所（Ｆ１土を除いて）にまとまって検出されている。土坑の平面形状は隅丸方形・隅丸長方形・円形がある。円形には0.8mを前後する小型タイプと1.3mを前後する大型タイプがあり規格性が強い。隅丸（長）方形の規模には多少のバラツキがあるものの、これにもある程度の規格性が伺われる。Ｆ区土坑群を除けば、土坑群の位置や配置状況には方形区画遺構との強い関連性が伺われる。遺物は出土していない。(以下の個別の土坑群の説明では区名を省略する。)

Ｄ区土坑群（配置図第74図、遺構図第86図、ＰＬ34）

方形区画遺構西溝の東側に柱穴群とともに近接して位置する。１・６・７・８号土坑が大型円形で、３・４号土坑は形状が不明瞭であるが小型円形と思われる。２号土坑は隅丸方形、５号土坑は隅丸長方形である。



第82図　方形区画遺構南溝東端部



第83図　E南区小溝

検出面からの深さは1号土坑が若干深いが、他はすべて0.3～0.4mとほぼ一定している。土坑どうしで重複するものもあることから、一時期のものではないが、方形区画遺構西溝に沿ってほぼ3mの距離に直線的に配置されており、西溝との強い関連性が伺われる。

E南区土坑群（配置図第84図、遺構図第87図、PL34・35）

方形区画遺構南溝の東端部の南側を中心に位置する。D区土坑群と同様にすべてのタイプの土坑で構成される。5・6・8号土坑が大型円形、9・10号土坑が小型円形、1・2・7号土坑が隅丸長方形、4号土坑が隅丸方形である。深さはすべて0.3～0.5mの範囲に収まる（検出面が2面である8～10号土坑もこの範囲内に復元される）。配置状況は2・3・6・7号土坑は方形区画遺構南溝に沿ってほぼ2m前後の距離に直線的に配置される。また、5・8～10号土坑は直線的に配列され、5・8号土坑、9・10号土坑がそれぞれ同タイプで間隔が約3.8mと等しく、対での使用が推定される。隅丸長方形

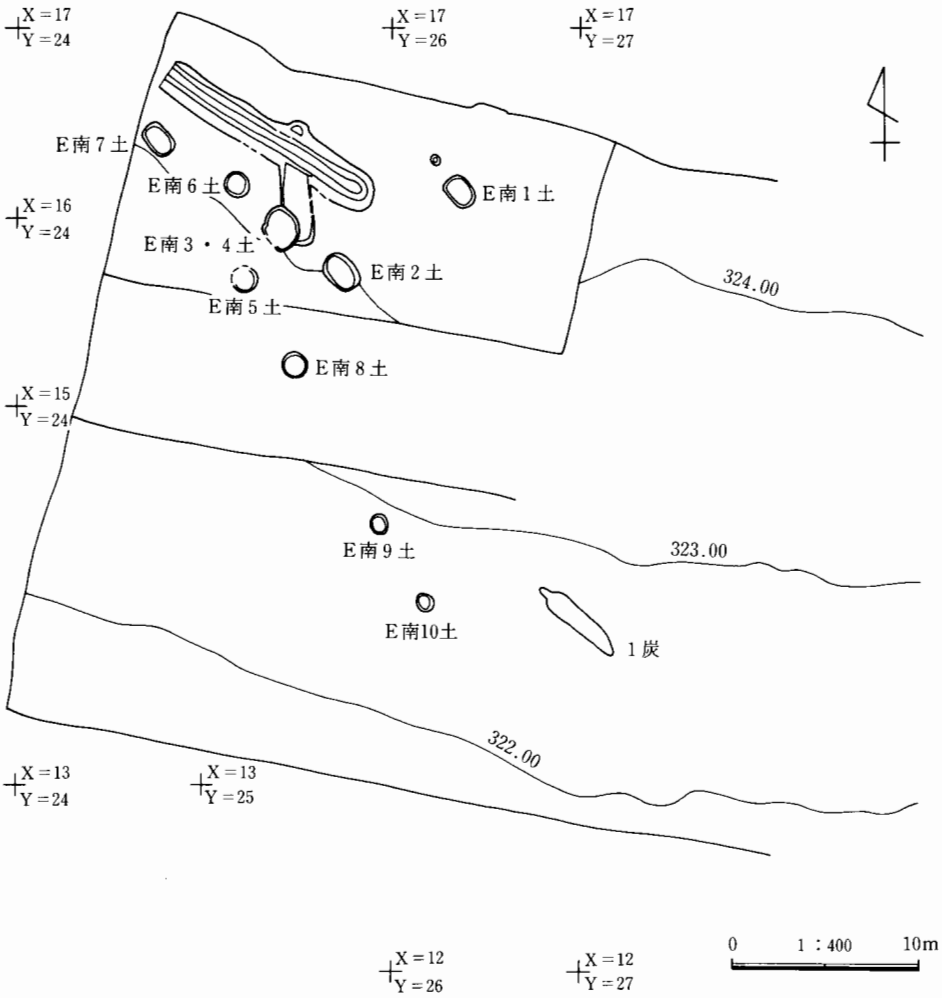
タイプの長軸方位はすべて南溝の方位に近似する。

Ｅ北区土坑群（配置図第71図、遺構図第88図、ＰＬ36）

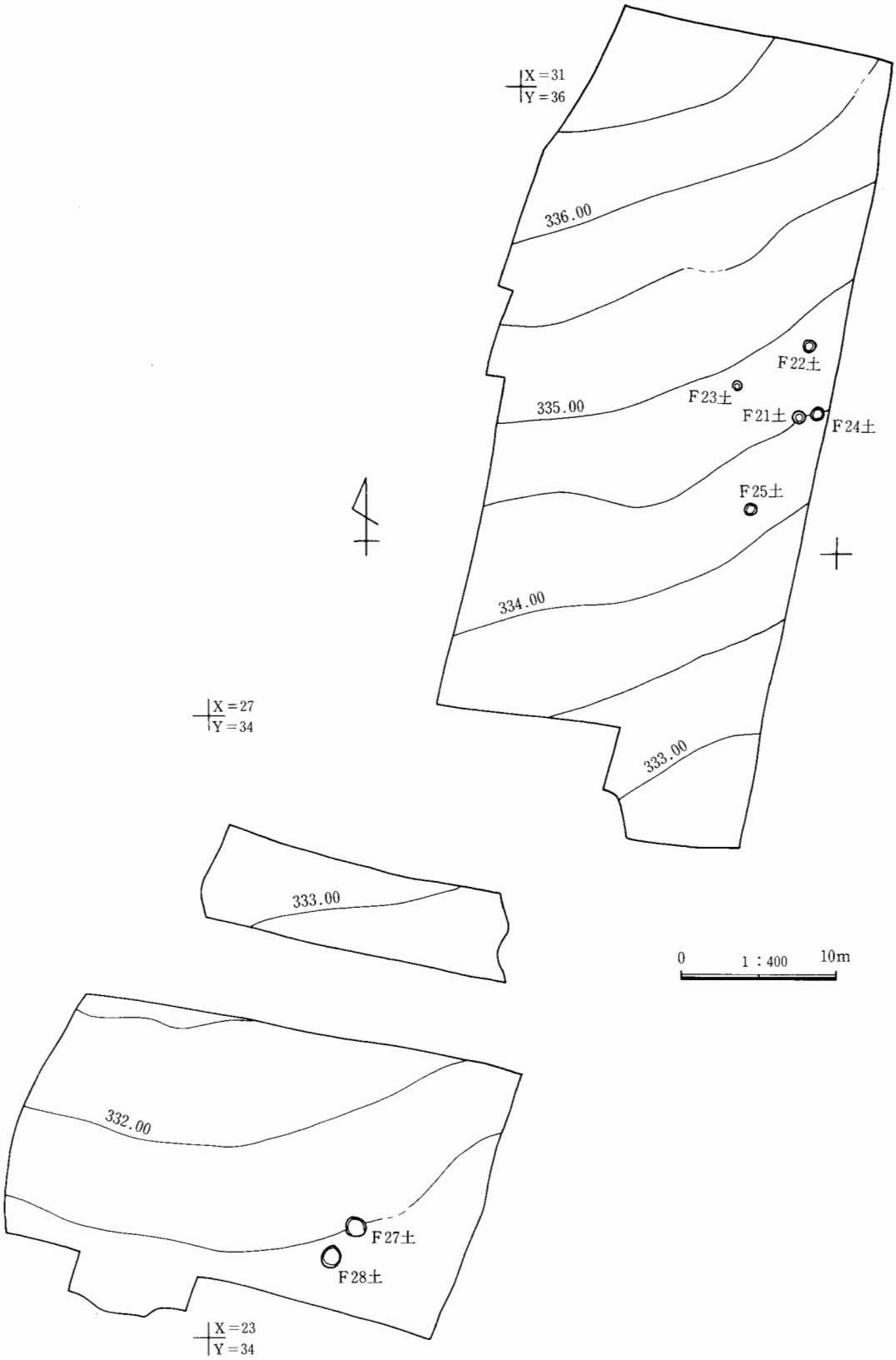
方形区画遺構南東溝屈折部の東側に位置する。本群はすべて小型円形タイプで構成される。Ｅ２号炭窯跡と重複する９号土坑を除けばまとまった位置にある。配置状況は７・１号土坑は南東溝屈折部分の延長上にあり、１～３号土坑は南東溝（或いは柵列）に沿って直線的に配列される。また、１・２・３・10・５・４号土坑は３ｍ前後の近似した間隔で剣菱形に配置されており、溝或いは柵列のどちらに伴うのかは不明であるが、意図的な配置状況が伺われる。

Ｆ区土坑群（配置図第63・85図、遺構図第89図、ＰＬ36）

本群は３個所に別れて位置する。１号土坑は方形区画遺構内部に区画溝から離れて単独で占地する。Ｆ区内で唯一隅丸長方形を呈する土坑である。他の土坑は方形区画遺構東溝から離れて東方に位置する。すべて２面調査の際に検出・調査したものである。21～25号土坑は東溝喰違い部の東方に５基が近接して位置している。23号土坑が規格から外れるが、いずれも小型円形タイプである。現状では規則的な配置状況は伺えない。27･28号土坑は大型円形タイプである。近接する26号土坑は覆土の関係で攪乱として除外したが、形状･



第84図　Ｅ南区土坑位置図



第85図　F区土坑位置図

第11表　D区土坑一覧表

番号	位　置	形　状	規　模	深　さ	備　考
1	23—24・25G	円　形	126×120	54	
2	23—24・25G	隅丸方形	140×129	39	推定値
3	23—25G	楕円形？	108× 84	30	推定値
4	23—25G	不正円形	93× 93	36	
5	23—25G	長方形	135×105	32	
6	24—25G	楕円形	160×135	40	
7	24—25G	円　形	径約130	40	
8	24—25G	円　形	144×138	36	

第12表　E南区土坑一覧表

番号	位　置	形　状	規　模	深　さ	備　考
1	16—27G	隅丸長方形	160×130	約30	
2	15—26G	隅丸長方形	206×142	44	
3	15—26G	隅丸長方形	160×130	(46)	推定値
4	15—26G	隅丸方形	170×160	(46)	推定値
5	15—26G	円　形？	長径140	約30	
6	16—26G	円　形	136×118	約40	
7	16—25G	長方形	166×120	34	
8	15—26G	円　形	126×116	約30	
9	14—26G	円　形	約1m	約10	
10	13—27G	円　形	径約84	7	

第14表　F区土坑一覧表（縄文時代以外）

番号	位　置	形　状	規　模	深　さ	備　考
1	29—32G	隅丸長方形			実測漏れ
21	28—38G	円　形	径約90	20	縄文土器
22	29—38G	円　形	80× 74	8	
23	29—38G	円　形	径約62	10	
24	28—38G	円　形	径約90	22	縄文土器
25	28—38G	円　形	径約76	18	
27	23—35G	円　形	径約130	30	
28	23—35G	円　形	径約120	30	

第13表　E北区土坑一覧表

番号	位　置	形　状	規　模	深　さ	備　考
1	17—33G	円　形	86× 80	38	
2	17—33G	円　形	86× 80	40	
3	16—34G	円　形	径約90	48	
4	17—34G	円　形	径約75	30	
5	17—34G	円　形	径76	38	
6	16・17—34G	円　形	82× 76	52	
7	17—33G	円　形	径約75	35	
8	17—33G	円　形			柱穴
9	16—27G	円　形	92× 80	35	
10	16—34G	円　形	径約86	69	

規模・位置関係などからすれば一連の遺構である可能性が高いと現時点では考えている。位置的な状況からは本群と方形区画遺構との関係は不明であるが、他の遺構の検出状況や、土坑の規格性、覆土の状況等から判断すれば方形区画遺構に伴う土坑群である可能性が高いと思われる。

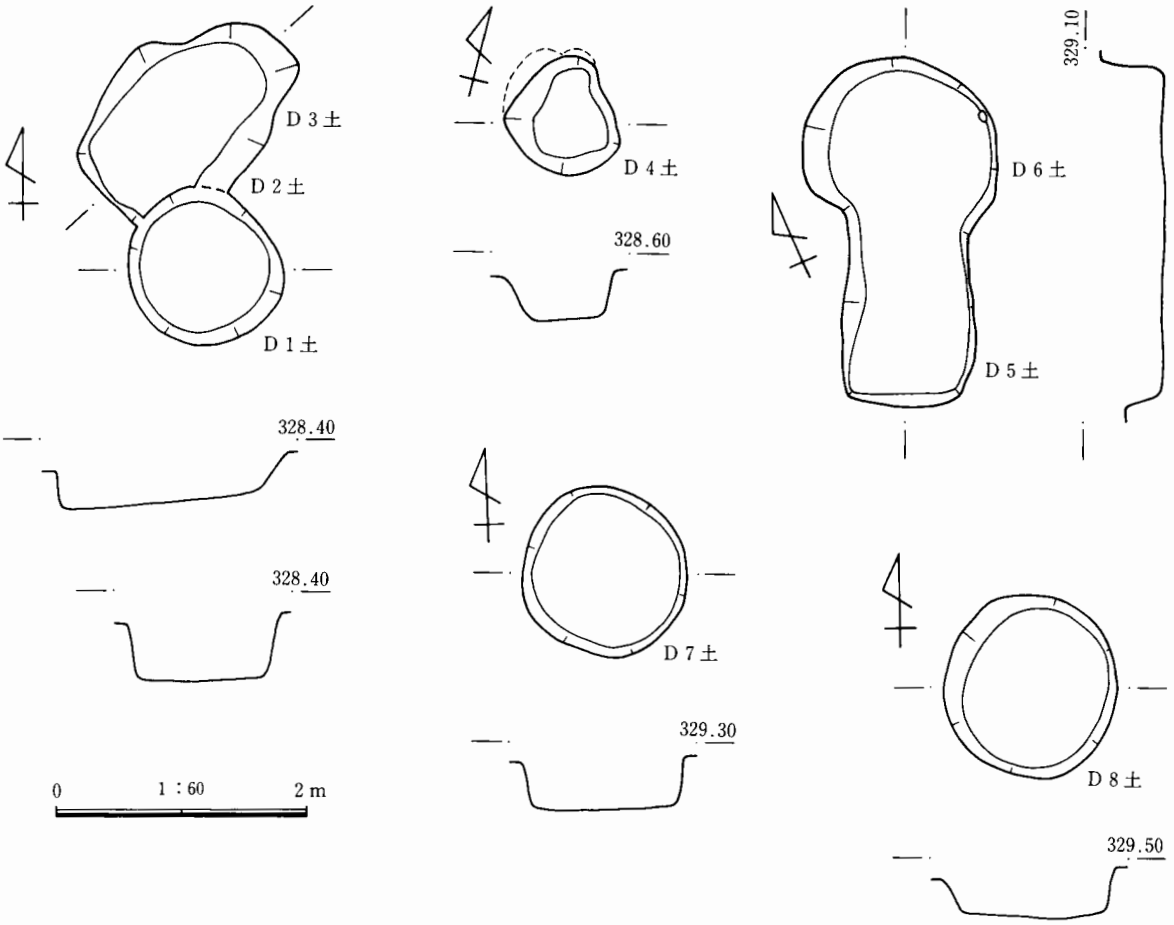
(4) 炭窯跡（遺構図第90図、ＰＬ37）

Ｂ・Ｃ・Ｅ区に検出された。Ｅ区２・３号炭窯跡が近接するだけで、ほかは散在して位置する。遺物は炭以外には出土せず、また示準テフラも堆積していないため、構築時期は不明である。

Ｂ区１号炭窯跡

11—21グリッドに位置する。耕作坑・溝が多数重複する。

主体部の長さ5.1m、幅約1.7m、深さ35cmを測る。主軸方位はＮ—126°—Ｅである。焚口の出は1.1m、幅



第86図　D 区 土 坑

約65cm、煙道の出は15cmである。底面には幅30cm前後の浅い溝が長軸上に敷設されている。炭化材は、特に焚口前面には短軸方向に向きを揃えて多量に残存する。

B区 2 号炭窯跡

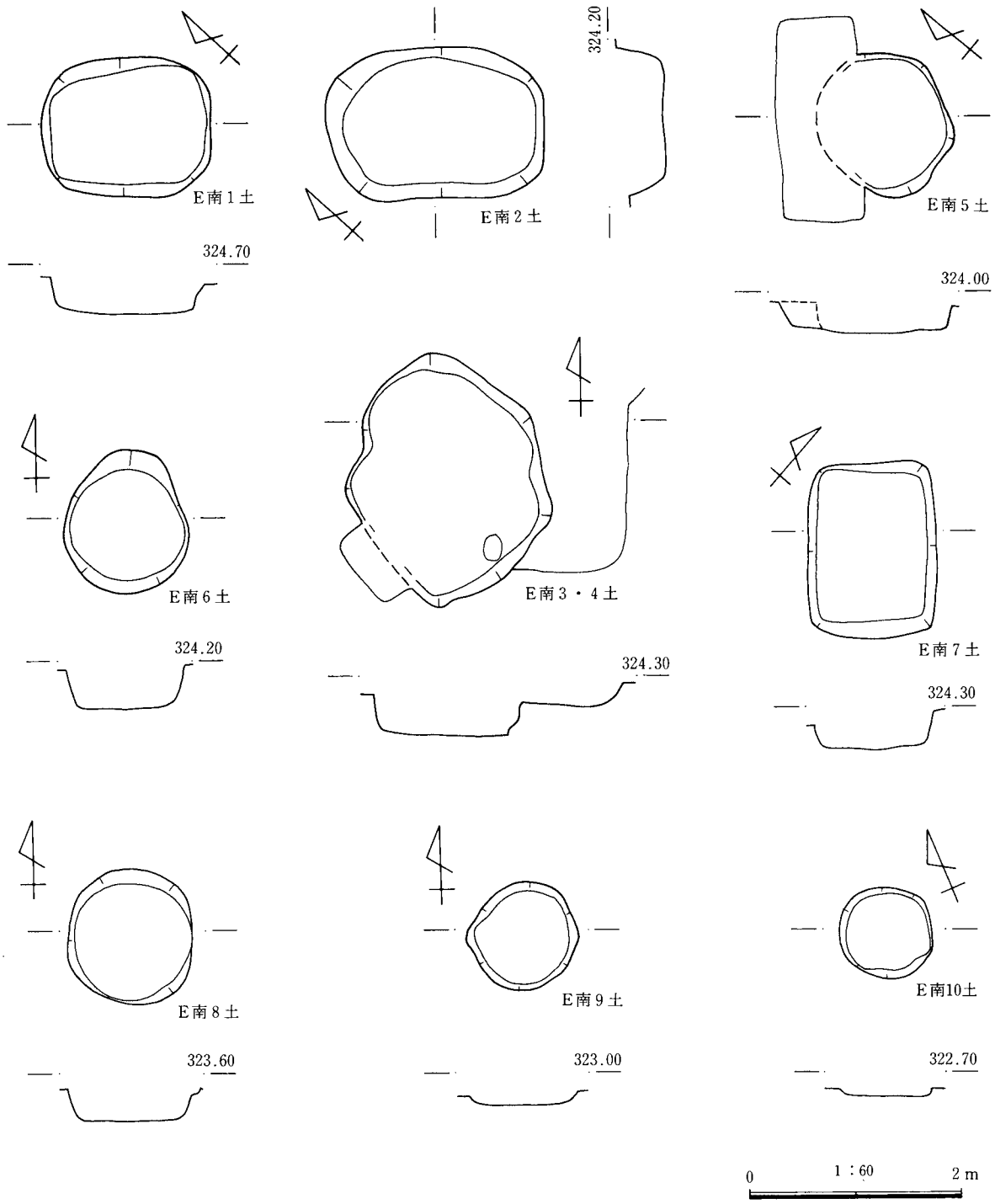
6 —14グリッドに位置する。中央部に東西溝が重複し、本跡が新しい。北壁に柱穴も重複する。

主体部の長さ4.8m、幅約1.6m、深さ20cmを測る。主軸方位はN—157°—Eである。焚口の出は0.5m、幅約70cm、煙道の出は15cmである。底面に溝は敷設されていない。炭化材は細片が覆土中に少量含まれていた程度である。

B区 3 号炭窯跡

11—16グリッドに位置する。

主体部の長さ3.8m、幅約1.4m、深さ20cmを測る。主軸方位はN—135°—Eである。北西に突出部があるが、焚口であるか煙道なのか断定できない。出の長さは0.5m、幅約50cmである。底面には幅40cm前後の浅い溝が長軸上に敷設されている。炭化材は細片が覆土中に少量含まれていた程度である。

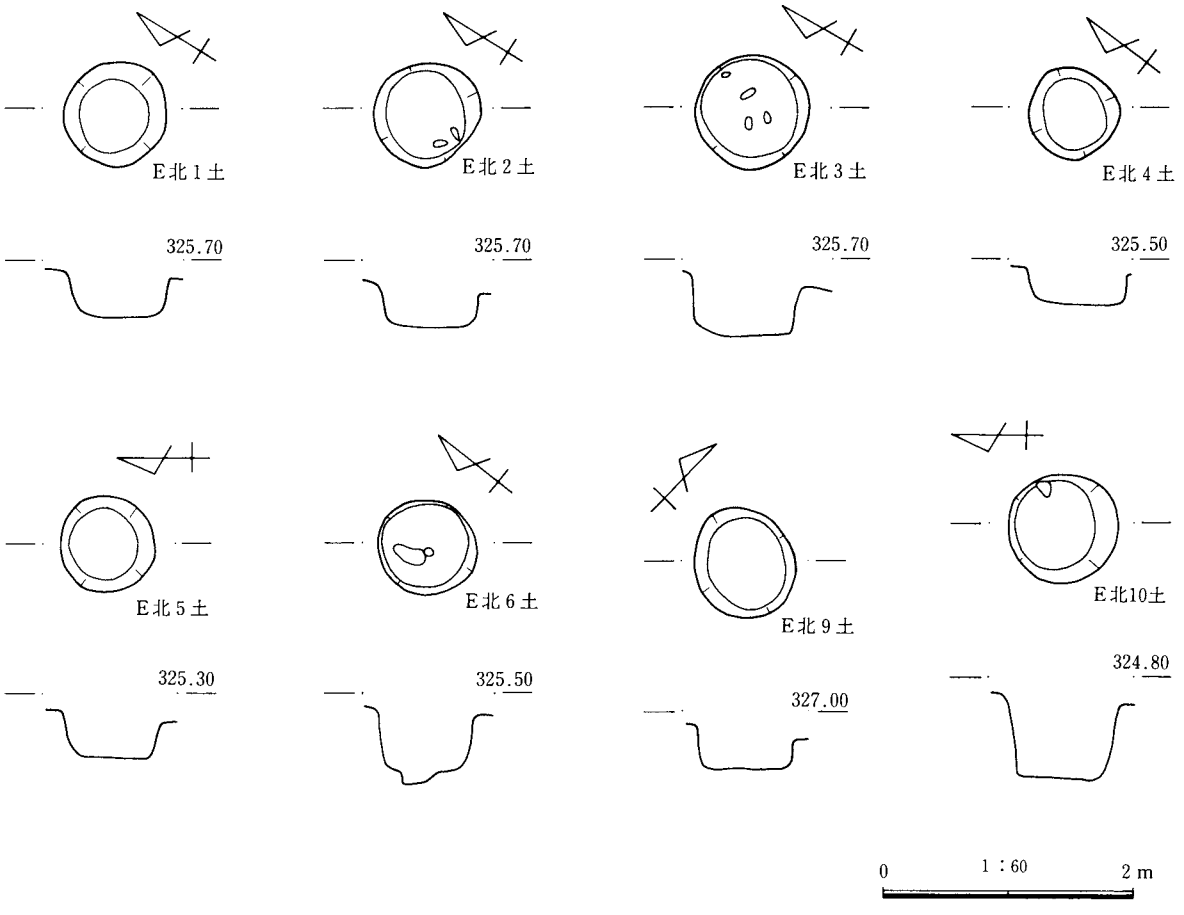


第87図　E南区土坑

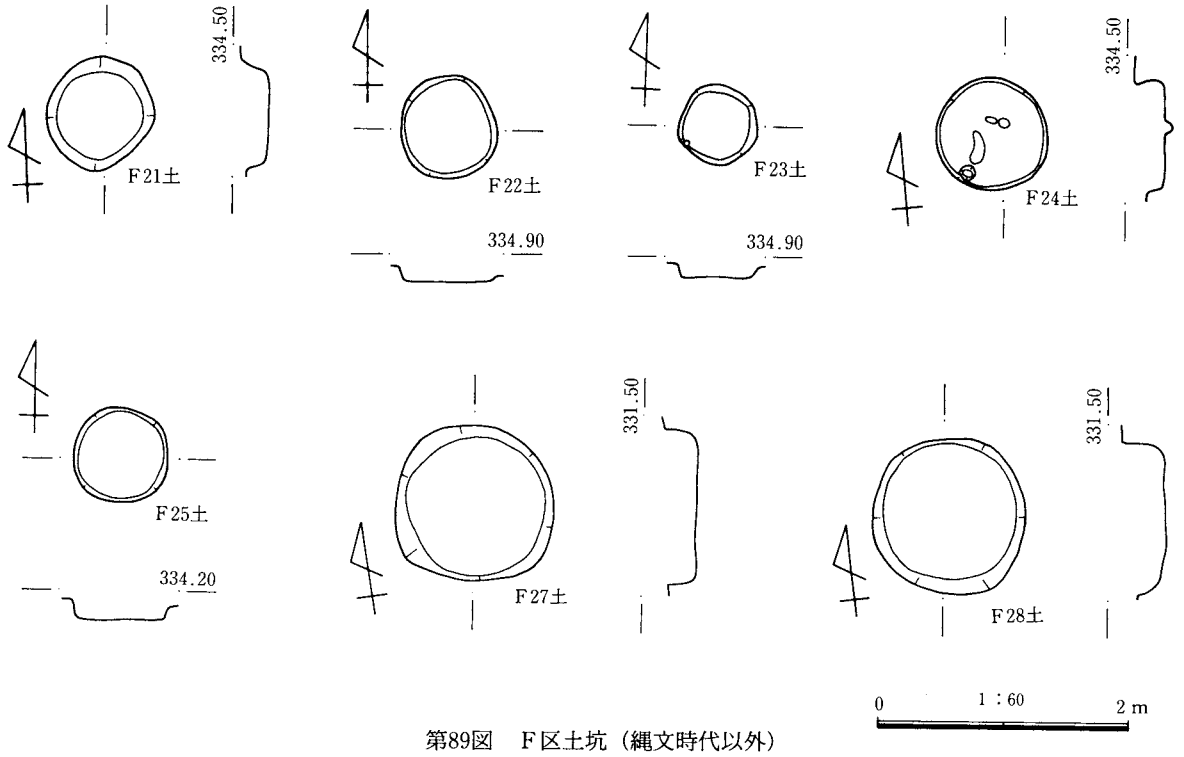
C区1号炭窯跡

21—24グリッドに位置する。両端に耕作溝が重複する。掘り込みが浅く、底面が残存するだけである。

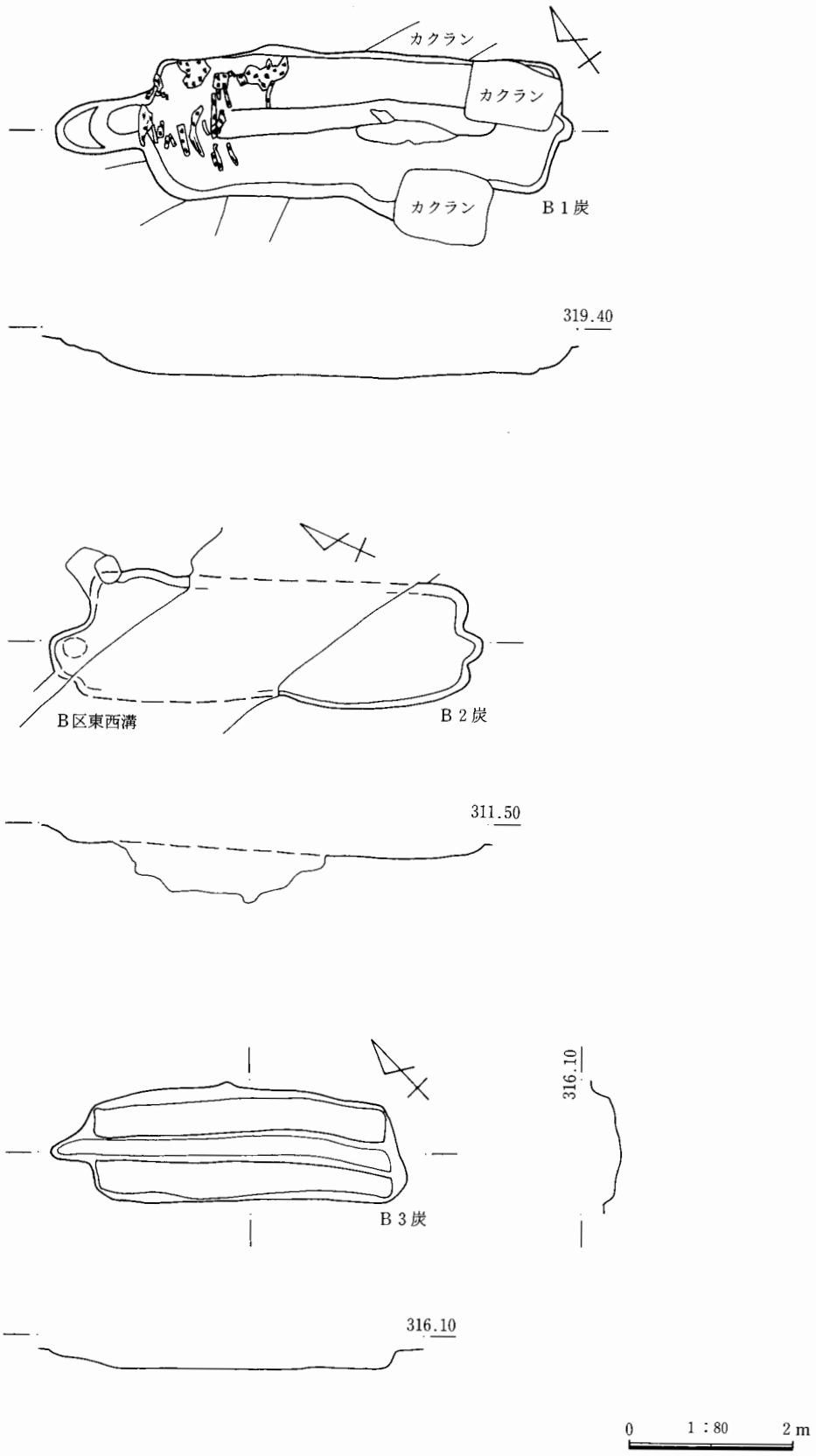
主体部の長さは現状で5.2m、幅約1.1m、深さ6cmを測る。主軸方位はN—161°—Eである。焚口や煙道は不明である。底面には幅20cm前後の浅い溝が長軸上に敷設されている。炭化材は細片が覆土中に少量含まれていた程度である。



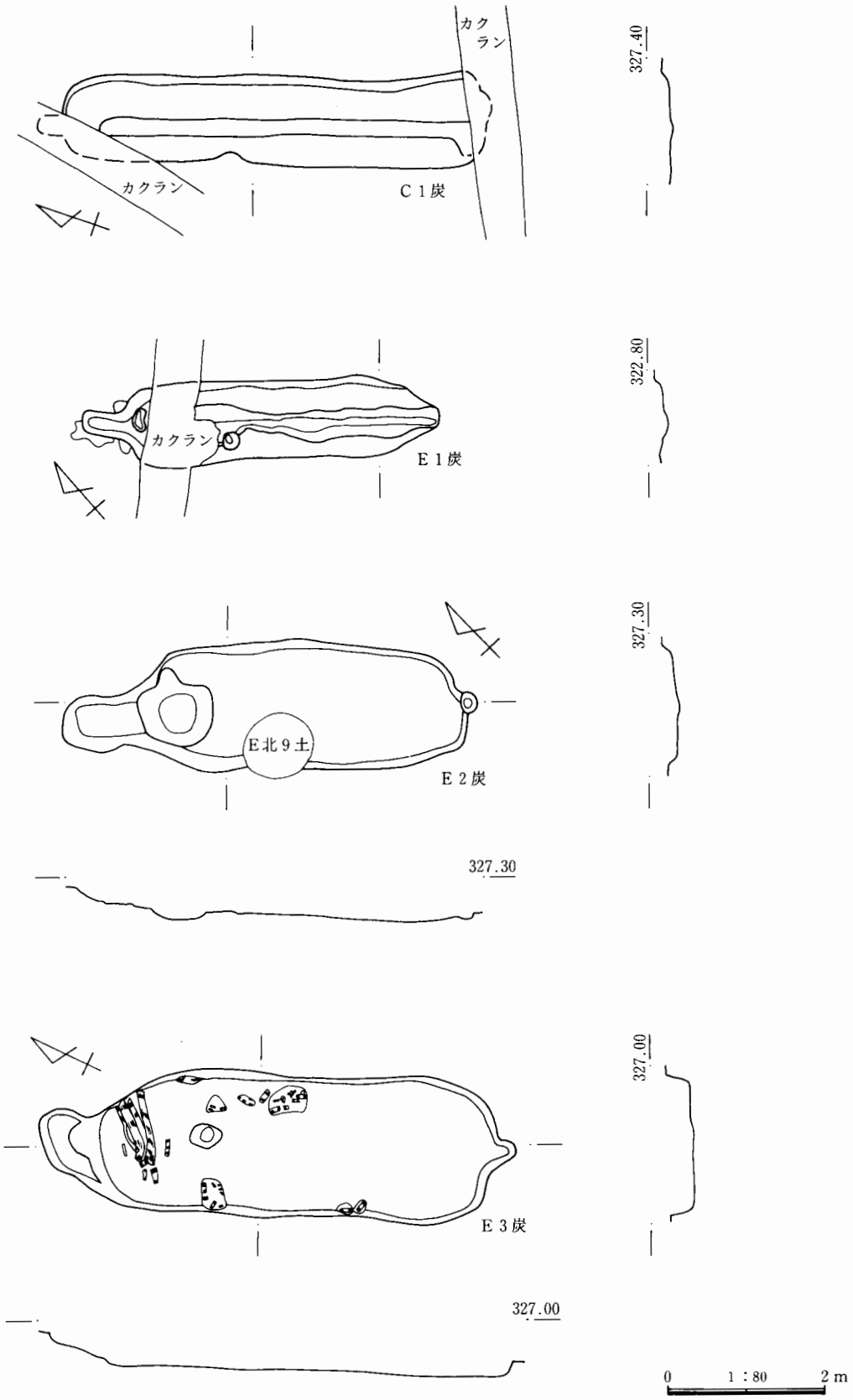
第88図　E北区土坑



第89図　F区土坑（縄文時代以外）


カクラン
カクラン
カクラン
B 1 炭
319.40
B区東西溝
B 2 炭
311.50
316.10
B 3 炭
316.10
0
1 : 80
2 m

第90図　炭 窯 跡 (1)


カクラン
カクラン
C 1炭
327.40
カクラン
E 1炭
322.80
E北9土
E 2炭
327.30
327.30
E 3炭
327.00
327.00
0
1：80
2 m

第91図　炭 窯 跡 (2)

E区1号炭窯跡

13—27・28グリッドに位置する。2面調査で検出された。焚口近くを耕作溝により攪乱されている。

主体部の長さ約4m、幅約1m、深さ10cmを測る。主軸方位はN—129°—Eである。焚口の出は0.9m、幅約30cmである。煙道は主体部から漸移する。底面には幅40cm前後の浅い溝が長軸上に敷設され、焚口近くに2基の小ピットが穿たれている。炭化材は細片が覆土中に少量含まれていた程度である。

E区2号炭窯跡

18—33グリッドに位置する。E北9号土坑と重複し、本跡が新しいと思われる。

主体部の長さ約4.1m、幅約1.6m、深さ約15cmを測る。主軸方位はN—135°—Eである。焚口の出は約1m、幅約70cmである。南東端のピット状の部分が煙道とすれば、出は約15cmである。焚口前には土坑状の浅い掘り込みがある。実測図上には表現していないが、不明瞭な浅い溝が長軸上に検出されている。炭化材は細片が覆土中に少量含まれていた程度である。

E区3号炭窯跡

18・19—33グリッドに位置する。北側にE2号炭窯跡が近接する。

主体部の長さ5.2m、幅1.9m、深さ約40cmを測る。主軸方位はN—166°—Eである。焚口の出は0.6m、幅約80cm、煙道の出は25cmである。底面の溝は不明瞭である。炭化材は焚口前に短軸方向に並んでまとまって出土したほか、覆土中からも細片が多量に出土した。

(5) 縄文時代以外の出土遺物（遺物第92図、PL43）

先述したように、縄文時代以外の遺物はごく少量である。掲載した遺物以外では古墳時代前期のS字状口縁台付甕の胴部破片が4点、同時期頃と思われる無文の口辺部・胴部破片が5点、平安時代頃と思われる土師器坏の小破片が2点、土師器甕の胴部破片が2点で、これらはいずれもB区から出土している。A区からは焙烙の破片が2点出土している。

1は甕形土器の口縁部である。口唇部に刻み目を付し、頸部に等間隔止めの簾状文、胴部に羽状格子目文を施文する。口縁部内外面、胴部外面に煤が付着する。

2は甕形土器の頸部破片である。頸部に粗い波状文を施文する。

3は小型の壺形土器の胴部破片と思われる。上端に縄文LRが施文される。

1～3は弥生時代中期後半と思われる。

4・5は古墳時代前期のS字状口縁台付甕の破片と思われる。4は肩部、5は胴部下端である。

以上はB区から出土している。

6は無文の口縁部破片である。E南区から出土している。古墳時代前期？である。

7は須恵器坏の口縁部破片である。平安時代と思われる。

8は酸化炎焼成の蓋である。時期不明であるが、平安時代頃か？

9はかわらけで口縁端部内外面に煤が付着している。

10は酸化炎焼成の坏（かわらけ？）で内面全体に煤が付着している。

11は陶器の皿で白色釉がかかる。

12は陶器の皿で志野釉が全体にかかる。底部に目痕が付着している。

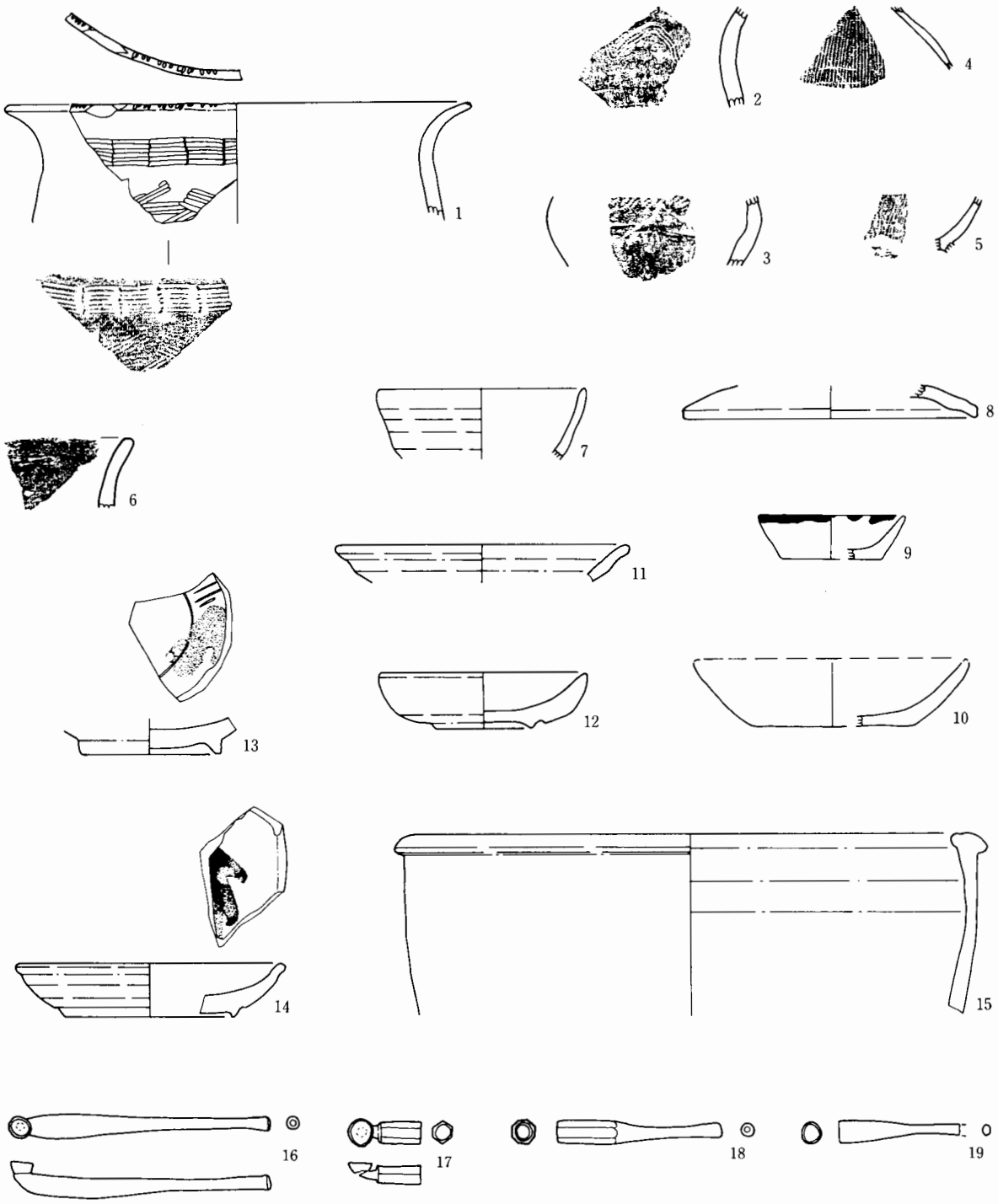
13は陶器の輪花皿？で、灰釉が内面にかかり、一部緑色に発色している。

14は陶器の皿で、志野釉が高台裏を除いてかかる。内面には鉄絵が描かれる。

15は陶器の鉢で、内外面に灰釉を施釉し、部分的に緑色に発色する。

16～19は銅製の煙管で、17と18は一対と思われる。

７～19の出土位置は11が表採、13がＢ区、14がＦ区のほかはすべてＡ区遺構外から出土した。



第92図　縄文時代以外の出土遺物

III　発掘調査の成果と課題

1．縄文時代のまとめ

坂上遺跡からは早期～中期の遺構・遺物が検出された。以下では富士見村の既調査遺跡の様相も含めて簡単なまとめを行いたい。

遺構は竪穴住居跡、竪穴状遺構、陥し穴、土坑、集石である。明確に時期が判るものは前期後半のＦ区の土坑だけで、Ｅ・Ｆ区の竪穴住居跡、竪穴状遺構は前期後半の可能性があるもののあまり明確ではない。Ａ・Ｂ区の陥し穴・土坑からも遺物が出土しているが、時期の確定には至らない。集石も複数時期のものがあると思われ、Ｂ区１号集石が早期、Ｆ区１号集石が前期後半、Ｂ区２号集石が中期初頭と推定している。

早期の遺物はＢ区の遺構外から少量が出土しただけである。しかし、富士見村ではこれまでこの時期の遺跡の調査はごくわずかであり、坂上遺跡の遺物が最もまとまった資料となった。時期的にも比較的バラエティーに富んでおり、撚糸文、押型文、沈線文、条痕文がある。また、時期判定は難しいが無文土器がまとまって出土した。既調査遺跡では久保田遺跡、愛宕山遺跡、東上原遺跡などで少量の遺物が出土している。

前期初頭はＢ区の遺物包含層から遺物が少量が出土しただけで明瞭な遺構は検出されていない。既調査遺跡では久保田遺跡から住居跡・土坑が検出されている。下庄司原東遺跡でも住居跡を調査しているが未整理・未報告である。遺物だけが少量出土した遺跡には田中遺跡、東上原遺跡などがある。

前期中葉もＢ区包含層やＦ区遺構外から遺物が出土しただけである。この時期の遺跡は大規模なものはないが数は多い。既調査遺跡では田中田遺跡、由森遺跡、陣場遺跡、下庄司原東遺跡、上庄司原東遺跡、広面遺跡、愛宕山遺跡、長泉寺遺跡、本年度調査を行った寺間遺跡から住居跡・土坑が検出され、これ以外の多くの遺跡でも遺構外から少量の遺物が出土している。

前期後半はＦ区から土坑が検出され、比較的まとまった量の遺物が出土した。Ｅ・Ｆ区の住居跡・竪穴状遺構も本期に属すると推定された。遺物では結節浮線文土器の出土が特筆される。富士見村では本期の遺跡が前期中葉と並び最も多く、遺構・遺物の量や質の点では最も充実している時期である。既調査遺跡では田中田遺跡、向吹張遺跡、岩之下遺跡、米野田遺跡、東上原遺跡、陣場遺跡、上庄司原東遺跡、広面遺跡、愛宕山遺跡、本年度調査を行った上百駄山遺跡、孫田遺跡から住居跡或いは土坑が検出され、これ以外の遺跡からも遺物が出土している。これらのうち愛宕山遺跡と広面遺跡はそれぞれ10軒以上の住居跡や土坑が検出され、まとまった資料が出土しており、当地の該期の土器編年上重要な位置を占める。結節浮線文土器は上百駄山遺跡から１点だけであるが復元個体が出土しており、来年度報告予定である。また、陣場遺跡からもまとまった資料が出土しているが、未整理であり、現時点では報告の予定はない。特筆される遺物として小型石棒が陣場遺跡から１点、上庄司原東遺跡から２点出土しているが、同様に報告の予定がたたない。

前期末～中期初頭の遺物は包含層から比較的まとまって出土した。炉跡の存在から住居跡の可能性も推測されたが不明瞭である。富士見村の本期の様相は群馬県内の一般的な傾向と同様にあまり調査例が多くないが、米野田遺跡からは住居跡が検出されている。遺物だけが出土した遺跡も久保田遺跡など多くない。

中期前半～後半の遺物はごく少量であり、明確な遺構も検出されていない。既調査遺跡では田中田遺跡、向吹張遺跡、西上原遺跡、陣場遺跡、下庄司原東遺跡、長泉寺遺跡、新井遺跡で住居跡・土坑などが調査されており、他にも遺物だけ少量出土した遺跡がある。この中で陣場遺跡が最も豊富に遺構・遺物が出土しているが、上記したとおり報告書も未刊行である。

2．方形区画遺構等について

(1) はじめに

坂上遺跡からは溝と柵列による区画遺構が検出された。遺構の時期は主に示準テフラの堆積状況から、溝による区画部分については榛名山二ツ岳火山灰降下（６Ｃ初頭）前後、柵列による区画部分については浅間Ｃ軽石降下（４Ｃ中葉或いは初頭[注1]）前後の時期の埋没が推測された。

遺構の性格については区画以外の遺構は少数の群在する土坑と柱穴だけで、遺物がほとんど出土していないことや、馬歯が出土していることなどにより、現時点では「(馬) 牧」とするのが最も妥当であると考えられる。しかし、現在までの考古学的事実（古墳への馬具の副葬・馬型埴輪の樹立、馬歯・馬骨の埋葬例など）に照らせば、馬の存在が確認されるのは５世紀代からである。牧については律令時代以降を含めても確実な調査事例はごく少ない。文献史学的には多少逆上る記述はあるものの、この年代の記述で考古学的に検証されていないものをそのまま信ずるわけにはいかない。

日本の在来馬の起源については縄文時代後期にまで逆上るという説もあるが、上記したように確実な証拠はない。仮にその段階から馬が存在したとしても、縄文時代後・晩期の日本において馬が縄文社会において果たしうる役割を想定することは困難であり、自然科学的な観点においてはともかく、文化的には縄文時代に馬はいなかったとしても良いと思われる。一方、本格的な農耕社会に発展する段階である弥生時代において馬を活用し得る場面を想定することは十分可能であるが、いずれにしても新たな考古学的な事実の出現無しには証明され得ないことである。

坂上遺跡の古墳時代前期の牧は現在のところ日本で最も古い調査事例と思われるが、群馬県の地理的な条件や弥生時代社会の発展の段階からすれば、日本で最初に当地に牧が設けられたとは考えにくく、まず北九州あるいは畿内等において馬が招来され、牧が設けられたと考えるのが自然である。しかし、いずれにしても坂上遺跡の牧が日本における初源的な牧の一つであることは間違いないと思われる。

坂上遺跡の牧が日本における初源的な牧としたとき、比較検討はできないが、構造的にはかなり完成されていると思われ、この段階から既にある程度完成された技術の元に飼育が行われているのは確実であり、馬の飼育についても他の文化事象と同様に、当初からある程度完成された技術とともに馬が招来されたと考えるのが自然である。当然技術の修得は一朝一夕に行えるはずもなく、朝鮮半島等からの技術者（渡来民）の存在が考えられるところである。また、時代の先駆的な馬匹生産施設を長期にわたって維持・管理するには個人はもちろん小規模な集団によってこれを行うことは不可能で、そこにはかなり大きな勢力の存在を前提としなければ成り立たないことと思われる。しかし、これらの分析には政治的・社会的・経済的な時代の流れを汎日本的なレベル、さらには朝鮮半島等東アジアの動向も踏まえた上で総合的に分析する必要があると思われるが、あまりにも大きな問題であり、現時点で分析することは不可能である。

そこで、今回はまず坂上遺跡の「牧」前後の富士見村を中心とした遺跡の動向を検討し、当地に牧を支えた勢力の存在や牧が存在し得る条件があるかどうかを探ってみたい。

以下では簡単に遺構のまとめを行い、遺跡の動向を概観した上で若干の考察も行いたい。

(2) 遺構のまとめ

●方形区画遺構の区画は溝と柵列で構築されるが、溝主体の段階と柵列主体の段階が考えられた。

●遺構の時期は、純層堆積ではないが示準テフラの堆積状況から、溝主体の区画部分については榛名山二ツ

岳火山灰降下（６Ｃ初頭）前後、柵列主体の区画部分については浅間Ｃ軽石降下（４Ｃ中葉或は初頭）前後の時期が推測された。つまり、牧の区画方法は当初柵の形で行われ、その後溝（と土塁・柵？）による区画方法に変更された。また、溝跡と柵列にはそれぞれ構造改変を伴う造り変えが少なくとも１度は認められており、長期間にわたる継続使用が考えられた。

●区画遺構の時期をさらに細かく推定すると、柵列を構成する柱穴には浅間Ｃ軽石が多量に含まれるもの、少量含まれるもの、ほとんど含まないものの３タイプが認められた。このうち大量に含むものは浅間Ｃ軽石降下前後、少量含むものは軽石降下以降の埋没が考えられた。軽石をほとんど含まないものについては人為的・自然的な条件により軽石降下以降のものを含む可能性もあるが、柵列の機能期間を考えれば基本的に軽石降下以前に埋没し切っていたものと思われる。とすれば、当初の柵列の構築＝牧の設置は浅間Ｃ軽石降下以前の段階で、ある程度の時間的な隔たりが考えられる。柱穴の埋没に要する時間は諸条件により様々と思われるが、浅間Ｃ軽石の降下時期を４世紀中葉とすれば４世紀前半代に、４世紀初頭とすれば３世紀後半代～末葉と推定される。

●溝の時期は掘り変え後の溝の埋没開始時期がＦＡ火山灰降下前後であり、ＦＡ火山灰が純層堆積ではなく、間層を挟みＦＰ軽石を含む層が堆積することから、ＦＡ火山灰降下後の比較的早い段階で溝の埋没が始まったと考えられる。但し、掘り変え後にも溝の維持・管理（＝掘り直し）を行っていたとすれば、掘り変えの時期がＦＡ火山灰降下以降とは限らない。また、掘り変え前の溝の構築の時期はＦＡ火山灰降下以前で、ある程度の時間的な隔たりが考えられる。

●溝の長方形区画部分の規模は南北約170m、東西約65mである。溝の区画には北東部、南溝中央部、南東溝中央部の３ケ所に出入口施設（土橋）が設けられている。柵列にもＣ区柵列、Ｂ区柵列に出入口施設の設置が推定される。

●Ｂ区の遺構外から少量出土した古墳時代前期の土器は柵列の段階に伴うものと考えられる。

●遺構の性格については、類例に乏しく断定はできないものの、区画の内外に土杭や少数の柱穴以外の遺構が認められないことや、遺物を伴わないこと、さらに区画するだけで地形の改変を行っていないことなどから、現時点では「牧」とするのが最も妥当と思われる。また、柵列中から馬歯が出土していることや、後代の東国においては牛の存在が希薄[注2]であることなどにより「馬牧」の可能性が高いと考えられた。

●Ａ区の東西道路跡は位置的には柵列との関連が強く伺われるが、テフラの検出状況からは溝の時期にも使用されており、柵列から溝の時期までの継続使用が考えられた。また、Ｂ区の柵列は当然であるが、Ａ区南北道路やＢ区の東西・南北両溝も覆土の状況や、調査区域内から他の時期（縄文時代以外で）の遺構・遺物がほとんど検出されていない状況からすれば、これらも方形区画遺構に伴うものと考えられ、個別の組み合わせは明瞭ではないものの、これら全体で一連の遺構を形成していたものと推察された。

⑶　方形区画遺構柵列前後の遺跡の様相

坂上遺跡（第93図１）からは２点の弥生時代中期後半と推定される土器破片が出土したが、この時期の資料が出土したのは富士見村では初めてである。弥生時代中期前半も田中田遺跡（同図８）から土器破片が出土しているだけであり、後期も含めて明確な弥生時代の遺構は富士見村では検出されていない。時代・時期的にも古墳時代前期の牧との関連は考えられず、弥生時代中期後半の土器出土の意味するところは現段階では不明である。

古墳時代前期の遺跡も先述した田中田遺跡のほかは３遺跡があるに過ぎない。田中田遺跡は前期から後期

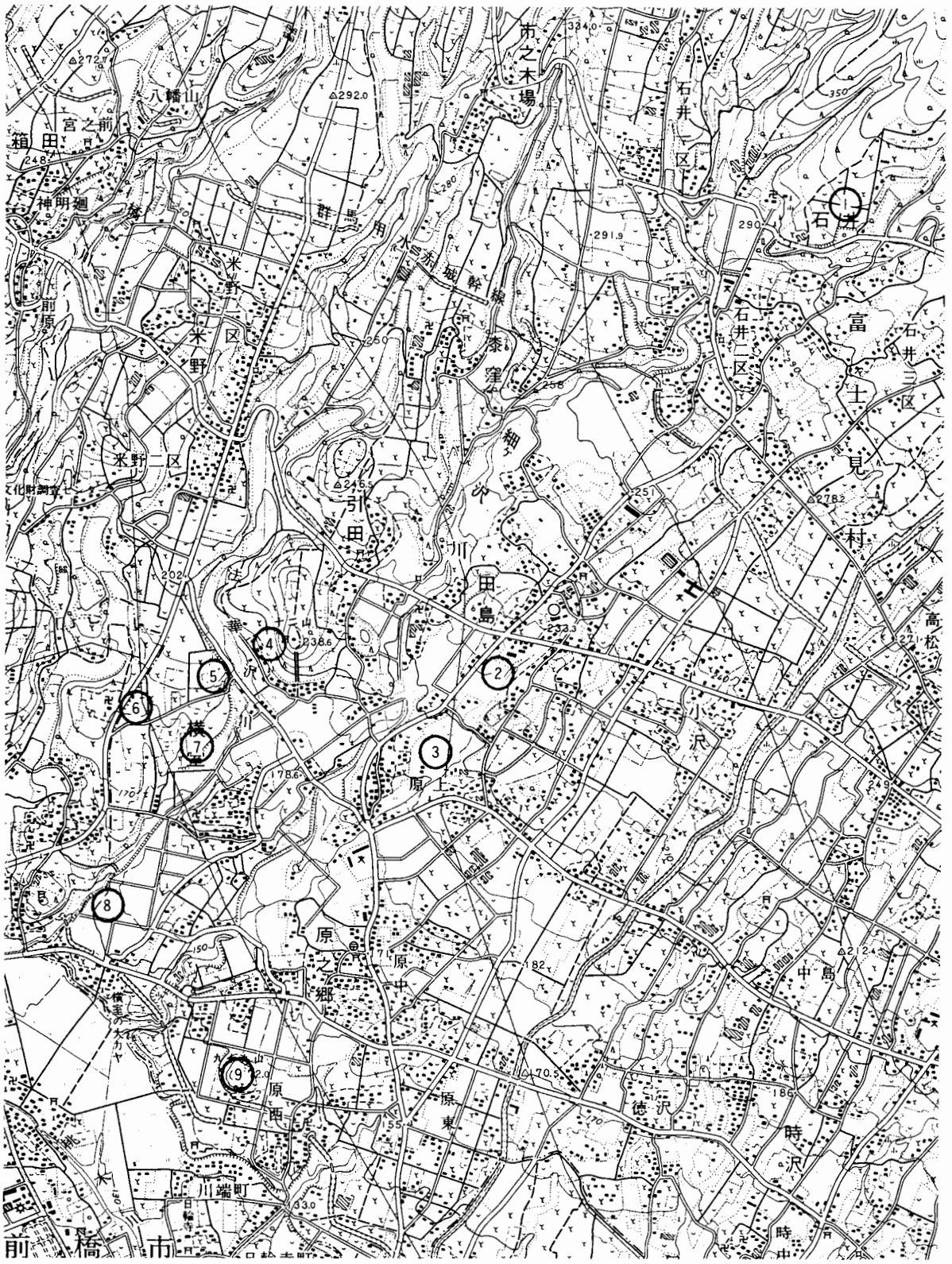
までほとんど間断なく継続する古墳時代の集落で、約4,400m²の調査範囲内から61軒の竪穴住居跡と台地を東西方向に横切って掘削された上幅10m以上(中段で6m)、最大幅20m以上、深さ3mの大溝と馬歯を出土した土坑（墓坑）1基が検出された。住居跡の時期的な内訳は前期が21軒、中期が17軒、後期が22軒、不明1軒とほとんど時期的な偏在は認められない。但し、細かい時期的な検証は行っていないが、後期初頭段階の1時期については住居跡が調査範囲内には認められていない。田中田遺跡は西方の河川部分を除いて調査区周辺の広範囲に展開する遺跡である。現況が水田であったため、地表面では遺物散布がほとんど認められず、明確な範囲は不明であるものの、試掘調査の結果等も参考にすれば優に5万m²を越える富士見村で最も大規模な遺跡の一つである。調査区内で検出されなかった時期の遺構が遺跡内に存在する可能性も否定できないものの、少なくとも調査区内では一時期、居住が途絶えるという事実は注意する必要があるが、この件に関しては後述したい。古墳時代前期のもう一つの遺跡は田中田遺跡と法華沢川を挟んで北方に位置する下庄司原東遺跡（同図7）である。ここからは竪穴住居跡1軒と前方後方形を含む4基の周溝墓が検出されており（これ以外に古墳時代後期と平安時代の集落を検出)、田中田遺跡との密接な関連が伺われる。尚、下庄司原東遺跡の概期の住居跡の覆土中に多量の浅間C軽石が検出されており、本村内でこのような浅間C軽石の堆積状況[注3]を示す遺構は住居跡と柱穴という違いがあるが、坂上遺跡とこの下庄司原東遺跡だけである。その北西に位置する上庄司原西遺跡（同図6）からも1基の方形周溝墓が検出されており、これも田中田遺跡に係わる墳墓の可能性が強いが、この場合谷地を挟んで東方に前期集落が存在する可能性もあり、また、西方の前橋市域の遺跡の存否が不明であるため確実性には欠ける。最後の遺跡は久保田遺跡（同図3）である。ここからは竪穴住居跡1軒と土坑1基が検出されただけであり、調査範囲の関係もあるが、いずれにしてもごく小規模な遺跡と思われる。

本村周辺の地域については、西方に隣接する北橘村ではこれまで関越分郷八崎遺跡で1軒の住居跡が検出されただけであったが、本年度調査が行われた北町遺跡で多数の住居跡が調査されており、かなり大規模な集落の存在が推測されている。東方に隣接する大胡町では上ノ山遺跡等数カ所で前期の遺跡を調査しているが、それほど大規模なものは無いようである。南方に隣接する前橋市では東日本最大の前方後方墳である前橋八幡山古墳を初めとして多くの遺跡が存在する。これらの中で最も近いのは、本村の南東に近接する芳賀東部団地遺跡で73軒の住居跡が検出されているが、一旦本期で居住が終息する。

弥生時代の周辺の状況についてもみると、大胡町は本村と同様に弥生時代の遺跡が希薄である。北橘村でもそれほど大きな遺跡は現在のところ確認されていないものの、関越分郷八崎遺跡をはじめとした数カ所で後期の集落が調査され、包蔵地を含めて10ケ所ほどが知られている。前橋市では東部の荒砥地域等で中期後半～後期の遺跡が調査されているが、本村周辺では今のところ調査例は無いようである。

いずれにしてもこのような周辺地域を含めた遺跡の分布状況を見れば、居住空白地帯であった本地域に古墳時代前期のある時点に忽然と田中田遺跡の集落が出現（下庄司原東遺跡と上庄司原西遺跡に墓域を形成）し、ここを拠点に水田開発を行うとともに、坂上遺跡で「牧」を営んだ可能性は高いと思われるが、田中田遺跡の古墳時代前期集落の始期と坂上遺跡方形区画遺構柵列の始期が厳密に同時期であるかの判断には尚検討を要し、本地域における弥生時代末～古墳時代前期の土器研究の進展と浅間C軽石降下時期の特定、さらには新たな時期判定の資料の出現[注4]を待つしかないと思われる。

群馬県では現在までに20数基の前方後方形周溝墓が調査されており、それぞれが小地域の首長層の墳墓と思われる。彼等が富を貯え勢力を伸長させていったベースに農業技術の改良を前提とした水田（畠も含む）の開発・経営があったのは当然であるが、少なくとも下庄司原東遺跡の前方後方形周溝墓に葬られた被葬者



1．坂上遺跡
2．白川遺跡
3．久保田遺跡
4．初室古墳
5．上庄司原1、2号古墳
6．上庄司原西遺跡（上庄司原4号古墳）
7．下庄司原東遺跡
8．田中田遺跡
9．九十九山古墳

0　1：25000　1km

第93図　関連する遺跡位置図

の生産基盤の一つは「牧」経営による馬匹生産であったと推察される。

(4) 方形区画遺構溝跡の時期の遺跡の様相

この時期の遺跡は明確には前述した田中田遺跡と白川遺跡（同図２）だけである。

田中田遺跡では一旦居住が中断する時期である。それに代わって出現するのが白川遺跡である。前後の時期で多少田中田遺跡集落と重複するが、最も集落が拡大するのが田中田遺跡から住居跡が検出されていない時期であり、限られた調査範囲や未調査遺跡の存在は考慮するにしても、両遺跡の盛衰には強い因果関係が伺える。位置的にみても白川遺跡は田中田遺跡と坂上遺跡のほぼ中間に位置しており、一時的に坂上遺跡の牧の管理拠点（並びに水田経営の拠点）を移したことが考えられる。尚、両遺跡ともにこの時期の竪穴住居跡の多くが焼失家屋であり、田中田遺跡の居住中断と白川遺跡からの回帰の原因として少なくとも２度の大規模な争乱があったことが推定される。さらに、この争乱が坂上遺跡の方形区画遺構の柵列から溝への構造改変の契機であった可能性も考えられる。

この時期を過ぎると急激に遺跡が増加するようである。既調査の集落遺跡は田中田遺跡と白川遺跡の他には下庄司原東遺跡と岩之下遺跡を数えるだけであるが、未調査の包蔵地の散布遺物には古墳時代後期～終末期の時期と思われるものがかなり多く認められる。本村唯一の前方後円墳である九十九山古墳（同図９）が築かれるのもこの頃であり、６世紀後半～７世紀には横室古墳群（既調査の陣場・庄司原古墳群や初室古墳を含む）や時沢古墳群、さらに大字米野～山口、大字原之郷といった地区にも古墳が築かれるようになる。馬具は既調査古墳８基中３基から轡、鉸具、鞍などが出土している。馬具出土古墳はすべて円墳で、主体部は横穴式石室である。時期は６世紀後半から７世紀の前半である。（同図４・５）

富士見村は群馬県の中では古墳の数が少ない地域である。特別有望な水田可耕地（畠作を含めて）を有しているわけでもない。しかし、坂上遺跡の牧廃絶後（同時期に、或いはその後坂上遺跡とは別の場所に新たな牧が設けられた可能性はある）であるが、前述した初期横穴式石室を有する前方後円墳である九十九山古墳や、群馬県内で30基に満たない数しか確認されていない截石切組積横穴式石室を有する上庄司原４号古墳の存在は、坂上遺跡の牧を前提としたとき、当地において穀物生産以外の生産基盤＝馬匹生産が存在し、当地＝馬匹生産技術（の伝統）が重要視されていたことを証するものと思われる。

(5) 馬歯について

これまで本村で出土した馬歯はわずか３件である。馬骨は出土していない。この内１点は中近世の寄居の堀跡から出土した。他の２点が坂上遺跡のＣ区柵列の柱穴中から出土したものと田中田遺跡の墓坑から出土したものである。田中田遺跡の墓坑は長径1.8m×短径1.2m、深さ0.4mで長円形を呈する。馬歯は掘り方の上部北端から出土しており、他に遺物は出土していない。埋葬の時期は墓坑掘削時に古墳時代前期の住居跡の一部を壊していることから、前期以降の時期であり厳密には不明というしかないが、周辺に古墳時代以外の遺構が認められないことから、古墳時代に属する可能性が高いと思われる。

(6) 若干の考察

古墳時代はいうまでもなく時代名に冠せられた古墳によって諸社会現象が代表される時代である。弥生時代の小規模な墳墓から古墳時代の大規模な古墳への変化は、その社会構造の変化とこれを経済的に支える農業生産力が飛躍的に拡大したことの証に他ならない。

汎日本的なレベルで国家統一に向けて胎動する小国家群が初期的な弥生時代の農耕社会から脱皮するには、まず、経済基盤の確立、中でも農耕技術の大幅な改良により農業生産力を増強する必要がある。この農耕技術の改良の条件としては、鉄の普及を前提とした道具の改良や新たな道具の発明とともに、新たな可耕地を大規模に開墾・耕作するための労働力が必要であることは言うまでもない。しかし、弥生時代の延長で人的な労働力に頼っていたのでは飛躍的な生産力の向上は達し得ない。他国を支配領域に組み入れることにより人口増加、耕作地の拡大を図っても、絶対的に農業生産力が増加するわけではない。もちろん、弥生時代以来かなり頻繁な朝鮮半島系を主とする渡来民(渡来の契機は別として)は想定でき、これによる人口増＝労働力増があるにしても、人口増だけで飛躍的な生産力の増強が果たせたとは思われない。なによりも彼等の先進的な知識や技術の果たした役割が大きかったものと思われる。この先進的な知識や技術の中に農業技術の改良方法、特に労働力の増強の方策として（牛）馬の活用があったことは十分考えられる。

近年、群馬県の子持村ではＦＡ火山灰に覆われた畠地上に多数の馬の蹄跡が検出されており、休閑放牧と推定されている。また同様にＦＰ軽石下の複数の集落内で家畜小屋が検出され、牛が飼育されていたことが脂肪酸分析により確認されており、馬の飼育も推定されている。これら集落の当時における階層的な位置は不明ではあるが、特別に上位の階層に属するとも思えず、これが農耕集落の一般的な様相とすれば、少なくとも当地における６世紀初頭段階の農耕集落ではかなりの数の馬や牛が飼育され、農耕労働の面で使役されていたことになる。一般の農民層（時に兵士となる可能性はある）にまで馬や牛が普及するまでにどれだけの時間がかかるかは不明というしかないが、数十年或いは百年単位の時間がかかることも十分考えられる。

一方、馬具の副葬や馬形埴輪の樹立に現れる騎馬の風習はまず４世紀末葉～５世紀初頭の北九州から始まり漸次東進し、６世紀前半代には関東以西の広範な地域から馬具の副葬が認められ、騎馬の風習が普及したと考えられている。本県でも馬具・馬形埴輪ともに５世紀末葉～６世紀初頭には出現している。このことは騎馬の風習に伴って馬及び馬匹生産技術の招来がなされたのではないことを物語っており、まず農耕技術の改良（労働力の増強）策として馬及び馬匹生産技術の導入が図られたものと推察される。

現在のほぼ群馬県に相当する上毛野地域は、古墳時代において東国屈指の有力地域であったことは、約12,000基ともいわれる古墳の存在や、前期の首長墳である前橋八幡山古墳・前橋天神山古墳、東国最大の前方後円墳である太田天神山古墳、或いは前橋市の総社古墳群など、古墳の数量や質的な観点から明らかである。しかし、弥生時代の当地の遺跡の状況からは東国の他地域に比較して卓越するような状況はまったく伺えず、先進的な畿内周辺などに比べれば社会構造的にもはるかに遅れた地域といってもよいと思われる。

このような当地が弥生時代的な社会から脱却し、抜きんでた勢力に成長できたのは東国他地域に先駆けて馬及び馬匹生産技術を導入し、これを基にいち早く経済的な発展をとげたこと以外には考えられない。さらに、これを当地の弥生社会が自律的に発展していった結果であるとは考えにくく、そこには外来の勢力の存在が考えられるところである。この点に関しては、これまでの先学の研究によって指摘されているように当地の石田川式土器文化の母体である東海系勢力の当地への進出によって成されたと考えるのが最も妥当であろう。さらに、この東海系の勢力が最新の技術を携えているということは、この勢力が比較的新しい時期の朝鮮半島等からの渡来民であるか、その構成員に渡来民を含んでいた可能性を示唆するものである。

(7) 文献史料について

文献史料の記述をそのまま史実とすることができないのは当然である。実在の可能性のある天皇（大王）でも古い時代のものほど年代的な創作があり、出来事の記述についても考古学的な資料を含めた他の資料に

よる検証を経た上で史実と認められるものは多くないとされている。このような状況の中で安易に文献資料を引くことは、厳に慎まなければならないと思うが、坂上遺跡の牧の存在を前提として文献資料に見える馬と上毛野氏[注5]に係わる記述について少し考えてみたい。

『日本書紀』の応神天皇15年８月条には百済王が阿直岐を遣わして、良馬２匹を貢上し、軽坂上厩で飼育させたという記述とともに、阿直岐の進言により上毛野君祖荒田別らを百済に派遣し、王仁を連れ帰ったと記されている。

坂上遺跡の牧を前提としたとき、この説話は俄然真実味を帯びてくる。しかし、この説話は荒田別が馬の飼育を行ったという記述ではない。上毛野で飼育したという記述でもない。この項に関する『古事記』の記述では良馬２匹が牡馬１匹、牝馬１匹となっており、馬匹生産＝牧の開始（時期）を示唆する説話と思われるが、荒田別に関する記述はない。さらに、応神天皇は実在の可能性の高い天皇とされているが、その治世は実際には４世紀末～５世紀初頭と推定されており、書紀の年代は史実ではない。

この説話について考える上でまず念頭におかなければならないのは、『日本書紀』天武天皇10年３月の条で、川嶋皇子以下皇族、貴族、官人12人に命じて帝紀と上古諸事の記定をさせており、このうちの官人の筆頭に大錦下上毛野君三千の名前が挙がっていることである。また、『日本書紀』持統天皇５年８月の条には上毛野氏ら18氏に祖先の墓記を上進させたことが記されている。これらが『記・紀』のどちらに係わるかは不明であるが、少なくとも『記・紀』が編さんされた時代、大和朝廷を構成する氏族の内でも上毛野君が重きを置かれ、上毛野氏の祖先伝承もまた重きを置かれて採録された可能性を示唆している。

これらのことから考えれば、上記の説話は阿直岐氏の祖先伝承の中にあった馬の飼育の開始ついての説話に上毛野君の祖先伝承の中の馬の飼育に関する説話を関係付け、百済派遣の説話とともに記述した可能性があると思われる。また、荒田別の度重なる派遣記事は、実際に行ったのか、或いはこの前後の時期に渡来したのかは不明であるが、朝鮮半島と深い関わりを持つという点では事実と思われる。さらに、坂上遺跡の牧の開始の推定年代（３世紀後半或いは４世紀初頭）と応神天皇15年＝西暦284年の年代がほぼ符合するのは、上毛野君の祖先伝承が何代前の誰某の時という形で伝承されたと考えられ、ある程度実際に近い年数の逆上りが可能だったためと思われる。つまり、この説話は応神天皇の治世という点を除けば馬の飼育の開始年代についてはほぼ事実としてもよいものと思われる。

応神天皇15年条で良馬２匹としている点にも注目される。日本書紀の編さん時に修飾的に良馬とした可能性もあり、上毛野君らの祖先伝承中も良馬となっていたかどうか不明であるが、仮にこれが実際に良馬とすれば、すでに駄馬或は農耕馬がいたことになる。しかし、招来当初の段階で使い分けが行われていたとは思われず、実際には駄用、農耕用その他の区別なく使われていたものと思われる。時には騎乗に使われた可能性もあるが、本格的に騎乗に用いられたのはやはり騎馬の風習と馬具が普及する５世紀以降と思われる。

上毛野君祖の荒田別という名前も示唆的である。実名であるかどうかは不明であるが、上毛野氏の祖先が新しい技術を携えて新田開発を行ったという農業技術者的な性格を表現したものとも考えられる。

さらに、荒田別以降の上毛野君祖や上毛野君の多くも朝鮮半島に派遣されていることが注意を引く。これらが事実であるかどうかを判断する術はないが、事実とすれば、彼地で先進的な諸文物や技術に触れる機会があったと考えるのが自然であり、帰還に際してそれら文物や技術者を帯同してきたことも十分考えられることである。

(8) 課　　題

坂上遺跡の古墳時代の牧の出現によって派生する問題・課題は多いと思われるが、現時点では類例や新たな遺構・遺物の出現を待つしかないとも思われる。

遺構では牧の類例の出土に期待されるが、溝や柵列（或は土塁）で区画するという遺構の性状から部分的な調査で牧と判断することは難しく、逆に言えば、これまでの調査資料の中にも牧の可能性を含むものが数多くあるとも思える。いずれにしても、古墳時代前期に限らず、５世紀代以降の牧も含めて類例の発見に期待したい。さらに、管理者の居住施設、馬小屋などの牧関連施設などもあげられる。

農耕関連遺構では水田・畠跡に（牛）馬耕の痕跡が認められるか、馬を用いた耕地（水田・畠）の開墾の痕跡が検出されるかどうかということであるが、やはり簡単には検出できそうもない。群馬県内で検出されるＦＡ火山灰層下の水田の多くはいわゆるミニ水田であり、この小区画に牛馬耕の痕跡を認めることは困難である。大区画ごとに牛馬を用いて鋤起こしを行った後で人力により小区画の畦立てを行ったとも考えられるが、現在のところ検証されていない。

遺物では木製品の馬鍬・犁、さらに５世紀以降であれば鉄製品の中に(牛)馬耕に関係するものはないか、埴輪その他の造形物に農耕の情景を表したものがないかなどが考えられるものの、これも調査の進展に待つしかないと思われる。

古墳時代は勿論であるが、律令時代以降においても農耕馬や駄馬についての史・資料は乏しい。馬の招来の時期も問題であるが、それよりも馬匹生産技術がいつどのように定着・普及していったのかということが最も問題である。馬の活用場面での痕跡に期待できないとすれば、結局のところ痕跡を残す生産施設である牧及びその管理施設等の調査例の蓄積に待つ他はないと思われる。

(9) おわりに

群馬県の県名は古代の群馬郡にちなんで付けられたものである。群馬という地名は古くから当地が馬の産地であったことを表すと思うが、郡名をつけた当時の馬の産地が群馬県域に限られるわけはなく、強いて言えばやはりより早い段階から馬の産地であったという伝承によって付けられたものと思われる。いずれにしても、結果的に群馬県は日本で唯一県名に馬を含んでいる。

富士見村には現在群馬県の畜産試験場がある。その一角には馬事公苑が併設されている。この馬事公苑は昭和58年に開催された「あかぎ国体」の際に馬術競技会場となったことを契機として開設されたものであり、畜産試験場の広大な敷地があったために馬術競技用地となったに過ぎない。畜産試験場は大正時代に有畜農業を目指して開設した種畜場から発展したものであり、当地の地勢的な要素（県庁からの距離や有畜農業への適性など）から場所の選定が成されたものと思われるが、やはり必然的なものではない。しかし、古墳時代前期初頭の頃に初源的な牧が設けられた当地に現在でも畜産試験場があり、馬事公苑があるという事実には深い歴史の縁を感じざるを得ない。

発掘調査の段階では方形区画遺構の性格は不明のままであった。「牧」の可能性については発掘調査終了後に子持村教育委員会の石井克己氏と北橘村教育委員会の長谷川福次氏に指摘されるまで、まったく思い浮かぶことはなかった。遺構の時期についても溝や柱穴、或いは倒木痕のテフラの堆積状況からテフラ降下前後の廃絶の可能性も考えたものの確信はなかった。正直なところ現在でも100％の確信は持てないでいる。

坂上遺跡の今回の調査部分は既に造成され、完全に消滅した。しかし、少なくとも溝による区画については、調査地の北側に続いている。未調査区域にどの程度の遺構が存在するかは不明であるが、地形的には今

回の調査遺構と同様な区画が存在する可能性もある。遺構の残存状況にもよるが、遺跡の重要性からみれば基本的には新たな開発は避け、保存するべきと考える。発掘調査自体に不備が多く、本報告書では十分な資料提供ができなかったため、できればなるべく早い段階で遺跡の範囲と牧の全体構造の確認、さらには構築～廃絶時期を絞り込むための学術的な調査を行いたいと考えている。

注

注１：浅間Ｃ軽石の降下時期についてはこれまで４世紀中葉とされてきたが、近年では土器の観点から４世紀初頭或いは３世紀末葉まで逆上るという見解が出されている。（一連の友廣哲也氏の文献による）

注２：後項でも触れているが、子持村の家畜小屋では牛が飼われており、馬と同じ牧内かどうかは不明であるものの、この段階ですでに牛の飼育が行われていた可能性もある。

注３：軽石の間に土（暗褐色土）が入り込んでいるような状態である。標準的な堆積状態はあくまで黒色土の中に多量の軽石が含まれている程度であり、なぜこのような堆積状態になるのかは現時点では不明というしかない。

注４：田中田遺跡と坂上遺跡の未調査区域の調査により、田中田遺跡の古墳時代集落の始期と坂上遺跡の牧の開始時期を判別できる新たな資料が出現すること。

注５：上毛野氏（君）自体が一系とは限らないが、この時点では上毛野地域と深く関わりを有し、上毛野地域の諸事（事件）を統合して伝承していると仮定する。

主要参考文献

『群馬県史』 通史編１　原始古代１　1990
『群馬県史』 通史編２　原始古代２　1991
『群馬県史』　資料編４　文献　1985
『富士見村誌』 富士見村役場　1954
友廣哲也 「古式土師器出現期の様相と浅間Ｃ軽石」『群馬の考古学』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988
友廣哲也 「群馬県における古墳時代前期の土器様相」『群馬考古学手帳』 群馬土器観会　1991
友廣哲也 「群馬県の古墳文化初頭期の検討」『古代』 早稲田大学考古学会　1992
直木孝次郎 『日本神話と古代国家』 1990　講談社
山川守男 「古墳時代馬小考」『研究紀要』　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1992
『田中田・窪谷戸・見眼遺跡』 富士見村教育委員会　1986
『向吹張・岩之下・田中・寄居遺跡』 富士見村教育委員会　1987
『白川・由森・久保田遺跡』 富士見村教育委員会　1989
『西上原・東上原・米野田遺跡』 富士見村教育委員会　1990
『陣場・庄司原古墳群』 富士見村教育委員会　1991
『広面遺跡』 富士見村教育委員会　1992
『赤城・長泉寺遺跡』 富士見村教育委員会　1993

附編　坂上遺跡の自然科学分析

古環境研究所

Ⅰ．坂上遺跡のテフラ分析

1．はじめに

群馬県には多くの火山が分布しており、人類紀とも呼ばれる第四紀を通じて大量の火山砕屑物(簡単に「テフラ」と呼ばれる）を噴出してきた。これらのテフラの中には、直接または間接的に年代が得られているものがあり、それらとの層位関係から地形の形成年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。このような手法は「火山灰編年学（テフロクロノロジー)」と呼ばれ、考古学、地形学、地質学などに盛んに利用されている。テフラ層がとくに多い群馬県域は、全国的にみてもこの種の研究が盛んな地域となっている。

赤城火山南西麓の火山原面上に位置する坂上遺跡の発掘調査でも、良好な火山灰土の断面が作成された。そこで野外地質調査とテフラ検出分析を合わせて行い、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラの降灰層準を求めて、土層断面中に時間軸を設定することを試みた。また方形区画遺構西溝の北端部において覆土を対象としてテフラ検出分析を行い、遺構の構築年代に関する資料を得ることを試みた。

2．地質層序

坂上遺跡の標式的な火山灰土の層序が認められたＥ南区深掘断面の土層柱状図を図１に示す。火山灰土は、下位の厚いローム層と上位の黒ボク土に大きく区分される。黒ボク土の上部には、上下の黒褐色土と比較して暗褐色と色調の薄い、いわゆる淡色黒ボク土（早田，1990）が認められる。

Ｅ南区深掘断面では肉眼観察によって10層のテフラが確認された。後述するように、これら以外にテフラ検出分析により２層が、また方形区画遺構西溝北端部ではこれらとは別に３層のテフラが検出された。これら合計15層のテフラについて、下位より仮に坂上第１～15テフラ（Sk-１～15）と呼ぶことにする。以下、各テフラの特徴について述べる。

坂上第１テフラ（Sk-１）：層厚20cm以上の黄色風化軽石層。この軽石はその層相から約4.0～4.4万年前に榛名火山から噴出した榛名―八崎軽石層（Hr-HP，新井，1962，鈴木，1976，大島，1986）に同定される。

坂上第２テフラ（Sk-２）：ローム層中に濃集する赤褐色スコリア。スコリアの最大径は６㎜。このスコリアの起源については不明な点が多いが、岩相から浅間火山起源の可能性が考えられる。

坂上第３テフラ（Sk-３）：層厚４cmの成層した降下テフラ層。下位より黄白色細粒火山灰層（層厚２cm)、細粒の黄色軽石層（層厚２cm)、灰色粗粒火山灰層（層厚１cm）の連続から構成されている。このテフラは、層相から考古学研究者の間で「八崎火山灰」と呼ばれているテフラに相当する。この八崎火山灰について、早田（1990）は榛名火山を起源とするテフラと考えている。

坂上第４テフラ（Sk-４）：いわゆる暗色帯の上位に認められる黄灰色風化火山灰層。

坂上第５テフラ（Sk-５）：暗色帯中に濃集する橙色風化軽石。軽石の最大径は８㎜。この軽石はその層位や層相から、約1.6～2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間―板鼻褐色軽石群（As-BP Group，新井，1962，

町田ほか，1984）の最下部、浅間一室田軽石（As-MP，森山，1972，早田，1991）に同定される可能性が大きい。

坂上第6テフラ（Sk-6）：層厚4cmの成層した降下テフラ層。このテフラは下位より層厚2cmの比較的粗粒の黄橙色軽石層（軽石の最大径：7mm）と層厚2cmの粗粒の黄灰色火山灰層（軽石の最大径：3mm）から構成されている。このテフラは、As-BP Groupの一部に同定される。

坂上第7テフラ（Sk-7）：炭化物を多く含む層厚2cmの暗褐色土を挟んでSk-6の上位に認められる層厚6cmの橙色軽石層。灰色の細粒岩片を多く含む。含まれる軽石の最大径は7mm。このテフラも、As-BP Groupの一部に同定される。

坂上第8テフラ(Sk-8)：層厚14cmの比較的粗粒の黄橙色軽石層。最大径11mmの軽石に富む。このテフラも、As-BP Groupの一部に同定される。

坂上第9テフラ（Sk-9）：層厚7cmの黒色粗粒火山灰層。最大径6mmの軽石を含む。このテフラも、As-BP Groupの一部に同定される。

坂上第10テフラ（Sk-10）：層厚21cmの黄橙色軽石層。よく発泡した最大径5mmの軽石を含む。軽石は丸みを帯びており、斑晶は少ない。このテフラは、軽石の岩相などから約1.5万年前に浅間火山から噴出した浅間一白糸軽石（As-SP，町田ほか，1984）に同定される。

坂上第11テフラ（Sk-11）：E南区深掘断面におけるテフラ検出分析で検出されたガラス質火山灰。

坂上第12テフラ（Sk-12）：方形区画遺構西溝北端において溝の覆土の基底部で認められた細粒の軽石。軽石はよく発泡しており、その最大径は6mm。この軽石は、4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C，新井，1979，石川ほか，1979）に由来すると考えられる。

坂上第13テフラ（Sk-13）：方形区画遺構西溝北端において溝の覆土の基底部で認められた白色粗粒軽石。最大径23mmの軽石が含まれている。この軽石は、その層位から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名一二ツ岳火山灰（Hr-FA，新井，1979，坂口，1986）に由来すると考えられる。

坂上第14テフラ（Sk-14）：方形区画遺構西溝北端において溝の覆土の下部で認められた白色粗粒軽石。最大径23mmの軽石が含まれている。Sk-12やSk-13が含まれる土層とこのSk-14の軽石が含まれる土層の間には、層厚14cmの軽石に乏しい暗褐色土が認められる。この土層は、これらのテフラの間に時間間隙が存在していることを示唆している。このことから、この軽石については6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名一二ツ岳軽石（Hr-FP，新井，1962，1979，坂口，1986）に由来している可能性が考えられる。

坂上第15テフラ（Sk-15）：方形区画遺構西溝北端において溝の覆土の中部で認められた層厚2cmの黄褐色軽石層。含まれる軽石の最大径は9mm。

3．テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

群馬県下の黒ボク土には、多くのテフラが認められる(早田，1990)。そこで野外地質調査によりテフラが検出されなかったE南区深掘断面の黒ボク土を中心に、テフラ検出分析を試みた。また方形区画遺構西溝覆土で認められたSk-15についても、その特徴を観察するためテフラ検出分析を行った。

分析の手順は、次の通りである。

1）試料10gを秤量。

2）超音波洗浄装置により、泥分を除去。

3）80℃で恒温乾燥。

4）実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

1）E南区深掘断面

テフラ検出分析の結果を表1に示す。試料番号1および2には、細粒の白色軽石が含まれている。軽石の発泡は比較的よく、斑晶に斜方輝石が認められる。この軽石は、その特徴からAs-Cに由来すると考えられる。

一方、火山ガラスは試料番号10以上のいずれの試料にも比較的多く含まれている。火山ガラスの形態は軽石型が多く、少量のバブル型も認められている。多くの火山ガラスの色調は透明である。ただし淡色黒ボク土の下位の試料番号5および7には、褐色のバブル型がごく少量含まれている。この特徴的な火山ガラスは、約6,300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，町田・新井，1976）に由来すると考えられる。

またSk-4に相当する試料番号11には、透明のバブル型火山ガラスが多く認められた。この特徴からSk-4は約2.1-2.2万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976）に同定される。

2）方形区画遺構西溝覆土

Sk-15に相当する試料番号1には、最大径9.1㎜の淡褐色軽石が多く含まれている。軽石の中には、褐色の部分と白色の部分が縞状に混じったいわゆる縞状軽石や白色の軽石も含まれている。斑晶には、斜方輝石が認められる。軽石の特徴から、このテフラは1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B，新井，1979）のすぐ上位にある浅間一粕川テフラ（As-Kk，早田，1991）に同定される。このAs-Kkの噴出年代については不明な点が多いものの、As-Bとの層位関係からAs-Bの噴出年代にかなり近いものと推定される。

4．考　　察

(1) 淡色黒ボク土の年代について

E南区深掘断面において、淡色黒ボク土の下位の黒ボク土中よりK-Ahに由来する火山ガラスが認められた。このことから、淡色黒ボク土の形成開始年代は約6,300年前より新しいものと考えられる。一方、淡色黒ボク土にはAs-Cに由来すると考えられる軽石が検出された。しかし量が非常に少ないことなどから、その降灰層準が必ずしも淡色黒ボク土中にあるとは断言できない。ここでは淡色黒ボク土の形成年代は約6,300年前以降と考えておく。

(2) 方形区画遺構西溝の構築年代について

方形区画遺構西溝の覆土の基底部には、純層として認められなかったものの、As-CおよびHr-FAの軽石を含んだ土層が認められた。このことからその構築年代については、Hr-FA降灰すなわち6世紀初頭に比較的近い可能性が考えられる。

5．小　結

坂上遺跡において野外地質調査とテフラ検出分析を合わせて行った結果、約4.4万年前以降に噴出した、じつに15層ものテフラが検出された。これらのテフラは、下位より榛名―八崎軽石(約4.0-4.4万年前)、給源・年代不明のスコリア、榛名―八崎火山灰、姶良Tn火山灰（約2.1-2.2万年前)、浅間―板鼻褐色軽石群（約1.6-2.1万年前）のうちの５層、浅間―白糸軽石（約1.5万年前)、鬼界アカホヤ火山灰（約6,300年前)、浅間Ｃ軽石（４世紀中葉)、榛名―二ツ岳火山灰（６世紀初頭)、榛名―二ツ岳軽石（６世紀中葉)、浅間―粕川テフラ（1108年に比較的近い年代）である。これらの示標テフラとの層位関係から、約6,300年前以降に色調の薄い淡色黒ボク土が形成されたことが明らかになった。また方形区画遺構西溝の構築年代が、６世紀初頭に比較的近い年代であることが推定された。

富士見村では、以上のテフラのほかにも約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間―板鼻黄色軽石（As-YP，新井，1962，町田ほか，1984)、約1.1-1.2万年前に浅間火山から噴出した浅間―草津黄色軽石（As-YPk，新井，1979，町田ほか，1984)、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ(As-B)、1783（天明３）年に浅間火山から噴出した浅間Ａ軽石（As-A）などが検出される可能性がある。これらの示標テフラを利用することにより、様々な遺物や遺構の編年学的な研究が可能である。今後引き続いてテフラを利用した調査が期待される。

〔文　献〕

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.157，p.41-52.

石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一（1979）火山堆積物と遺跡Ｉ．考古学ジャーナル，no.157，p.3-40.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰―姶良Tn火山灰の発見とその意義―．科学，46，p.339-347.

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学―考古学研究と関係するテフラのカタログ―．古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p.865-928.

森山昭雄（1972）榛名山東・南山麓の地形―とくに軽石流の地形について―．愛知教育大学地理学報告，36・37，p.107-116.

大島　治（1986）榛名火山．日本の地質「関東地方」編集委員会編「関東地方」，335p.

坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.

早田　勉（1990）群馬県の自然と風土．群馬県史通史編，１，p.35-129.

早田　勉（1991）浅間火山の生い立ち．佐久考古通信，no.53，p.2-7.

鈴木正男（1976）過去を探る科学．講談社．234p.

表1　坂上遺跡E南区深掘断面のテフラ検出分析

試料	軽石			火山ガラス		
	量	色調	最大径(mm)	量	形態	色調
1	＋	白	2.2	＋＋	pm＞bw	透明
3	＋	白	1.9	＋＋	pm＞bw	透明
5	－	－	－	＋＋	pm＞bw	透明，褐
7	－	－	－	＋＋	pm＞bw	透明，褐
9	－	－	－	＋＋	pm＞bw	透明
10	－	－	－	＋＋	pm＞bw	透明
11	－	－	－	＋＋＋	bw＞pm	透明

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，＋：少ない，
－：認められない．pm：軽石型，bw：バブル型．

表2　坂上遺跡方形区画遺構西溝のテフラ検出分析

試料	軽石			火山ガラス		
	量	色調	最大径(mm)	量	形態	色調
1	＋＋＋	淡褐，白	9.1	＋＋	pm＞bw	淡褐，透明

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，＋：少ない，
－：認められない．pm：軽石型，bw：バブル型．

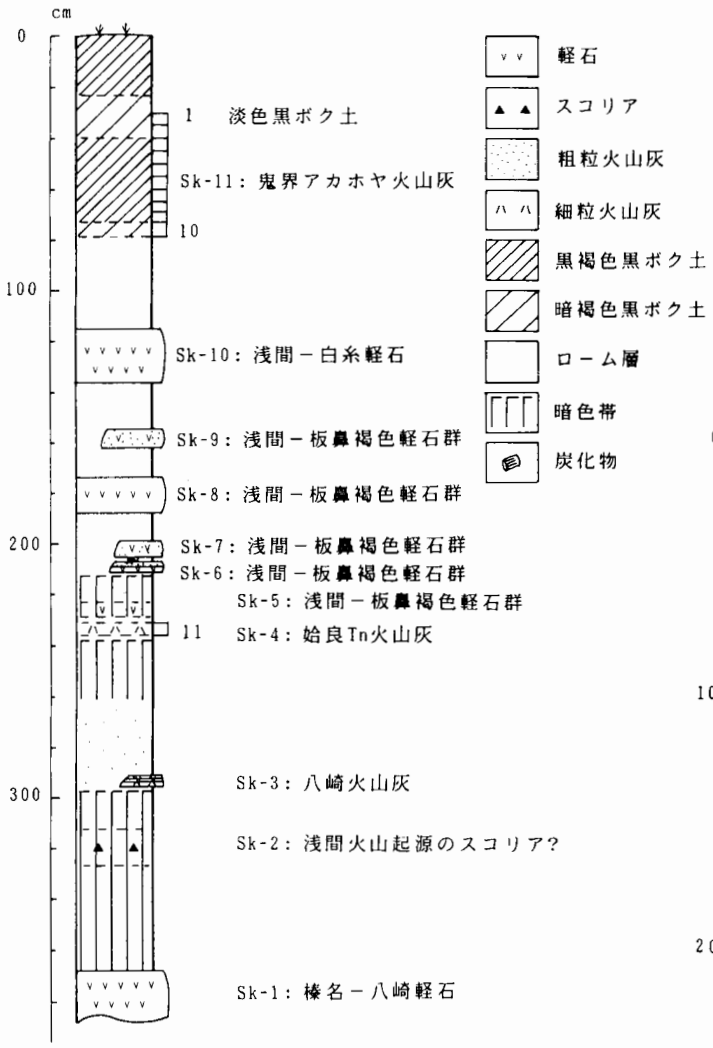


図１　坂上遺跡Ｅ南区深堀断面の土層柱状図
数字は、テフラ検出分析の試料番号

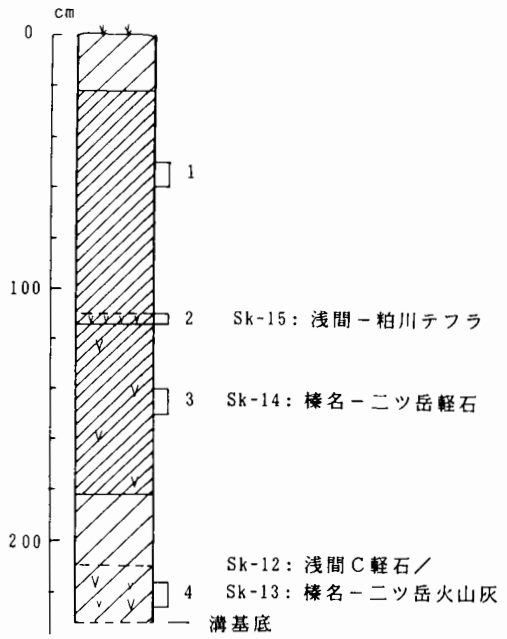


図２　坂上遺跡方形区画遺構西溝北端の土層柱状図
数字はテフラ検出分析の試料番号

II．坂上遺跡の植物珪酸体分析

1．はじめに

植物珪酸体は、植物体内で形成されたガラス質の細胞であり、植物が枯れた後も微化石(プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体（プラント・オパール）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定や古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987)。

本章では、同分析を用いて、坂上遺跡における古植生および古環境の推定を試みた。

2．試　　料

試料は、E南区深掘断面において、ローム層およびその上部の黒ボク土について採取された。試料数は19点である。採取層準の詳細については第Ⅰ章を参照されたい。

3．分 析 法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976)」をもとに、次の手順で行った。

(1) 試料の絶乾（105℃・24時間)

(2) 試料約１ｇを秤量，ガラスビーズ添加（直径約40μm，約0.02ｇ）

※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

(3) 電気炉灰化法による脱有機物処理

(4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間)

(5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去，乾燥

(6) 封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成

(7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

4．結果および考察

Hr-HP直上層（試料19）から現表土（試料１）までの層準について植物珪酸体分析を行った。その結果、Hr-HP直上層からAT直上までの層準（試料14～19）では、タケ亜科B1タイプ（クマザサ属など）が多量に検出された（図１)。その他の分類群では、タケ亜科A1aタイプ（ネザサ節など）や不明Bタイプ（ウシクサ族類似）などが見られたが、いずれも少量である。

タケ亜科B1タイプ（クマザサ属など）は、As-BP Gruop層準（試料10～13）ではやや減少傾向を示すが、As-SP直下層（試料９）では著しく増加し、その上位のローム層（試料７，８）でも圧倒的に卓越している。なお、タケ亜科A1aタイプ（ネザサ節など）はATより上位の層準ではまったく検出されなかった。

黒ボク土との漸移層（試料６）では、タケ亜科B1タイプ（クマザサ属など）は急激に減少し、代わってタケ亜科A1aタイプ（ネザサ節など）やウシクサ族（ススキ属など）、不明Ｂタイプ（ウシクサ族類似）の増加傾向が認められた。タケ亜科A1aタイプ（ネザサ節など）は黒ボク土層（試料３～５）では急激に増加し、その上位の淡色黒ボク土（試料２）および現表土（試料１）では、さらに増加して圧倒的に卓越している。なお、現表土ではイネやムギ類、キビ族なども検出された。

以上の結果から、本遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。Hr-HP（約4.0-4.4万年前）直上層からローム層の最上部までの層準では、おおむねクマザサ属を主体とするイネ科植生であったものと推定され、とくにAs-SP（約1.5万年前）直下層では同植物の生育が旺盛であったものと考えられる。AT（約2.1-2.2万年前）より下位の層準ではネザサ節なども少量見られたが、As-BP Gruopからローム層最上部までの層準ではクマザサ属が圧倒的に卓越しており、その他の分類群はほとんど見られなかったものと推定される。クマザサ属は比較的寒冷なところに生育していることから、ローム層の堆積当時は比較的寒冷な気候条件で推移したものと推定される。

その後、黒ボク土との漸移層では、何らかの原因でクマザサ属が急激に減少し、代わってネザサ節やススキ属などが増加したものと推定される。ネザサ節は比較的温暖なところに生育していることから、この時期に寒冷から温暖への環境変化があった可能性が考えられる。

黒ボク土層の最下部から現表土にかけては、ネザサ節を主体としススキ属なども見られる草原植生が継続されたものと推定される。ネザサ節やススキ属は森林の林床では生育しにくいことから、遺跡周辺の当時の植生は森林で覆われたような状況ではなく、ネザサ節などが生育するような比較的開かれた環境であったものと推定される。なお、現表土では、イネやムギなどを栽培する農耕が行われていたものと推定される。

５．ま と め

以上のように、ローム層の堆積当時はクマザサ属を主体とするイネ科植生が継続されたものと推定されるが、ローム層と黒ボク土層との境で大きな植生変化が認められ、黒ボク土層ではネザサ節を主体としススキ属なども見られる草原植生に移行したものと推定される。このように植生が大きく変化した原因として、１）この時期に寒冷から温暖への気候変化があったこと、２）この時期に森林植生が破壊されネザサ節やススキ属などの草原植生が維持されたことなどが考えられる。これと同様の植生変化は群馬県内およびその周辺でも認められており（杉山ほか，1992）、比較的広い地域における環境変化を反映している可能性が考えられる。

なお、タケ亜科やススキ属はその有用性から燃料や道具、住居の屋根材や建築材などとして盛んに利用されていたものと考えられる。とくに笹類は鹿などの草食動物の食料としても重要であったものと考えられる。

〔参考文献〕

杉山真二．1987．遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第２号：27-37

杉山真二．1987．タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号：70-83.

杉山真二・前原 豊・大工原 豊．1992．植物珪酸体（プラント・オパール）分析による遺跡周辺の古環境推定．日本文化財科学会第９回大会研究発表要旨集，14-15.

藤原宏志．1976．プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―．考古学と自然科学，９:15-29.

表１　坂上遺跡Ｅ南区深堀断面における植物珪酸体分析結果

（単位：×100個/ｇ）

分類群	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	12	14	15	16	17	18	19
イネ科																			
イネ	29																		
ムギ類(穎の表皮細胞)	7																		
キビ族(ヒエ属など)	7																		
ウシクサ族(ススキ属など)	29	14	13	31	21	6	20												
シバ属	7																		
不明Aタイプ(キビ族類似)	29	21		15		6							7	23				15	
不明Bタイプ(ウシクサ族類似)	103	49	133	54	69	48				7			15	31		21	8	15	7
不明Cタイプ(Bタイプの大型)				8	7				7									7	
表皮毛起源	22	14	33	15	14	12	20	7	7		7	8		15	15	35	38	22	20
茎部起源					7				14		14								
棒状珪酸体	96	168	245	177	158	72	20	28	28	41	41	60	59	69	37	70	84	60	41
その他	191	154	312	369	192	355	150	203	213	237	289	331	331	371	207	217	276	284	237
タケ亜科																			
A1aタイプ(ネザサ節など)	987	797	749	422	329	72								39	15	49	23	67	41
B1タイプ(クマザサ属など)	15	35	27	23	48	66	382	372	766	169	206	293	353	525	103	391	369	351	439
B2タイプ(メダケ節など)	29	35	7	8															
B2タイプ(マダケ属など)		7																	
その他	346	363	265	276	137	120	129	189	298	88	241	256	199	178	111	161	177	343	297
樹木起源													7						
植物珪酸体総数	1899	1656	1784	1397	980	759	722	800	1333	542	797	947	971	1251	488	944	975	1164	1081

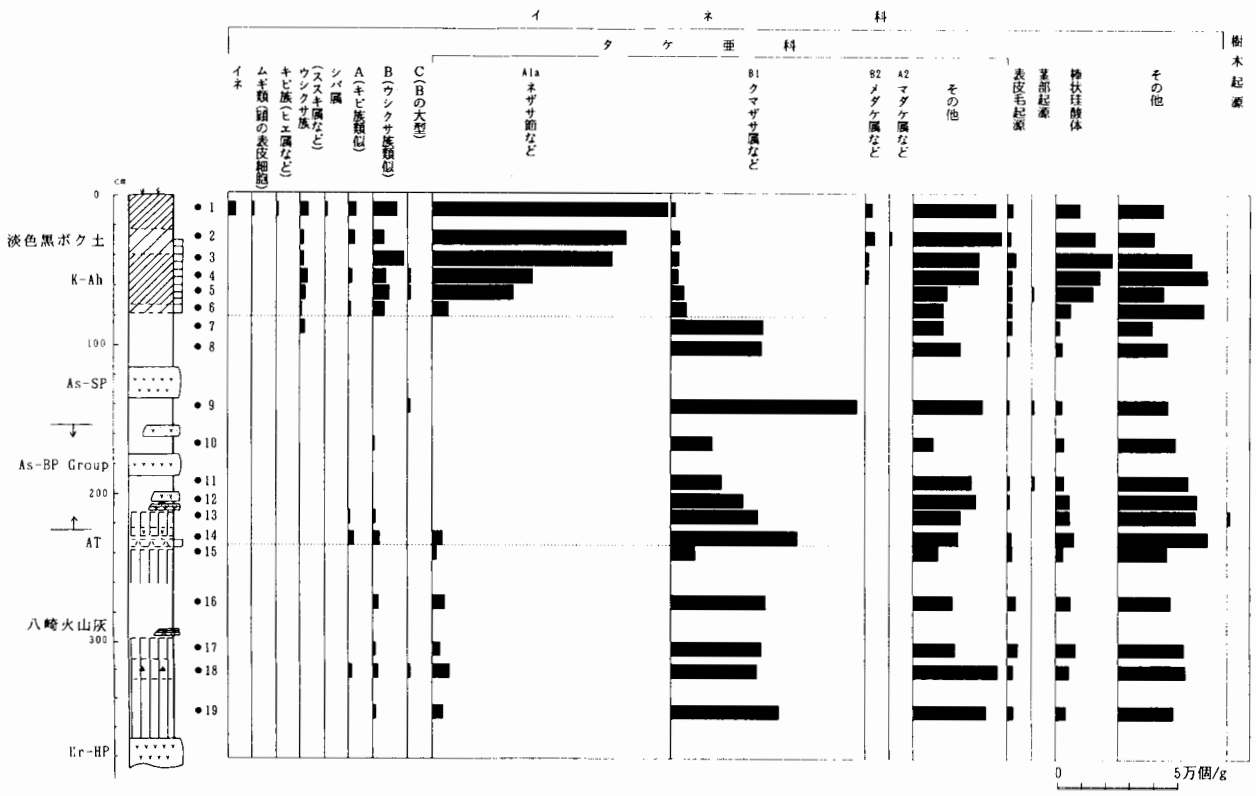


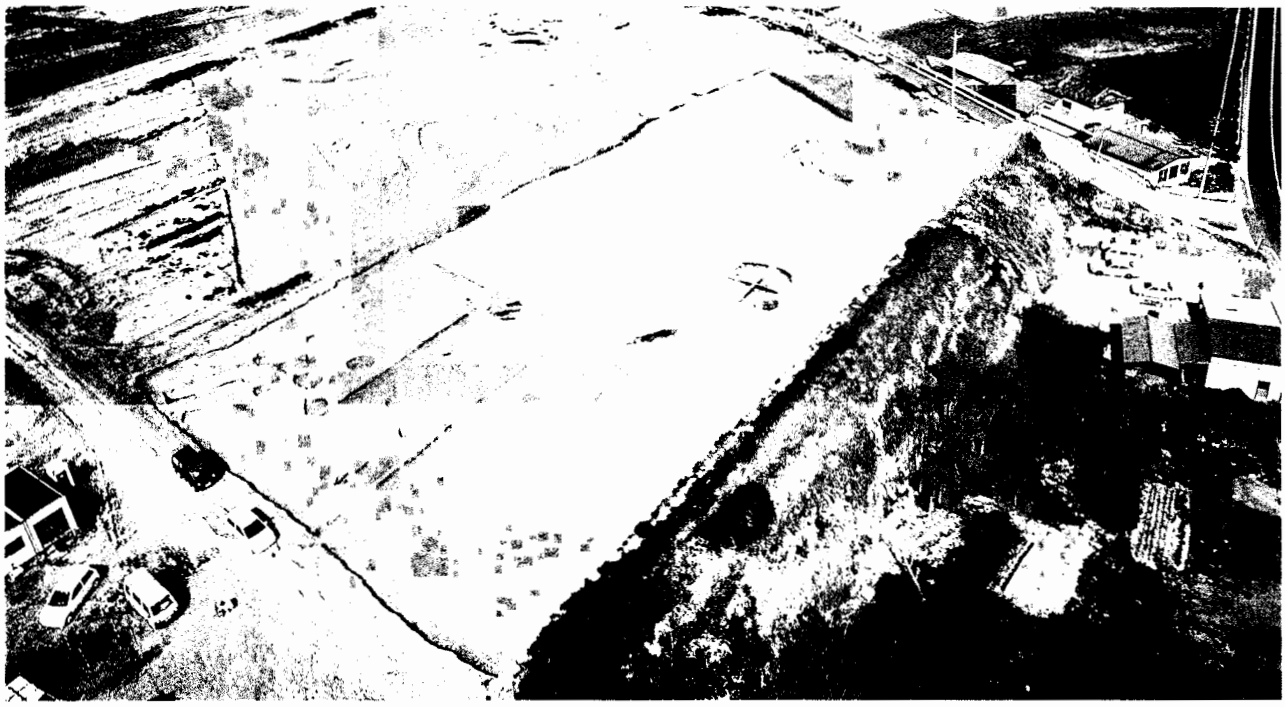
図１　坂上遺跡Ｅ南区深堀断面における植物珪酸体分析結果

写　真　図　版

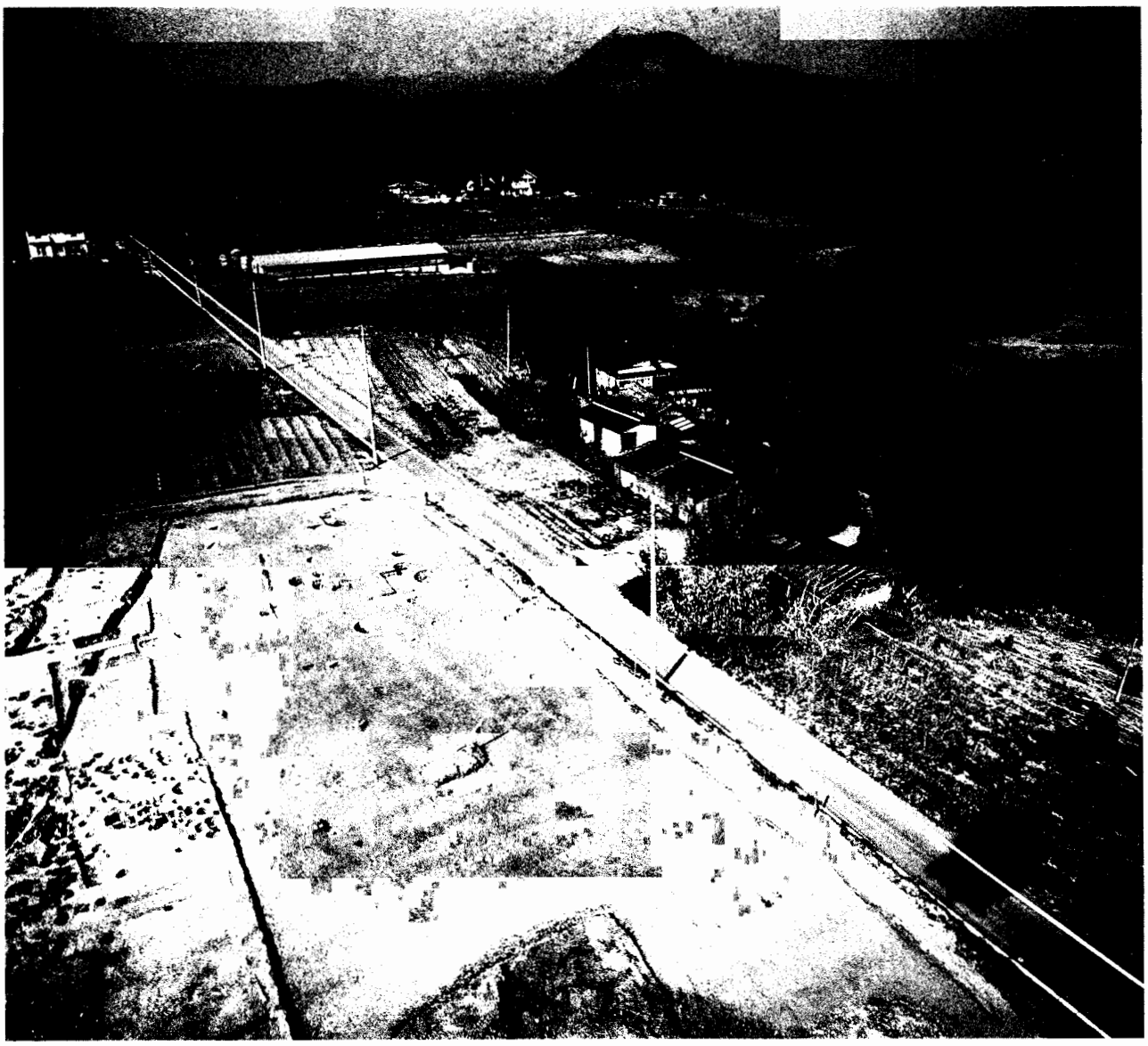
1．坂上遺跡（南上空から）

1．A区全景（上が北）

2．B区全景（上が北）



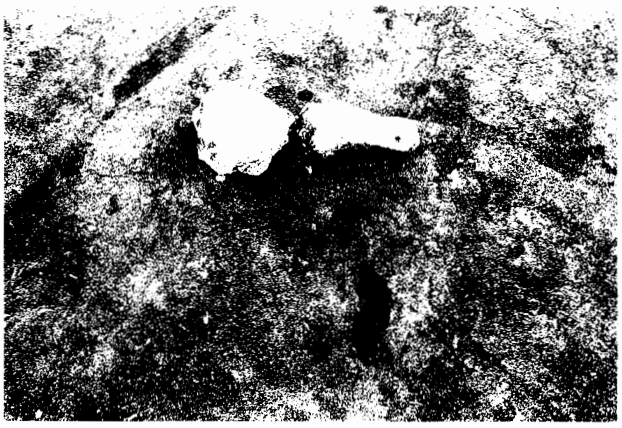
1．E南区全景（南西上空から）



2．F区縄文調査区北半部（南上空から）

PL　4 〈縄文時代住居跡、竪穴状遺構〉

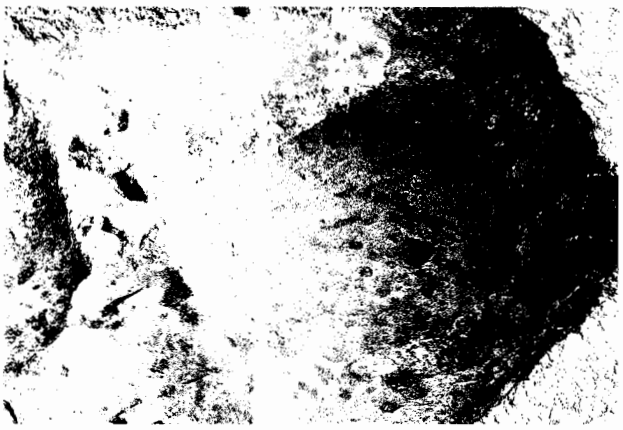
1．1号住居跡（北から）



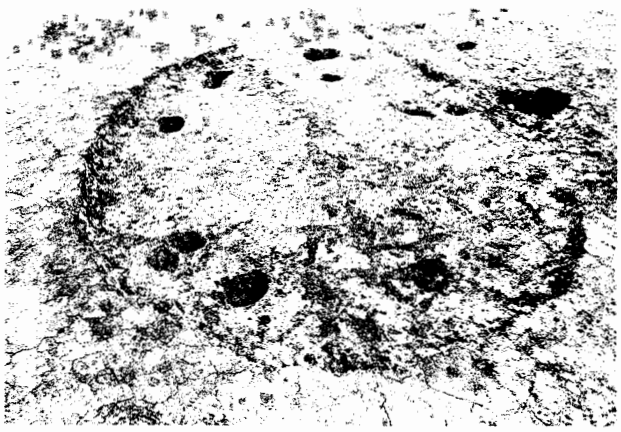
2．1号住居跡炉（東から）

3．2号住居跡（東から）

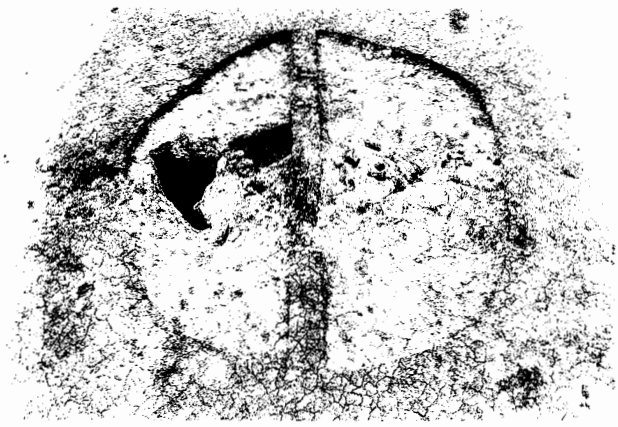
4．2号住居跡1号土坑（東から）



5．2号住居跡2号土坑（北から）



6．A区1号竪穴状遺構（北から）

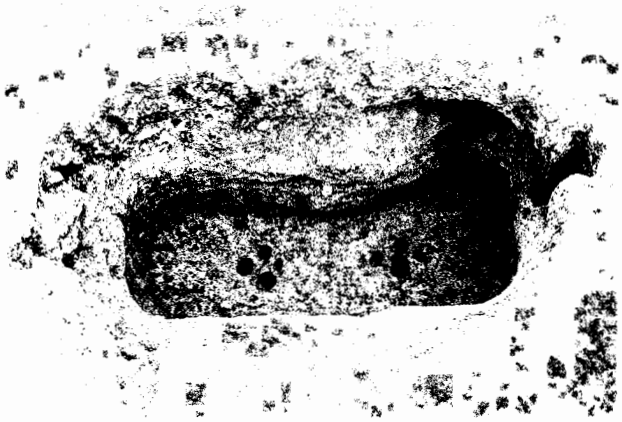


7．F区1号竪穴状遺構（東から）

8．F区2号竪穴状遺構（東から）

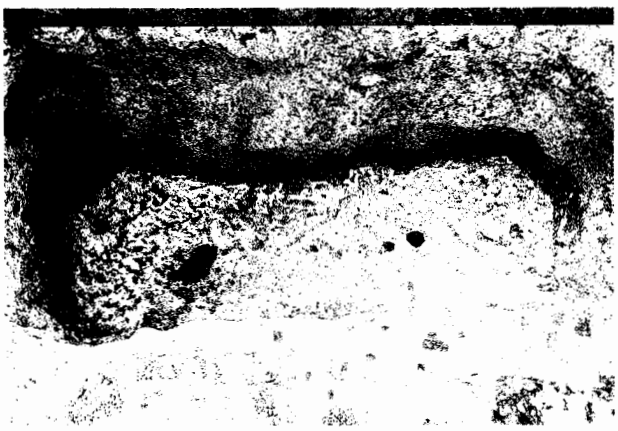
1．A区1号土坑（北から）

2．A区2号土坑（北から）

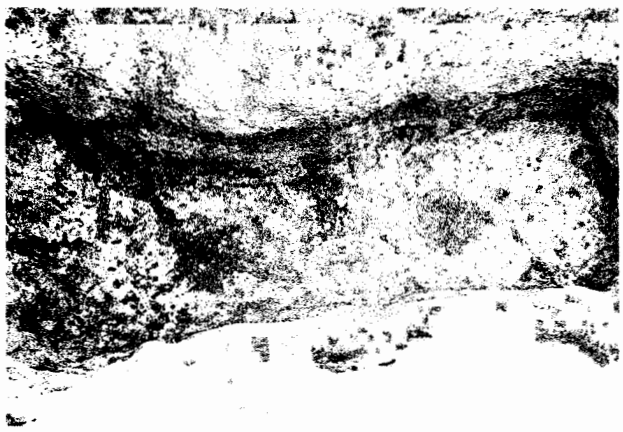


3．A区3号土坑（北から）

4．A区4号土坑（北から）



5．A区4号土坑ローム貼床検出状況（西から）



6．A区4号土坑逆茂木検出状況（西から）

7．A区5号土坑（北東から）

8．A区6号土坑（北から）

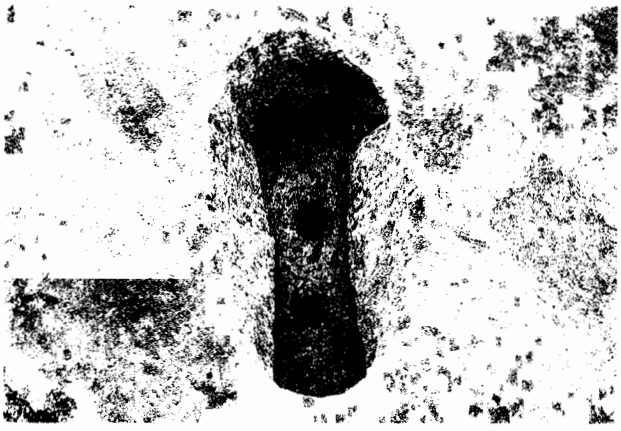
PL　6 〈A区縄文土坑〉

1．A区7号土坑セクション（南から）

2．A区9号土坑（北から）

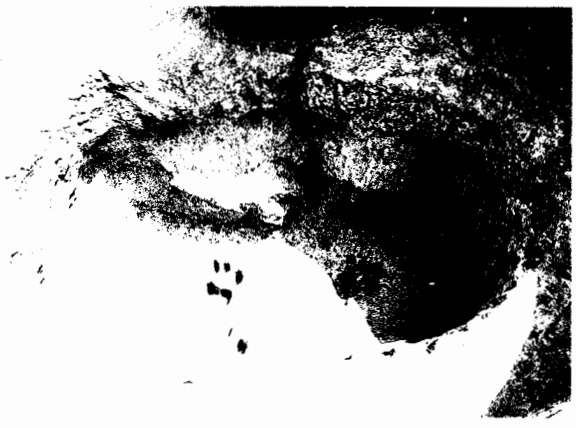
3．A区9号土坑セクション（南から）

4．A区10号土坑（北東から）



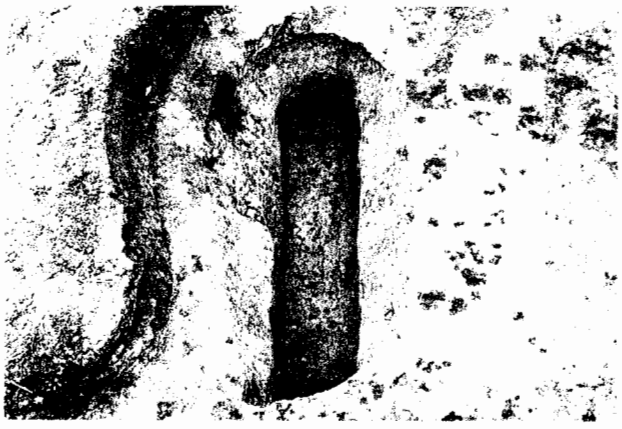
5．A区11号土坑（北から）

6．A区11号土坑逆茂木検出状況（東から）



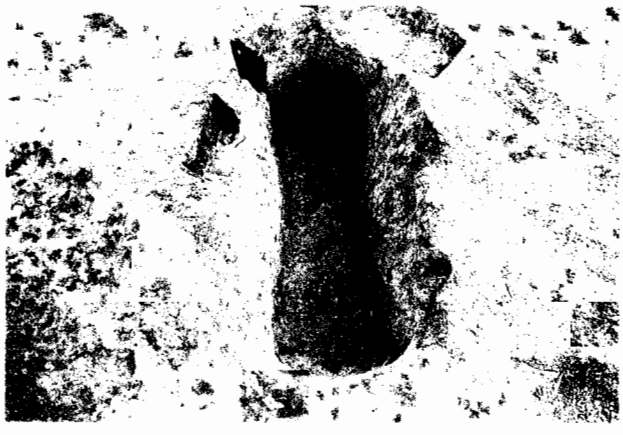
7．A区12号土坑（西から）

8．A区12号土坑セクション（北から）

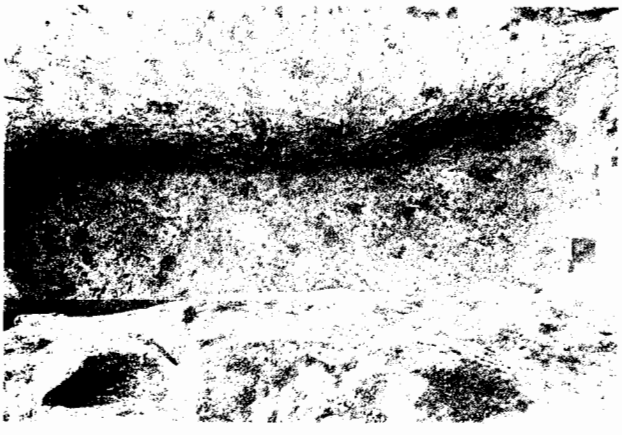


1．A区13号土坑（南西から）

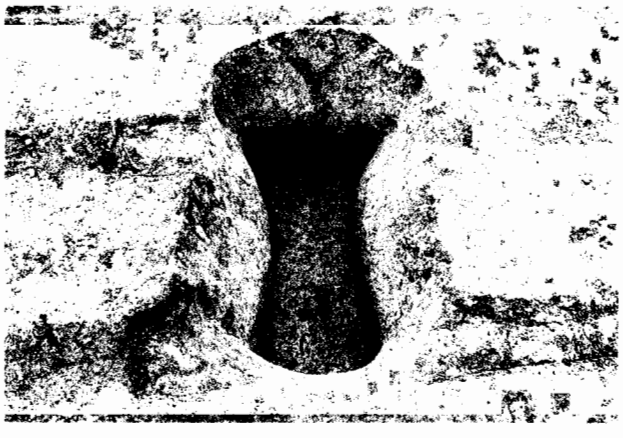
2．A区13号土坑（北西から）



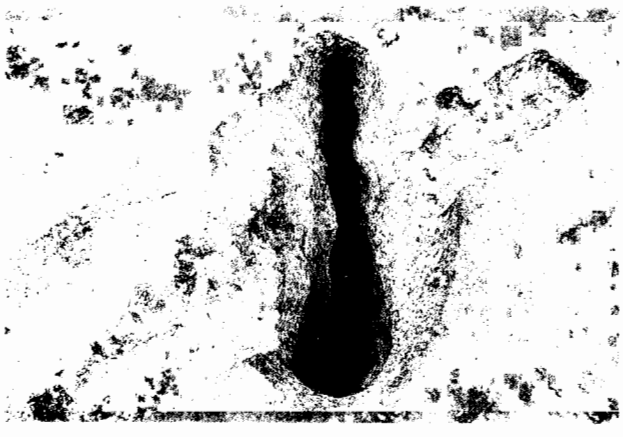
3．A区14号土坑（北から）



4．A区14号土坑（東から）



5．A区15号土坑（東から）

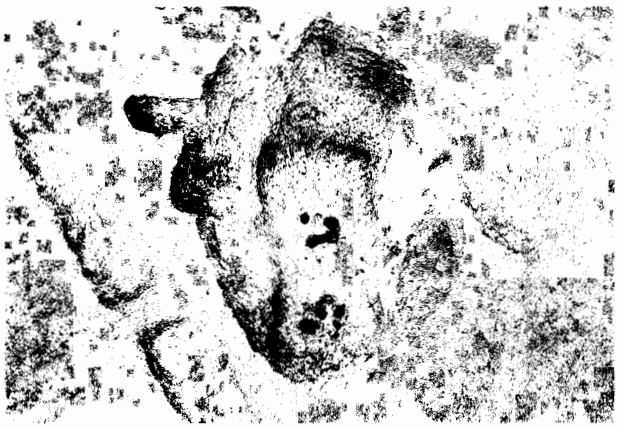


6．A区16号土坑（東から）

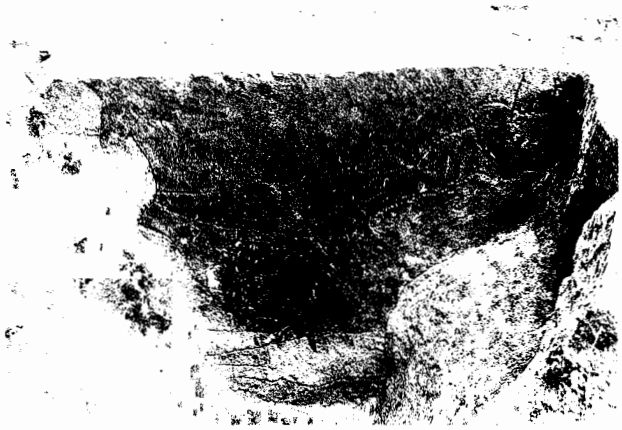
7．A区16号土坑セクション（西から）

8．A区16号土坑セクション（西から）

PL　8 〈A区縄文土坑〉

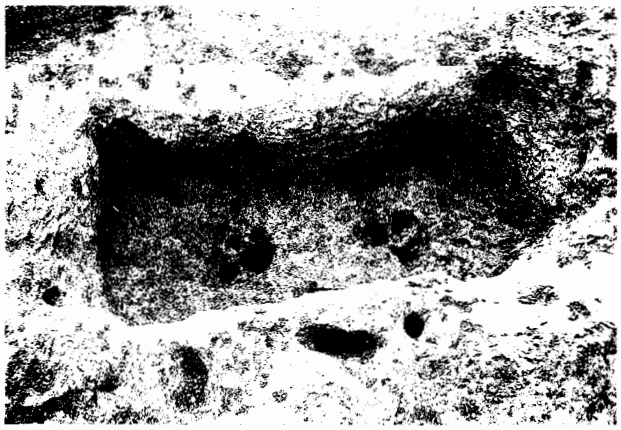


1．A区17号土坑（東から）



2．A区17号土坑セクション（西から）

3．A区18号土坑セクション（西から）



4．A区19号土坑（東から）

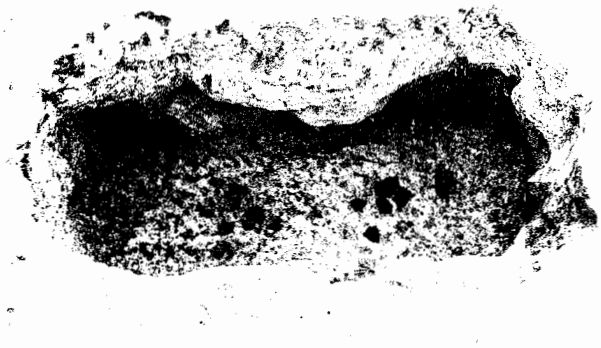
5．A区20号土坑（北から）

6．A区22号土坑（東から）

7．A区22号土坑セクション（北東から）

8．A区23号土坑（北西から）

1．A区24号土坑（東から）



2．A区25号土坑（西から）

3．A区26号土坑（北から）

4．A区27号土坑（北東から）

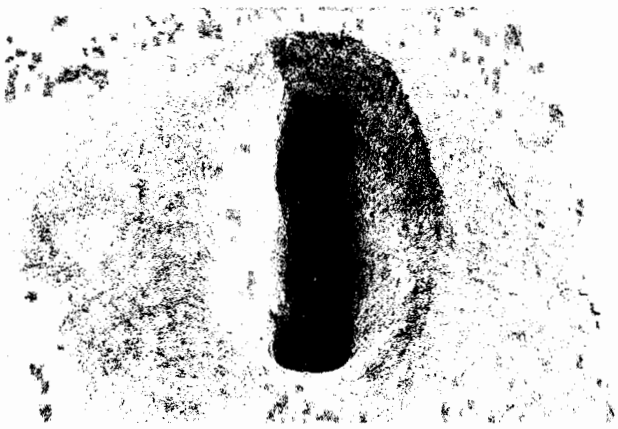
5．A区28号土坑（南東から）

6．A区29号土坑セクション（南から）

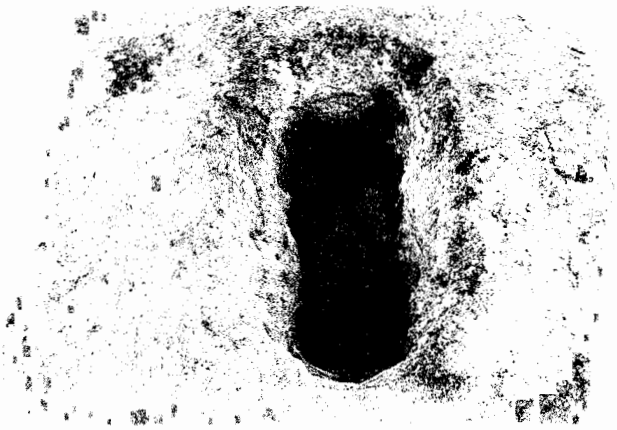
7．A区31号土坑（北東から）

8．A区33号土坑（北東から）

PL　10 〈B区縄文土坑〉



1．B区1号土坑（北から）



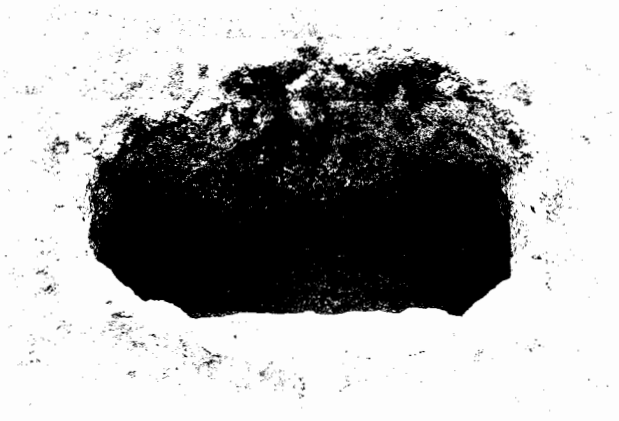
2．B区2号土坑（北から）

3．B区2号土坑（東から）

4．B区3号土坑（北西から）

5．B区3号土坑セクション（南東から）

6．B区4号土坑（北東から）



7．B区4号土坑（北西から）

8．B区5号土坑セクション（西から）

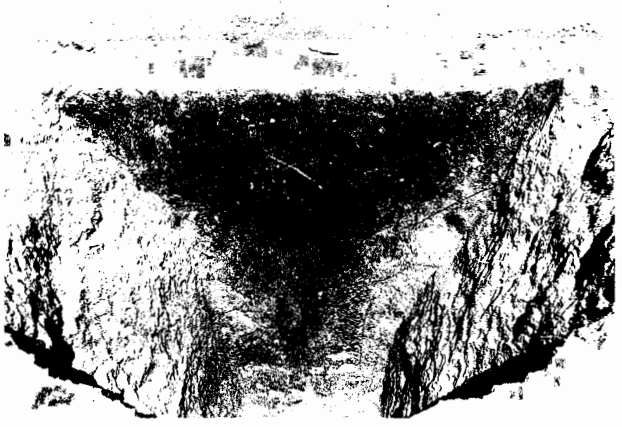
1．B区6号土坑（北東から）

2．B区7号土坑セクション（南から）

3．B区8号土坑（南から）

4．B区10号土坑（北から）

5．B区11号土坑（北東から）



6．B区11号土坑セクション（南西から）

7．B区12号土坑（東から）

8．B区13号土坑（東から）

PL　12 〈B区縄文土坑〉

1．B区14号土坑（北から）

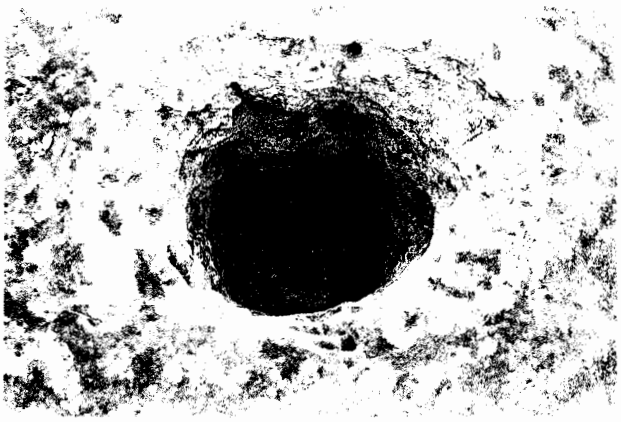
2．B区15号土坑（東から）

3．B区15号土坑セクション（東から）

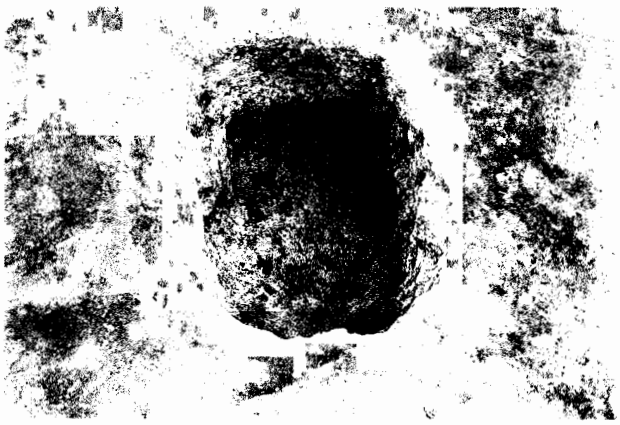
4．B区16号土坑（東から）

5．B区17号土坑（北東から）

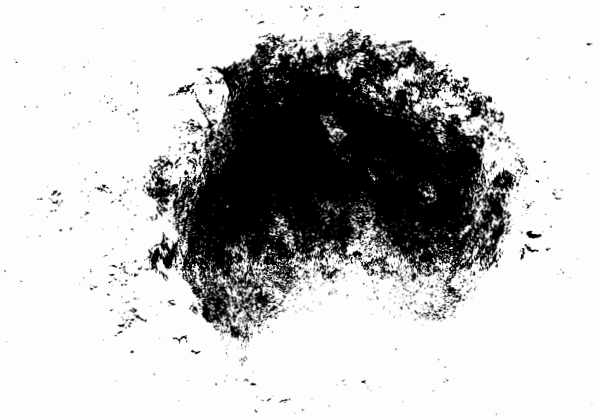
6．B区18号土坑（北東から）



7．B区19号土坑（東から）

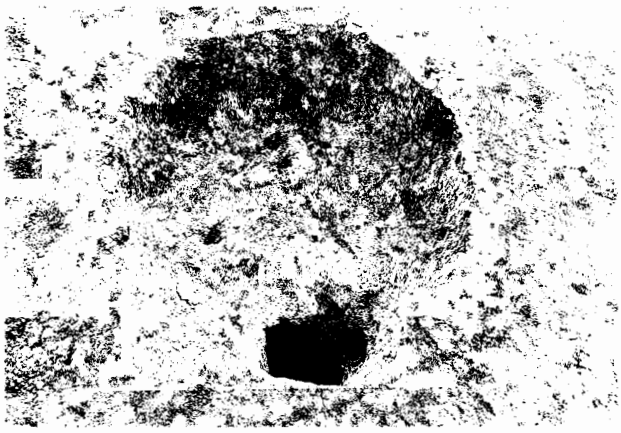


8．B区20号土坑（北から）

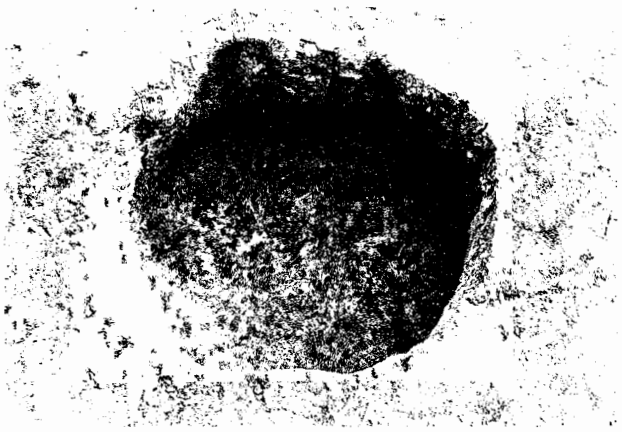


1．B区21号土坑（東から）

2．B区21号土坑セクション（東から）



3．B区22号土坑（北東から）



4．B区23号土坑（北から）

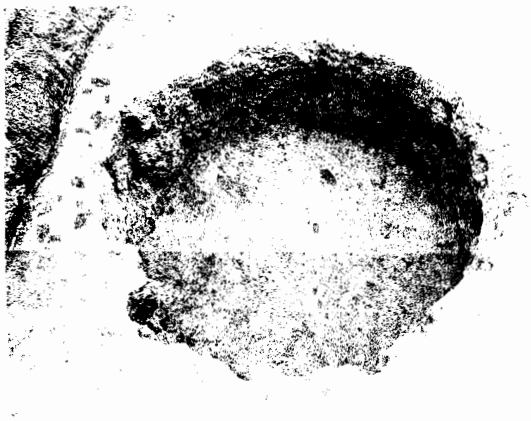
5．B区24号土坑（北から）

6．B区25号土坑（東から）

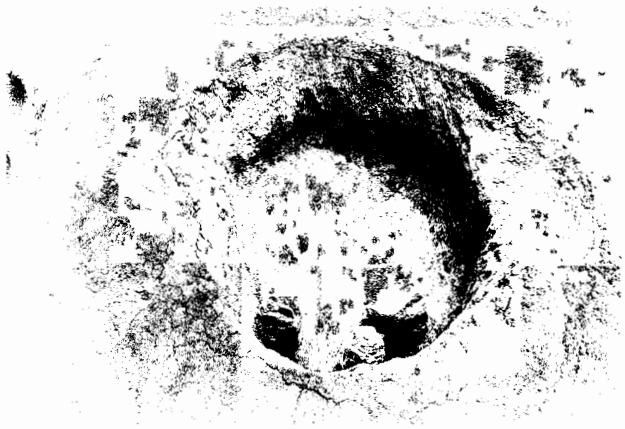
7．B区27号土坑（北西から）

8．B区28号土坑（北から）

PL　14 〈F区縄文土坑〉



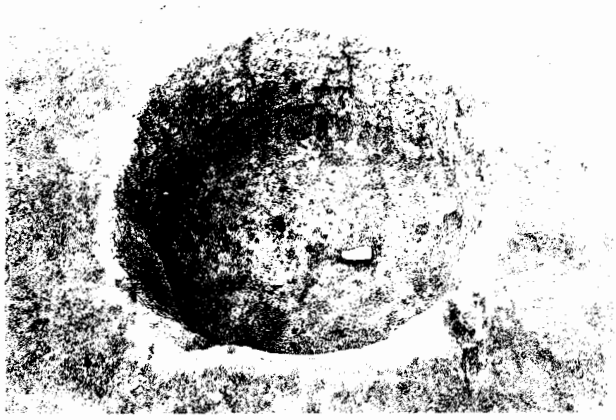
1．F区2号土坑（西から）



2．F区4号土坑（北西から）

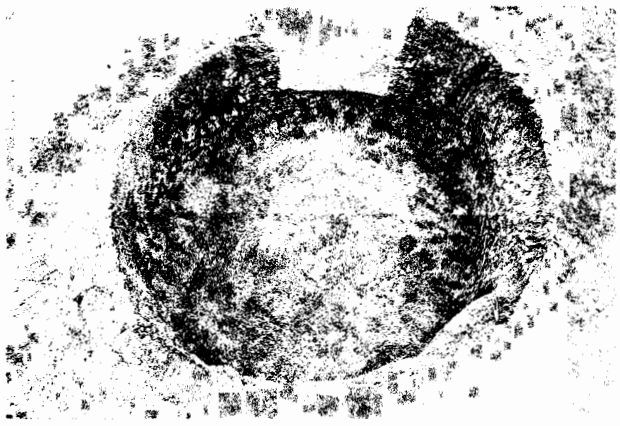
3．F区6号土坑（北西から）

4．F区6号土坑セクション（東から）



5．F区7号土坑（東から）

6．F区7号土坑セクション（東から）



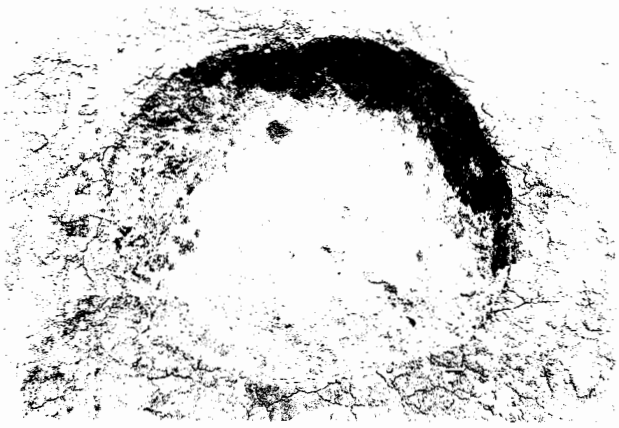
7．F区8号土坑（東から）

8．F区8号土坑遺物出土状態（西から）

1．F区9号土坑（北から）

2．F区10号土坑（北から）

3．F区10号土坑セクション（南から）



4．F区15号土坑（北から）

5．F区16号土坑（東から）

6．F区17号土坑（西から）

7．F区18号土坑（北西から）

8．F区18号土坑遺物出土状態（東から）

PL　16 〈集石〉

1．B区1号集石（北西から）

2．B区1号集石（西から）

3．B区2号集石（南西から）

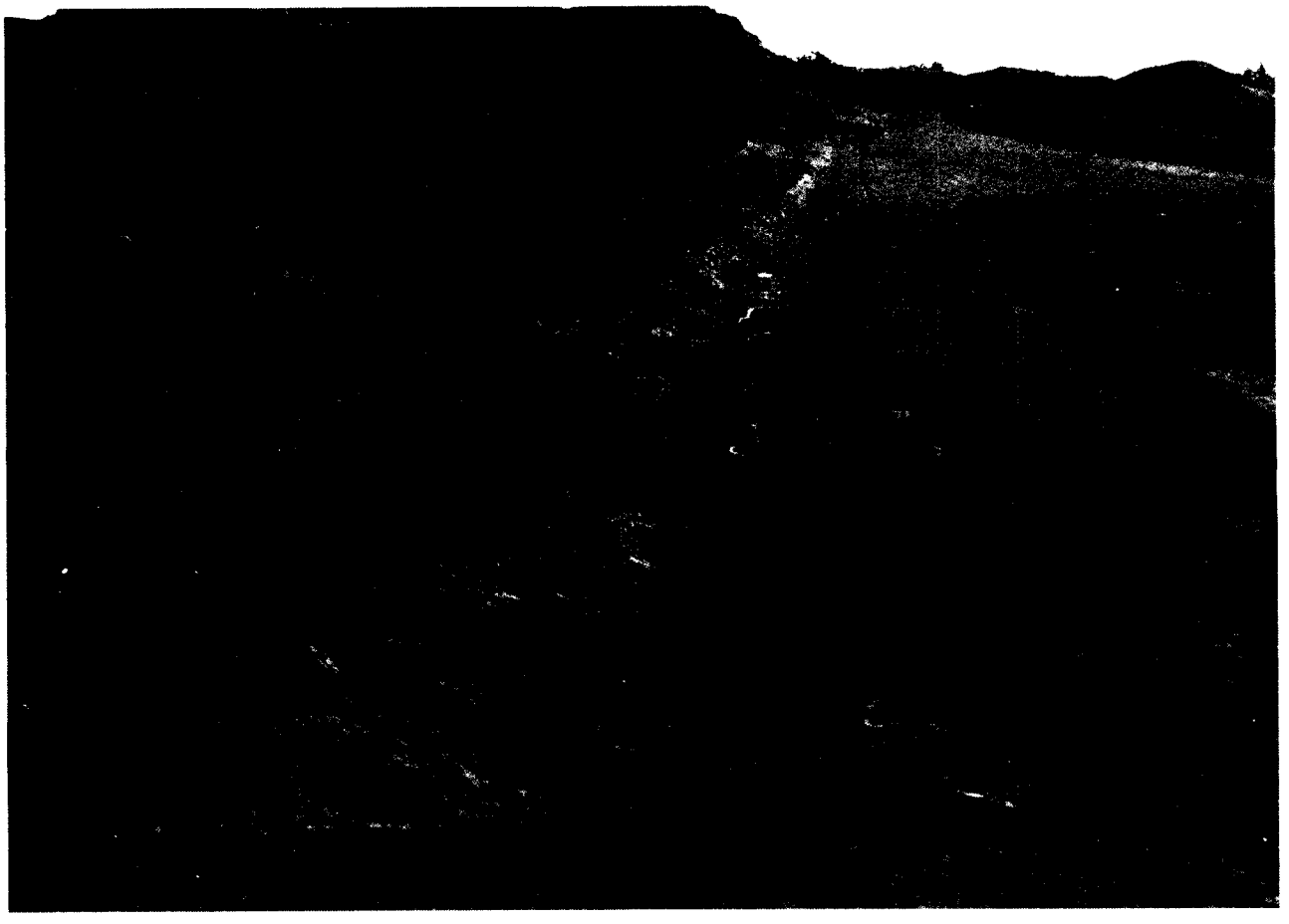
4．B区2号集石（北から）

5．E区1号集石（北から）

6．E区2号集石（北から）

7．F区1号集石及び周辺礫出土状況（東から）

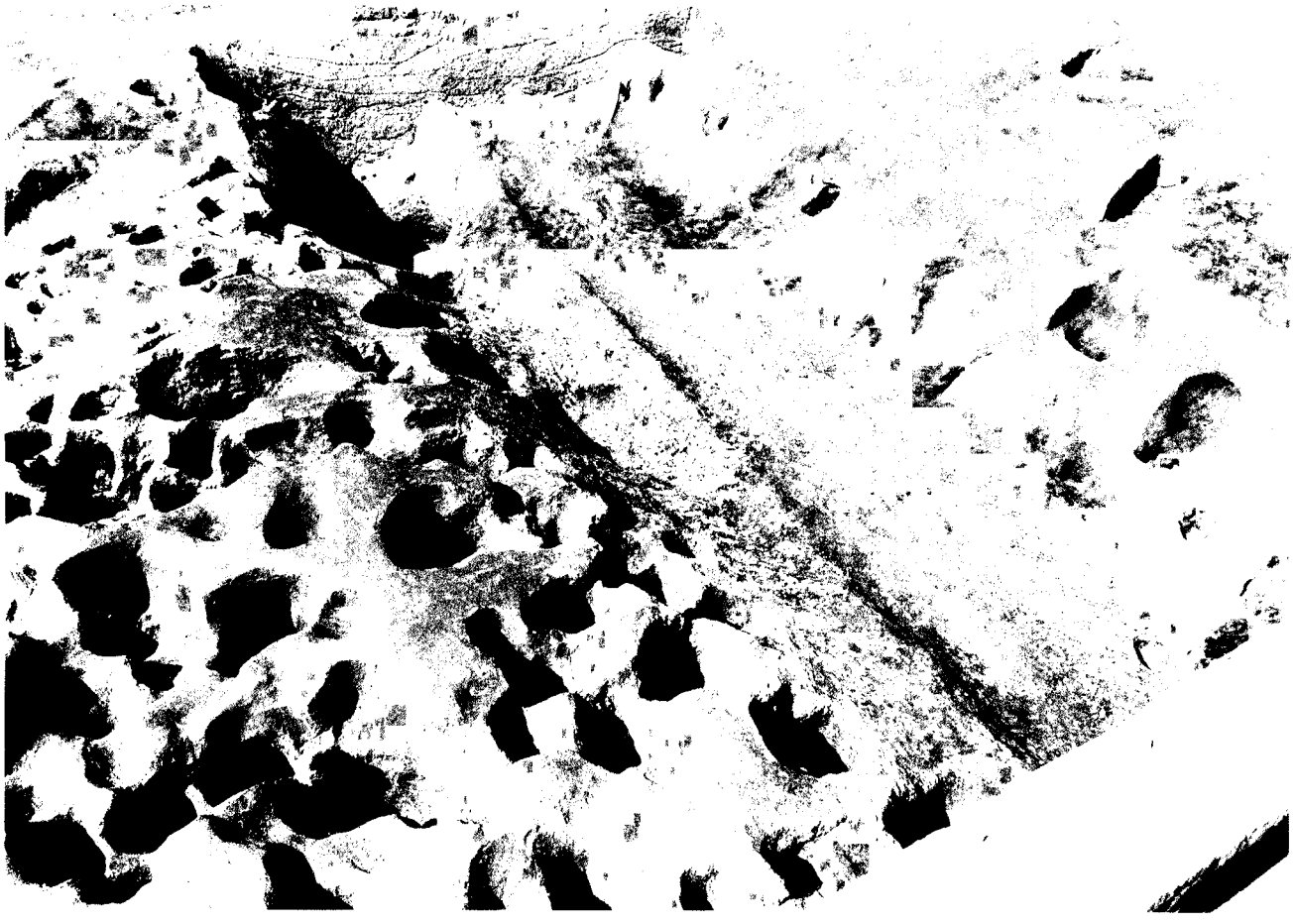
8．F区1号集石（南から）



1．東西道路東端部（西から）

2．東西道路西半部（西から）

PL 18 〈A区〉

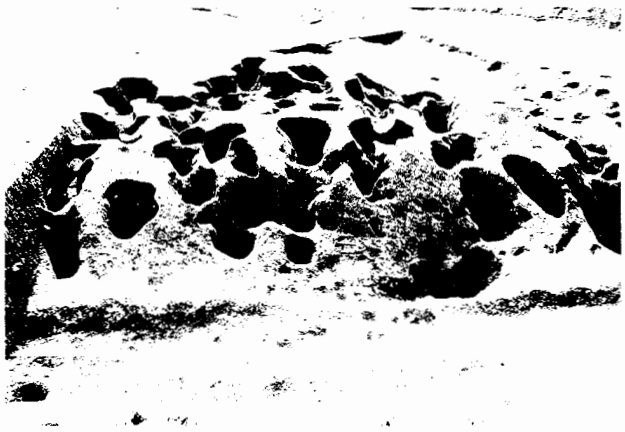


1．東西道路西端部路面と柱穴群（東から）

2．南北道路北半部（北から）

1．東西道路セクション（西から）

2．東西道路西半部（東から）

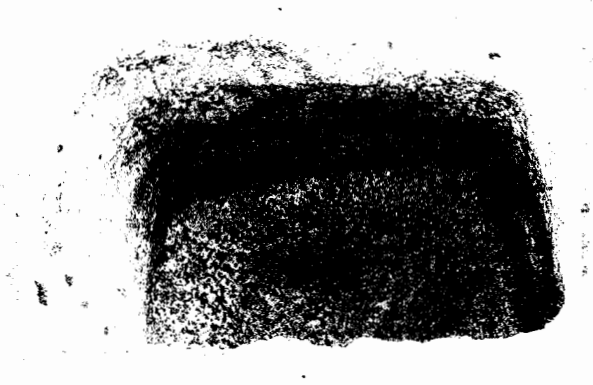


3．東西道路西端部柱穴群（北から）

4．南北道路南半部（北から）

5．区画溝北端部（東から）

6．1号墓坑（南から）



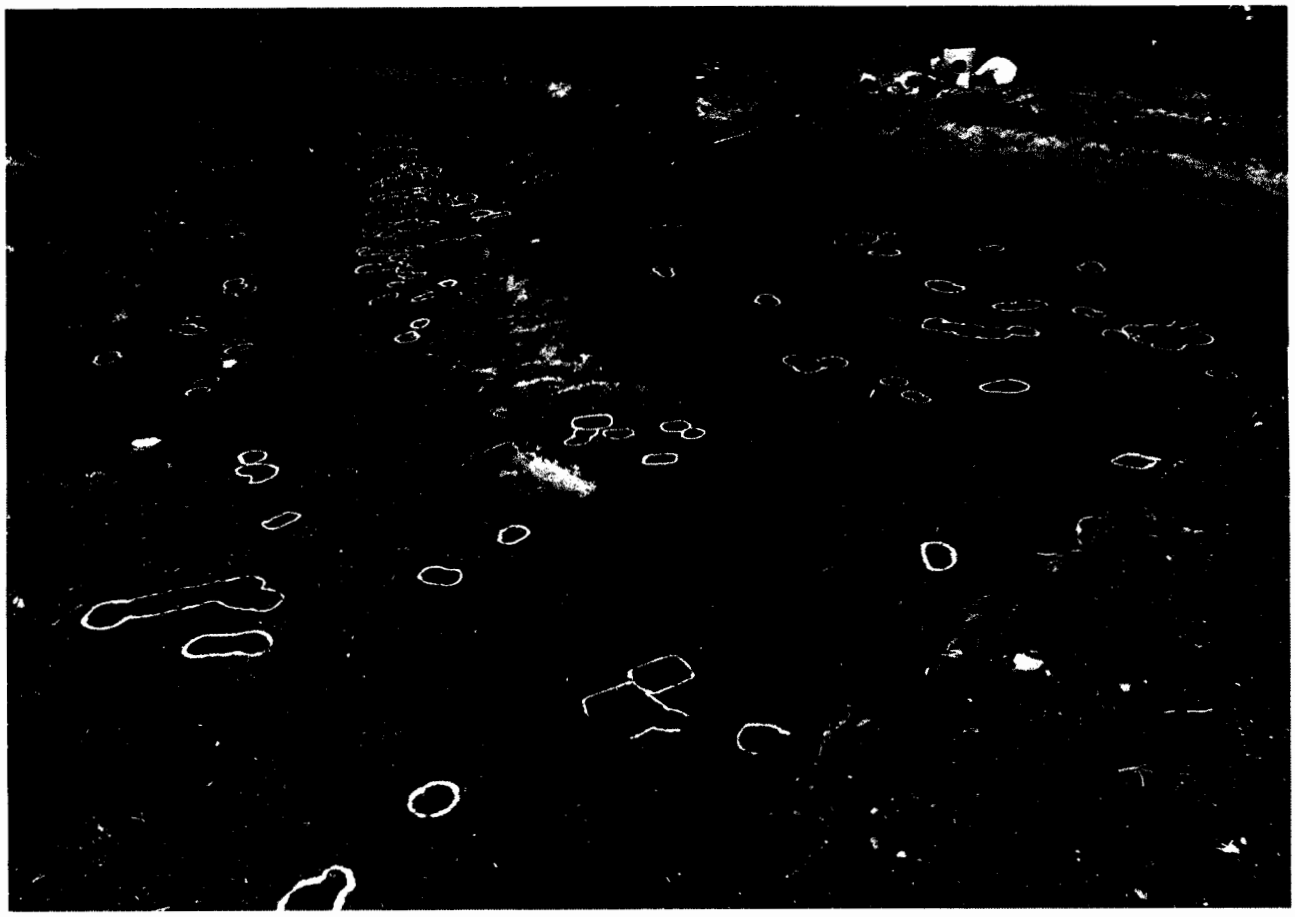
7．32号土坑（北から）

8．32号土坑セクション（西から）

PL 20 〈B区〉

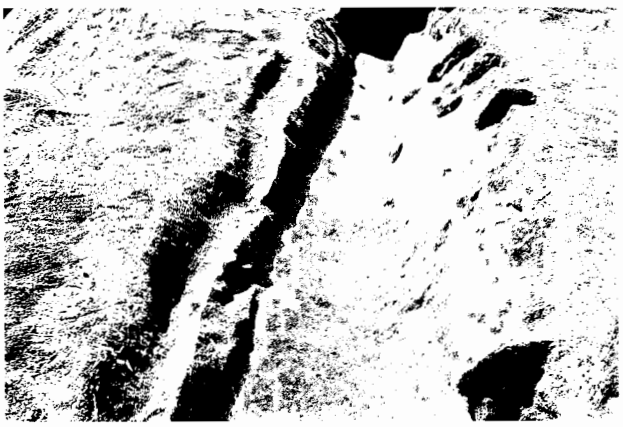
1．B区東西溝西半部（東から）

2．B区南北溝（北から）

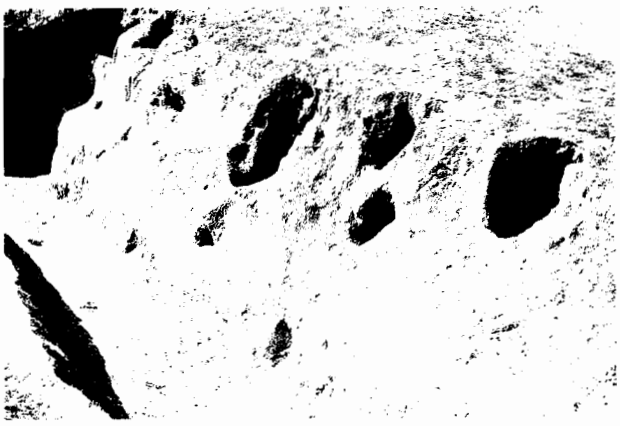


1．B区柵列調査状況（南東から）

2．B区東西溝セクション（東から）



3．B区東西溝東半部（東から）



4．B区東西溝東半部壁面柱穴（南東から）

5．B区柵列調査状況（北西から）

PL　22 〈方形区画遺構〉

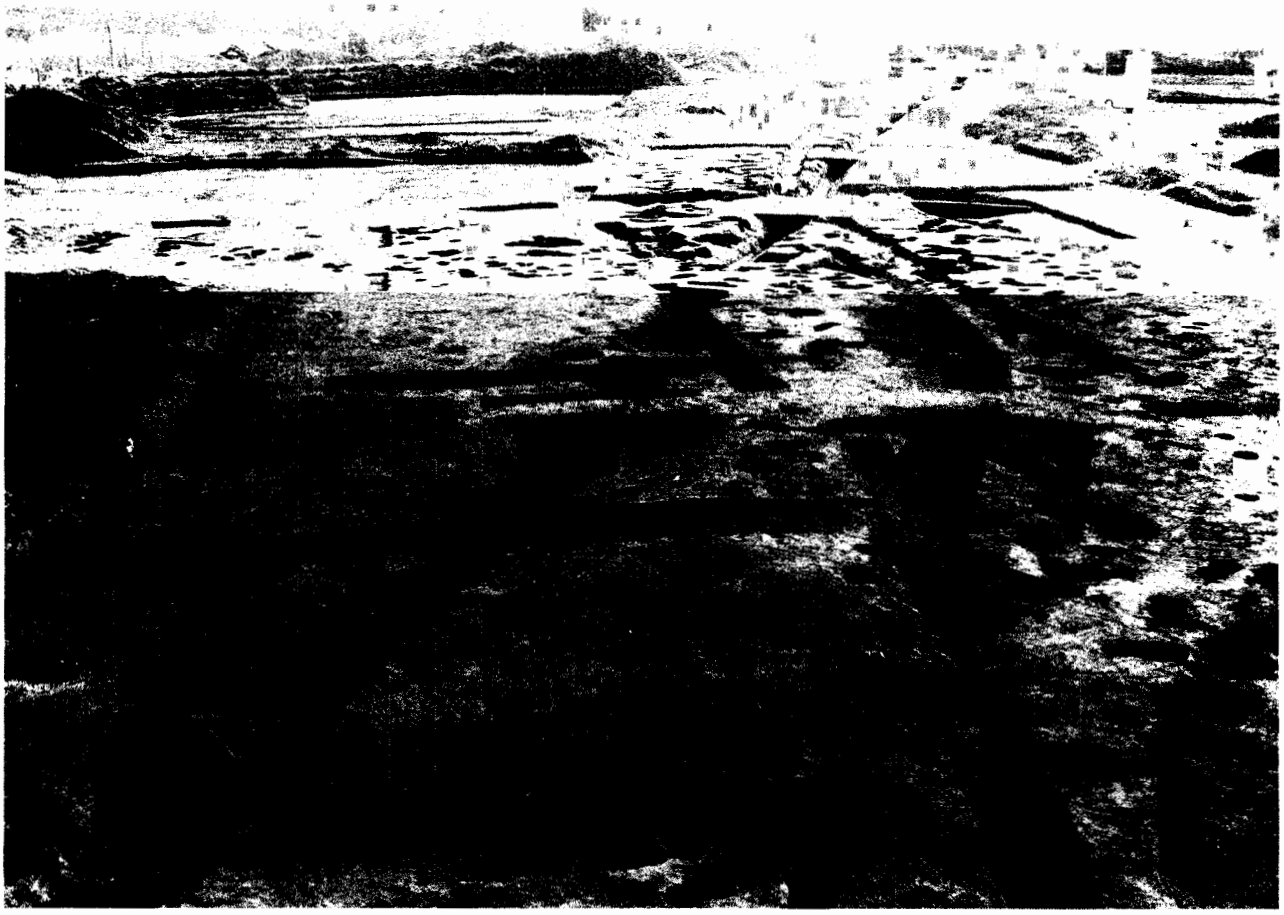
1．方形区画遺構全景（上空から－上が南東）

2．F区北東隅部（北から）

3．F区北東部（北から）

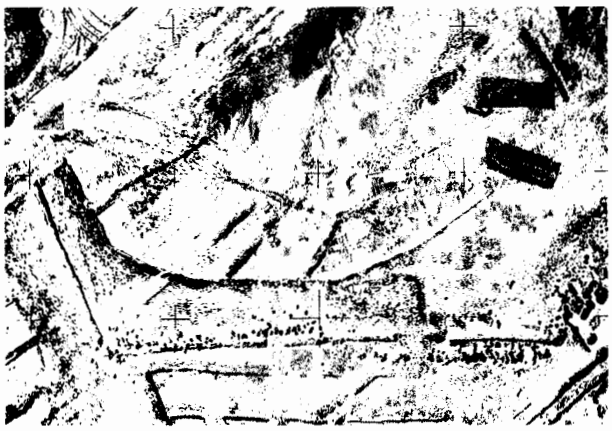
1．北東隅部（上空から－上が北）

PL　24 〈方形区画遺構〉（F区）



1．北東溝と東溝喰違部周辺柱穴出土状況（北西から）

2．北東部東西柵列（東から）



1．南東溝北西半部（上空から）

2．南東溝南東半部（上空から）

3．南東溝屈折部（東から）

4．南東溝屈折部（南から）

5．南東溝南側柱穴群（北東から）

PL　26 〈方形区画遺構〉（Ｆ区）

1．北溝（東から）

2．西溝北半部（北から）

1．東溝（北から）

2．北東溝セクション（南から）

3．北溝壁面柱穴群（西から）

4．北溝セクション（東から）

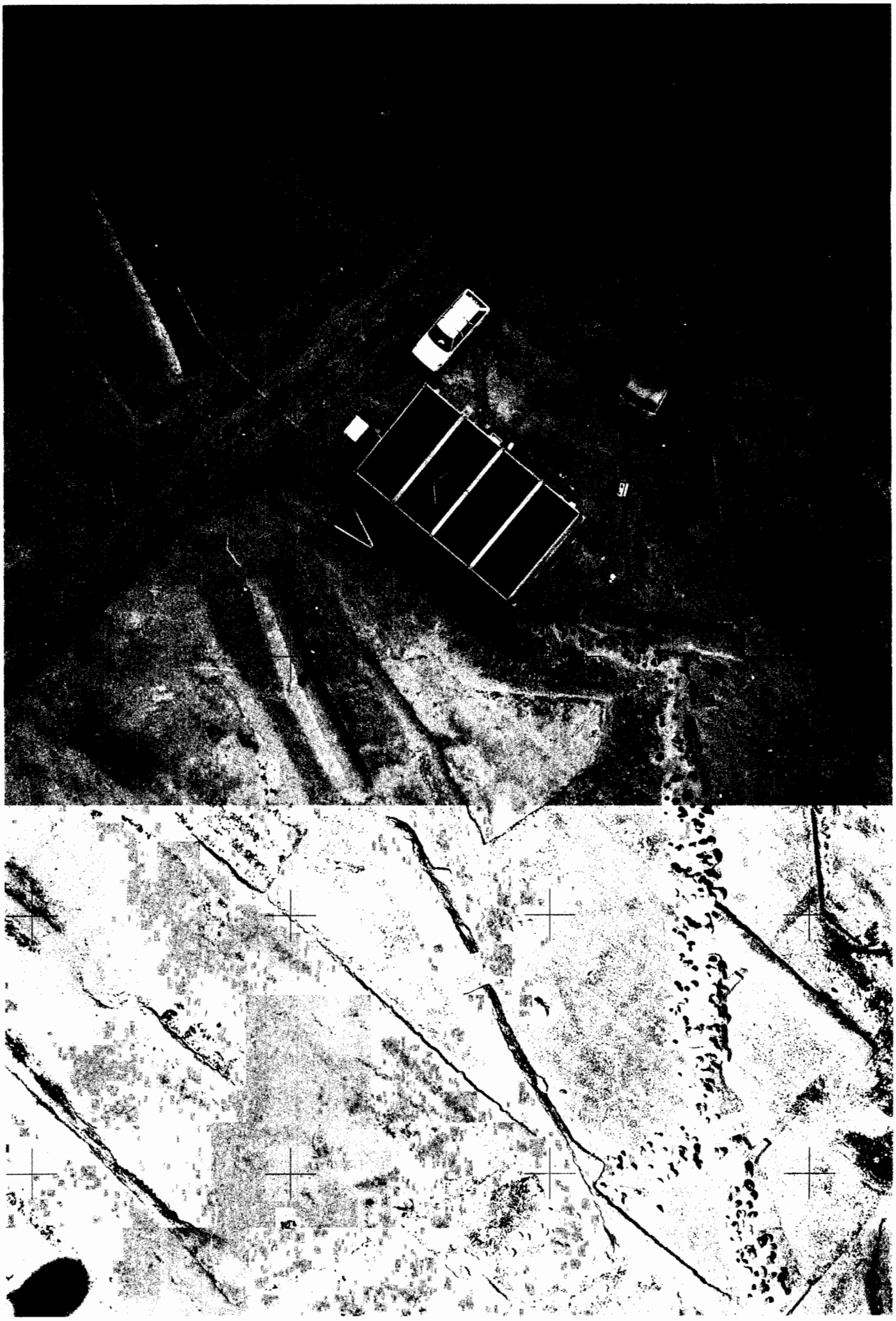
5．西溝（北から）

6．西溝（北から）

7．西溝壁面柱穴（西から）

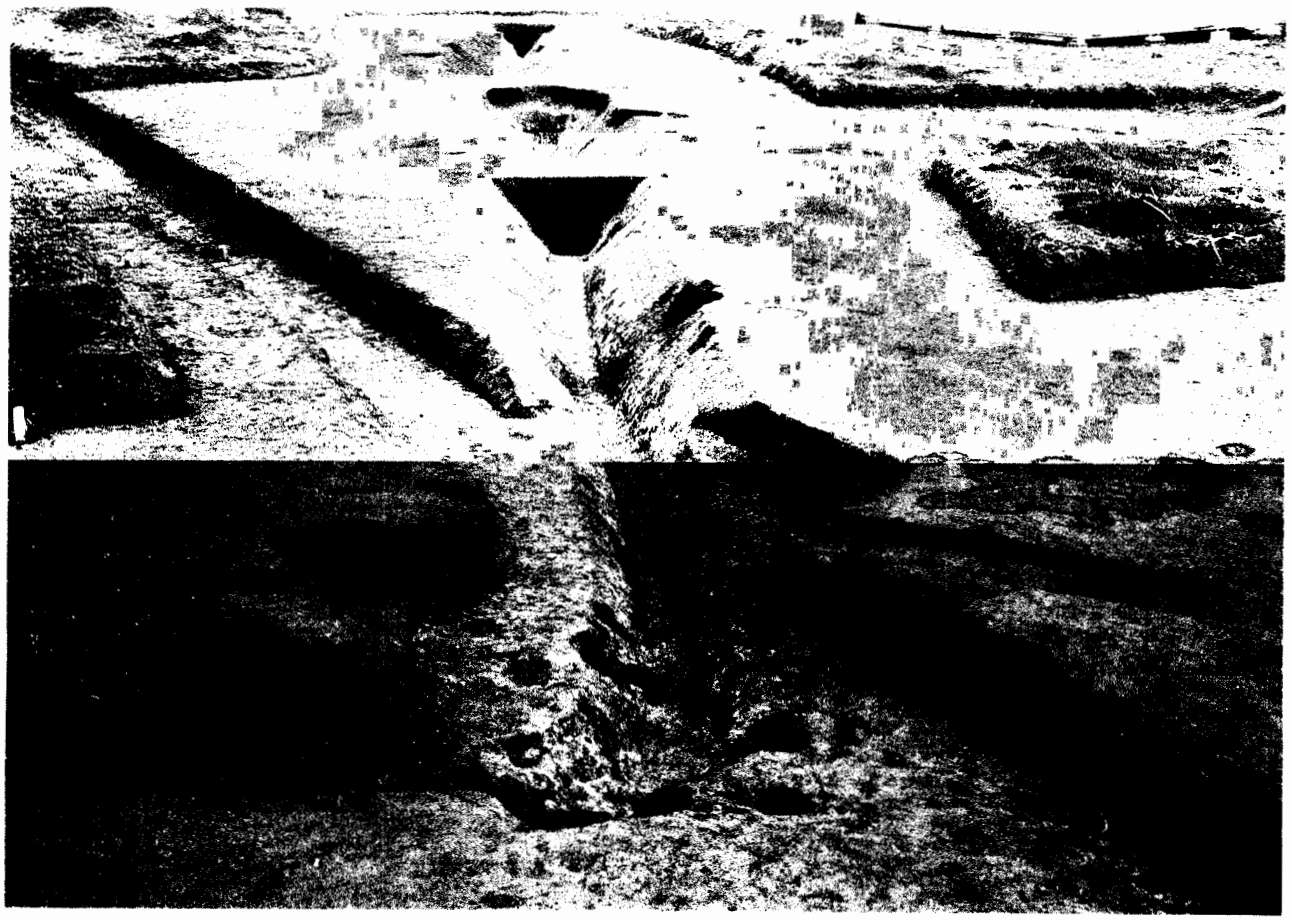
8．西溝壁面柱穴（東から）

PL　28 〈方形区画遺構〉（C～E南 区）



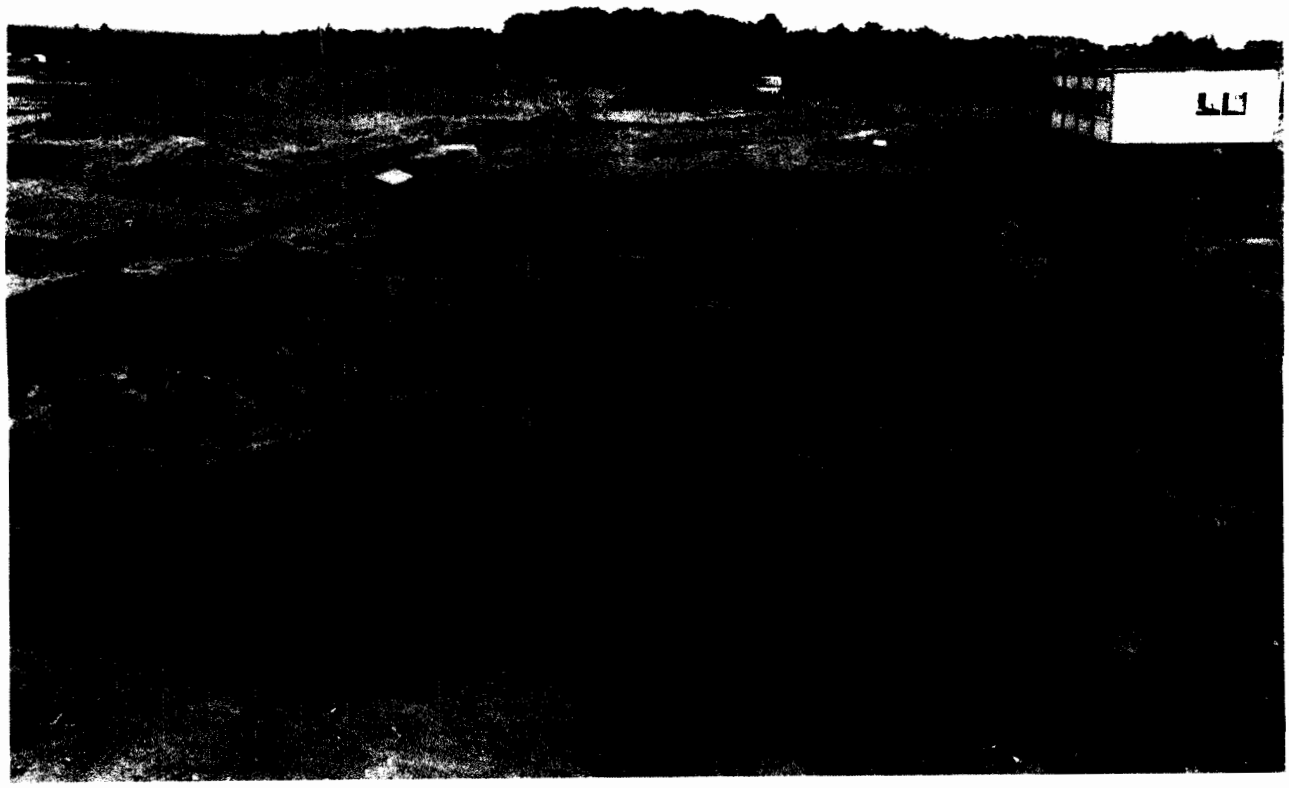
1．南溝とC区柵列東半部（上が南東）

1．南西隅部（北から）



2．南溝（西から）

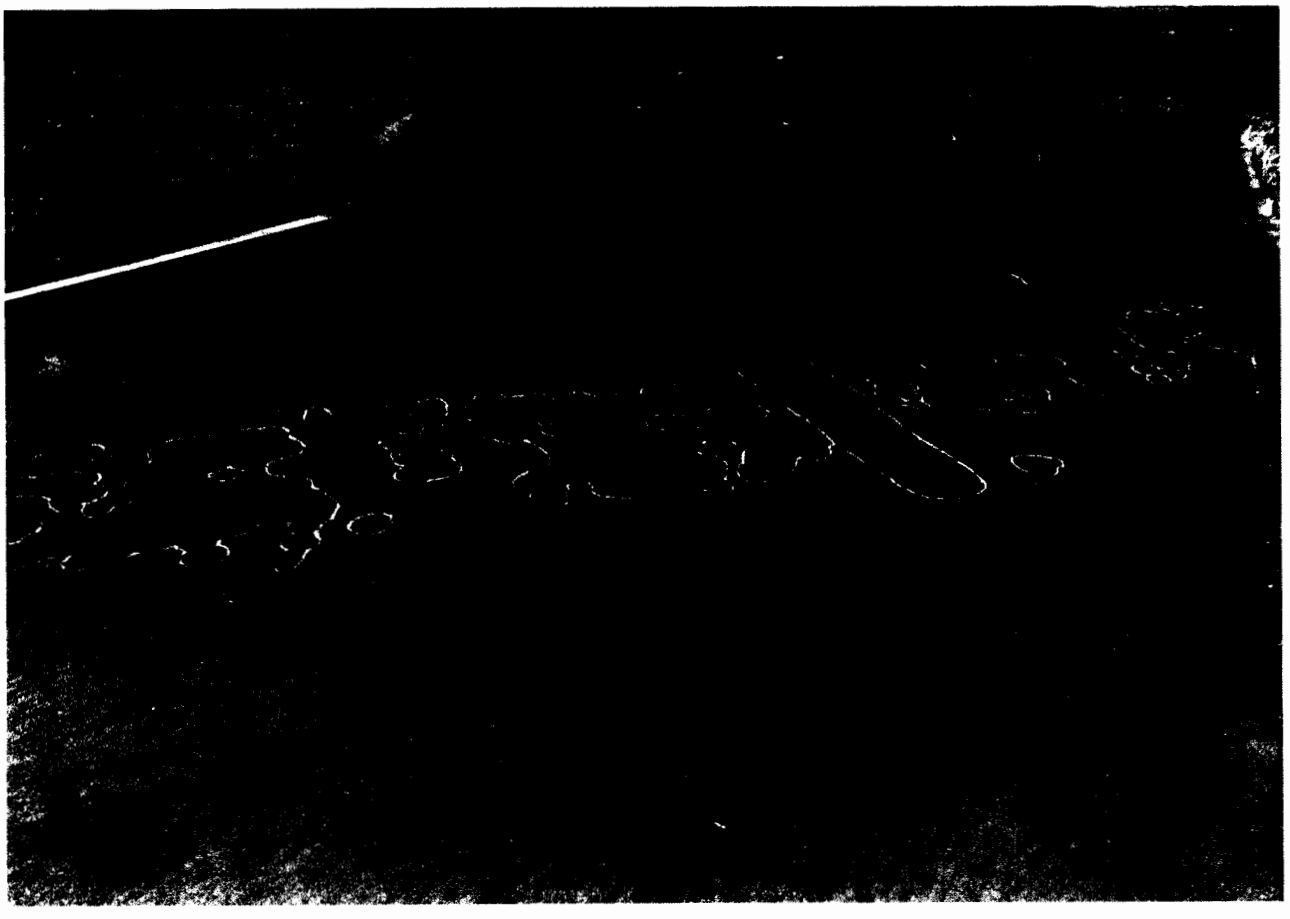
PL　30〈方形区画遺構〉（C区）



1．C区柵列東半部（西から）

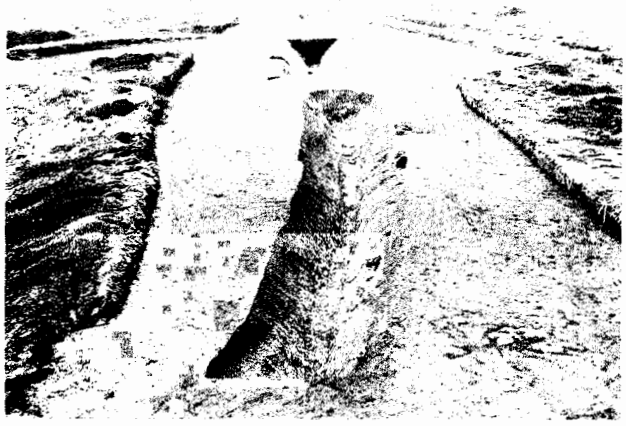
2．C区柵列東半部（北西から）

1．C区柵列西端部（北東から）



2．C区柵列西半部検出状況（北東から）

PL　32 〈方形区画遺構〉（C区）



1．南溝（東から）

2．南溝土橋部（北から）

3．南西隅部（北西から）

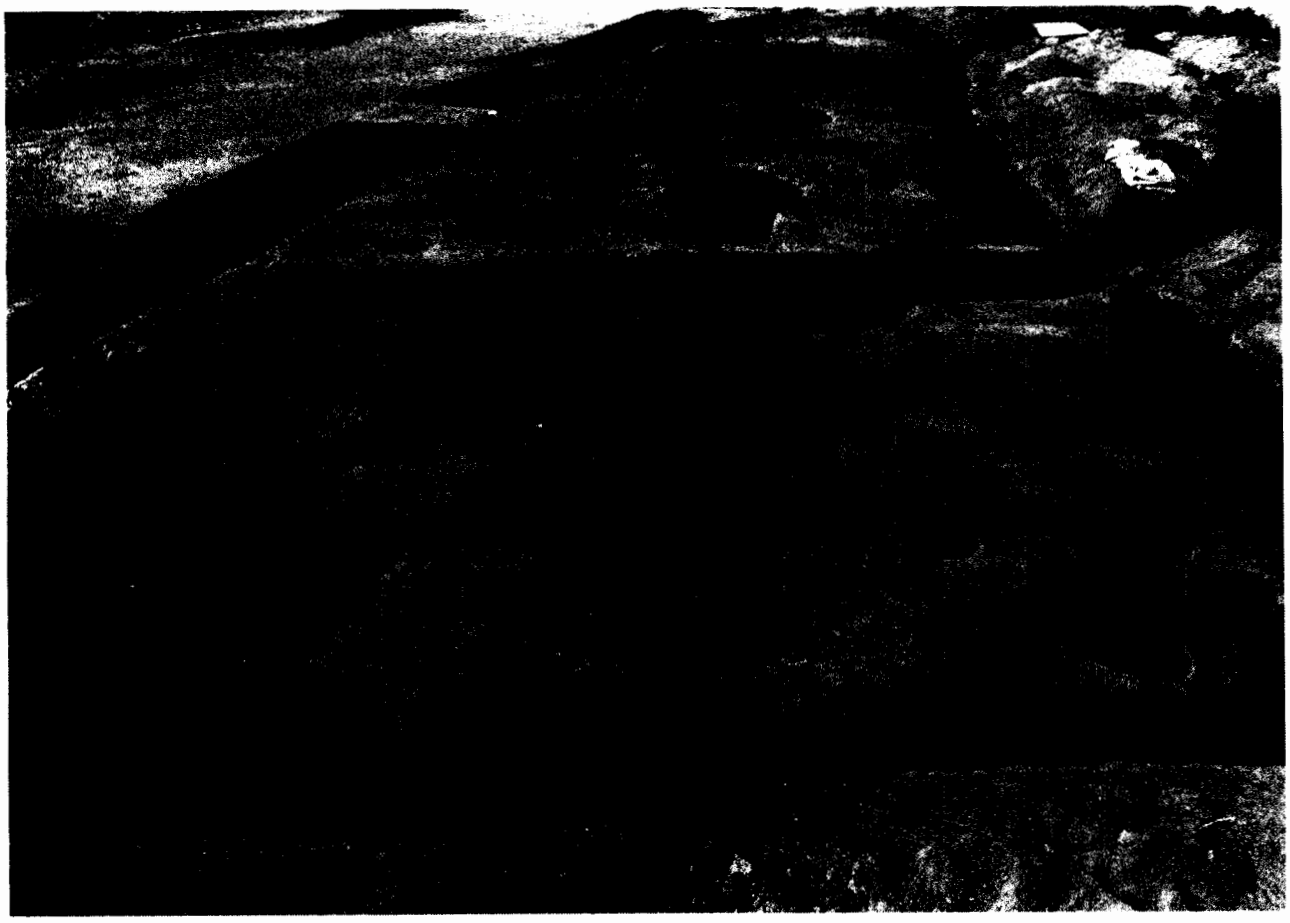
4．C区柵列東半部（南東から）

5．C区柵列柱穴（南から）

6．C区柵列柱穴（南西から）

7．C区柵列西端部柱穴（北西から）

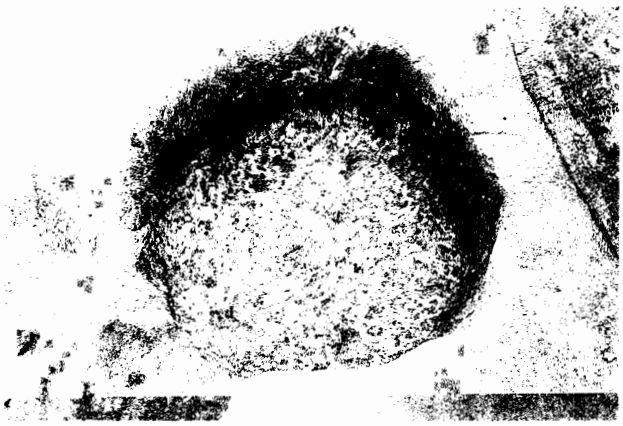
8．C区柵列西端部（北西から）



1．方形区画遺構西溝とD区土坑・柱穴群（南から）

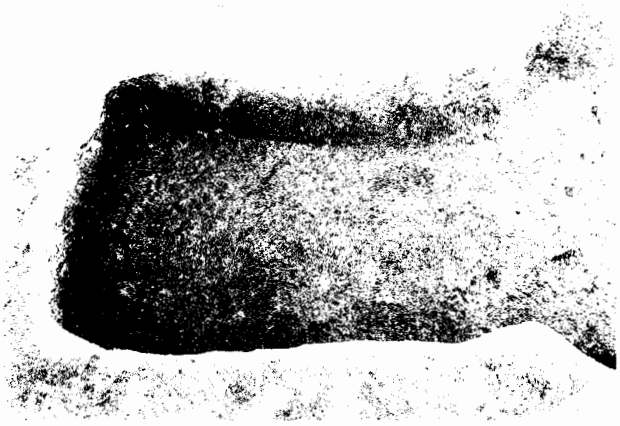
2．方形区画遺構南溝とE南区土坑群（西から）

PL　34 〈土坑〉（D区、E南区）

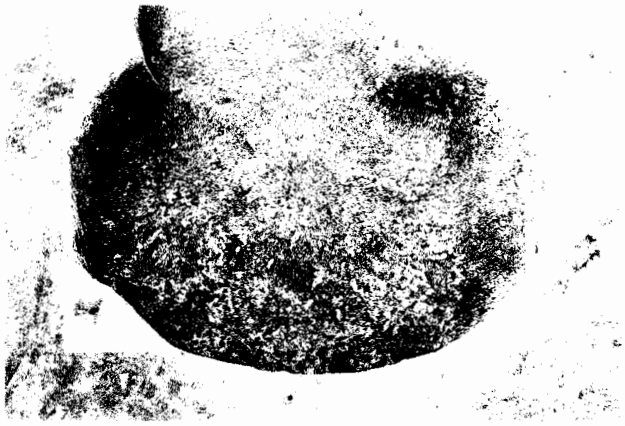


1．D区１号土坑（西から）

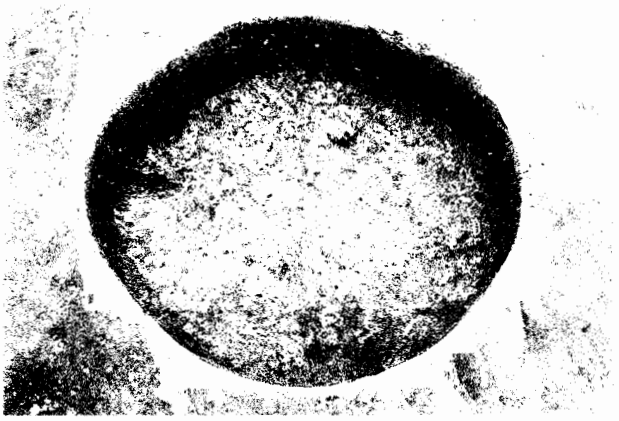
2．D区２・３号土坑（東から）



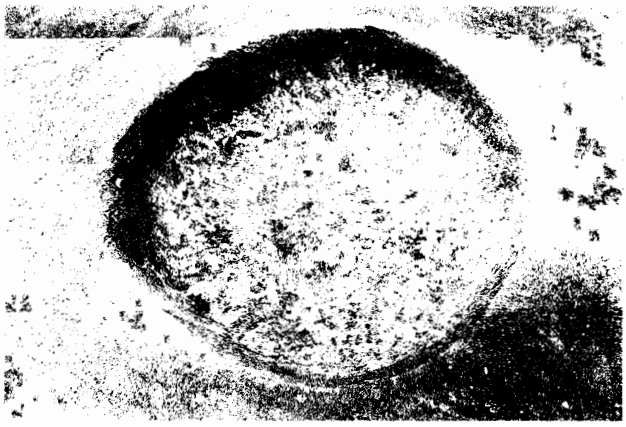
3．D区５号土坑（東から）



4．D区６号土坑（北から）



5．D区７号土坑（北から）



6．D区８号土坑（北から）

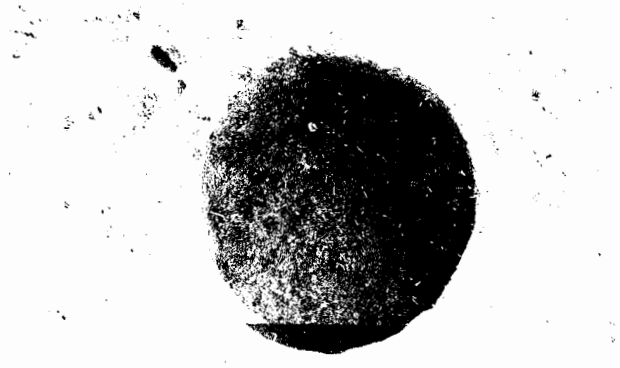
7．E南区１号土坑（北西から）

8．E南区２号土坑（北西から）

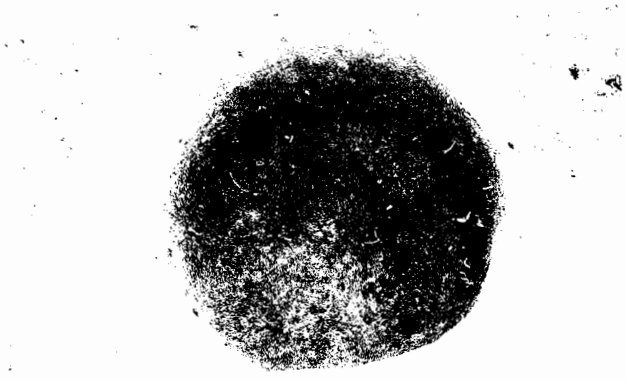
1．E南区３・４号土坑（北西から）

2．E南区６号土坑（北から）

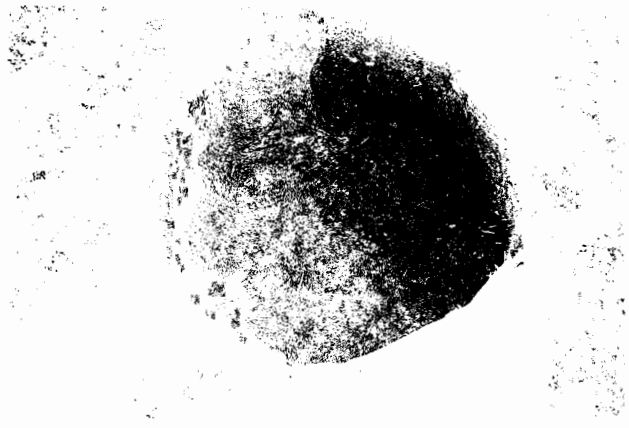
3．E南区７号土坑（北東から）



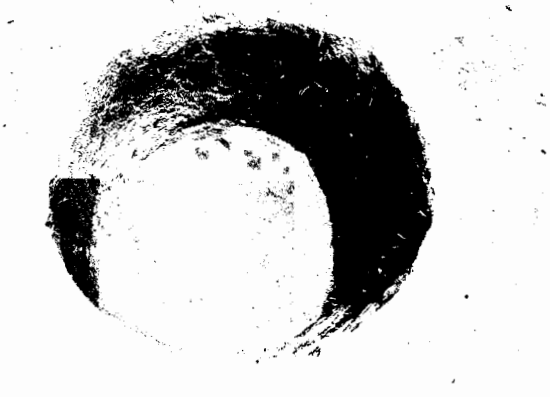
4．E北区１号土坑（北から）



5．E北区２号土坑（北から）



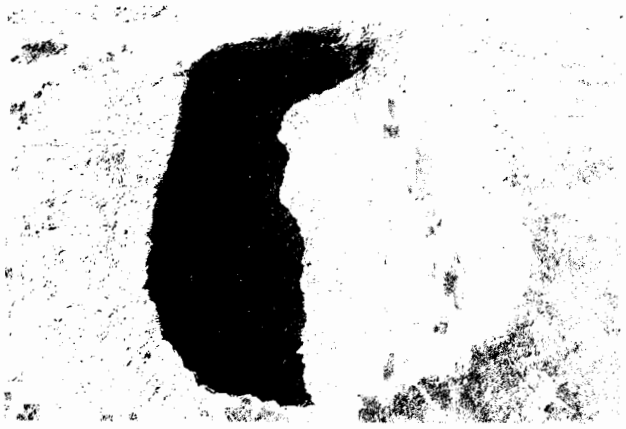
6．E北区３号土坑（東から）



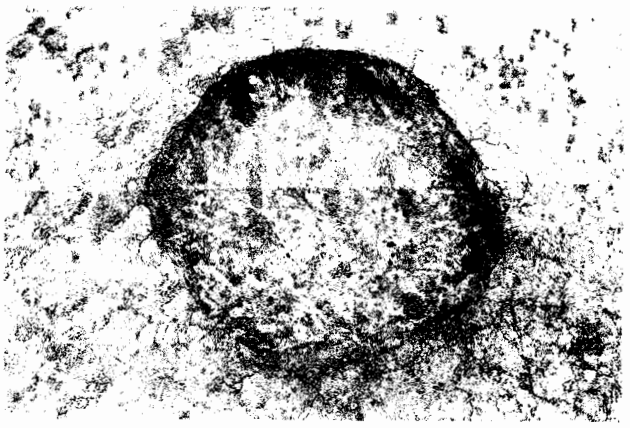
7．E北区５号土坑（北から）

8．E北区６号土坑（北から）

PL 36 〈土坑〉（F区）

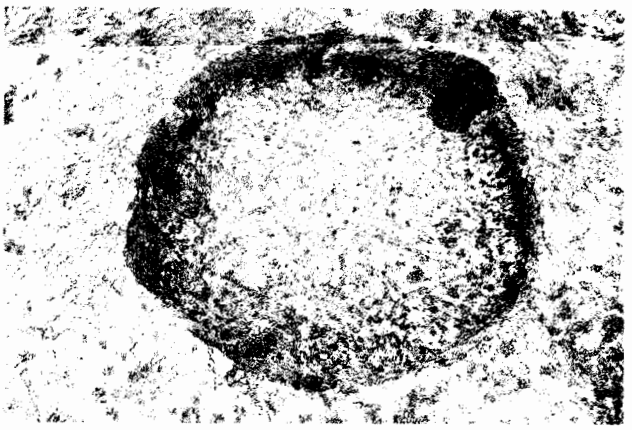


1．F区1号土坑（東から）

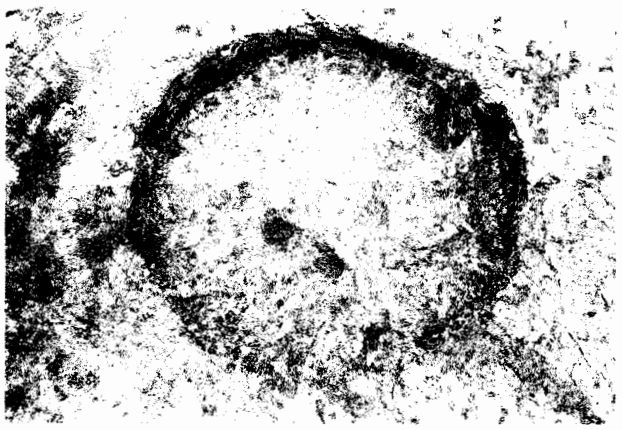


2．F区21号土坑（西から）

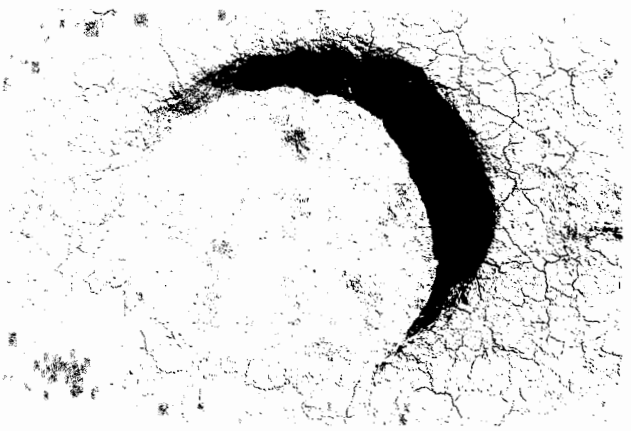
3．F区22号土坑（西から）



4．F区23号土坑（北から）

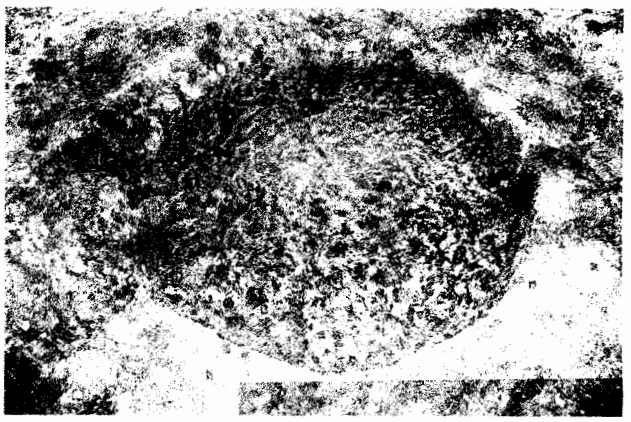


5．F区24号土坑（北西から）



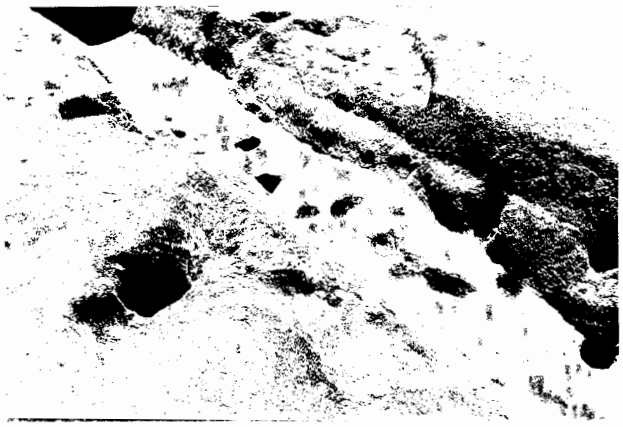
6．F区25号土坑（北から）

7．F区27号土坑セクション（南東から）

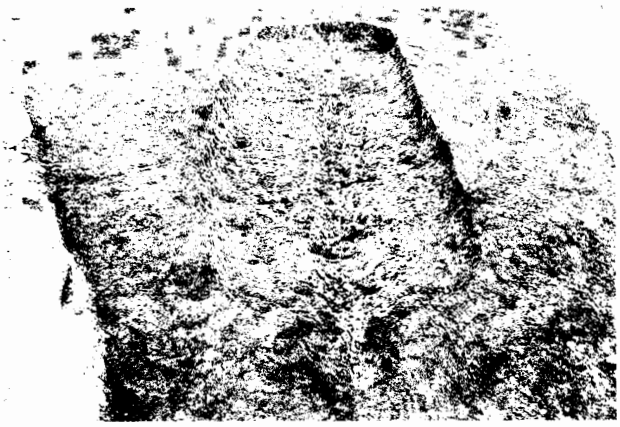


8．F区28号土坑（北西から）

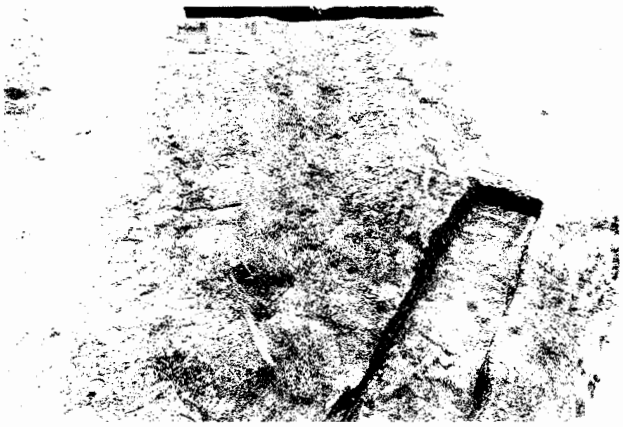
1．B区1号炭窯（北西から）



2．B区2号炭窯（北西から）



3．B区3号炭窯（北西から）



4．C区1号炭窯（北西から）

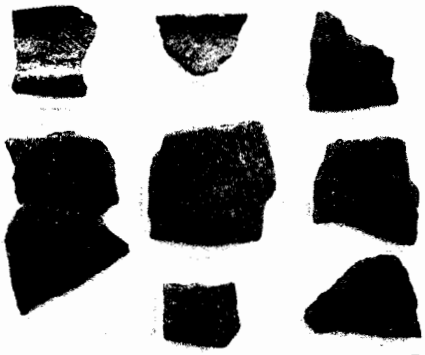
5．E区1号炭窯（北西から）

6．E区2号炭窯（北西から）

7．E区3号炭窯（北から）

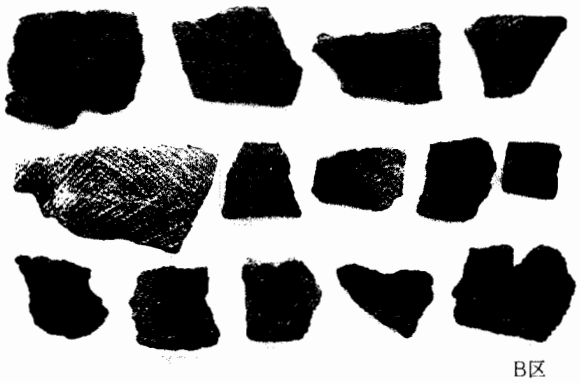
8．E区3号炭窯（東から）

PL 38 〈A・B区出土土器〉

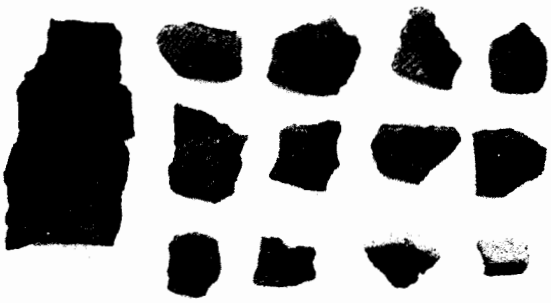


B区

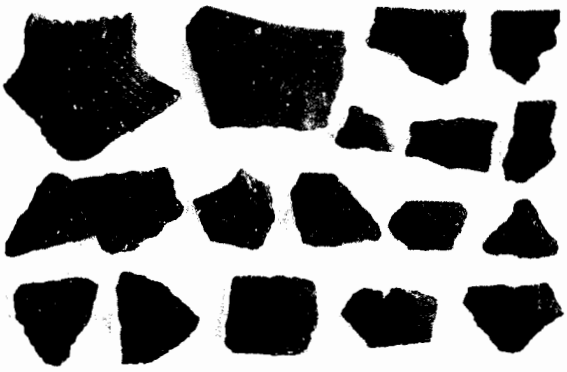
B区



B区

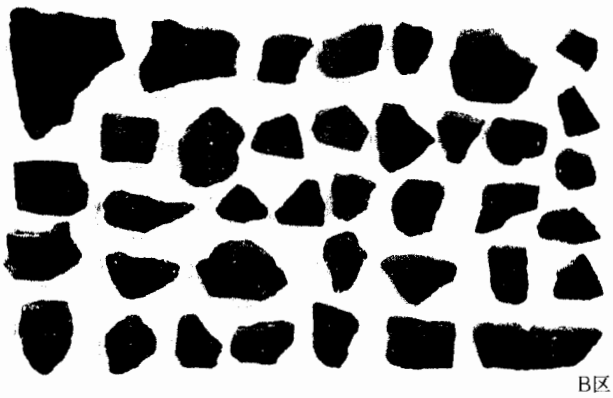


B区

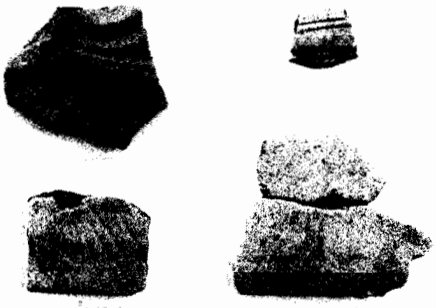


B区

B区

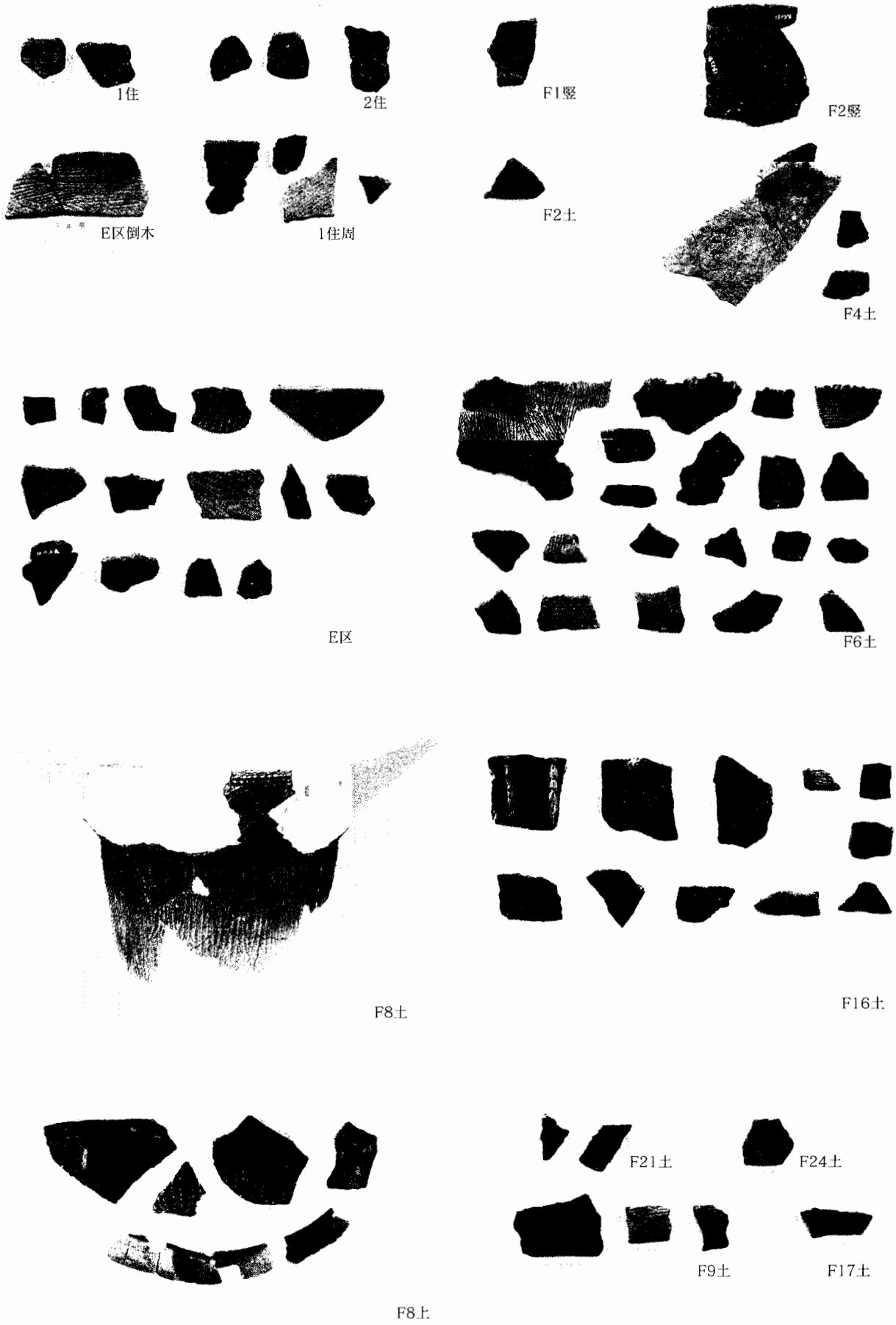


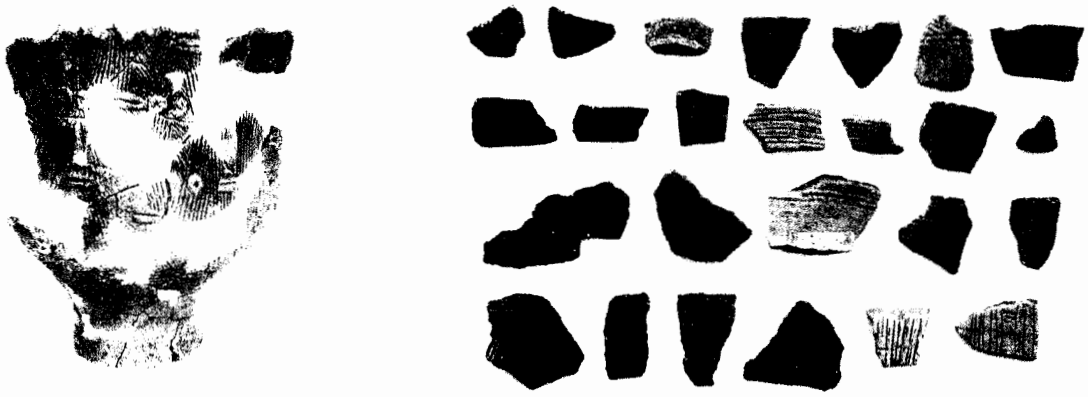
B区



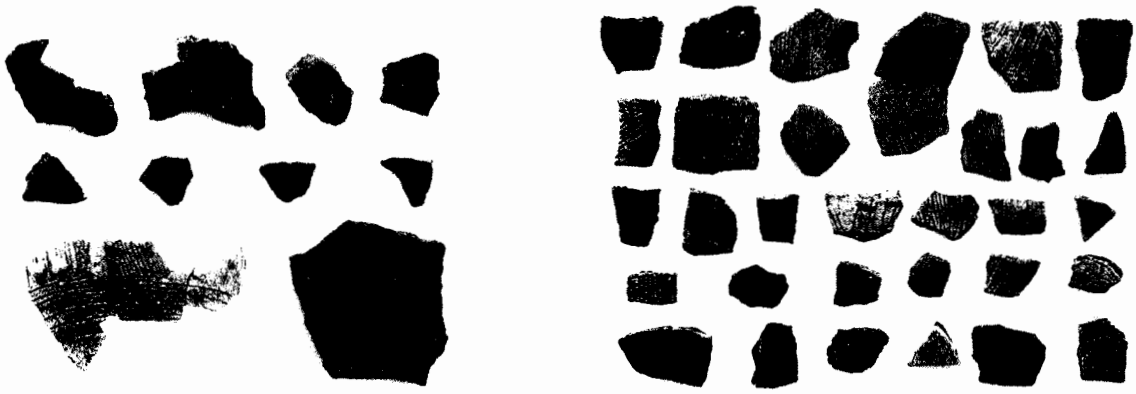
B区

PL 40 〈E・F区出土土器〉



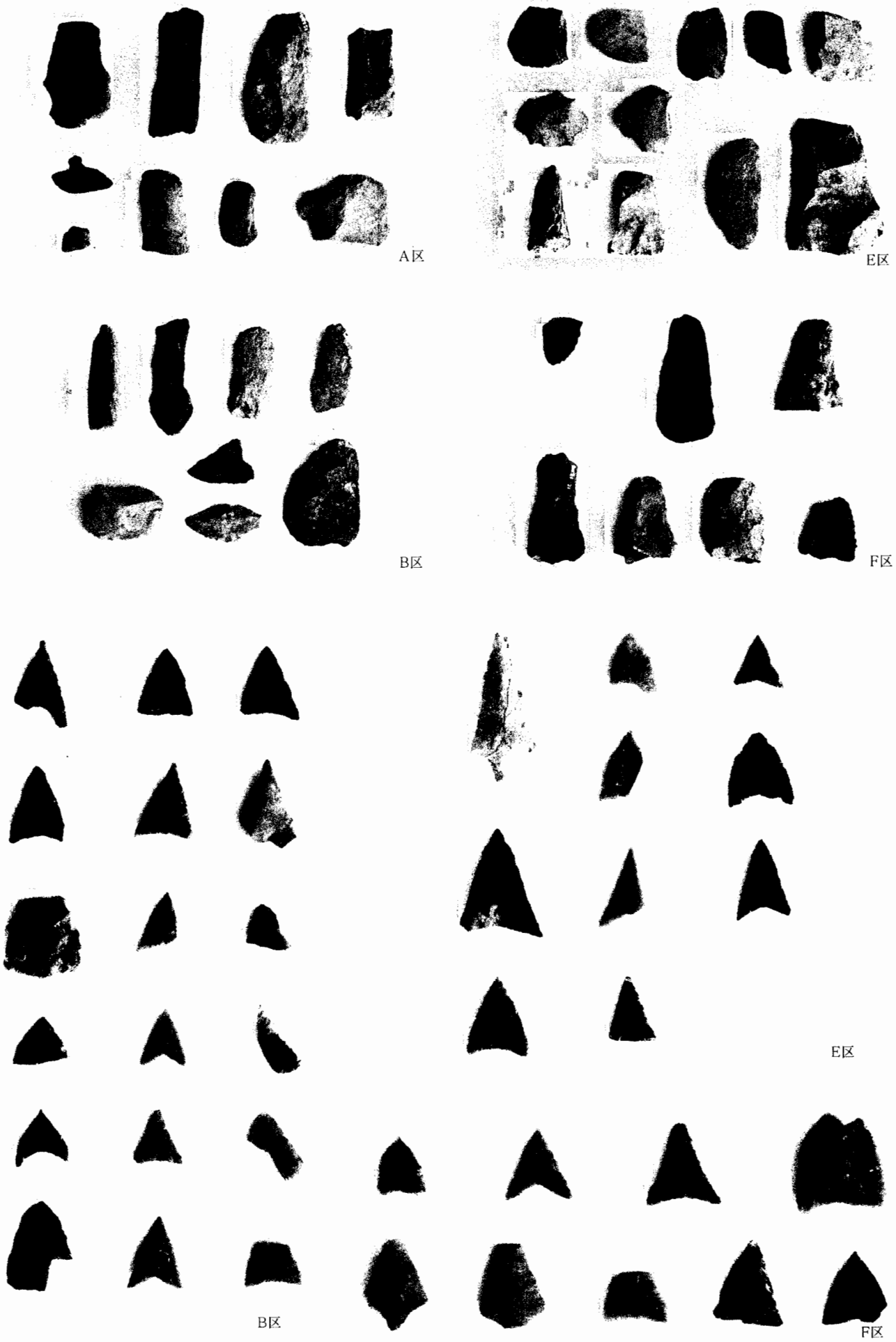


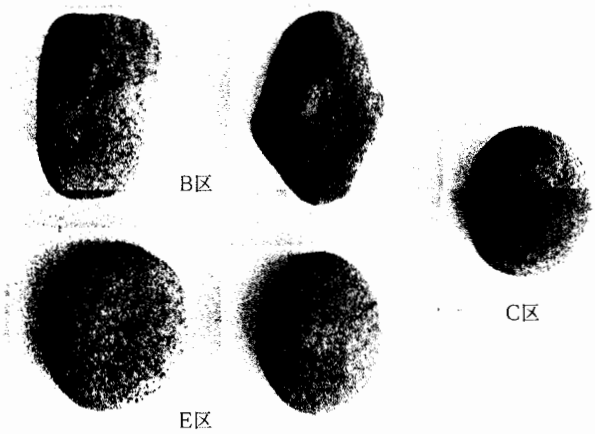
F18土

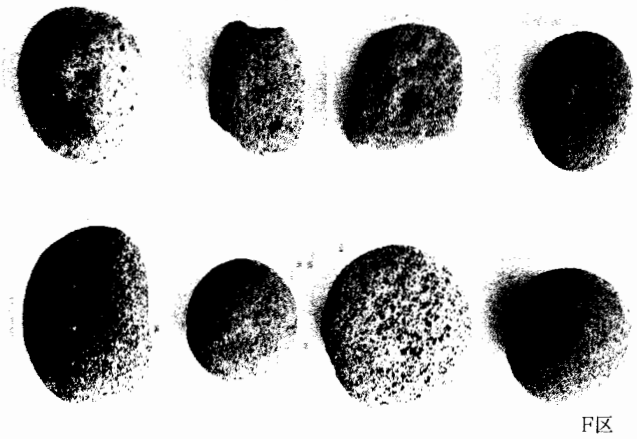


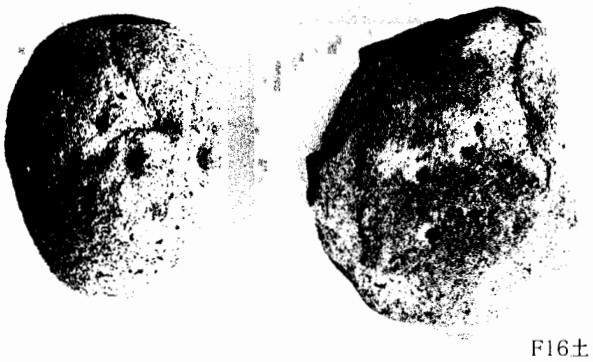
F18土

PL　42　出土石器（1）

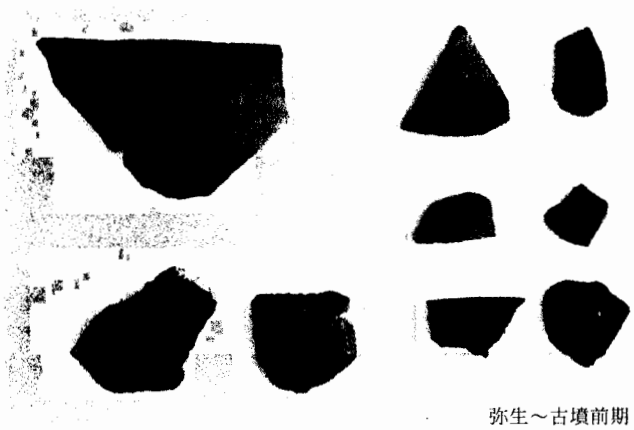


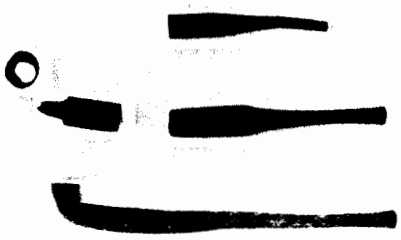






出土石器（2）





縄文時代以外の出土遺物

PL　44 〈調査風景〉

1．F区北東部東溝噴逸部（西から）

2．F区北東部東溝（北から）

3．F区西溝（北から）

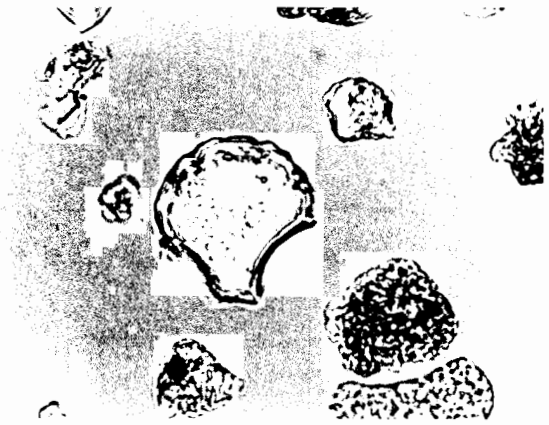
4．C区柵列（北から）

5．C区柵列

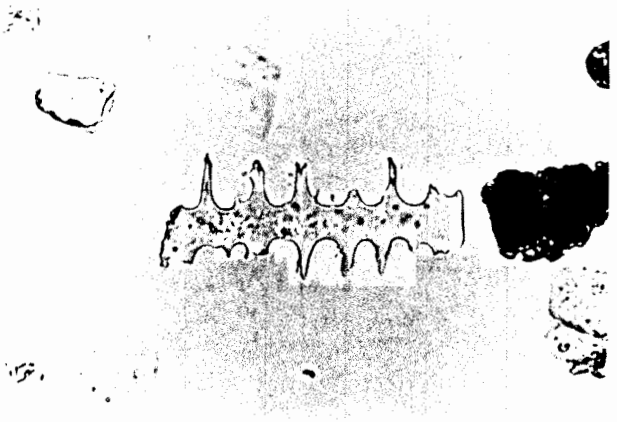
6．C区柵列

7．雪景色

8．調査地遠景（南東から）

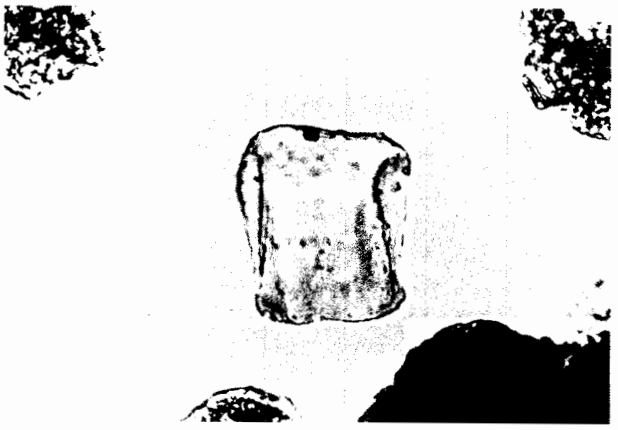


1. イネ　　試料 1

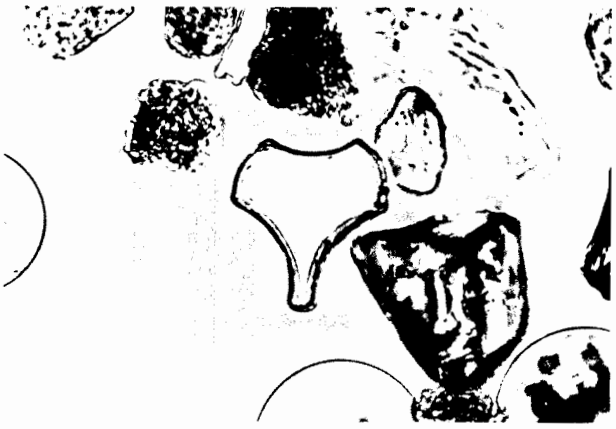


2. ムギ類（穎の表皮細胞）　　試料 1

3. キビ属　　試料 1



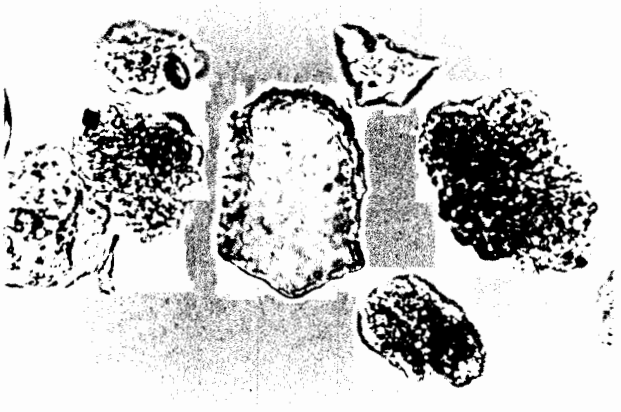
4. ウシクサ族（ススキ属など）　　試料 2



5. シバ属　　試料 1

6. タケ亜科Ala（ネザサ節など）　　試料 1

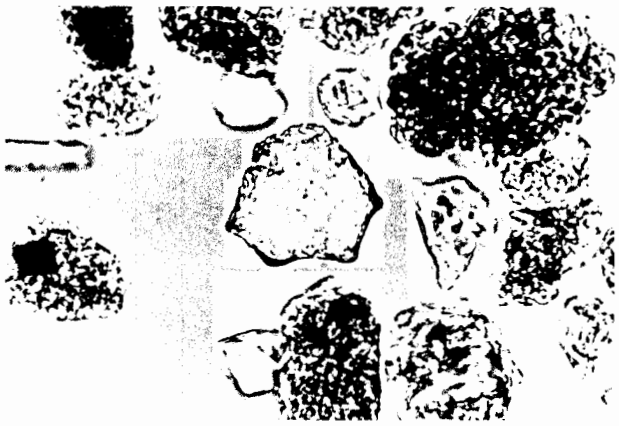
7. タケ亜科Ala（ネザサ節など）　　試料 19



8. タケ亜科Bl（クマザサ属）　　試料 9

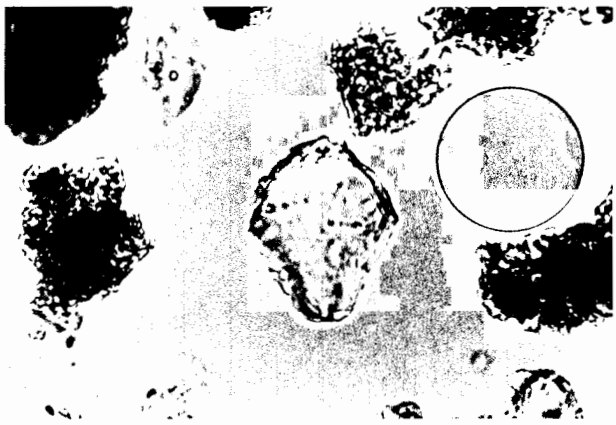
PL　46　植物珪酸体の顕微鏡写真（2）

9. タケ亜科B1（クマザサ属）　　試料　9

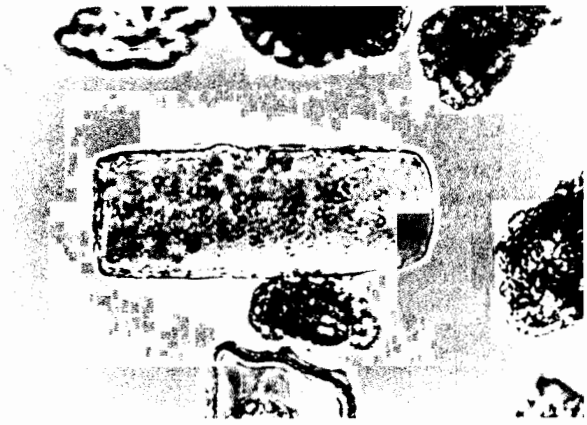


10. タケ亜科B1（クマザサ属）　　試料　7

11. タケ亜科B2（メダケ属など）　　試料　1

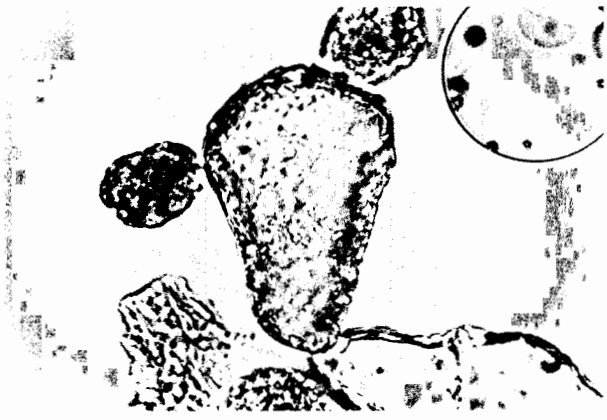


12. タケ亜科A2（マダケ属など）　　試料　2



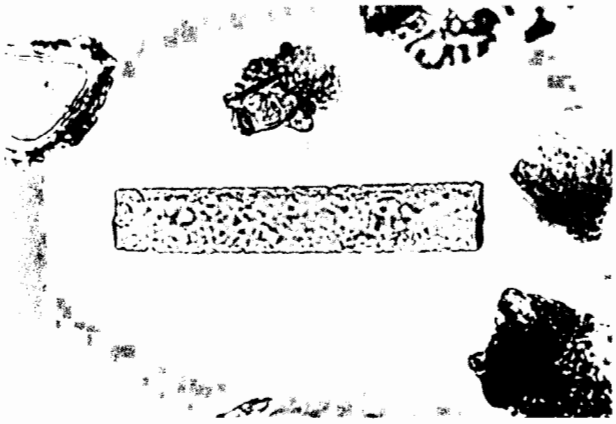
13. 不明A（キビ族類似）　　試料　2

14. 不明B（ウシクサ族類似）　　試料　2



15. 不明C（ウシクサ族類似、大型）　　試料　9

16. 表皮毛起源　　試料　1



17. 棒状珪酸体　　試料 2

18. 不明　　試料 2

19. 不明　　試料 11

20. 不明　　試料 17

21. 不明　　試料 12

注：原資料（倍率400倍）
を80%に縮小。

発掘調査報告書抄録

フリガナ	サカガミイセキ
書名	坂上遺跡
副書名	富士見工業団地造成に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	羽鳥　政彦
編集機関	群馬県勢多郡富士見村教育委員会
編集機関所在地	〒371－01　群馬県勢多郡富士見村大字田島866－1　☎ 0272－88－6111
発行年月日	西暦1994年3月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
サカガミ 坂上遺跡	セタグンフジミムラ 勢多郡富士見村 イシイ　サカガミ 大字石井字坂上	10303		36°28′03″	139°5′30″	19911202 ～ 19920430	約35,000	工業団地造成事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂上遺跡		縄文	住居跡　1軒 竪穴状遺構　4軒 土坑　60基 （うち陥し穴40基） 集石遺構　7基	早期土器 前期土器 中期土器 石器	縄文時代前期後半の結節浮線文土器出土
		古墳	方形区画遺構 溝跡 道路跡 柵列（柱穴群） 土坑　30基	馬歯	古墳時代前期～後期の「牧」状遺構
		江戸時代	墓坑　1基		
		時期不明	炭窯跡　7基		

坂上遺跡　富士見工業団地造成に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

平成6年3月18日印刷
平成6年3月25日発行

編集・発行/群馬県勢多郡富士見村教育委員会
群馬県勢多郡富士見村大字田島866-1
電話(0272)88-6111
印　　刷/朝日印刷工業株式会社